大魔王が倒せない

はぐれっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
大魔王が倒せない

【Ｎコード】
Ｎ２２１９Ｗ

【作者名】
はぐれっち

【あらすじ】
突如として現れた大魔王を自称する美少女は瞬く間にある国を支配し、自由気ままな大魔王ライフを送り始める。そんな大魔王少女が様々な敵と戦っていくお話。
「１章：大魔王　対　勇者」魔王を退治した勇者一行。だが魔王は死に際に、お前らの国は落ちたと語る。帰還した勇者を待っていたのは大魔王が支配するいつもと変わらない街の姿だった。勇者達は大魔王に挑むことにするが……。
「２章：大魔王　対　大魔導師」魔法使いになりたいという少年ア

ル。ボロボロの格好の少女を伴い魔法使いに家に向かうが……。
現在2章まで完了。3章のスタートは未定です。
文章が堅苦しい感じなんですが書いてる人はお気楽エンタメぐらいのつもりです。
注）
・微エロぐらいのお色気的表現はありますので苦手な方は回避してください。
・大魔王は残虐無比で外道な感じというよりは、のん気な感じの人です。大魔王という語感から感じるイメージと違うかもしれません。
・作者がうかつなので誤字脱字、意味不明の文章等多いです。お気づきの点があればご指摘くだされば嬉しいです。

1章の登場人物（終了時点）（前書き）

ただの登場人物表です。
本編をご覧なりたい方は、「プロローグ」の「大魔王があらわれた」からお読みください。

割り込みで設定を入れるのは後々まずそうだと思ったのでこの設定集は2章終了時点で全体的に整理して消そうかと思っています。
最新の設定集は（ｈｔｔｐ：／／ｔｕｅｅｅ．ｓｅｅｓａａ．ｎｅｔ／ｔａｇ／％９０％ＤＤ％９２％Ｅ８％８ＦＷ）に用意しましたのでこちらを御覧ください。

1章の登場人物（終了時点）

注意事項：

未設定となっているのは作者が全く考えていないということです。その情報がストーリーの中で意味を持つようならその時点で設定されます。

未公開はそのうち作中で公開される予定。

そんな大した話でも無いですが、1章終了時点でのネタバレが含まれますので未読の方はご注意ください。

1章の登場人物

・大魔王
性別：女
年齢：未公開
マテウ国の支配者。首都ベイヤーで適当に暮らしている。すげー強い。勇者を蹴散らすもその全貌は未だ不明。

・マテウ国軍の代表者
性別：男
年齢：おっさん
大魔王の第一被害者の一人。貴族。セプテム国との小競り合いを大魔王に邪魔された。この後の話で関わってくる予定は特にない。

・セプテム国軍の代表者
性別：男
年齢：おっさん
大魔王の第一被害者の一人。貴族。マテウ国との小競り合いを大魔王に邪魔された。大魔王に見逃され国に返った。後でちょろっと

大魔王について報告するようなシーンがあれば出てくるかもしれない。

・マテウ国王
性別：男
年齢：未設定、壮年。渋目のおっさん。
大魔王にレガリアを奪われ最高権力者の座から落とされた。ただ大魔王が権力にあまり興味を示さない性質だったため、そのまま国王を続けている。貴族の中でも特に王族と呼ばれているグループの一員。

・王族達
王の家族構成は特に設定されていないが、王妃とか王子とか王女とかはいるはず。なんとなくだけど王女は話に関わってくるかも。

・フォグ
性別：男
年齢：未設定、多分２０歳ぐらい
聖剣の勇者。貴族。王直轄部隊、第一遊撃隊の隊長。白銀の鎧と聖剣がトレードマーク。魔族に対してはほぼ無敵の人類の守護者。魔王を倒している。

・アイゼン
性別：男
年齢：未設定、フォグと同じぐらい。２０歳ぐらい？
第一遊撃隊隊員。魔法使い。契約魔法の使い手。貴族っぽい格好をしているが平民。近接戦闘ではあまり役に立たない。知識が豊富でなんでお前がそんなこと知ってるんだよ！　ってことを平然と解説してくれる人。今後も大魔王戦で解説だけしにやってくるかもしれない。

戦闘スタイルは事前に魔法による罠を仕掛けて、はめるような陰険な感じ。

・ゲルン
性別：女
年齢：未設定、他と同じで２０前後。
第一遊撃隊隊員。貴族。戦士。戦斧の使い手。力自慢で戦斧を適当に振り回す戦闘スタイル。大魔王にやられた後はほとんど出てこない。どうしたんだろう？　多分落ち込んで黙りこんでたんだと思う。そういうことにしといてください。

・マキノ
性別：女
年齢：未設定、他より少し若い。１７，１８？
第一遊撃隊隊員。平民。神官。神聖魔法の使い手。お祈りマキノんの愛称で親しまれる。マジキチ。狂信者と化した彼女に対抗出来たのは今のところ大魔王だけ。
勇者をして「もう全部あいつ一人でいいんじゃないかな」と言わしめる。（正確にはこう言ってないですけど）
武器は聖堂。（武器なんだろうか？）

・アルベリク
性別：男
年齢：未設定、見た目はおっさん。
第３魔族領を支配していた魔王。魔族。槍を投げつけて森を破壊するなど膂力は勇者以上で、まともに戦えば勇者に勝ち目はなかったはずだが、勇者の持つ聖剣と相性が悪かったため敗れた。

・ホルス
性別：男

年齢：未設定、フォグ達よりは年上。２０～３０の間？
冒険者の貴族。第三魔族領の魔王城の発見者。数々の実績を持つそれなりに有名な人物だが魔王に殺された。魔王に挑んだ動機は不明だが、増長と傲慢故だと思われる。

・ダフニー
性別：女
年齢：未設定、フォグ達と似たようなもの。２０前後？
首都の入り口の検問所で手続きを行う兵士。
気さくで人好きのする明るい性格。街の案内も気軽に行うが、最近では大魔王のことばかり聞かれ、そのため大魔王の現在地を大体把握するに至った。そんなムダ知識の持ち主。

・ゴドウィン
性別：男
年齢：未設定、フォグよりは少し年上のイメージ。
第二遊撃隊隊長。貴族。聖盾の勇者。ごつい。特に活躍はしていない。今後も出てくるのかは不明。

・デリク
性別：男
年齢：１４
アレがヤバイ亭の女将の息子。店で働いている。大魔王に密かに興味をもっているが、それは見ている人間誰もが知っている。

・リサ
性別：女
年齢：未設定。１４歳の息子がいるぐらいの歳。いつ産んだのかで結構幅はあると思いますが。
アレがヤバイ亭の女将。恰幅のいい気のいいおばちゃん。大魔王

からは「オカミ」という名前だと思われている。
アレがヤバイ亭はこれからもちょくちょく出てくるので、リサもそれなりに出てくると思う。

・ライサ
性別：女
年齢：未設定。幼女。
大魔王の友達の一人。迷子になっていた所を大魔王に保護され、ソフトクリームを奢ってもらった。まぁ大魔王は金払ってないけど。

・ネルデフォウス
性別：男
年齢：未設定。かなり長い時を生きている。
大魔王に召喚された悪魔。人間研究家。人間の生物的な仕組みに詳しく、人間の修復が得意。見た目は召喚者により異なる。大魔王の召喚時には背中から3本目の腕が生えている小男の姿だった。メレーヌの召喚時には美青年の姿を取っている。

・魔族の大魔王
性別：男
年齢：未公開
魔族の大魔王。魔族を統べるもの。魔族国家エレシアでえらそうにふんぞりかえっている。

・魔族の幹部、竜
性別：未公開
年齢：未公開
魔族の幹部。幹部の集まりには、竜の姿で登場した。今後どれぐらい話に関わるかは不明。ソードマスターヤマトみたいにまとめてやられる可能性もある。

・魔族の幹部、狼
性別：未公開
年齢：未公開
魔族の幹部。幹部の集まりには、狼の姿で登場した。ソードマスター（略

・魔族の幹部、本
性別：未公開
年齢：未公開
魔族の幹部。幹部の集まりには、本の姿で登場した。ソードマスター（略

・魔族の幹部、石
性別：未公開
年齢：未公開
魔族の幹部。幹部の集まりには、石の姿で登場した。ソードマスター（略

・シオドア
性別：未公開
年齢：未公開
魔族の幹部。幹部の集まりには、剣の姿で登場した。大魔王の過去話に関連するので、大魔王の過去話に話が進むようなら今後も出番はあるかも。

・メレーヌ
性別：未公開
年齢：未公開
魔族の幹部。幹部の集まりには、人形の姿で登場した。ネルデフ

ォウスと契約している。大魔王の過去話に関連するので、大魔王の過去話に話が進むようなら今後も出番はあるかも。最強の勇者やらなんやら伏線ぽいこと言っているが、これもソードマスターよろしく、「別にそんなことはなかったぜ！」となかったことにされる可能性はある。

2章の登場人物（6話時点）（前書き）

ただの登場人物表です。
本編をご覧なりたい方は、「プロローグ」の「大魔王があらわれた」からお読みください。

割り込みで設定を入れるのは後々まずそうだと思ったのでこの設定集は2章終了時点で全体的に整理して消そうかと思っています。
最新の設定集は（ｈｔｔｐ：／／ｔｕｅｅｅ．ｓｅｅｓａａ．ｎｅｔ／ｔａｇ／％９０％ＤＤ％９２％Ｅ８％８ＦＷ）に用意しましたのでこちらを御覧ください。

2章の登場人物（6話時点）

注意事項：
未設定となっているのは作者が全く考えていないということです。その情報がストーリーの中で意味を持つようならその時点で設定されます。
未公開としているのはそのうち作中で公開される予定。
そんな大した話でも無いですが、2章更新中の現時点でのネタバレが含まれるかもしれませんので未読の方はご注意ください。

2章の登場人物

・大魔王
性別：女
年齢：未公開
相変わらず街中でフリーダムに行動している。2章になってから全然出てこない。一応主人公。めっちゃ強い。

・アル
性別：男
年齢：15歳ぐらい
栗色の髪の少年。瞳は黒。魔法使いになるため街にやってきた。職業は日雇い作業員。今のところ主役面して出張っている。

・リーリア
性別：女
年齢：16
金髪碧眼の美少女。髪は腰まである。巨乳。平民。職業は侍女。アルと一緒に行動している。ヒロイン面してしゃしゃり出てきてい

る。

・ベティ
性別：女
年齢：３０手前ぐらい。
首都ベイヤーにある職業斡旋所の所員。平民。あまり繁盛していないためかいつも暇そうにしている。仕事はちゃんとやる。キャシーの姪。

・ケイン
性別：男
年齢：４０ぐらい？
ディーン開拓団の団員。アルに職業斡旋所を紹介した。

・ディーン
性別：男
年齢：じじい
ディーン開拓団の団長。本編未登場。多分出てくることはなさそう。

・キャシー
性別：女
年齢：見た目は２５ぐらい。
魔法使い。平民。無駄にエロい感じの美女。アル達に部屋掃除の仕事を依頼した。職業は彫金士。アクセサリーを作っている。魔法使いとしての実力は不明。アル達に魔法の講義を行った。ベティの叔母。

・テオバルト
性別：男

年齢：未公開。見た目は美青年。
現時点では詳細は未公開。

・ヴァルター
性別：男
年齢：未設定
聖棍の勇者、第三遊撃隊の隊長。名前だけ登場。

・セルジュ
性別：男
年齢：未設定
第三遊撃隊の隊員。魔法使い。名前だけ登場。

・エーヴェルト
性別：男
年齢：未設定
第三遊撃隊の隊員。短槍使い。名前だけ登場。

・ギャリ
性別：男
年齢：未設定
第三遊撃隊の隊員。司祭。神聖魔法の使い手。名前だけ登場。

・フォグ
性別：男
年齢：未設定、多分２０歳ぐらい
聖剣の勇者。魔王を倒しているが、大魔王には返り討ちにあった。
リーリアの話にだけ登場。リーリアの憧れの人。けど、このお話は安心安全をモットーとしておりますので……。

・野族の隊長
性別：男
年齢：３０ぐらい？
貴族くずれの盗賊。ひどい目にあわされ生死の境をさ迷いながら狼に引きずられている。

・リーリアの同僚の従者
性別：女
年齢：２０ぐらい。
ヴァルターの従者の一人。リーリアにひどいことをした。

設定説明（レガリア）（前書き）

これも設定説明のみで本編ではありません。すいません。
本編をご覧なりたい方は、「プロローグ」の「大魔王があらわれた」からお読みください。

割り込みで設定を入れるのは後々まずそうだと思ったのでこの設定集は2章終了時点で全体的に整理して消そうかと思っています。
最新の設定集は（ｈｔｔｐ：／／ｔｕｅｅｅ．ｓｅｅｓａａ．ｎｅｔ／ｔａｇ／％９０％ＤＤ％９２％Ｅ８％８ＦＷ）に用意しましたのでこちらを御覧ください。

設定説明（レガリア）

本編でわざわざ説明しない設定のメモのようなもの。本編で説明しないぐらいですから話には直接関係ありません、多分。
もし本編に関わることがある場合で矛盾する場合は設定変更を行う場合もあります。ご了承ください。

・レガリア
・王権の象徴。国内でのみ有効な絶大な能力を発揮するアーティファクト。神の恩寵とされている。
・大抵の国ではこれの所持者が王となる。

・レガリアの基本機能
・レガリアは支配領域内の生物から魔力を吸収することで作動している。
・強制ではなく拒否することは可能。その場合は国民とは見做されない。ただ、人間では魔力の操作を行うことが出来ないためほぼ強制ということになる。
・一定期間レガリアの支配域から離れると、この国民登録は削除される。
・吸収率はレガリア保持者が自由に設定できる。
・通常は魔物対策のため吸収率を２０％程度に設定。魔力は一般人には無用の長物のためある程度は影響はないが、やりすぎると国内の活気が失われる。
・魔物は魔力の搾取を嫌がるため通常はレガリア支配域へ侵入することはない。
・浸蝕の宝玉は１％に設定されている。そのため浸蝕の宝玉の支配領域では魔物の活動が活発になる。
・国民を一定期間中立地帯へ置くことで、その地域への支配域の

拡大が可能。

・レガリアのモード

・レガリアには、初期状態、起動状態、移譲状態、保留状態、休止状態の5つのモードがある。

・初期状態：なにも設定されていない初期の状態。この状態のレガリアコアに血を登録することで所有者となれる。所有者が死亡時に継承者が設定されていない場合この状態となり、設定は全て初期化され初期状態となる。

・起動状態：レガリアが起動し効果を発揮している状態。

・保留状態：レガリアがその効果を停止し、所有者の変更を待つ状態。起動状態のレガリアのコアに血を登録することでこの状態に移行する。この強制所有者変更には時間がかかる。かかる時間は、前登録者の在位年数を日に換算した時間。7年であれば7日。保留状態の間に、前登録者が再度登録を行えば即座にそれまでの状態で起動状態へと移行する。

・移譲状態：所有者による設定で移譲を行うことが出来る。その際は瞬時に所有者の変更が行われる。所有者の死亡時には登録されている継承順にに基づいて自動で移譲される。

・休止状態：機能が停止する。保留状態と似ているが、休止状態では登録関連処理も休止するため所有者の変更が出来ない。レガリアを国外へ持ちだした場合にこの休止状態となる。

・モードではないが、所有者の死亡時には登録されている継承順にに基づいて自動で移譲される。この際は保留状態とはならず瞬時に移譲される。

・レガリアの複数所持。

レガリアは複数所持が可能で、その場合所持しているレガリアの支配範囲が拡大される。A国のレガリアとB国のレガリアを両方所持した場合、A国のレガリアがB国でも発動できることになる。

・レガリアの制限
・レガリアを使用できるのは所有者のみ。
・レガリアにはレプリカを産むものがあり、レプリカは王以外でも使用可能。様々な条件でその効果を発揮する。
・レガリアは国内でのみ使用可能。

・現在確認されているレガリア
春風の外套、支配の王錫、救済の王冠、誓約の天秤、断罪の聖剣、凶王の修練場、浸蝕の宝玉。世界には中立地帯が数多く存在するため、それらに対応した未発見のレガリアがあるともされている。

・春風の外套
国内の完全な気象制御を行うことが出来る。どんな気象変化でも起こせるが、部分制御は出来ない。（一部地方に雨を降らせるなどは出来ない。雨を降らせれば国内全てに雨が降る）
武器として使えばかなり強力だがその場合国内全てを犠牲にする諸刃の剣となる。

・浸蝕の宝玉
アンチレガリアの性質を持つ。このレガリアは他のレガリアの支配領域を押しのける。
宝玉は同効果のレプリカを一定時間ごとに排出する。宝玉一つの効果範囲は宝玉を中心に半径数キロ程度だが時間と共に拡大していく。
本体にはレプリカの制御機能が存在する。
レガリアは通常破壊不可能とされているが、レプリカは破壊可能。

大魔王があらわれた

「今からあなたたちを攻撃します。死なない程度に手加減はしますが、体力に自信のない方は地面に伏せ手を頭の後ろで組んでください」

突如として戦場に現れた少女はこう言った。

まさに激突せんばかりだった両軍は戸惑った。その少女がどこから現われたのかは誰も見ていない。気づけばこれから戦場の中心となるはずの場所に一人たたずんでいた。

とても綺麗な少女だ。髪と瞳は黒。腰まである黒髪を白いリボンでくくり一本結びにしている。ドレスは基本黒だが袖や裾などのエッジ部分は白いフリルがあしらわれていた。肌は顔と手足の一部しか覗いていなかったが、抜けるように白い。

ほとんどの者がその美しさに目を奪われた。

皆が呆けたようになっている中、少女が手のひらを上にして右手を挙げる。その動作に呼応するように上空１０ｍ程の空間に巨大な光り輝く玉が現われた。

「攻撃範囲はこの球体を中心に１ｋｍです。地面に伏せている方は降伏したとみなし攻撃対象から除外します。この攻撃は全員が降伏するまで続きますので、これ以上耐えられないと思えば無理せずに伏せてくださいね」

少女が右腕を振り下ろす。両軍合わせて２０００名、その全てに雷撃が降り注いだ。

少女の言うように手加減された攻撃のようだったがそれだけで半数の者がバタバタと倒れていく。

「やはり人間を無力化するには電撃は効果的ですね」

独り言ではあるがその言葉は先ほどからの発言と同じくその場にいる全員に聞こえていた。特に大きな声ではないが、自然と通る声だった。

「次、来ますよ」

再びの雷撃。その攻撃は少女の動作を必要とはしなかった為、一度目は耐えた者たちも完全に不意を付かれた。雷球は一定間隔で条件に合った者を自動的に攻撃するようだ。2度目の攻撃の前に立っていられたものはほんの数人だった。

少女は静寂に包まれた戦場を見渡す。その立っていられた数人が慌てて地に伏せると満足そうに頷いた。

「静かになりましたね。全員降伏していただけたようでなによりです。さて、両軍の代表者の方、立ち上がっていただけますか？　2名までは攻撃対象外に設定しましたので怖がらなくてもいいですよ？」

両軍から代表者と思しき人物がそっとあたりを伺いながら立ち上がった。どちらも全身甲冑を身にまとっている。電撃で所々焼け焦げているがそれほどダメージは無いようだった。

「ではこちらに来ていただけますか？」

代表者はよたよたと少女の元へやってきた。その顔は青ざめている。

「こんにちは」

少女は何事もなかったかのように挨拶をした。

「では質問です。あなた達はどこかの国の軍隊でこれから戦う所だったんですよね？　所属を見分けるにはどうすればいいですか？　その外套の色で区別出来るんでしょうか？」

代表者の二人は愕然とした。この少女は我々が何者かを理解しないまま攻撃を仕掛けてきたのか？

「あ、あぁ、我々マテウ国のものは緑色を身につける。そいつらセプテム国は赤だ」

あれほどの攻撃を見せられた後に余計な事を言う気にもなれずマテウ国軍の代表者は問われるまま素直に答えた。

「なるほどわかりました。ではあの方はマテウ国の方だったようですね。では……そちらの赤の方。セプテム国でしたか。あなた達は撤収していただいてかまいませんよ。お国はどちらの方角ですか？」

「……南だ」

「では、この雷球から遠ざかる方には攻撃しないようにしました。もう立って頂いても大丈夫ですよ。最初に言いましたように攻撃範囲は１ｋｍですのでまっすぐお帰りくださいね。こちらに近づいたらまた同じ目に合いますよ。攻撃の度に威力が上がるようになっていますから次ぐらいからは死人が出るかもしれません」

「わかった。本当に安全は保証してくれるんだな？」

「えぇ、大魔王の名に賭けて誓いましょう」

二人は思っても見なかった名が飛び出したことに驚愕した。人間は有史以来魔族と争いを続けているためそれなりに魔族については研究を進めている。それによれば魔族は小集団のコミュニティを魔王という名の頭領を中心に形成しており、それぞれのコミュニティ同士に緩やかな繋がりがあるとされていた。そしてそのコミュニティ全てを統括するものこそが大魔王とされていた。

なぜ、この場に大魔王が現れるのか？　マテウ国軍代表が考え込んでいるうちにセプテム国側は撤収を始めていた。少女が言うように攻撃はされていない。

「俺たちはどうすればいい？」

「あなた達はしばらくそのまま伏せていてください」

「わかった。その通りにしていよう。だが一つ聞いていいか？」

「いいですよ」

「何故だ？　何故このようなことをする？」

「私はすぐそこの村はずれに住んでいるんですが、側で戦争されるのがとても鬱陶しかったからです」

「なに？」

「それと村にあなた達の軍の方が略奪にやってきたからです。まぁ、それ自体にはさほど思うところはないのですが、私のささやかな家庭菜園を踏み荒らしてくれました。ですので報復することにしたの

です」

「ば、馬鹿な！　そんなことでか！」

中立地帯での略奪は恒例行事だ。中立地帯には国からあぶれた者達がそこかしこに小集団を作っている。どこの国にも属さない者のためその行為を咎めるものはどこにもいなかった。そうされたくなければ国の庇護下に入り税を納めればいいというのが国側の理屈だ。

「質問は終わりですか？　では１０分差し上げますので、あなたはお仲間の所に戻り伏せたままでいることを言い含めてください。それが終わったらあなたももう一度伏せてくださいね」

「何故だ？」

「それは簡単です。今からあなたたちの国、マテウ国ですか？　を襲撃しようと思うのですが出来れば人を殺したくないのです。ですのでこの場にしばらく留まっていただくことにしました。あなたたちの行動の最終的な責任は王にあると思いますのでマテウ国王に責任を取って頂こうかと」

マテウ国の代表者は激昂しかけた。何故一足飛びに王の責任ということになっているのか！

だがここで怒りに任せて何をしようともこの戦況を覆す術がないことは自明だった。激情に身を任せこの少女に反駁するのはただの自殺行為だ。

「……部下の狼藉の責任は私にある。私の身を持って償うことでは代えられないだろうか？」

なんとかこの場で事を納めたい。なんならこの場にいる全員が犠牲になっても構わないとすら思ったが、少女の返答はにべもないものだった。

「結局は最高責任者である王に責任をとってもらうしかないと思いますよ？」

何か手はないかと考え続けたが、やがてマテウ国代表者は踵を返した。１０分の時間制限のうちに戻らねばならない。部下たちの元へと戻るとこのままの姿勢で待機することを言い渡し自らも伏せた。

「この雷球はしばらくここで待機していますので気をつけてくださいね。雷球が消えた後なら動いてもらってもかまいませんのでそれまでの間不自由をおかけしますがよろしくお願いします」

そう言って少女はマテウ国軍に歩いて行く。陣の中程まで来てからふと立ち止まり兵に声をかけた。

「なんとなくこちらに来ましたが、マテウ国というのはこのまま北に行けばいいんですか？　国王はどちらにいらっしゃいます？」

「……北へ行けばマテウ国だ。街道沿いに北上すれば首都ベイヤーに辿り着くが、ベイヤーはほぼ国の中心部だ。ここからではかなりの距離がある」

「徒歩ではどれぐらいかかるでしょうか？」

「一週間というところか」

「そうですか。結構かかりますね。まぁいいですのんびり行きます。

雷球は1時間ほどで消えると思いますけど追ってこないでくださいね。このへんであなたたちものんびりしていればいいと思いますよ」

そう言いおいて少女はまた歩き出した。

「この野郎！　ふざけやがって！」

一人の兵士が立ち上がった。

「あ！　3回目からは威力がかなりあがっているので注意してくださいね」

言い終わる前にその兵士は雷撃に打ち倒された。その後少女に逆らうものは現れなかった。

＊＊＊＊＊

一週間が過ぎた。

今少女は首都ベイヤーにある王城内、王の私室にいる。

王を守護する近衛兵は既に沈黙していた。王も虫の息といったところだ。

「貴様……何者だ……」

「とりあえずお仕置きに来ただけだったんですが、いいものを手に入れてしまいました」

少女はまるで話を聞いていない。その手には王が直前まで身につ

けていた緑色のマントがあった。室内で外套を着続けるというのも変な話だが、王権の象徴であるレガリアを目の届かない場所に置いておく気がなかった王はそのマントを常に身につけていた。

「さて、私はあなたに勝ったのでこれは私のものだと思うのです。所有権の移譲手続きをしていただけませんか？」

「断る！」

息も絶え絶えながらも、しっかりとした声で王は拒絶した。

「では強制移譲を行うことになりますね。私レガリアには詳しいんですよ？」

そういうとマントの留め具になっている宝玉を中程でひねる。半球状の蓋が外れると内部にあった針の様な物が露出した。

「ここに私の指先でも押し付けて血を与えればレガリアは保留状態に移行します……在位年数は？」

先程から王はこの少女の正体をなんとか推測しようとしていたが、必死に行っていた思索は全て吹っ飛んでしまった。何故だ？　何故知っている？

レガリア保有国ではレガリアの所持者こそが王となる。そこに血筋や身分、能力は一切関係無い。そのためレガリアの所有権移行手続きに関することは王族のみの知る最高機密に属した。上位の貴族といえどもこの事は知らない。王位の継承は血族間で行われると素直に信じられていた。レガリアは王のみが持つことの出来る強大な魔法具であるとは広く知られているが、実態がその逆であることを知る立場はかなり限定されることになる。

「ぼーっとしてないで質問に答えてください。移譲しちゃいますよ？」

「……１０年だ」

王はまとまらない考えに没頭していたが、ぼそりとつぶやくように答えた。

強制移譲はまずい。この国ではなおさらだ。そして少女はその事を知りながら黙っている。王はそう考えた。

マテウ国は本来、極寒の地だ。１年のほとんどを雪と氷に覆われ、人が住むのはほぼ不可能に近い。そのマテウ国が年中快適な気温に保たれ常春の国と呼ばれているのはひとえにレガリア、春風の外套の恩恵だ。

「では１０日というところですね。耐えられますかね、みなさん」

レガリアは強制移譲中は保留状態となり全ての機能を停止する。その際、前所有者が再登録をすることで移譲の取り消しを行うことが出来る。保留状態は前所有者の所有年数を日数に換算したほどの期間だった。

「本来、奪われたレガリアを取り返しやすいようにするための仕様だと思うのですが、この国だとまずいですよね。まぁ私はどうでもいいんですけど」

この国の者は皆等しくあたりまえのようにレガリアの恩恵を享受している。この国が本来極寒の地であったことなど誰も意識してはいない。そんなことははるか昔のお伽話としか思われていなかった。

「１０日もあれば全滅でしょうか。冬の備えなんてまったくないんでしょうから、１日も持たないかもしれませんね」

少女はさっきから同じ内容を繰り返し語っていた。要は正当な移譲をしなければこの国は滅ぶということだ。

王は考える。自殺をするというのはどうだ？　所有者が死んだ場合、レガリアに登録された継承順位に従って所有権は自動的に移譲される。その際は保留状態にはならないので機能停止にはならない。

だがレガリアがこの場にある時点でそれは意味がなかった。簒奪者は誰に継承されようが勝手に強制移譲を行えばいいのだ。宝物庫にでもしまいこみ厳重に保管していればよかったと後悔した。それならばこの化け物じみた少女がレガリアに興味を抱くことはなかったかも知れない。

王族にのみ伝わるレガリアの伝承に思いを巡らせるも結局移譲以外にこの国を守る方法を思いつけなかった。

「わかった……レガリアを……譲ろう……」

苦渋に満ちた声を搾り出すように王は言った。

「ありがとうございます。では一度お返ししますね」

そういうと少女はマントを王に手渡した。受け取った王は留め具の中にあるレセプタと呼ばれる針状の物に触れる。

「貴様……名はなんという？」

「あぁ、移譲に名が必要でしたね。本名はすごく長いので……そうですね、大魔王と。私のエイリアスです。この世界でただ一つ私のみを指し示す言葉ですので名の代わりになるでしょう」

「……所有権を大魔王に委譲する」

特に複雑な手続きは必要としなかった。明確な言葉さえあればレガリアは処理を行う。特に何が起こるわけでもなかったがこれで移譲手続きは完了した。

王は黙ったままマントを差し出した。少女はにこやかにそれを受け取る。王はその笑顔に一瞬とはいえ状況を忘れ魅入ってしまった。

「それで……王となって貴様はどうするのだ？」

「別になにも……あぁ、何か誤解させてしまったようですね。国家元首はあなたのままでかまいませんよ。今まで通りにお過ごしください。私は王の上に立つ大魔王ということになります。何かしてもらいたいことがあれば言いますしそれには服従してもらいますけど、今のところ何もありませんので」

「ではレガリアはなんのために必要だと言うのだ！」

「こういう趣味はなんと言えばいいんでしょうか。秘宝蒐集？　私、不思議な道具が大好きなんですよ。特にこういった意思の宿る神授の秘宝というのですか。さて、春風の外套なのでハルさんでいいですね。ハルさん、ユーザインタフェースを音声モードにしてください」

『……了解しました。ユーザインタフェースを音声モードに移行します』

王は目を見開き驚愕した。

「レガリアが喋るだと！」

「言ったじゃないですか、レガリアには詳しいって。音声以外にもインタフェイスはいろいろありますけど、人間にはあまり意味ないかもしれませんね。ではハルさん、外見の変更は可能ですか？　ま緑なマントというのは趣味じゃないのです」

『はい、外套の範疇であるならどのような形態を取ることも可能です』

「では短めの白いケープでお願いします」

マントは瞬時に指示通りにケープへと姿を変えた。少女はそれを羽織るとその場でくるっと一回転してみた。

「どうです？　似合ってるでしょうか」

王は薄れ行く意識の中で可憐に微笑む少女の姿を見た。まるで人間にしか見えないな。そう思ったのを最後に王は意識を失った。

＊＊＊＊＊

しばらくして国中に高札が掲示された。

高札は雨に濡れるのを防ぐために簡単な屋根のついた板に文字を書いたものだ。それに大人の目の高さぐらいになるように棒に固定して地面に突き刺したり、街の中だと専用の掲示場がありそこに掲示される。高札は王国から国民への公的メッセージの発信手段であり、法令の掲示などに使われていた。街中では文字の読めない者の

ために役人を配置し読み上げさせることもしている。
マテウ国の首都ベイヤーの中心に位置する広場。その一角は戸惑いの声にあふれていた。

「なぁ、みんな騒いでるけどこれ何が書いてあるんだよ」

「あぁ、なんでも王様の上の位が出来てそれが大魔王なんだってよ」

「なんだそりゃ、大魔王ってお伽話かよ」

「そういや、魔族の王が魔王で、その魔王の上に大魔王ってのがいるって聞いたことがあるな」

「まさか、魔族に負けたのか俺たちは！」

「いや、負けるも何も攻めこまれた覚えがないが？」

「勇者はどうしたんだよ！　こないだ魔族領に攻め込むって出陣したばかりじゃないか！」

「大魔王が出てきたって言われても……突然だよな」

「別に今まで通りで変わりはないらしいぞ？」

「そうなのか？　別に気にしなくてもいいのか？」

結局の所、平民にとって特に何も変わらないということがわかり騒ぎは自然と落ち着いていった。
ただ高札の最後の言葉に言い知れぬ不安を覚えるものもいた。
そこにはこう書いてあった。

大魔王の言葉は全てに優先する、と。

1話　勇者

世界を土地という基準でみるならそのほとんどが中央大陸に占められていた。世界のほぼ全てと呼んでもいいそれは超大陸とも呼ばれており、世界の土地の約9割の面積を有することになる。

だが人類の版図はここにはない。人類にとって中央大陸は全くの謎としかいいようがなかった。有史以来、幾度も調査の手を伸ばすも成果はほとんど得られていない。

人類の大半はその中央大陸をとりまく環状大陸を活動の範囲としている。では残り1割が全て人類のものかというとそれすら人類には許されていない。

魔族。人類に敵対する知的種族の為だ。

魔族が占拠する魔族領と呼ばれる土地が環状大陸を虫食い状に蝕んでいた。いつから人間と魔族の対立が続いているのかさだかではないが記録に残っている最初の記述では環状大陸にある1国が魔族領、魔族の住まう国とされていた。

それから歴史が進むに連れ魔族領は奇妙な形で人類の領土を浸蝕していった。ある日突然、人間の領土内に魔族領が現れるのだ。魔族領となった土地は魔獣が跋扈し、魑魅魍魎にあふれるため凡そ人の住める環境では無くなる。その繰り返しが進むに連れ人類は徐々にその勢力を減らしていった。世界創造を紀元とする創造歴１９７６０年の現在において環状大陸における魔族と人類の勢力比は7対3となっていた。圧倒的な劣勢である。

人類の勢力図は魔族領に分断され、文明が断絶された。今となっては魔族領を超えた先にどのような国が人が文化があるのか、極少数の命知らずの冒険家によるほそぼそとしたやりとり以外で知るすべはなくなっていた。

人類と魔族が覇を競う舞台である環状大陸であるがこれはおおよそ3つの地域にわかれていた。環状大陸は環状の名の通り中央大陸

の周りを円状に取り囲んでいる。一部に切り込みの入った円、Cの形を思い浮かべるとわかりやすい。これを3等分し、中央大陸を基準に、北大陸、西大陸、南大陸と分けると大体現状の大陸間の位置関係を表せている。

このうち、かろうじて人類側が優勢といえるのが北大陸だ。人類の国家は現在ほとんどがここに集中している。西大陸や南大陸には人類に似た亜人が住むとされているが大陸間の連絡はすでに途絶えているため今となってはそれも分からない。

北大陸は現在6つの国家と魔族領、そのどちらにも該当しない中立地帯からなっている。

その6つの国家のうちの一つマテウ国の西端に接する魔族領、光輝の森があった。マテウ国内では魔族領の発見順に番号で呼ぶため第3魔族領ということになる。

この地を舞台に人類対魔族、その勢力図を書き換える事件が起こりつつあった。

＊＊＊＊＊

まだ薄暗い夜明け前の森の中、４人の男女が身を潜めていた。

「しかしあれだな、魔王の住む城だっつーからどんなもんかと思えば、えっらいしょぼいな。木造じゃねえか」

全身を白銀の甲冑に身を包んだ青年がぼやくように言った。彼の名はフォグ、マテウ国軍内での地位は王直轄の第1遊撃隊の隊長だ。巷では聖剣の勇者と呼ばれていた。その名の所以はもちろん腰に下げられた聖剣にある。

「そうですね。私の村の村長の屋敷でもあれよりはましでしたね」

そう答えるのは鬱蒼とした森を行くには不釣り合いな貴族然とした格好の男。今の言葉どおり地方の寒村の出身のため、貴族ではないが魔法使い故にそのような装いが許されていた。名をアイゼンという。

「あたしはあの冒険家の報告があやしいと思うけどねぇ。魔王城をとうとう発見した！　ってどうなんだ？」

冒険家の発見報告に異議をとなえだしたのが、軽装の皮鎧を着込んだ短髪の女だ。体格は華奢に見えるが、その手に持った自らの身長をも超える、度肝抜くようなサイズの戦斧を扱えるというならかなりの膂力をほこるのだろう。彼女の名はゲルン。全くそのようには見えないが一応貴族だ。３等貴族の中でも序列が１１０位のためほぼ領地には縁がないが本人は、領地なんぞあってもめんどくさくてしかたねーだろ！　と、どこ吹く風といった様子だ。

そしてもう一人、先程からの会話に加わってこない少女がいるのだが、彼女は寝袋に包まれ夢の中だ。

この４人が先程から森の中にある魔族の集落と思われるものの観察を続けている。

彼らは第一遊撃隊に下された勅令により魔王城の偵察にやってきていた。

「村って程でもねーな。なんだよあれ掘っ立て小屋が5、６件建ってるだけじゃねーか。あれか？　ここは魔族の限界集落か？　若いもんは皆過疎の村を見捨てて出ていきましたってか？」

その過疎のような村の中でもまだ立派といえなくもないのが魔王城と思しき建物だ。この建物だけが2階建てで、その広さは周囲の

掘っ立て小屋で換算するなら5件分はある。

「つーかよー、その冒険者はなんであれを魔王城なんて思ったわけ？　確かに魔族集落の発見だけでもすげーとは思うけどさぁ。話盛ってんじゃねーの？」

「そうですね、この認識の齟齬が作戦行動に影響を与える可能性が……」

「いいって、いいって。余計なこと考えるだけ無駄無駄！　敵は魔族なんだ。とりあえずぶっ殺せばいいんだよ！」

フォグはアイゼンの慎重論を適当に否定した。アイゼンもここは隊長に従うことにする。

「ではどうします？　襲撃するにしても作戦は？」

「これぐらいの規模の集落ならよ、まとめてどかーんと吹っ飛ばすとかどうよ、魔法でなんかねーか？」

「そうですね、ここまでの戦闘ではあまりお役に立てませんでしたが建物ごと殲滅するということであれば魔族のスピードに翻弄されることもありませんしいけるかもしれませんね」

「ゲルンはなんかないのかよ」

「あぁ？　あたしが何か作戦立てて戦ったことなんかあっか？　あたしが馬鹿なんは知ってるだろうが！　聞いてどうすんだよ、突っ込んで暴れりゃそれでいいだろうが！」

「いや、それはさすがにどうよ、お前一応軍人だぞ？　ちっとは頭使えよ」

「お祈り」

「え？」

いつの間にか寝ていたはずの少女が起きてきていた。真っ白い神官服をきた愛らしい少女だ。若くして中央正教の神官位に上り詰め、

街では聖女もかくやといった扱いを受けている。実際に聖人に列する動きもあるらしい。彼女は正式には遊撃隊の隊員ではなく、教会から派遣されている形になっていた。名はマキノという。

「朝になりました。お祈りの時間です」

そういって彼女は自分の背丈ほどもある箱を展開し組み立て始めた。この箱には底に車輪がついていて、彼女はここまでこの箱をひっぱりながら運んできた。

「いやいや、こんなとこでかよ」

今までも半ば無理矢理、朝夕の礼拝に付き合わされて来た遊撃隊だが、魔王城を目前にしてまですることだとは思ってもみなかった

「場所は関係ありません」

そういう間に組み立ては終わっていた。簡易聖堂と呼ばれるものだ。中央正教では祈りは聖堂で捧げると定められている。簡易聖堂は聖堂としての要件を最低限満たすものだがマキノのものは通常の物と比べてもやけに大袈裟に見えた。展開状態だと大人が両腕を広げた程の幅がある。平民の一般信徒の家庭にも聖堂はあるがこれよりもずっと規模は小さい。

「せめて朝飯食ってからにしね？」

ゲルンは少しひきぎみに言った。腕力でなら圧倒出来るはずだがどうも強く出られない。

「いえ、このような場所での祈祷では信仰が下がってしまいますの

で、信仰の強化のためには朝起きて直ぐのお祈りが効果的です」
「いやいや、俺ら徹夜してるじゃん？」
「徹夜明け一番の朝のお祈りでも代用は可能です」

この場にはマキノの謎信仰理論に反論出来る者は誰もいなかった。
渋々、フォグとゲルンが聖堂に向かって祈りを捧げる。アイゼンは魔法を使うために悪魔と契約をかわしおり中央正教の信者ではない。マキノは異教徒、無神論者には寛大で信仰を押し付けるような真似はしないのでこれが原因で揉める事もなかった。

「ゲルンさん」

マキノは優しく微笑かける

「は、はい」

対するゲルンはいたずらがばれる直前の子供のような微妙な表情を見せた。

「３０点のお祈りです。少し良くなりましたよ、ぎりぎり、かろうじて、どうにか神に対しての礼を失しないものでした。この調子で明日以降もがんばってください」

ゲルンはほっと胸をなでおろす。

「勇者フォグ、２点です」

ゴミを見るような目というのが正ににそれだった。美少女の蔑みに性的興奮を覚えるような輩にとっては最高のシチュエーションと言えるかもしれないが生憎勇者にはそのような趣味はなかった。今

後のことを考えるならこれを楽しめるようになったほうがいいのかもしれない。

「なんでだよ！　ちゃんとやったじゃねーか！」

「言語体系が違うのでしょうか？　あなたがなにを言っているのかわかりません。勇者でさえなければバラバラにしてうちのポチの餌に混ぜてポチがたべる寸前に蹴飛ばしてやるところです」

「わけわかんねーよ、なんだその遠まわしな脅し文句は！」

「あなたが犬も食わない生ゴミ以下だというのはこの際置いておくとしても、聖剣の能力は使用者の信仰が影響するのですよ？　勇者としてあり続けたいなら信仰を疎かにすべきではありません！」

「わかったよ、やり直せばいいんだろうが！」

「やり直す？　……お祈りを……やり直す？」

マキノの目から光が消えた。これはまずい、狂信者の、いや狂神官のスイッチが入りかけている。フォグは慌てて謝罪の言葉を口にした。

「いや、すまん、ちゃんとやるから、な、怒るなよ、次はちゃんとやるから！　な！」

我を忘れかけてはいたがまだ聞く耳は持っていたようだ。マキノは謝罪を受け入れた。

「朝二度祈るなど言語道断です。いいですか、今から私が祈りを捧げます。低脳勇者でもわかるように子供用のお祈りをさらに簡略化したものをお見せしますので明日からはこれを行ってください！」

そういうとマキノは簡略化したという祈りを捧げた。その作法は折り目正しく、まさに神官というものだった

「えぇ！　そっちの方が簡単じゃん！　あたしもそれ……」

マキノと目があったためそれ以上言うことができなかった。

「ゲルンさんは大人の女性用をちゃんとやってくださいね」

「はい」

ゲルンは素直に頷いた。

マキノはてきぱきと用の済んだ聖堂を元の箱型に戻していく。それが終わると全員で朝食を取った。

「さて、お祈りも朝食も済んだ所で今後のことを相談したいのですが」

「あぁ、そうだったな、忘れるところだったぜ！」

ここで忘れて他に何をするのかと言いたくなったがアイゼンは自重した。お祈り騒ぎの間にすっかり朝日が登ってしまっている。払暁が襲撃には適していると言われるがその期は既に失われていた。

「日が登ってしまった今から襲撃をかけるというのも間抜けな気もするのですが」

「まぁ、もともと偵察が目的だしな。とりあえずこのまま様子見てあそこに本当に魔王がいんのか確認しても……お、なんか出てきたぞ」

魔王城から出てきたのは偉丈夫といっていいだろう戦士然とした男の魔族だ。袖のない単純な白い貫頭衣を着ており、むき出しの腕には黒縄をより合わせたような筋肉が盛り上がっている。その手には背丈を超える槍が握られていた。

魔族は集団ごとにそれぞれ特徴があるが、この集落の魔族の肌はどうやら黒いらしかった。

「ふむ、なかなか雰囲気のある奴じゃないか。あれが魔王か？」

フォグがそう判断したのは、ここにやってくるまでに遭遇した魔族よりも格段に強そうに思えたからだ。

「魔王城を発見したって冒険者はあいつを見たのかねぇ。まぁあれならわからんでもないか」

妙に冒険者に固執するゲルンだった。

「あれは、投槍だな。狩りにでも行くのか？」

魔王らしき魔族は館から出た後は何をするわけでもなくただ立っていた。しばらくすると周辺の小屋からも魔族が出てきた。これも男だ。ぞろぞろと他の小屋からも出てくると館の前に集まり始めた。全員がその手に槍や弓を持っている。服装も似たり寄ったりだった。

「総勢１５名ですか。魔族の家族形態は知りませんが人間に当てはめるなら男が全員出てきたといった所でしょうね」

「全員、遠距離武器だし狩りに行くんだろうな。で、この中だとやっぱり最初に出てきた奴が一番強そうに思えるな。ゲルンはどうよ」

「あぁ、間違いねぇな。あいつが魔王だ」

「……このあたりで一旦撤収しませんか？　敵の構成もだいたいわかったことですし」

アイゼンはだんだん嫌な予感がしてきた。人払いの魔法をかけているので森の中にいる限りはまず気づかれることはないはずだが、

それでも魔族が近くに寄ってくれれば発見されてしまうだろう。狩りが目的だとしてもこちらに来ないとも限らない。

「そうだな一旦引き返して他の遊撃隊と合流すれば戦力的には……ン？」

「どうしました？」

「いや、今魔王と目があったような……」

４人は魔王に注目した。確かにこちらを見ている気がする。魔王だけでなく魔族全員がこちらを見ていた。フォグの目はまっすぐ魔王をとらえ、そして魔王もまたフォグをまっすぐに見つめていた。

「狩られるのって……もしかして俺ら？」

魔王が槍を振りかぶった。最大限まで背をそらし力を溜める様は引き絞られた強弓を思わせる。槍の穂先はカタカタと音を上げ、徐々に早くなる振動はやがてヴゥンという唸りをあげるにいたった。高速振動する穂先は白熱化し光を放ち始める。無理やり注ぎ込まれる力に耐え切れずこのままでは槍が持たない。誰もがそう思う瞬間魔王がその力を解き放った。

槍は空を裂いた。雷鳴の如き唸りを上げ瞬時に森に到達し、そして森が爆発した。

＊＊＊＊＊

フォグ達のいた地点を中心に樹々は放射状に吹き飛んでいた。根こそぎだ。根っこからまるごと吹き飛ばされた樹々は、さらに他の樹々を巻き込んで被害を広げ、森の中に空白地帯を作り出していた。

巻き上がった土砂が一帯の視界を妨げる。爆発の余波はいまだおさまらず砂塵を撹乱し小規模な嵐さえ巻き起こっていた。

しばらくして砂嵐が、砂煙程度の規模におさまってくるとぼんやりと爆発の中心に何かがあるのが見えてきた。魔族たちもこの間、黙って様子を見ている。

そこにあったのは聖堂だった。

「げほっ、げほっ、なんだこりゃ、ひでぇな、なんにも見えねぇ」

「なんですか、あれは？　魔王というのはここまでのものですか！？」

「いや、あたしはそれよりこの聖堂の頑丈さに恐れいってるんだけど……」

「当然です！　神の宿りし聖堂が魔王ごときに砕けるわけもありません！」

「あぁ、いやすまんかった。これからは本当にちゃんとお祈りするわ。神様さまさまだな」

「しかし……少し疑問に思ったのですが……マキノさん、あなた礼拝の度に聖堂を手作業で展開してましたよね？　今この聖堂が、勝手に私達の前に飛び出して勝手に展開したように見えたのですが……」

「神のご加護です！」

マキノは胸を張った。それは信仰にたいする一片の曇もない、信者とはかくあるべきという姿だった。彼女には神の使徒たる神官を害することなど出来るはずがないという狂信的な確信があった。

「でだ、どうすりゃいい？　マキノの信仰バリアーであれが防げるとしてもだ、あれを連発されりゃどうしようもねーぞ」

「そう何度もあの規模の攻撃はないと信じたいですね」

「今の攻撃は結構溜めがあった。接近してその暇あたえなきゃどうにかなるだろ。まぁいつもの作戦でいくしかねーな」
「その場合はまた私の出番はないわけですね」

魔族相手に遊撃隊が主に取っている作戦というのはこうだ。気づかれる前に、アイゼンが魔法により攻撃。その後マキノが神聖魔法により魔族を弱体化させ、そこにフォグとゲルンが突っ込んで暴れるというものだ。気づかれてしまっている状態ではアイゼンの発動に時間のかかる魔法は使いづらいし、神聖魔法が発動してしまった後ではアイゼンの魔法は相殺されてしまうためすることがなくなってしまう。

「魔王は俺がやる。ゲルンは周りのやつを頼む」
「了解！」
「魔王を除いても１４名は一人では多すぎるでしょう。私もいきます」

マキノが前線に出てくるのは珍しい。大抵の場合は神聖魔法「神の牢獄」の維持に努めて後衛に待機している。

「じゃカウントダウンな、３、２、１、ＧＯ！」

合図とともに3人が聖堂の影から飛び出す。まだ視界はよくないがまずは集落の方に駆け出す。

砂塵を抜けるとそこには１５人の魔族全員の姿があった。この魔族の行動は、魔王の攻撃に全幅の信頼をおいていたがために致命的な油断となった。まさか無傷で切り抜けるとは思っていなかったのだ。１５人全員で行動しているのも生き残りがいた際に中途半端なことはせず全員で押し包み殲滅するためだった。

まずは戦斧を腰だめにしたゲルンが飛び出す。彼女は周り全てが

敵といった戦に滅法強い。おあつらえ向きの状況だ。

「うらあああぁあああ！」

何も考えずただ戦斧を振り回す。初撃で3人の魔族が両断され吹き飛んだ。魔族側も驚愕から立ち直り一旦距離を取って手にした弓や槍を打ち放つ。だがそれは暴風のように無茶苦茶に振り回される戦斧に阻まれゲルンには届かない。

ゲルンに巻き込まれないように十分距離をとってフォグが出た。魔王を視認すると聖剣を鞘より抜き放ち振りかぶった。そのまま一気に距離を詰める。振りかぶっただけの聖剣が輝きを放った。これが聖剣の聖剣たる所以だ。この光は魔族の動きを一瞬だが止める。そしてその一瞬があれば魔族を屠るには十分だった。フォグは聖剣を手にして以来魔族には全く苦戦していない。この聖剣の力により魔族退治は害虫駆除程度にしか感じなくなっていた。

「死ねや、害虫が！　人間様なめてんじゃねー！」

聖剣を魔王に上段から叩きつけた。動きを封じられた魔王を両断するはずの聖剣の軌跡。だが、それは魔王の右腕によって防がれた。上にあげた魔王の手首あたりで受け止められている。

「人間風情が、我が槍を防ぎ、我に一太刀浴びせる……これが勇者というやつか？」

「は！　余裕こいてんじゃねー！」

フォグは聖剣に力を込める。聖剣のさらなる能力が発動した。剣と手首の鍔迫り合いのようなものはあっさりとその天秤をフォグに揺らす。手首を切り飛ばし、後ずさった魔王の胸元を切り裂いた。

聖剣は魔族に対して異常に効果のある対魔族専用の武装だ。魔族

は触れただけでもただでは済まない。

「貴様……」

魔王は己の不利を悟った。1対1では対抗手段がない。聖剣の輝きは事前の覚悟さえあれば多少抵抗できるが一瞬動きが止まるのは避けられず、そして受けてしまえば問答無用で切り裂かれる。

魔王は部下を見た。数は魔族側の方が多い。見たところ飛び出して来た敵は3人だった。数で押せばなんとかなるだろうと期待したがそこには予想外の光景が広がっていた。

「……第5の御使いが鐘を鳴らす。汝信仰を示せ。イネレクの民は一番の歌謡いの舌を引き抜き御使に捧げた……」

「……第6の御使いが笛を吹く。汝信仰を示せ。イネレクの民は一番の鍛冶の右腕をもぎ取り御使に捧げた……」

マキノが歌うように神聖魔法の祈祷を行っていた。そこにあるのは理不尽で一方的なものだ。

ゲルンへの攻撃を無駄と悟った魔族はマキノを標的と定め矢を放った。が、当たらない。ゆっくりと無造作にこちらに歩いてくるマキノだ。狙いを外すなどありえない距離で放った矢はなぜか当たらない。

マキノは神聖魔法の発動に必要な呪文を唱える。経典にあるイネレクの民の章だ。驕り高ぶったイネレクの民に神の御使いが信仰を問いただし、民が信仰を示すために試行錯誤する。最初は工芸品や金品などといった物質的なものを捧げることから始まるが、徐々に苦痛や生贄を捧げていき、最終的には全ての民が身を投げ出すがそれでも神は許さないという身も蓋もない話だ。

その故事になぞらえた現象が魔族の身におき始めていた。

舌が抜け、目が抉られ、腕をもぎ取られる。一人に起きる現象は

一つのため壊滅にはいたっていないが、苦痛に身をよじれば、ゲルンの戦斧が襲いかかる。詠唱が進むほど苛烈な内容になっていくため後の方の現象の餌食となったものはほぼ即死だった。

「と、こんなものでしょうか。第１４の御使いまで詠ってしまいますとこの場の全員が死にかねませんし」

「マキノちゃん……」

ゲルンは呆れた顔でマキノを見つめた。今までは「神の牢獄」を使うマキノしか見たことがなかった。神の牢獄は一定範囲を神の恩寵で囲い範囲内の魔族を弱体化させる神聖魔法だ。マキノの信仰が加わった神の牢獄は、弱い魔獣程度なら消しとばすが、それでも神聖魔法というのは怪我の治療や支援に使うものだと思い込んでいた。

「で、魔王さんよ、お仲間は全滅だぜ！」

フォグが勢い込む。嵩に掛かって連撃を加えた。魔王もなんとか抵抗しようとするも、いちいち動きを止められるため完全には避けきれない。致命傷とはいえないが、それでも小さくない傷がだんだん増えていき、反撃もままならないまま魔王は地に膝をつきその動きを止めた。

「まぁ、なんだ、最初の攻撃には焦ったが聖剣だけで方がついたな。精霊魔法も見せてやりたい所だったが」

フォグは聖剣を肩に担ぎ上げ魔王を見下す。勝負は決したとフォグが確信した時、日差しが一瞬陰った。

烏だ。

空の彼方からあらわれた烏はゆっくりと降下し魔王の肩に止まる。

「使い魔でしょうか？」
「うぉ！　アイゼンかよ、急に出てくんなよ」
聖堂の影にずっと隠れていたアイゼンがいつの間にかフォグ達４人の間に立っていた。
「大勢は決したようですので危険はないかと思いまして」
「なんかお前、今回あんまり役にたって無いよな？　人払いの魔法も見破られたし、攻撃にも参加してないし」
「それはまぁ、魔法使いという以前に参謀的位置づけでもありますし、いちいち前線に出なくてもいいかとは思うのですが」
苦笑気味にアイゼンは言うが、役に立っていないことは少し気にしていた。
「くくくっ、はははははっ！」
魔王の哄笑が響き渡った。何がそんなにおかしいのか、死にかけの体を揺すっての大笑だ。
「ははははっ、貴様らに面白いことを教えてやろう……マテウ国……貴様らの国だろう？　落ちたぞ」
「は？」
フォグ達は何を言われたのか分からなかった。
「俺たちと遊んでいる間に、貴様らの国は落ちたといったのだ！残念だったな！」
「負け惜しみにしちゃ、痛々しすぎるぞ、お前。魔王らしく潔く死

ねよ」
「あぁ、殺すがいい。しかし、大魔王とはな！　あれが何なのか……」
フォグは肩に担いでいた聖剣を振り下ろした。袈裟懸けに断たれた魔王の半身が地に落ち、肩の烏は一声鳴くと飛び立った。
「なんだよ、気分わりーな、こっちが負けてるみたいな感じじゃねーか」
「大魔王とは一体……。とにかく館を捜索しレガリアを破壊しましょう。そこまで出来れば残党は問題ないはずです」
館内の捜索はあっけなく終了した。入って直ぐの広間にご丁寧に鎮座していたからだ。レガリア、侵食の宝玉。人類を悩ませる魔族領の発生の原因だった。侵食の宝玉は、時間と共に複製を産むというやっかいな性質を持っている。
聖剣の一太刀を浴びせると宝玉は簡単に壊れた。レガリアは破壊出来ないとされているのでこれは複製だと判断出来る。
捜索を終えた勇者フォグとその仲間たちは急いで国へと戻ることにした。

2話　邂逅

マテウ国の最高権力者が交代してから1週間が過ぎた。ほとんどの国民にとっては特にこれといった事件は起こっておらず、今までと変りない生活を過ごしていた。

少し変わった事があるとすれば、とても美しい少女を街で見かけるようになったことぐらいだろう。彼女は特に何をするわけでもないがベイヤーの街をうろうろしている。

一番影響があったのは商売をやっている者達だ。この少女は気まぐれに店を訪れ物色し気に入ったものがあればそのまま持っていく。基本的には着の身着のままと言った様子で物をあまり持っている様子はなく、あまり大きな物を持っていくことはないが、特に困ったのは食料品店や飲食店だ。

八百屋や菓子店では店頭で美味しそうなものを見つけてはその場で食べてしまう。飲食店ではメニューを見て内容を吟味して注文したあげく、舌鼓を打ち、礼儀正しく「ごちそうさまでした」と言ってそのまま立ち去る。

そんなことをされては困るので文句をつけるも少女はまったく聞く耳を持たない。暴力に訴えるにしても相手は少女だし気が引ける。そこで役所に訴え出ても役人も困った顔をするばかりでどうともしてくれない。明確な犯罪行為だというのに訴えは尽く退けられた。なぜならこの少女は大魔王でこの国で何をしようと一切が免責されると言うのだ。

しかし商売人たるものこの状況をも利用できなくてはならない。彼らは大魔王には逆らわずに、「大魔王様のお気に入り！」「大魔王様御用達！」「大魔王様もご満足！」などと宣伝に利用することを始めた。

実際大魔王の趣味はなかなか良くお薦めに足るものだった。

大魔王は金だけは頑なに払おうとはしなかったが、店側がお薦め

文を書いて欲しいと言うと二つ返事で請け負うし、一緒に写真を取りたいという頼みも快く引き受けた。

それらの宣伝と共に謎に包まれていた大魔王という存在は徐々に知られていった。

まず非常に穏やかな気質らしいと言うことだ。誰に対しても丁寧な口調で話しかけるし、どんな暴言に対しても特に怒ることはしない。多少嫌そうな顔をすることもあるがそれで首が飛ぶというようなことはなかった。これは街で横暴な振る舞いをする貴族の連中と比べると天地の差がある。

ただ明確な挑戦に対する処置は果断だった。

この特に強そうにも見えない少女が大魔王だと知り名を上げようと挑んだものがいる。貴族の冒険者で名をホルスと言った。実績のある冒険者で有名な所では第1魔族領の踏破によるティアル王国への行路の確立、最近では第3魔族領の魔王城の発見が挙げられる。その実力から勇者候補とされたが軍に束縛されることを厭い冒険者を続ける逸材だ。

街の広場で大魔王と対峙したのだがそれは戦いと呼べるものではなかった。大魔王は戦闘の開始と同時にホルスの左肩にそっと右手を乗せ、右下へ軽く手を振り切った。それは紙を引き裂くのでももう少し手間がかかるだろうというぐらいあっさりしたもので、内容物をまき散らして絶命したホルス本人も死の直前まで何をされたのかわかっていなかっただろう。そしてその後、

「そうそう、負けたと思ったら命乞いをしていただければ命までは取りませんよ」

と、物言わぬ死体に話かけた。どうやらどの程度やれば人間が死ぬかがわかっていなかったらしい。

この顛末を見学していたものがさらに驚いたのが、派手に臓物をぶちまけて死んでいるホルスを前にした大魔王には返り血の一滴も

ついていないということだった。
そして明確な挑戦がないのならばどんな暴力にも特に反応を示すことはなかった。石を投げつけようが、矢を射掛けようが、剣で斬りかかろうが、魔法をかけようがまるで問題としない。それらは大魔王に痛痒すら感じさせることはなく反撃するまでもなかった。
結局のところ、喧嘩を売りさえしなければ危険はないということだった。逆にうまく利用すれば商売の役にも立つ。
その事が自然に広まっていくにつれ大魔王という存在は街になじみつつあった。

＊＊＊＊＊

勇者フォグ一行は一週間程かけて首都ベイヤーに戻ってきた。荷物を打ち捨て、馬を乗り継ぐなどすればもっと早く戻れたのかもしれないが、聖堂を運ぶ関係上大型の馬車が必要になりあまり無茶な事もできなかった。他の荷物はともかく聖堂の放棄はマキノが頑なに拒否したせいだ。
途中国内で情報収集を行いながら戻ってきたが、国境近くでは大魔王の存在が知られていなかった。首都に近づくほど確かになってきた情報をまとめると、突然大魔王という存在があらわれ王の上に立ったが、今の所国民の生活になんら変化はないということになる。

「意味がわからん」

とぼやくのはフォグ。

「とりあえず王に謁見するのが早いのではないでしょうか」

アイゼンは御者席から返事をする。
街の入口で彼らは検問の順番を待っていた。検問の行列待ちはいつものことでこれは特にいつもと変わりが無いようだった。

「つーかよー、特に魔物の集団に占拠されてるとかじゃないんなら急いで戻ってきた意味ねーんじゃねーの？」

ゲルンが馬車の中であぐらをかき、戦斧の手入れをしながら言った。
マキノはぐっすりと眠っている。フォグはこの女はお祈りしてるか寝てるかだな、と思った。
検問の順番が回ってくるころには日が暮れそうになっていた。軍事関係者である彼らには別の入口もあるのだが、今更急ぐ理由もないということで検問所を通ることにした。入出の管理が分かれると少しややこしくなるので出来れば検問所を通ったほうがいいという理由もある。寝ているマキノは馬車に置いておき、３人で検問所へ赴いた。

「これは、フォグさん。お帰りなさい。あれ、マキノさんは？」

検問所の女性兵士が親しげに声を掛けてきた。軍服姿ではあるが威圧感を与えない明るい感じの女性だ。

「よぉ、ダフニー！　あぁ、マキノなら馬車で寝てるけどかまわんだろ？　さっそくだけどよ、魔族に襲われたってほんとか？　そんな感じは全然ないんだが」

フォグは久しぶりに会ったダフニーに気軽に返事をする。ダフニーは少し困った顔をした。

「えぇと、襲われてはいないのですが……」

「ん？　大魔王ってのが来たんだろ？」

フォグは首をかしげながら問い直す。やはり何か思っていたのと違う。

「そうですね、大魔王様は確かにおられるのですが、別に襲われたということは……」

ゲルンがダフニーを睨みつけた。

「てめぇ、どういうつもりだ？　大魔王様だぁ？　何様づけしてんだよー！」

ダフニーは慌ててゲルンを黙らせようと口を抑えにかかった。

「ちょ、ちょっと滅多なこと言わないでくださいよ！　誰に聞かれてるかわかりませんよ！　もうこの国は大魔王様の支配下にあるんですから！」

「二人共落ち着いてください。……そうですね、まずは私達がいない間にどうなったのか教えて下さいませんか？」

アイゼンが仲裁に入った。このままゲルンが騒いでいると話が進まない。

「えーと、襲われたとかはなかったようですね。２週間ほど前に突然大魔王様がおいでになられたようです。高札が立てられて、この国は大魔王様の支配下になったという御触れが出されました。レガリ

ア、春風の外套は大魔王様がお持ちになられています。今のところ特に国の体制としては変化はありません。王はご健在で今まで通りに政務についておられます」

ダフニーは一気に喋りきった。

実際は国王の周りにいた近衛兵は襲われているのだが、検問所の兵士にまでその話は伝わっていないようだ。

「……君臨すれども統治せずってやつか？」

「それはちょっと違うような気がしますが……」

「あたしら急いで戻ってくる必要なかったんじゃないか？　なんか思ってたのと違うしよー。それならせっかく魔王は倒したんだ。残党をきっちり処理して魔族領を開放したほうがよかったんじゃねーか？」

「まぁ、そうは言いましてもあの場では何もわかりませんでしたしね。確かに魔王の言葉に踊らされた感はありますが」

「とにかくだ、一旦城に行くしかないな。現状の報告と今後について考える必要がある」

フォグは考える。魔王を倒したと思ったら大魔王があらわれた。魔族は敵だ。普段は向こうから積極的に襲いかかってくることはないが、それでも突然魔族領を発生させ、人類の領土を奪っていく。故に魔族が特に何もしていないように見えるというのは、こちらが戦いを挑まない理由にはならない。そのうちいずこかに魔族領が発生するのだ。奪い返さねばならない。もし、それが大魔王という存在の元に行われているというならこれはチャンスだ。ここで人類の

大逆転ということもあり得る。

「では、手続きはこちらでしておきますので、皆さんはお城に向かってください」

フォグ達はその言葉に甘え城に向かうことにした。

＊＊＊＊＊

城の謁見の間。そこにフォグを隊長とする第1遊撃隊とゴドウィンという男を隊長とする第2遊撃隊の姿があった。

城に向かい謁見の申請を行うとすぐさま許可が下りたのだが、なぜか第2遊撃隊も呼ばれている。

今までの経緯は謁見の申請時にあらましは述べてあった。

彼らが跪き頭を下げた状態で待機しているとしばらくして王があらわれた。

「楽にするがいい」

王の指示に従い頭を上げる。少しおやつれになられたか？　とフォグは思ったが、さほど変わりがないような気もする。少なくとも敗戦国の王といった風には感じられなかった。

「まずは、勇者フォグ。大儀であった。魔王討伐に関しての論功行賞は春の大祭で行うこととする」

論功行賞は春と秋の大祭で通常行われていた。魔王討伐ともなれば大々的に行われるのだろうと思っていたが、今となってはどうな

るのか。大魔王の支配下で魔王討伐の功績を讃えられるなど笑い話にもならない。

「そして勇者ゴドウィン。そちには、魔王亡き後の第3魔族領完全開放を命じる。開拓団300人を率いよ」

そして第2遊撃隊に命じられたのはフォグ達の残務処理だ。レガリアの破壊により魔族領としての勢力は消失している。そのうち蔓延っていた魔獣の類も自然といなくなるだろう。だが、魔族は別だ。その場に留まるかもしれず残党の殲滅が必要だった。

それと元魔族領は中立地帯ということになる。この領土をマテウ国に組み入れる必要があった。国の領土はレガリアの有効範囲とされている。この有効範囲を広げるにはレガリアの支配下におかれていない地域にレガリアの恩恵を受けている国民が長期的に暮らす必要があった。その為の開拓団だ。

衣食住が保障され一定期間暮らすだけの仕事なのだが、魔族の残党や、他国の侵略などで命の危機にさらされることもある。基本的にただの平民の集まりである開拓団に戦闘能力はないので襲われればまず助かることはなかったが、特に職能が必要ないのでそれなりに人気はある職業だった。

「以上だ。だが、皆聞きたいこともあるだろう。許す。なんなりと申せ」

フォグの目に何か言いたげなものを感じたのか、発言を許可した。

「では……大魔王……様とこの国の関係はどうなっているのです？その、一体どのような方なのでしょう？」

フォグもこの場では言葉を取り繕う。

「レガリア、春風の外套の所持者だ。しかしそれだけだな。あやつは国政には口を出さんようなので今まで通りだ」

馬鹿な！　レガリアを奪われたということはこの国の全てを奪われたということだ。それが今まで通りだと！

「まぁ、なんだあやつもあまり無茶はせん……と思う。今のところ無銭飲食ぐらいのものだ」

大魔王が無銭飲食って何だよ！

「どのような方か……あやつは……いやなんでもない」

王は少し顔を赤くした。何赤くなってんだよ！　ねぇ、今何考えたの、ねぇ！

王にツッコめるわけもなく、喉まで出かけたそれらのフォグは言葉を飲み込んだ。喉のあたりに何か詰まったようにすら感じた。

「他にないか？　ではこれで謁見を終わる」

王が退室した。

残された遊撃隊員たちは微妙な表情になっている。

「おい、ゴドウィン！　お前これでいいのか！」

フォグはゴドウィンに訴えかけた。一体俺達のいない間に何が起こっている？

「知らん。王命に従う。それだけだ」

言葉少なにゴドウィンが答えた。ゴドウィン。第2遊撃隊隊長、またの名を聖盾の勇者。フォグに比べて頭ひとつ大きい背丈に、筋肉で膨れ上がった大柄な体。殴り合えば確実にフォグが打ち負けるだろう。その名を示す聖盾は謁見の間へは持ち込んでいないが、この武装も魔族に有効なものだった。

「クソっ！　おい、アイゼン、ゲルン、マキノ！　行くぞ」

吐き捨てるように仲間達を呼びつける。その目にいつものフォグにはない光を感じたゴドウィンは思わず声をかけた。

「待て、どこへ行く？」

「大魔王だ！　この目で直接見る！」

「……なら、検問所の兵士に知り合いがいただろう、奴に聞け。大魔王の居場所を知っているはずだ」

なぜダフニーがと思いつつも忠告は素直に聞くことにしフォグ達は謁見の間を後にした。

＊＊＊＊＊

その店は「アレがヤバイ亭」と呼ばれていた。最近注目の宿屋兼酒場だ。これまでは「まずネーミングセンスがヤバイ」とか「アレってなんだよ」とか散々な言われようだった。

木造2階建てで1階が食事も出す酒場になっており、2階が宿屋

となっていた。名前以外の特徴としては街の郊外にあるせいか同様の店よりも広くゆったりとした空間を贅沢に使っており、知る人ぞ知る店だった。店名のアレさに加えて郊外ということもあってか客足は悪かった。

この店が注目を集めるようになったのは1週間前からだ。その頃に大魔王がふらりとあらわれ無銭飲食をしていった。それ以来何が気に入ったのか大魔王は毎日一度はあらわれ、ご飯を食べたり、隅で寝転がったり、2階の宿屋の一室を占拠したりと好き放題し始めた。

大魔王がよくやってくるという噂が広まり始めるとあっと言う間に人が集まるようになり、繁盛するようになった。元々質の良い店だったこともあり常連客も増え始める。店にとってはいいことづくめだったが中には納得のいっていないものもいた。

「おい、こら、大魔王、いい加減に金払えよ！」

宿屋の一人息子デリク、今年１４歳になる少年だ。デリクは金を絶対に払わない大魔王にいらいらしていた。

大魔王は窓際の４人がけの丸テーブルを一人で占領している、大魔王の好みはよくわからないがそこがお気に入りらしい。店内はほぼ満席で、外にも幾人か並んでいるのだが、大魔王と相席になろうというものは誰もいなかった。

大魔王はいつも同じ格好をしている。今日も黒いドレスに、白いケープ、髪は無造作に白いリボンでくくってあった。そう何着も同じ服を持っている様にも思えないのだが、いつ見ても埃の一つもついていない。

大魔王は手にしたフォークを口に運ぶ。テーブルの上には大量の料理が置かれていた。

「オカミさん、この豚肉はおいしいのでもっと欲しいです。出来れ

ば丸焼きでください」

妙なイントネーションで店主を呼ぶのは、女将さんと他の常連が読んでいるのを聞いて「オカミ」という名前だと勘違いしているからだ。特に誰も訂正しないし、結局似たようなものなのでこれで落ち着いていた。

昼時で騒がしい店内でも大魔王の声は自然と必要な者の元へと届く。

「あいよ！　こらデリク！　遊んでないで働きな！」

オカミ、ことリサが大声を張り上げる。こちらは大声を張り上げないことにはデリクの元に声は届かない。

「遊んでねーよ！　この馬鹿から金を受け取るのも仕事のうちだ！」

「そうです。働かざるもの食うべからずといいますよ？　あなたはその手にもっているお皿を私のテーブルにおいて他のお客さんにも料理を運ぶべきです」

「お前にだけは言われたくねーよ！　つーか、お前は客じゃねー！　なぁ、お前大魔王なんだろ？　えらいんだろ？　だったら大金持ちだよな？　金持ってんだよな？」

「金？」

大魔王が可愛く小首をかしげる。デリクは顔を真っ赤にした。本人は怒りによるものだと信じたいところだろうが、どう見ても大魔王の魅力にやられているようにしか見えない。

「な、何、初めて、そんな単語聞きました、みたいな風にしてんだよ！」

どん！　と皿を置くとデリクは厨房に戻った。それ以上この場にいると何かおかしくなってしまいそうだ。

結局の所大魔王の集客効果は大魔王が食べる分の金額よりも遥かに上だ。女将も最初こそ戸惑ったものの今では逆に有難がっていた。

デリクが大魔王に絡み続けるのは、気になった娘に何かとちょっかいをかける子供のようにしか見えていなかったし、今ではこのやり取りも店の名物として集客の一助になっていた。

いくら大魔王が寛大で何を言っても怒らないといっても、ここまでの勢いで大魔王に絡める人間はそうはいない。

「なんだかわかりませんが勝った気分がしますね」

大魔王は豚肉のささったフォークを片手ににこりと微笑んだ。

そんな大魔王のいつものやりとりを離れた席から食い入るように見ている者達がいた。

フォグ達勇者４人組だ。４人ともフード付きのコートを着こみ顔が見えないように工夫していたが傍から見るにかなり怪しい。しかし昼時の混雑のせいか彼らに注目するものは誰もいなかった。

彼らはダフニーに大魔王の居場所を聞いてここにやってきた。ダフニーが言うには、最近は街の外からやってくる人達の中にも大魔王を一目見たいと言うものが多く、何度も案内するうちに各時間帯における大魔王の居場所を把握するに至っていた。

「えぇっと……俺、何がなんだかわかんないんだが……」

「私に聞かないでください」

「あたしにも聞くなよ、わかんねーから」
「豚肉おいしそうですね」
あぁ、と3人がマキノを見やる。
「お前はなんかあいつと気が合いそうだな」
3人を代表してフォグが言った。
「しかし思っていたのとは随分違いますね。女性ですか、随分と愛らしい……」
「くぉらぁ、鼻の下伸ばしてんじゃねーぞ、ありゃ敵だろうが！」
「ですが、彼女を殺せますか？　どう見ても普通……とはいえないぐらいの美少女ですが、人間にしか見えませんよ」
「つーか、全く強そうに見えねー。素手でもひねり潰せるだろあれなら？」
4人はテーブルの上で顔を付き合わせぼそぼそと喋っていた。
「……俺は勇者だ。あいつが大魔王だと言うなら俺の敵だ、戦うしかないな」
「止めはしません。ですが、どうしましょう。まさかこんな所で戦うわけにもいきませんし」
「ダフニーに聞いた所、大魔王は広場で戦うらしい。なのでそれは

問題ないはずだ。……よし、俺が大魔王を誘い出す。お前らは先に広場に行って準備をしておいてくれ」

「わかりました」

３人が席を立ち、勘定を済ませ先に店を出ていった。ここは街の郊外なので広場までは歩くと２０分はかかる。準備も考えると１時間は要るか？　と考えフォグはその場でじっと待つことにした。

その間も魔王は豚肉やら牛肉やら鶏肉やら羊肉やら蛙肉やら蛇肉やらを食べ続けていた。肉ばっかかよ！　野菜も食えよ！　バランス考えろ！　とツッコミたくなるぐらい大魔王を凝視していたフォグは時間が来たと判断して立ち上がり大魔王のテーブルへと向かった。

「おい」

「なんでしょう？」

大魔王が側に立つフードの男を見上げた。全身をコートで包んでいるため何者かははっきりしないが、隙のない身のこなしが戦いに身を置くものだと思わせる。

「お前が大魔王と言うのは本当か？」

「はい。そうですが、何か御用でしょうか？」

フォグはフードの付いた外套を一気に脱ぎ捨てた。何か面白そうなことが始まったのか？　と店中の客が注目し始める。そこにいたのが白銀の鎧を着た聖剣の勇者であるとわかった時、店は一瞬静まり返った。その一瞬が過ぎた後、店内が爆発したように騒がしくな

る。

「おいおい、あれ勇者様じゃねーか！」

「え、いろいろあって忘れてたけど、勇者ってどうなったんだっけ？」

「ばかやろー、出陣式やってたろうが。つーか、聖盾の勇者とか、聖棍の勇者とかいろいろいるだろ！」

「で、なに大魔王ちゃんに何か用かよ」

「まさか、戦うとか？」

「いやいや、前の馬鹿がやられるとこ見たけどあれ見た後、挑む奴はいねーだろ？」

「じゃ、告白すんじゃね？」

「おぉ、そっちの方がまだありそうだな！」

喧騒の続く中デリクが大魔王とフォグの間に飛び出した。両手を広げ大魔王の前に立つ。デリクは大魔王の素性について詮索したことはないが、言葉通りに大魔王だとは思っていなかった。ふざけた態度がまかりとおることと、その美貌から王族に連なるやんごとなき方ではないかと夢想したこともある。彼としては深窓の姫君を守る騎士のような気分だった。

フォグは訝しげな顔をした。

「お、おい、勇者のにーちゃん、こいつになんの用だよ！　こいつ

は大魔王とか言ってるけど、悪いやつじゃねーんだ、いや、金払わないから悪いのかもしれんけど、別に人に迷惑かけたりしてねーよ！」

フォグはまだ用件は何も言っていないのだが、早とちりしたデリクは喚いた。

フォグはこれからという所を騒がれ、喚かれたことに苛立った。邪魔だといわんばかりにデリクを押しのける。デリクは立っていられず尻餅をついた。それを見た大魔王の眉が一瞬動いたが、それに気づくものはいなかった。

「勝負しろ！　俺は聖剣の勇者フォグ。王直轄部隊、第1遊撃隊の隊長だ！」

大魔王はフォグの名乗りをろくに見ていなかった。席から立つと、デリクの手を取り立ち上がらせる。

「大丈夫ですか？」

「あ、あぁ、べ、別になんてことねーよ」

大魔王の顔を今までになく間近に見て、デリクは真っ赤になった。手まで取られているし、それに何かいい匂いもする。どうしようもなく恥ずかしくなった。

大魔王はフォグの方を振り向いた。

「勝負ですね。では広場に行きましょうか。ここでは狭いですし汚れてしまいますからね」

大魔王は、女将のリサにごちそうさまでした。大変美味しかった

です。と挨拶をして店を出た。フォグはそれに黙って続く。
大魔王は店を出た後ゆっくりと広場に向かって歩き始めた。かなりの鈍足だ。フォグは後ろについて歩いていたが歩幅をあわせるのに苦労した。
このペースじゃ２０分以上は楽にかかるな、とイラつき始めると大魔王がこちらを向いた。

「大魔王と勇者が戦いの場にのこのこと連れ立って歩いて行くというのはおかしいと思いませんか？」

何を言い出す？　とフォグが疑問に思うと大魔王の顔が目前にあった。今の発言中のどこかで間合いを詰められたようだがその瞬間が分からない。
大魔王がフォグの襟元を掴む。細く白い手だった。繊手とはこのようなものを指すのかもしれない。

「ですので、あなたは先に行って後からゆっくりとあらわれる大魔王を迎え撃つというのはどうでしょうか。いいですね、そうしましょう」

と言うと一人で勝手に納得した大魔王はフォグを片手でぶん投げた。広場の方に向かって。

＊＊＊＊＊

「うわあああああああああああああああああああああ！」

フォグは叫び続けた。視界が真っ赤に染まり、回転し、自分がど

こにいてどうなっているのかまるで分からない。
真っ赤な視界に広場の噴水が目に入ったような気がした。時間感覚が間延びしていく中、一部冷静な自分が益体もない計算を始める。一瞬見えた広場の様子から半分ほどの距離を飛んできていた。大雑把に考えて広場までの距離が２ｋｍとするとここまで約１秒、秒速１キロメートルとすると……音速を超えていた。マッハ３ぐらいだ。
このまま地面に激突すれば即死だ。どんどんと時間が遅くなっていく、視野も何故か妙にくっきりと、拡大して見えるようになってきた。いや、これは単に広場に近づいてきているだけか。はっきりと、仲間たちの姿が見えた。
広場で人払いを行っているアイゼン。ははっあいついつもあんなことばっかしてんな。
戦斧を手に仁王立ちするゲルン。お前格好良すぎるだろ、そんなんだから男にもてねーんだよ。
何かよくわからないお祈りをしているマキノ。ちゃんとお祈りにつきあってやりゃよかったよ、真面目にやんなくてごめんな。
……って、ちげーよ！　なに別れの言葉みたいなこと考えてんだよ！
愛すべき仲間たちの姿を見かけた瞬間、思考がさらに爆発的に加速した。
ちくしょう！　こんなとこで死ねるかよ！　全力で考えるんだ！
生死の境で過去の記憶が高速でよぎって行く。その中にフォグは活路を見出した。精霊魔法だ！　こんな時こそ精霊の加護を使わなくてどうする!?　風か？　土か？　炎か？　水か？　いやなんでもいい、つーか全部だ！
「精霊達よ！　なんでもいいから助けやがれー！！！！」
まず風の精霊が動いた。小さな少女の姿をした精霊が逆風を吹かせた。これで速度が落とせる！

次に水の精霊が動く、妖艶な美女の姿の精霊が広場の噴水を操った。水が飛び出しフォグを包み込む。これでなんとか耐えられるか！

そして土の精霊が動いた、小太りのオヤジの姿の精霊が広場の石畳を泥状に変えていく。いいぞ、泥ならぶつかってもなんとかなりそうだ！

最後に炎の精霊が動いた、蜥蜴の顔をした青年の姿の精霊がその筋肉質の腕を大きく広げ、そこからゆっくりと腕を組んだ。そして黙ってこちらを見つめている。少し困り顔だ。……いや、お前もなんかしろよ！　なんで黙って見てんだよ！！

炎の精霊にツッコミを入れてる間にフォグは広場に激突した。激突の恐怖が紛れたという意味でなら炎の精霊も多少は役に立ったのかも知れない。

3話　対決

轟音と共に広場の中央から盛大な泥飛沫が跳ね上がった。泥は上空高く舞い上がり周囲一帯に泥の雨を降らせた。

幸いアイゼンが広場の人払いを行っていたおかげで怪我人は出なかった。ただ街の人間にとってはいい迷惑であることは間違いない。屋台などは広場の端にまで移動していたのだが、それでも食い物などは泥をかぶってしまい売り物にならなくなってしまった。

街の人間は特に説明をうけないまま人払いをされていたのでこの大爆発を見て、あぁ、だから人払いをしていたのかと納得した。

街の人間以上に驚愕しているのがアイゼン達だ。何か叫び声が聞こえたと思ったら突如広場が泥だらけになって爆発したのだ。

呆然としていたが、あの叫び声がフォグのものだったのではないかと思い至るとアイゼンは動転した。慌てて広場の中心を見る。

泥の中に砕けた噴水の破片がそこかしこに埋まっていた。その破片を押しのけるように水で出来た玉がゆっくりと浮かび上がってきた。

「フォグ！」

水球の中にいるフォグを確認し、恐慌状態になったアイゼンが泥の中に飛び込む。体は泥の中に腰まで埋まってしまった上に、焦りも手伝い中々前に進めない。落ち着きをなくしたアイゼンだったが、がむしゃらに手で泥をかき分けながらなんとか水球に辿りついた。

「み、水が！　このままでは息ができない！」

水球に完全に包まれているフォグをはっきりと確認し、さらに狼狽するアイゼンにマキノの一言一言ゆっくりと発するような落ち着

いた声がかけられた。聖職者として人々に広く訴えかける日常で身についたものだ。

「アイゼンさん、落ち着いてください。それは水の精霊によるものです。精霊の加護を受けている勇者に危険はありません」

マキノの声でアイゼンは少し冷静さを取り戻した。だが、どうしていいのか判断がつかない。

「とりあえず上がってこいよ！　多分精霊がうまくやるだろ」

ゲルンもやってきてアイゼンを促す。この調子で泥に侵入した所で身動きできない人間が増えるだけだ。

アイゼンは泥から抜け出すべく引き返した。帰りが比較的に楽になっていたのは泥が固まり始めていたからだろう。アイゼンが抜けだす頃、水球もその全体を表した。中には頭の後ろで手を組み、頭を臍に近づけた胎児のようなフォグの姿があった。頭と体の中心部分を守るためにこのような態勢になったのだろう。

程なくして水球が破裂し中のフォグを吐き出した。もうすっかり硬くなった地面の上にフォグが落ちた。げほっ、と少し水を吐き頭を上げる。

「……死ぬかと思った……つか、俺死んでんじゃね？」

意外に元気そうだった。だが、勇者といえども精霊の加護を持ち、貴族の体をもつフォグでなければ切り抜けることは出来なかっただろう。

「大丈夫ですよ。神の国はあなたがやってきたとしても受け入れ拒否です。追い返しますから」

「そうそう、俺は神の国に受け入れられない……って、結構ひどい事言ってねーか？」

「よかった……無事だったのですね……」

アイゼンが安堵の余り膝から崩れ落ちた。

「無事……じゃねーよ。体中がいてぇ。まぁ精霊のおかげで助かった」

風の精霊が不安そうにフォグの周りを飛び回っていた。水の精霊が大破した噴水から溢れ出る水を癒しの雨と変えてフォグに降らせる。土の精霊は泥と化した広場を石状に戻していた。石畳から泥になったはずだが、石畳そのものには戻せないらしい。炎の精霊は腕を突き出し親指を立てていた。

「グッジョブ！　じゃねーよ！　お前結局なんもしてねーだろ！」

精霊はフォグ以外には見えていないので何の事か、仲間達には分からなかった。たまに何もない空間にツッコミ始めるのはフォグの奇癖だ。

「一体何があったのですか？　わけがわからないのですが」

「大魔王にぶん投げられた……」

「はぁ？」

全員の声が揃った。投げたということはあの酒場から？　俄には

信じられることではない。

「とにかくだ、大魔王がやって来る。とろとろ歩いてたから３０分はかかるだろ。それまでに戦いの準備を整える！」

「作戦はどうします？」

「いつも通りだ。アイゼンお前はとにかく最大威力の魔法をぶっぱなせ。その後マキノが神の牢獄、俺とゲルンで突っ込む！」

「地霊爆を仕掛けましょう。３０分あればかなりの数を用意できます」

「まかせた。マキノ、回復させてくれ！　精霊だけだと時間がかかる。奴が来る前になんとか全快したい」

普段ならこんな時、あれこれ文句を言うマキノも今回ばかりは素直に祈祷を始めた。フォグの信仰度ではあまり神聖魔法は効かないのだが、マキノの手によればフォグの回復程度はなんということもなかった。

神聖魔法による回復は朝夕の祈祷を行った状態にまで回復させるものだ。つまりお祈りにより健康な状態の自分の状態情報を神に提供していることになる。その際適当なお祈りではその情報伝達が不十分になり回復魔法はうまく効果を発揮してくれない。ただそれは普通の信者に普通の聖職者が回復魔法を使用した場合であってマキノなら話は別だ。彼女はフォグをよく知っている。朝夕どころか常に見続けていた彼女は神になりかわりフォグの状態情報を無意識に維持していた。

ゲルンは何をするでもなく立っていた、戦う前からこの有様の広場を見渡し言い知れぬ不安を感じていた。

＊＊＊＊＊

１時間が経つころようやく広場に大魔王がやってきた。３０分かかるという目算だったがそれ以上の時間が経過している。

大魔王は小さな女の子と手をつないでいた。反対側の手にはソフトクリームを持っている。女の子も同様にソフトクリームを持っていた。お揃いだ。二人はソフトクリームをちびちび舐めながら楽しそうに広場にやってきた。

フォグ達が黙ってみているとそのままどんどんと近づいて来る。広場の中心にある壊れた噴水のあたりまでやってきてようやく足を止めた。位置的には、大魔王、フォグ達、噴水が一直線に並んだ形になる。彼我の距離約１０メートル。

「なんだ、それはっ！」

対面したフォグが叫んだ。アイゼンも気勢を削がれる。まさか子供ごと魔法に巻き込むわけにも行かない。

「ソフトクリームですよ。牛乳で作ったお菓子です。おいしいですよね？」

「ねー」

大魔王が話しかけると、女の子がうれしそうに返事をする。

「さて、これから勝負をするのです。ライサさん、お家はわかりますか？」

「うん、広場まで来たらわかるよ！」

「では、ここは危ないので広場の中には入ってこないでくださいね。まっすぐ帰るんですよ？」

「うん！　じゃーねー、大魔王のお姉ちゃん、またねー」

「はい、またお会いしましょう。あ、私のソフトクリームをあげますよ。よければ持って行ってください」

女の子は思わぬ戦利品に目を丸くした。お礼を言うとソフトクリームを両手に元気よくかけていく。大魔王は女の子が広場を出、角を曲がって見えなくなるまでその姿を見守っていた。

「お前のことだ、ソフトクリームでも舐めながら戦うのかと思ったがな！」

フォグは無視されているような気がしたので無理やり話しかけた。

「そんなことはしませんよ？　あれ、それは私があなたを宥めているのと、かけていたりします？」

「かけてねーよ！　なんだよお前は！　どんだけ時間かかってんだよ！」

「それはそうと勇者さんも無事たどりつけたようで何よりです。適当に広場の方に投げたあとで弾道計算を忘れていたことに気づきました」

フォグが精霊魔法を使わなければ広場を超え街を飛び出すところだった。広場に着地させるつもりなら放物線を描くように山なりに放り投げるべきだったのだが、投げた後に気づいてもどうしようもない。大魔王は追いかけて広場に叩き落とそうかとも一瞬思ったようだがそれだと結局一緒に着いてしまうと思い自重していた。

「では……いつ始めますか？」

「今からだ！」

フォグ、ゲルンは大魔王から一度距離を取った。壊れた噴水ギリギリまで飛び下がる。アイゼンとマキノは援護のため噴水の後ろに回り込み隠れた。彼らの魔法は敵の視認は必要ない。事前に準備は済ませてあった。

大魔王の周りの石畳が次々と爆発した。

アイゼンの地霊爆だ。地面を爆破し指向性を持った石礫を敵に叩きつける魔法だ。地味な魔法にも思えるが生身でまともに食らえば原型を止めることは出来ない。噴水を中心に戦場になりそうな場所にこの魔法が大量に仕掛けてあった。破裂し砕けた石弾の全てが一斉に全方位から大魔王に襲いかかる。

だが大魔王は全く意に介さない。ただその場に立ち続けていた。

「こういう場合少し困りますね。食らってもなんともないものをわざわざ躱すのも受け止めるのもなんだか違う気がしますし、かといってただ食らうのも癪ですし」

石礫は大魔王に触れることがなかった。石礫がお互いに干渉しあい、ずらし、そらし何故か大魔王にあたらない軌道をとっている。膨大な量の石礫の弾幕の中に凪いだ海のような静寂の空間が作り出されていた。

結局大魔王は無傷で地霊爆を切り抜けた。噴水の陰からその様子を見ていたアイゼンは青ざめた。十分に時間をかけて用意した必殺の布陣だ。この初撃で終わるとすら自負していたがその自信は木っ端微塵に砕かれた。

「こんな感じだと、スマートでしょうか」

大魔王がしたのは数度石礫を弾き返しただけだ。それがどのような計算の元にか散弾のような石礫の軌道を狂わせた。

マキノが神聖魔法、神の牢獄を唱える。これ自体には攻撃力はない。一定範囲内の魔族の力を抑えるだけだ。だがこの魔法が大魔王に聞いているとはとても思えなかった。大魔王の様子は少しも変わらず、どんな些細な影響も感じていないことを伺わせた。

ゲルンが飛び出した。戦斧を叩きつける。ゲルンの闘法は我流であり、その太刀筋は無茶苦茶だ。ただ膂力にまかせて重量をぶちかます。今まではそれでもうまくいっていたが、我流は我流。基本的な動きがなっていない。通常の流派ならあるはずの体の中心線を守るための動きが技に含まれていない。

戦斧が届く前に大魔王は動いていた。蹴りだ。ただの前蹴りがゲルンのがら空きのみぞおちを撃ちぬいた。その衝撃は革鎧越しに肋骨を折り、内蔵を押しつぶす。血反吐を吐きながらゲルンは吹っ飛んでいった。

同時に突進を開始していた、フォグが肩に担いだ聖剣を発動する。その輝きはあたり一帯を白く染めたが神の牢獄が効かない相手だ、素直に通用するとはフォグも思っていない。

さらに地を蹴り加速したフォグが聖剣の光の中から飛び出した。大魔王に真正面から斬りかかる。

しかし大魔王は無造作に左手を斜め後ろに付き出した。

「ちょっと面白かったですけど、それをやるなら聖剣を囮にするぐ

らいの思い切りが欲しいところですね」

大魔王の手には白く輝く聖剣の刀身があった。大魔王の目前にいた勇者は見る間に色をなくし、透明な水と化すと、ばしゃんと音を立てて石畳に広がった。

大魔王の斜め後ろから斬りかかったフォグはそのままの姿勢で硬直していた。聖剣を掴んだ大魔王の手がびくともしない。押そうと引こうと微動だにしなかった。

フォグは聖剣で目眩ましをした隙に水の精霊の力で分身を創りだし突撃させた。地の精霊で大魔王の足元を泥濘化し動きを止め、自らは風の精霊で急制動と急加速を駆使し大魔王の背後に回りこみその首を取った。つもりだった。

だが、大魔王は分身は無視し、泥濘化した地面の上には普通に立っている。一寸足りとも沈み込んでいなかったし、聖剣の一撃は軽く掴み取られてしまった。聖剣の魔族への特効もまるで通用していない。

どうすればいい？　聖剣を手放して一旦距離を取るか？　いや、聖剣は絶対必要だ！　これが魔族攻撃の要なのは間違いない！　本当にそうか？　今も素手で掴まれているのにダメージを与えていない！

それは一瞬の間のことだったが、ぐるぐると空転する思考に囚われていたフォグの耳にみしりっという不吉な音が届いた。

「あれ、案外もろかったですね」

聖剣がひしゃげた。じっくりと力をかけられた刀身が半ばから折れ曲がっている。大魔王の掴んでいる部分などは小枝のような細さにまで圧縮されていた。

「まったく使いこなせてませんよ、これじゃあ強度が下がるのも仕

方ないですね」

大魔王が呆れたように言う。

「まぁ、これはこれでもらって起きましょうか。珍しいですし」

大魔王の足が跳ね上がった。聖剣を掴んでいる側、左の足刀がフォグの脇の下に入るとあっさり肩口を抜け顔の高さまで上がる。白銀の鎧は紙1枚程の抵抗も見せなかった。

伸びきった膝を折り曲げ足の裏でフォグを噴水まで押し飛ばすと、ゆっくりと足を揃えた。その一連の動作で大魔王の体軸がぶれることはない。

「下着が見えてたら恥ずかしいですね」

切断された右腕付きの剣を片手に恥じらっていても、そんなものは誰も注目していなかった。

フォグの絶叫が響く。肩から溢れ出す鮮血は噴水の水と混じりわずかに薄めながらあたり一面に広がっていく。

「フォグ！」

ここまでの闘いを呆然と見ていたアイゼンとマキノが慌てて駆け寄った。

「大分手加減というものを覚えたのです。そちらの人も死んでいないと思いますよ」

大魔王が右手でゲルンを指さした。こちらも噴水に激突していた。噴水は先程からの何度もの衝撃ですでに原型を留めていない。

アイゼンは死に物狂いでフォグの肩口を押さえて真っ赤になっていた。マキノは指摘を受けゲルンの様子を見る。ゲルンは肋を何本か折って内蔵を痛めたようだが命に別状はなさそうだった。

水の精霊が癒しの雨を豪雨のように降らせているおかげでフォグの朦朧としていた意識は回復しだした。出血も大分抑えられてきたが即座に回復できるわけではない。ここまでの大怪我となると神聖魔法でもそう簡単に回復することは出来なかった。

「何をやってるんですか？　腕ぐらい生やしてかかってきてください」

「ふっ、巫山戯るな！　腕が生える人間などいるか！」

アイゼンに支えられたまま頭を起こしたフォグはなんとか言い返したが、見るからに生気がない。瀕死の重傷であることは間違い無いだろう。これ以上の闘いは無理としか思えなかった。

「失礼ですね、普通の人間の腕が生えないことぐらいは知ってます。でも、勇者だったらそれぐらいしてください」

大魔王が拗ねた。ほおをふくらませて子供のようだ。

「わかりましたよ。じゃぁこれを返しますからくっつけてください。それぐらいなら出来るでしょ？」

と言って大魔王はフォグの右腕を放り投げた。聖剣は握られたままだ。結局そんなに興味がないのだとしたらフォグは一体なんのために右腕ごと奪われたのか意味がわからなかった。

右腕の切断面は恐ろしく綺麗だった。だが、だからと言ってくっつけて動くようになるものでは当然ない。

放り出された右腕を前に呆然とするフォグを見て大魔王はため息を付いた。

「それも無理なんですか？」

壊滅だ。遊撃隊はすでに戦闘を行える状態ではなかった。近接戦闘を行える二人はすで身動きがとれない状態になってしまっている。後衛の二人でこれ以上の戦闘続行は不可能だろう。誰もがそう思った。

「そうそう、いつも戦いの前に言うのを忘れるんですが、負けを認めてくださったら命までは取りませんよ。今回は死ぬ前に言えてよかったです」

「負けを認めたら……どうなる？」

「別になにも。好きになさったらいいと思いますよ。生き恥を晒すつもりはない、一思いに殺せ！　ということでしたら殺しますけど」

フォグは考える。命を助けると言うのだ。その誘いは素直に受ければいい。そして情報を集める。今回は相手の事を何も知らなかった。今まで戦った魔族の延長上でものを考えていた。それでは駄目だった。こいつは何か根本的に違う。まずはこいつがなんなのか徹底的に調べるのだ。再挑戦はそれからでも遅くはない。

「食べてくれ、という方もおられましたがそれにしますか？」

武器だ。聖剣以上の武器がいる。あれはこいつに通用しない。いや、他の勇者の武器はどうだ？　遊撃隊の隊長で組んであたるってのはどうだ？

フォグは結論を出した。とにかくここは生きて帰る！　後はそれからだ！

「わ、わかった、俺達の負けだ、助けて……」

負けと言い出した時点でマキノがゆらりと立ち上がった。ゲルンの応急処置は終えたらしい。

そしてフォグの元へとやってきた。

「負けた？」

マキノが感情が一欠片も感じられない声でささやいた。フォグを見下ろす。

フォグは身をすくめた。マキノの目に光が感じられない。これは……まずい。

マキノが大きく足を振りかぶった。そして、フォグの肩口を思いっきり蹴り飛ばした。フォグの絶叫が再度広場に響き渡った。

4話　決着

「マキノさん！　やめてください！」

アイゼンがマキノを止めようと後ろから近づき羽交い絞めにしたが、マキノの蹴りは止まらなかった。

フォグは悶絶しごろごろと転がる。

「勇者が負けるなど認められると思っているんですか？　勇者とは聖遺物に選ばれたもの！　つまり神が選んだ！　つまりあなたが負けるということは神の選択を冒涜するものだと言うことです。わかっているんですか、いえ、わかっていないんでしょうね、だからあっさりと負けたなどと口にできる。腕が無くなったぐらいでリタイアですか？　神舐めてんですか？　まだ2本の足と、一本の腕があるでしょうが！　それも無くなったなら噛み付いてでも戦えよ！　なぁ！　それに何聖剣壊されちゃってんの？　はぁ？　そりゃあんたの信仰が足りないって馬鹿でもわかるように教えちゃってるじゃない。ねぇ、満足？　自分の無能さを世間にひけらかして満足？　神が全知全能ではないとは広く知られた事実ですがそれでもこれはヒドイ。こんなのを選んじゃうなんて！　あぁ、今私は神を疑ってしまいました。それもこれも全部あなたのせいですね？　ひどいですね、中央正教の神官に神の正気を疑わせるなんてね！　この駄勇者！」

マキノが一気にまくしたてた。フォグは涙目で怯えている。苦痛より何よりマキノが怖かった。完全に狂神官のスイッチが入っている。

何かわからんが俺はもうダメだ、とフォグが打ち砕かれようとした時、マキノは一転聖職者の穏やかな笑顔を見せた。

「すいません、少し言い過ぎましたね。でも私はフォグさんには期待しているんですよ。負けたなんて言うのは作戦だったんですよね。そう言って敵の油断を誘うつもりだったんですよね。でも、それならそうと相談してくださいね。うっかり本気にしちゃうじゃないですか。そんなことないなんてわかってますけどね。さぁ」

とマキノが手を差し出した。

「勇者ならまだ戦えるはずです！　ここで不屈の闘志と共に絶望的な闘いに身を投じてこそ勇者です！　勇者とは勇気ある者のこと！　この場面こそ勇気を示す最良の舞台です！　敵の強さなんて関係ありません。敵が弱ければ闘い、強ければ尻尾を巻いて逃げ出すなんて勇者のすることではありません。弱い敵を嬲るなんてことはそこらの十把一絡げの冒険者共にまかせておけばいいのです。勇者は本当の強者にこそ立ち向かうもの！　誰もが逃げ出す巨悪に立ち向かうもの！　この神の恩寵の行き届かない世界の端々まで救済の光を届ける世界の守護者です！　人類の救世主です！　さぁ！　立ち上がるのです！」

フォグはマキノの手を取るとふらふらと立ち上がった。マキノの言葉がするりと心に入ってきて、なんだかまだ戦えるような気がしてきた。

「さぁ、聖剣を手に取るのです。魔族に対抗するすべに乏しい人間に与えられた神の恩寵です。一振りすれば魔物の動きを止め、二振りすればその生命を止めると言われる斬魔の剣です！　その聖剣はあなたにしか使えません。そうあなたは聖剣に選ばれたのです！」

フォグは残った左手で聖剣を手に取る。ひしゃげた聖剣をもった

フォグはこれぞ敗残兵といった姿だった。

「さぁ、戦うのです！　あなたには貴族の体と精霊の加護と聖剣があるのです！　貴族の鋼の如し体は魔族如きの攻撃は物ともせず、精霊はあなたを癒し、守り、援護し、聖剣は国中の信仰を束ね神の敵を討つのです！」

フォグはふらふらと大魔王に向かって歩いて行く。うつろな顔をしておりそこにまともな意思の影は見られなかった。

「大丈夫ですか？」

これにはさすがに大魔王も少し可哀想に思ってしまった。大魔王としては手加減の幅にぶれがあったりはするが積極的に殺したいというわけでもない。このあたりで終わってくれるのを望んでいた。

勇者が聖剣を振りかざす。信じがたいことにひしゃげた聖剣はそれでも輝きを失ってはいなかった。

「ちょっと可哀想になってきたのでとりあえずその聖剣、それはもうやめにしましょうね。ハルさん、聖剣のリンクを解除してください」

『了解です。魔力供給ポートの拒否リストに聖剣のオブジェクトＩＤを追加しました』

大魔王がそう言うとレガリアが応えた。聖剣は次第に輝きを失い、鈍色のするただの鋼の剣になってしまった。

「そもそもこの国のレガリアを持っている私には聖剣の魔力供給の

遮断が可能ですので聖剣で闘いを挑むのは不向きでしたね」

大魔王はレガリアと聖剣のリンクを切り離した。レガリアはその莫大な能力を維持するために国民全てから魔力の徴収を行っている。これは誰にも気づかれることなく行われていることで、見えない税とも呼ばれていた。

聖遺物である聖剣は神聖魔法で動いており、その源は神への信仰だ。聖剣の能力は使用者の信仰が反映されるのだが、個人の信仰などたかが知れている。そこでレガリアと聖剣をリンクし、国民の信仰をまとめて聖剣に流しこみ使用者の信仰の代替とすることでその力を発揮していた。

「これで頼みの綱もなくなったことですがどうしますか？」

フォグは意識を取り戻した。急速に覚めてきた頭で先ほどの自分が自分でないような状態はマキノによる軽い洗脳のようなものではないかと思い至りぞっとした。

聖剣との同調が解けた際に霧が晴れたように感じたので、聖剣を通じてなんらかの操作を行っていたのかも知れない。そう考えるとますますマキノが不気味に思えてきた。

「あ、いや、俺は、もう……」

マキノの方を振り向く。天使のような微笑をしたマキノがいた。あれは多分怒っている。さっきからずっと狂神官のままだ。

「俺はちょっと休憩する！　まだ負けてないが休憩だ！　マキノ！　しばらくまかせた！」

苦しい言い訳だがどうだろう？　内心ビクビクしながらマキノを

見た。表情は変わらない。フォグは勝手に大丈夫だと判断してアイゼンの元に向かった。

「おい、アイゼン。広場の端に行こう。ゲルンを担いでくれ」

「ちょっと！　マキノを一人にして大丈夫ですか！」

「いけるだろ、大魔王にちょっかい出さなきゃ大丈夫なはずだ」

「……わかりました。とりあえずゲルンさんをほうっておくわけにも行きませんし」

アイゼンはゲルンを抱き上げると、フォグと共に広場の端に向かった。

＊＊＊＊＊

広場の端に辿りついたフォグは地面に座り込んだ。アイゼンはゲルンをそっと地面に横たえる。

「フォグ、怪我は大丈夫なのですか？」

「あぁ、水の精霊がどーにかしてくれたみたいで大分ましになった。マキノに蹴られた方がよっぽど痛かった」

マキノの方を見ると大魔王と対峙していた。あれ、さっきまであんな感じじゃなかったような？　と思うとゴロゴロという音が聞こえてきた。音のする方、広場の入口を見やるとマキノの聖堂が一人

で勝手に動いているのが見えた。今回は持ってきていなかったはずだ。

「え、え？　どうなってんの？　あれ聖堂だよね？」

「そうですね……呼び寄せたんでしょうか？」

「何のために？」

二人は顔を見合わせる。この状況で考えられることはそうない。まさか私の聖堂自慢を大魔王相手に始めるわけではあるまい。

「ちょっかい出す気だ！」

マキノの元までやってきた聖堂が自動展開した。フォグ達の見慣れた、旅の間祈りを捧げていた見覚えのある形になる。

「なぁ、前から思ってたんだけどさ……マキノってたまにすごく怖くね？　マジキチじゃね？」

「まさか！　中央正教の１２神官に選ばれ、街に出れば聖女と敬われ、ご老人方には拝まれてしまい、お祈りマキノンという愛称で広く親しまれている彼女が！」

「……いろいろツッコミどころはあるがあいつの他に１１人も似たようなのがいるとするなら中央正教って怖いよ……」

「ちなみにあなたの想像は大体当たっています。中央正教においてそこらの宗教団体にありがちな組織腐敗の類は皆無と言っていいでしょう。下の方はそれほどでもありませんが、組織上部の人間は似

たり寄ったりの狂信者です」

「それがマジキチだろうが！」

「中央正教は他のおためごかしの宗教とは違い、現世利益がありますからね。神の存在を信じやすいのです。そのせいで修業が進み、神の存在を間近に感じるようになればなるほど、その信仰を深めていくわけで、トップの教皇ともなるとそれは凄まじいまでの信仰なのでしょう」

「げぇっ……あれより上がいんのか？」

フォグはげんなりした。こうやって話していてそれなりに体力は回復したようだ。それでも、もう一度戦えと言われると尻込みしてしまうだろう。

「で、マキノは何してんの？　ここでお祈りはないと思うが、ってなんか取り出した？」

マキノは聖堂の中から持ち手の付いた薄く黒い板のようなものを取り出した。

「あ、あれは！」

「知っているのかアイゼン」

「斬れない鋸！　聖遺物の一つです！　まさかマキノさんが持っているとは……いえ、レプリカでしょうか」

「何だよそれ、わかるように言えよ」

「中央正教の始まりの伝説に関わる聖遺物です。切れ味の悪い鋸で体を切断するという拷問に使用するのですが、あれは神の子を拷問するのに使われたという代物です」

「で、凄い威力でもあるのか？　だったら普段から使えばいいのに」

「いえ、そういう話は聞いたことがないのですが……」

その使い道はすぐに判明した。マキノは右手に持ったのこぎりをそっと左手首にあてた。何度か位置を微調整し満足のいく箇所を探しあてたのか、一切の躊躇なくのこぎりを引き始めた。

「ちょっ！　なにやってんのマキノー！」

フォグは見たものをそのまま受け入れることが出来なかった。意味が分からない。ここで自分の手首を拷問する意図が分からない。

「あれも祈祷の一種ですね、神の子の故事の再現です」

最初のうちは、ぞりぞりと音を立てていたが、次第にグシュグシュと血と肉を攪拌し、骨に達したのかゴリゴリと聞くものを不快にさせる音色を奏でた。

「痛い、痛い、見てるほうが痛い！　ねぇなに、あれ何!?　ほんと、マジキチじゃねーか、どーなってんのよ！」

「多分ですが、トランス状態だとすると本人は痛みを感じていないのかも……」

「いやいや、そういう問題じゃねーだろ！」

ぼとりと音を立てて左手首が落ちた。斬れない鋸という割には案外早い。

マキノは左腕をふり聖堂に血を振りかけ詠唱を始めた。

こんな悠長なことをやっていて大丈夫かとフォグは思ったが大魔王に動きはなかった。マキノは神の加護を信じているため何の迷いもない。何者も自分を傷つけることはないと硬く信じている。

しばらくして聖堂に変化があらわれた。

「え？　少し大きくなった？」

気づいた後は劇的だった。あっという間に周囲の石畳やら噴水やらを取り込んで聖堂は大きくなりつづけ見上げんばかりのサイズとなった。これではもう教会そのものとすらいえる。

「はあああああぁ！？　なんじゃそりゃ！　ねぇ、なんであんなことできんのよ！」

「あ、あれは！」

「また知ってんのか？　アイゼン」

「首の聖堂です！　聖地の一つ、カルリーヨにある神の子の頭を納めてあるという聖堂ですよ！　拷問によりバラバラにされた頭が保管されているというのですが……まさかそれを召喚？　いえ複製でしょうか」

その聖堂を前にマキノが朗々と歌い出した。澄んだ声音が響き渡る。一枚の絵画のような光景だった。左手からは出血を続けていた

が、地面に広がるそれすらも彩りの一部となっていた。
光の柱が幾本も天から降ってきた。その光景はますます宗教画じみてきたが、それすら序の口だった。
その光のなか何かが降りてきた。翼を持つそれらは、悠然と羽ばたきゆっくりとあたりを睥睨しながら降りてくる。それが１０体。
その姿は異形だ。それは二足歩行の白い鰐とも、手足の生えた蛇ともとれる姿だった。体長は３ｍ程だ。尻尾まで含めた全長は５ｍを優に超える。全身は白い鱗に包まれているが、その下にうねる筋肉を隠そうともしていない。顔はほとんどが口で、巨大な顎から伸びる上下の牙は口内には収まらず貫通している。顔の側面におまけ程度にしか見えない小さな瞳がついていた。
巨大な４枚の翼が背から生えているがこれが物理的に意味のあるものかはわからない。羽ばたきと浮遊にあまり関連性は見えなかった。
胴体の延長ともいえる極太の尻尾の先端は瘤を寄せ集めたひときわ大きなものになっており、それは顎と並びこの異形の主要な武器であることを想起させた。
武器はこの異形の肉体以外にもある。手に持つ槍がそれだ。それは槍と呼ばれる程複雑な構造ではなかった。ただの鉄の棒の先端を尖らせただけのものだったが、その大きさから想像される用途は槍と同様のものだろう。

「あれは……」

「どうせ知ってんだろ？　アイゼン？」

「業天使と呼ばれる神の尖兵です。そしてマキノさんの祈祷は、見捨てられし神の子の歌！　時の権力に捕まり衆人環視の元での拷問で死に追いやられた神の子が死の間際に歌ったという！　そして業天使の持つ槍は、神の子を貫きし槍！　神の子が死ぬまで突き立て

られたという聖遺物の一つです！」

「え？　その槍何本もあるように見えるがレプリカかなんかか？」

「槍は１００本以上現存していますよ」

「どんだけひどい目にあってんの神の子って！？」

その天使達が歌い続けるマキノを囲むように地に降り立った。異形ではあるが、その内から発する神気がただの魔獣の類ではないことを強く訴えかける。それらはマキノの前に頭を垂れた。

「なぁ……アイゼン、勇者っていらなくね？」

「えーと……」

アイゼンは口を濁した。

「あれどう考えたって一体でも俺より強いじゃん！　何あの数！　あいつらマキノ尊敬しちゃってるよ！　つーかあいつ神に溺愛されてねーか？　俺なんて精霊に好かれてるつっても、思春期になった幼なじみがちょっと意識し始めちゃった、ぐらいの好意しか受けてねーぞ！」

「またわかりにくい喩えを」

「あいつ一人で魔族でもなんでもやれるって！　もう全部あいつ一人でいいんじゃないかな！」

「いや、そうは言いましてもマキノさん左手を犠牲にしてますよ、

これをそう何度も使うのはさすがに無理なのでは？」

「あいつならまた生えてきてもおかしくねーよ」

「それはないでしょうが……。しかしこの後はどうなるのでしょう？　私もこの魔法が最終的にどのような現象を引き起こすのかまでは知らないのですが」

＊＊＊＊＊

「準備は終わりましたか？　もう随分待っているんですが。そろそろお腹が空いてきました」

大魔王のお腹がくぅ、とちいさくなった。大魔王はそっとお腹を抑える。そんな姿も愛らしかった。

遠くから、お前はさっきまで肉ばっか食ってただろうが！　という声が聞こえてくる。

マキノは大魔王は無視して歌い続けている。

天使達は一斉に立ち上がり大魔王を睨みつけた。が、大魔王を視認した瞬間微妙に揺れた。何かに一瞬驚きそれを押さえ込んだような感じだ。

この天使達は戦力としてここにいるわけではない。単純に戦力として使用しても一騎当千を誇るだろうがここでの役割は神力の補給にある。マキノの準備している神聖魔法に必要な量の神力を提供するために呼び出されたのだ。

「ん？　どこかでお会いしたことありましたでしょうか？」

大魔王が首をかしげながら天使たちを見た。思い出そうとした所、マキノが歌い終えたのか静寂が訪れる。マキノは右腕を伸ばし天を指さした。大魔王は思考を中断しマキノを見る。

「神雷」

鼓膜が破れるほどの轟音が鳴り響いた。発生した音圧だけで周囲の瓦礫をことごとく吹き飛ばし、閃光は大魔王に容赦なく打ち付けた。それは神の怒り。古来より神罰として知られるその雷霆は神に逆らいし民を、腐敗した街を、驕り高ぶる国を尽く塵の一片すら残さず消しさってきた。神の最大級の怒りに触れた者は魂すら消し飛び一切を無へと帰順させる。

その雷霆はマキノの怒りに同調していた。すなわちここではマキノの怒りが神の怒りだ。雲ひとつない空から降り注ぐ光線にも似た雷はその全てが収束し大魔王を打ち続けた。この雷は自然に発生するものとはわけが違う、その全てに敵を打ち滅ぼし物質の最小単位まで撃ち砕くべく神意が込められていた。

それは何度も何度もマキノの気力が尽きるまで行われた。神力自体は天使１０体分、人間に比べれば無尽蔵といえる程の膨大な量を行使することが出来たがそれを使う側はあくまでも人間だ。やがて限界は訪れる。

マキノが天を指していた腕をそっと下ろす。

あたりには帯電し砕けた瓦礫が粉塵となって舞っていた。マキノには大魔王が完全に塵ひとつ残さず消滅したという確信があった。それが神罰の当然の結果であり疑う余地などない。それが信仰だ。

だがその信仰は終わりを告げようとしていた。

「うるさすぎですよ、ちょっと腹が立ってきました」

大魔王が粉塵の中から悠然とあらわれ、マキノの方へと歩いてき

た。
　無傷だ。無傷どころか粉塵の中から現われたというのに埃一つ付いていなかった。
　マキノの心にこの現実がゆっくりと染み渡っていくと、これまでの人生の中で初めて確信にゆらぎがあらわれた。口を開こうとしては、何度も閉ざした。何を言っていいのか、わからない。
　大魔王が近づいていくと天使の半分が迎撃の様子を見せた。残りはマキノの守護に回る。
　無造作に近づいていく大魔王の心臓に向けて天使の槍が5本同時に突き出された。大魔王はそれを手のひらで受ける。槍は天使と大魔王の力の衝突に耐えられず全てが蛇腹のように変形した。
　意味をなくした槍を捨て天使はさらに同時に跳びかかった。左右端の天使は尻尾を叩きつけるべく回転し、残りは顎を人が丸呑み出来るぐらい大きく開け食らいついた。
　大魔王は右手で作った手刀を軽く、内から外へと振った。それだけで5体の天使は上下に分かたれその場に崩れさった。天使の鱗は人の作りし武器は一切通用しないとされているが、それは武器ですらない大魔王の手刀の一閃であっけなく両断された。
　マキノはその光景を呆然と見ていた。そして槍が折れ曲がり、天使が倒されるごとに、信仰を揺らされた。

「あ、あああぁ」

　マキノの口から意味のある言葉は出なかった。ゆれて、ゆれて限界が訪れた。
　守護にまわっていた天使が一斉にマキノを睨みつける。そこに敬愛の色は一切なかった。侮蔑し見下すそれだった。
　信仰が一定値を下回ったと判断した天使の行動は素早かった。
　ずぶり、とマキノの太ももに槍が刺さる。愕然と目を見開きマキノが見上げると、他の天使が槍を振りかぶっていた。

マキノは神聖魔法を除けば極普通の少女の体力と能力しか持っていない。人外の膂力で振るわれる槍を回避する手段は持ち合わせていなかった。ぎゅっと目をつぶり槍に貫かれるその瞬間を待ち続ける。

さくっ、と音を立てて槍が地面を貫いた。

＊＊＊＊＊

「マキノっ！」

フォグは飛び出した。おかしな成り行きにいつまでも呆然としているわけにもいかない。

風の精霊に頼み追い風を限界まで吹かせ、地を蹴って加速した。天使の直前で手に持った聖剣を投げつける、一瞬ひるんだ隙に左腕でマキノを抱えさらに加速した。

限界を超えた急加速に靭帯が耐え切れず嫌な音を立てたが、構いはしない。そのまま広場の反対側まで走り去りしゃがみ込んだ。

「フォグさん……」

「おい、しっかりしろ、なにやってんだよ！」

「私は……」

「いいからとりあえず逃げるぞ」

マキノを抱きしめたままフォグは立ち上がる。振り向くとそこには予想外の光景が合った。

大魔王が残りの天使を潰していた。それは文字通りの意味で、上から頭部を押さえつけ、胴体にめり込ませ地面に叩きつけることで上下に押し潰していた。

そうやって一体ずつ潰されていくのを見る度にマキノがびくっと震えた。

残りが2体になった時点でフォグは大魔王に声をかけた。

「待ってくれ！　もうそれ以上そいつらは殺さないでくれ、これ以上はマキノが耐えられん！」

「いいですよ」

大魔王はその動きを止めた。そして天使に話しかける。

「そういうことです。大人しくしていてください」

天使は素直にその動きを止めた。大魔王を相手にこれ以上戦う気は無いらしい。それを確認すると大魔王はフォグ達の元にやってきた。

「天使は中々面白いと思いましたよ。それでどうするんでしょうか？　あなたは確か休憩されていたと思ったのですが？」

「あぁ、降伏する。助けてくれ」

「わかりました。その変わりと言ってはなんですがこの広場は責任を持って元通りになおしてくださいね」

「え？」

「だってこの惨状はほとんどあなたたちのせいですよ？　私は物が壊れるようには動いていません」

木っ端微塵になった噴水、爆発し泥濘化した石畳、突如としてあらわれた教会、血まみれの地面、惨憺たる光景だった。ただ、被害は全て広場の中で収まっており広場外への影響は一切なかった。

「そもそも、勝負を挑まれたのもよく意味がわかりません。宿屋の子を虐めたのでちょっと腹が立って受けてしまいましたが」

「お前は大魔王だろうが！」

「えぇ、ですが何故大魔王だと勝負を挑まれたり、殺そうとされたりしなければならないんですか？」

「お前が魔族の頭なんだろうが！」

「魔族？　なんですか？　それは？」

「はぁ？　とぼけんな！　魔族領を広げて次々に人間の領土を侵攻してるだろうが！」

大魔王は本気でわからないと言った様子になった。

「魔族領？　私は魔界１７国の全てを支配するという意味で大魔王を名乗っていますがその魔族領というのは何か関係があるのでしょうか？」

「え？　え？　なにそれ？　ちょっと待って！　何お前、魔族と関係ないの？」

「魔界の私と同じような者は魔人と呼んでいますがそれが魔族なんでしょうか？　でも魔人は魔界から出てこれませんよ？」

「待って、待って、ちょっと待って！　なんかわからん！　一旦整理させてくれ！」

「わかりました。私も勝負を挑まれれば逃げることはありませんけど、何かの誤解の末というのは困ります」

大魔王はフォグと抱きかかえられたままのマキノを見た。二人共かなりの大怪我をしている。

「もう一度聞きますけど、その怪我は生えたり、くっついたりして治ることはないんですね？」

「ああそうだよ！　レガリア、救済の王冠ならどんな怪我でも治ると聞いたことはあるがあれは他所の国の話だ」

大魔王は少し考え込んだ。やがて答えが出たのかアイゼンの方を向いた。

「アイゼン……お前、いっつも何か終わった頃にそれとなくいるのな」

「仕方ないじゃないですか、闘いが始まってしまうとあまり役に立たないんですし」

「魔法使いさん、アイボンさんですか、何か地面に書けるような道具をお持ちではないでしょうか？」

フォグは確信した。こいつは名前を間違えて覚えて以後絶対に訂正しないやつだと。

「あ、はい、石灰を固めたものならありますが」

アイゼンは上着の内側からチョークを取り出し大魔王に手渡した。

大魔王は受け取ったチョークで石畳になにやら図形を書きだした。

まず、大きく円を描きその内側に同心円状に何個も円を描いた。

その円と円の間に文字のようなものを書きだす。魔法使いのアイゼンも見たことがない文字だったが、何らかの儀式に使うものなのだろうとは推測した。

ひと通り書き終えると、満足そうにうなずきチョークをアイゼンに返す。そして

「アイボンさんはその円の前あたりにしばらく立っていてください。定期ポーリングに引っかかて、連絡がいくはずです」

「ポーリング？　なんです？」

大魔王はそれには答えなかった。きっとめんどくさかったのだろう。

しばらくすると円陣が揺れ始めた。ぷるぷると弾力を増し、揺れながら盛り上がってくる。やがてそれは人程の大きさになってその形を整え始めた。

醜い、猫背の小汚い男があらわれた。まぶたがないため眼球がむき出しなのがグロテスクだった。他の特徴として背中にある大きな瘤から生えているこれも大きな手だ。この男には計3本の腕があることになる。白いコック帽に白衣、両手に包丁、背中の手には大きな鋏が握られていた。

大魔王はこの男を知っているのか紹介を始めた。

「人間研究家のネルデフォウスという方です」

「人間料理研究家の間違いじゃないのか！」

「いえいえ、この方は普段から「人間大好き！」と」

「それも違う意味にしか聞こえんな！」

「お医者さんみたいなものですよ。両手に持っているのはメスで背中のはコッヘルです」

「それは包丁と鋏だ！」

ネルデフォウスは眼球をぎょろりと動かしまわりを見渡した。そして大魔王に向き直り跪く。

「これはこれは、最近お見かけしないと思えばこのような所におられたのですか」

見た目とは違い意外にしっかりとした男らしい声が聞こえてきた。

「お久しぶりです。さっそくですが、こちらの方の怪我を治したいんですが可能でしょうか？」

「ふむ、欠損部位は残っておりますか？」

怪我の状況を軽くみてとり尋ねる。

「その辺に転がってると思いますよ」

これですか。と、両手の包丁に突き刺さった、フォグの右腕と、マキノの左手首を見せてきた。フォグにはこの男がいつのまに動いて回収してきたのかまるで分からない。

「って、粗末に扱うなよ！」

とこれもツッコンでいる間に右腕が接合されていた。マキノを見ると同じように左手首が元に戻っている。他にも細かい傷や、切れた靭帯、刺された太ももなど目に付く傷はほぼ修復されていた。信じがたい能力だった。

「ありがとうございます。ではまた」

と大魔王が言うとネルデフォウスの姿が崩れ落ちた。砂と化し広場にばらまかれる。これも片付けるのかよとフォグはうんざりした。

＊＊＊＊＊

アレがヤバイ亭に戻ってきた勇者一行と大魔王は現状について話をまとめていた。

「つまりだ、魔界から出てきたのはお前一人ってことなんだな？」

「はい、魔界は神が作ったとされる結界で囲われているため、一定以上の強さの者は出入りすることが出来ません、私は十分に強くなってその結界を打ち破れるようになりましたので人間界に来てみた

のです。ですので私以上に強いか、ゴミのように弱くないと結界を通ることは出来ませんので、我々が人間に直接干渉することはまずありえないでしょう」

「大魔王とか紛らわしいんだよ！　魔族の奴らも魔王とか名乗ってる奴がいるんだ！」

「そう言われましても、魔界にも魔王はいますよ。１７の国をそれぞれ支配しているのが魔王です」

「だったらそういう事情は先に言っとけよ！」

「聞かれませんでしたよ？　魔族という方のことも知りませんでしたし仕方ないじゃないですか」

大魔王はちょっと拗ねた。

そして思い出したようにマキノに言った。

「マキノさん」

「は、はい」

マキノがびくっとしながらもおずおずと答える。大魔王に対してはかなりの苦手意識が発生していた。マキノはあれからずっとぼーっとしており、時折思い出したように涙を流していた。

「気を落とされることはありません。あれは人間であるあなたが使用した結果ですからそれが直接神の能力に対する疑念にはなりません。人の身であれほどの事が出来るというのはなかなかないと思います」

「そうなんでしょうか……」

「それにあの天使の人たちには以前あったことがあるのを思い出しました。その……神ですか。多分私は会ったことがあります。あまりあなたを責めないように言っておきますので元気を出してください」

マキノは信じられないものを見るような目で大魔王を見た。確かに神に会ったことがあると言われても俄に信じる事はできない。マキノも今まで神が側にいる感覚を覚えることはあったが、直接会うことが出来るなどと思っていなかった。

大魔王はこれで話は終わりだといわんばかりに、料理を注文し始めた。

フォグ達は席を立つと再度広場へ向かった。広場再建の見積もりをするためだ。修復のことを考えると頭が痛くなった。

幕間　魔族

一匹の烏が空を飛んでいた。それは昼夜をおかず飛び続け魔族領に必要なメッセージを伝えている魔族の通信網の一部だ。

マテウ国の第3魔族領の魔王にメッセージを伝えたのもこの情報網の一部だ。

それは一定間隔で世界を巡り様々な情報を収集していた。マテウ国のレガリア奪取劇もそこには含まれる。

烏達は一定の行路を巡回し、中継地点で別の烏と情報伝達を行う。そしてその情報を各魔族領に伝えていく。情報としての即時性はそれほどでもないが、情報の複製と拡散による頑健な情報網を構築していた。

その烏は情報網の終端の一つ、魔族国家エルシアへと辿り着いた。魔族国家エルシア。全ての魔族を牛耳る魔族の総本山だ。

その首都、王城の一室へと烏は向かう。こちらの王城は森の中にある木造建築の魔王城などとは違い石造りの立派なものだ。もともと人間が建てたものだが遥か昔に攻め取った後そのまま利用している。街も道路も全て人間が作ったものだ。もともと魔族には大した文化などなく人間のものを奪うことで成り立っていた。

烏はある部屋の円卓の中央の止まり木に掴まると、一声鳴き帰還を報告した。

円卓の周りには7つの影があった。円卓であることから上下関係のない闊達な議論の場かと言えばそうでもない。これも人間の残したものを再利用しているに過ぎなかった。この中で一人だけが一際大きな玉座に座り6つの影を見下ろしている。この男こそが魔族を統べる王、大魔王だった。

烏はその場にいる全員に収集した情報のイメージを伝える。それは各自の脳内で映像、音声を伴い再生された。全員がその情報の咀嚼を行ったと見て取ると大魔王が言った。

「ふふっ、面白いでは無いか。この私を差し置いて大魔王とはな。中々笑わせてくれる」

魔族の王が苦笑した。それほど面白そうでもない。ここで激昂するのもプライドの問題があるのかも知れない。

「これは、あの時の娘ではないか？　我らを散々引っ掻き回した、ヤツの娘だ」

竜が言った。竜といってもここにいるのは本人の姿を投影した影だった。本体ならこの部屋には収まりきらないだろう。

「忌々しい。しかし、この娘が何故生きている？　死んだと報告を受けたぞ、シオドア！」

獣が吠える。狼の獣人だ。足は狼そのものの足を二足歩行に適応させたかのように太く長くなっている。手は五指を揃え人間のような形態だ。全身は獣毛で包まれている。

「正確には魔界に落ちた、だな。死んだかまではわからんが魔界に落ちたなら死んだと見做していい。貴様も当時それで納得したはずだ」

シオドアと呼ばれた剣は応えた。その剣は円卓に突き刺さっている。一々こんな使い方をされては円卓を作った職人も可哀想だろう。

「ヤツはどうなったのかな。俺その時まだここにいなかったんだけど」

本が喋った。革製の装丁の大きめの本だ。それがひとりでにパラパラとめくれその音で会話を行っている。どこで音を捉えているのかはよくわからない。

「ヤツならここの地下に封印中だよ。さすが人類最強の勇者様だ。そう簡単には殺せない……って聞いたんだけどさ、ホントのとこどうなのよ？　殺せないってことはないだろ？　生かしとく理由あんのか？　メレーヌ」

石がゴロゴロと唸った。これはただの手のひら大の石だ。見た限りなんの特徴も感じられない。

「……どうだっていいでしょ」

メレーヌと呼ばれた人形が不機嫌につぶやいた。等身大の少女を模した人形だ。人形故の美しさを醸し出している。

この場にいる者達はその本当の姿を表してはいなかった。この場にいるのは、影やら、使い魔やら、代理の者だ。それらが代わりにこの場で意思を伝えている。

「で、どうするのだ？　大魔王よ。倶に戴ける天ではあるまい？　消してくるかね？　儂が出れば直ぐに終わると思うが」

竜が大魔王に具申する。許可さえあればいつでも出向くつもりなのだろう。

「面白い見物かもしれんが、たかが小娘、我らの敵ではあるまい。辺境でおままごとをやっているうちは放っておけばよい」

「それよりどうすんだ！　アルベリクの奴死んじまったぞ？　レガ

リアも壊されちまった！」

獣が言う。

「ふむ、レガリアは増えるとは言っても、そう簡単に次を産むわけではないからな。マテウ国の侵攻はどうするか」

大魔王が答える。

「マテウ国に侵入したレガリアは後2個だね。持ってるのはユーアンとグスムントだ。こいつらを動かすかい？　周りの人間を蹴散らせば領域拡張が出来ると思うけど」

本が言う。

「そうだな。それはそれで進めるとしよう。次に宝玉が増えればそれはその時に決めるとするか」

そう言うと大魔王は唐突にその姿を消した。話は終わりらしい。
その場にいた者も次々に消えていく。最後に残ったのは人形だ。
人形はゆらりと揺れたと思うとその場に崩れ落ちた。震えている。
そして狂ったように笑い始めた。
それはある一点に思い至ってしまったからだ。

「魔界から生きて返ってきた」

人形と剣はかつてあの娘を直に見ている。剣がどう思ったか知らないが、人形と他の者の見解はまるで違った。
他の者は魔界に落ちたなら死ぬと思っていた。
人形は魔界に落とせば結界に阻まれこちらに戻ることはないと思

っていた。人形は知っていた。その時点の娘の力は結界に阻まれるほどであったことを。神の結界は一方通行だ。魔界に強者を封印し続ける事を最優先しているため魔界に入ること自体は誰にでも出来る。人間程度なら封印の対象外と見なされ出てくることも可能だろうが、一度銜え込んだ獲物を逃すほど魔界の環境は甘くない。

「ははははっ、馬鹿かあいつら！　儂が出れば終わり？　放っておけ？　わかってない、まるでわかってない！」

ならば、あの娘は神の結界に打ち勝ったということだ。どれほどの力があればそれが可能だというのだ。それとも神となんらかの交渉が出来たとでもいうのか？

人形はよろよろと部屋を抜け、バルコニーへと出た。夜だ。中天にはトカゲの形をした月が出ていた。

人形はトカゲの月を見上げて両手を天にかざした。

「ネルデフォウスよ！　メレーヌが求め訴えます！　その姿をお見せください！」

そのトカゲがメレーヌをぎょろりと見た。そのトカゲの月光がだんだんと凝り集まり人の姿を取る。

ぼんやりとしているがとても美しい姿の男だ。

「人形姫よ、いろいろと端折りすぎだ。陣もないし、生贄もない。まぁそれで出てくる僕もどうかと思うけどね。君の魔力は強大で独特だ。一目でわかるから、マーカーとしての陣はいらないんだが、生贄は欲しいな。あれは報酬の一部だよ」

「申し訳ありません。焦っていたものですから。生贄については後日必ず。新たな魔法の契約をして頂きたいのです」

「ふーん、言ってみてよ。どんな魔法が欲しいの？」

「マテウ国の大魔王の動向を常に監視する魔法です」

とたんネルデフォウスは大笑いを始めた。ぼんやりとした姿が腰を折りこらえきれないというように体を振るわせる。まさかこんな反応をされるとは思っていなかったメレーヌは戸惑った。

「……そんなにおかしなことだったのでしょうか」

メレーヌには意味がわからなかったが、悪魔の行動にはさして意味のないことも多い。気にしていては魔法使いなどやっていられないと気を持ち直した。

「いや、いい、君いいよ。願ってもないね。お誂え向きってやつかな。いいよ！　それなら只でもいいよ」

只という言葉にメレーヌは警戒を深めた。悪魔は基本的には嘘を付かないとされている。だが、只は怪しすぎた。なんだかんだと魔法契約に条件を付けてくるのが常であるからだ。

「いやいや、そんなに警戒しなくてもいい。本当に只だよ。僕は大魔王様の御傍に侍る大義名分が手に入るならそれで十分だ。契約なしで人界にありつづけるのは難しいしね。君の魔力でそれがかなうなら素敵だ！」

メレーヌはいまのネルデフォウスの言葉に疑問を覚える。大魔王様？

「ん？　なにかしゃべりすぎちゃったのかな？　でももう駄目だよ。今更この契約を取り消すなら、他の全ての魔法の契約を解除させてもらおう」

「な！」

メレーヌは言葉を失う。何かとんでもない間違いを犯した気がした。

「監視するなんて言うんだ。大魔王様と敵対しているのかもしれないけど、大丈夫。契約は守るよ。そこは安心していい。ふふふっ、この間なんて久しぶりに会えたと思ったらあっさり消されちゃったからね。悲しかったよ。僕も大魔王さまの前ってことで、ちょっとはりきっちゃったからなぁ。もうちょっと時間をかけて治せばよかった。せっかく居場所がわかったけど、用もないのにのこのこと出て行けないし、いやぁ、よかった。本当に感謝しているよ。そうだ、君と契約している全ての魔法の魔力消費量を1割引いてあげよう。せめてものお礼だ。それと今回の魔法は実損分の魔力だけでいいよ」

「その……こちらのことを大魔王に伝えるというようなことは……」

それが一番の問題だった。大魔王に脅威を感じ、その動向を監視しようとしているのだ。こちらの情報が筒抜けなどということになれば目も当てられない。

「大丈夫。わざわざそんなこと言わないよ。まぁ大魔王様に聞かれてしまうと答えないわけにはいかないけど、接触しなければ気づかれることはないしね。もちろん僕程度が大魔王様に気づかれないなんてことはないんだけど、大魔王様は普段、周囲を殊更気にしておられないので、余程目立つことをしない限り大丈夫だ」

メレーヌは大魔王を名乗る娘の力の一端を感じた。ネルデフォウスはメレーヌの契約している中でも最強の悪魔だ。これまでこの悪魔の魔法を使い縦横無尽の活躍を繰り広げてきた。

だがネルデフォウスは大魔王の臣下としか思えない言動をしている。

「まぁ大魔王様に挑むなら挑むでいいよ。君がどんな華々しい散り方をするのか見せてもらおう」

ネルデフォウスは徐々にその姿を薄れさせてゆく。その姿が完全に消えてなくなったときメレーヌは絶望に包まれた顔を上げた。

「いいだろう……こうなったら人類最強の勇者でもなんでも……」

悲壮な決意を固めたメレーヌを月だけが見ていた。

1話　職安（前書き）

とりあえず書けた所まで投稿してみました。ちょっと9月は忙しそうなので平日は書けないかも。
お気に入り登録してくださった方ありがとうございます。こんなんでも読んでもらえてると思うとすごい嬉しいです。

1話　職安

「すいません、魔法使いになりたいんですが」

職業安定所の受付カウンターにやってきた少年はそう言った。

カウンターで頬杖を付き、暇そうにしていたベティは何かの冗談だろうかとそのままの姿勢で少年の顔をまじまじと見つめたが、何も分からない。人好きのする素直な笑顔だった。

栗色の髪に黒い瞳。身長は女性としては背の高めのベティと同じぐらいだった。服装はお世辞にも綺麗とは言えない様子でかなりくたびれている。

初っ端に突飛なことを言って興味を惹きつけるつもりなのかとも思ったがそういう感じでもない。

いつまでも頬杖をつきっぱなしなのはいくら客があまりこないからと言ってもゆるみすぎだと思い直し背筋を伸ばした。

「エントリーシートはご記入いただいていますか？」

営業スマイルを向けながらとりあえず通常業務を遂行することにしてみたがずっと圧迫され真っ赤になっている頬はごまかせないし、ほとんど眠りかけている所をばっちりと見られていた。今更どう取り繕おうと遅い。

エントリーシートは職安に用意してある定型書式の書類だ。少年は既に記入してあるエントリーシートを差し出してきた。

白い。ほとんどなにも書いてない。名前と年齢しか書いていない。それによると名前はアル、年齢は１５歳。このシートだけで職を紹介するのはさすがに厳しいだろう。

「聞き違いだったら申し訳ありませんが……魔法使いになりたいと

おっしゃられました？」

ベティは寝ぼけていたのかも知れないと聞き直してみた。

「はい、聞き違いじゃないですよ」

キラキラした目が眩しい。

「あのー、ここ職業安定所なんですよ。大変申し訳ないんですが魔法使いといった職業の斡旋は行っていないのですが……」

どう言ったものかよくわからなくなってきてベティは多少口調が崩れてきた。怒ったり馬鹿にしたりしないだけえらいんじゃないかなぁ私、とベティは思う。

「え、そうなんですか？　ここにくればいいとケインさんに聞いてきたんですが。ディーン開拓団のケインさんご存じないですか？紹介状も書いてもらったんですが」

「紹介状を見せてもらってもいいですか？」

ベティは紹介状を受け取るとさっそく見てみた。

ディーン開拓団のケイン。この職安で紹介した者だ。開拓団は、勇者らが制圧した魔族領に一定期間住み着き領地の占有権を得る職業だ。特に職能がいらないということでそこそこの人気職だが、命の危険もそこそこある。

紹介状には「こいつ15歳だけど職についてないんだってよ、なんか紹介してやれよ」といったことが大体そのまま書いてあった。

馬鹿にしてんのか！

「あのぉ、ケインさんが魔法使いになるならここへ行けと本当に言ったんですか？」

だとしたら今度蹴ってやる！

「いえ、ケインさんは仕事を探すならまずここへ行けと。魔法使いになりたいというのはここに来るまでに思ったことでして」

はぁ、とベティはため息をつく。この子にはまず常識からきちんと説明しなくては駄目だ。

「この国の法律はご存知ですか？」

「……いえ、全く知りません」

「15年この国で暮らしてるんですよね？」

「違いますよ？」

「だったらなんでこの国の職安に来てるんですか！」

思わずツッコンでしまった。サービス業にはあるまじきことだ。

「あぁ、つい先ほど国民になりました」

「移民してこられたんですか？」

「そういうわけでもないんですが」

ベティは首をかしげた。さっぱり要領を得ない。

「住所はどちらになるんでしょうか」

そういえばエントリーシートに書いてなかった。

「この街に来たばかりなんです。元いた場所もまだ番地とかないみたいなんですよ」

ますますわからない。区画整理でも最近あっただろうか？

「まぁいいです。とりあえずはアルさんがマテウ国民であるという前提でお話させてもらいますと、この国には１４歳で職につかなければならないという法律があります。特に罰則はありませんが皆さんこれを守っておられます」

この国では１４歳になった時点で職に就かねばならないという決まりがあった。普通は１４歳になるまでに決まってしまう。ほとんどの者が家業を継ぐからだ。継がないにしても継ぐのが嫌だという確固たる意志があるのなら別の職業について自分なりに調べ道筋をつけているはずだ。

だがこの少年は１５歳にもかかわらず職についておらず、職安にやってきてそれも魔法使いになりたいという。それは魔法使いについても職安についても何も知らないということを表していた。

職安は魔法使いなどというエリートを斡旋するための場所ではないし、そもそも魔法が使える時点で引く手数多、職にあぶれるはずもない。

「つまり、アルさんがマテウ国民だというのなら、今すぐにでも職を決めていただく必要があるのです」

「では、魔法使いでお願いします」

「だーかーらー！　魔法使いはそもそも職業じゃないっーの！」

思わず地が出たがもういいやと半ば開き直った。

「いいですか、まず魔法使いという職業はありません。魔法を使って何かをする仕事ならわかりますが、魔法使い自体は職業じゃない、ここまではわかっていただけますか？」

「あ、はい、わかりました。では魔法を使う職業というのはどんなものがあるんでしょうか」

「ふっ！　やっとまともな話になってきましたね！　そうですね、魔法は基本的に武力として扱われています。ですので警察、軍隊、警備会社などでしょうか」

「あぁ、じゃそれを紹介してもらえば！」

「すとーっぷ！　いいですか、紹介することは簡単です。実際これらの職なら常に人手不足ですので未経験も可です。けどその場合単純な労働力として雇われるだけです。魔法を一から教えてくれたりはしませんよ。魔法が必要な部署は最初から魔法を使える人を雇います」

「じゃ駄目じゃないですか」

アルはあからさまに落胆した様子を見せた。

「そうですよ。最初からうちじゃダメだって言ってるじゃないです

か。で、他に魔法使い関係ですと、宮廷魔術師とか魔法学院の教師とかですね。宮廷魔術師は宮廷にいるんでしょうね。教師は魔法教えてるんでしょう」

このあたりの説明は本人が良く知らないせいかすごく投げやりだった。

「後は強いていうなら、冒険者とか修練者とか。でもこれは職業と言えるほどのものじゃないですね。魔族領を探索したり、魔物を退治したり、遺跡を探検したりするらしいですけど、その日暮らしのヤクザ稼業って感じでしょうか。定期収入がありませんしあまりお薦めは出来ません」

「冒険者って魔法を使うんですか？」

「あぁ、これはですね、我々のような平民が冒険者をするなら魔法は必須のようですね。そもそも冒険者のほとんどは貴族です」

「そうなんですか？」

「えぇ、貴族は我々平民の１００倍近い身体能力を持つという話です。まぁ本当に１００倍かどうかは知りませんが、それぐらいすごい強いよ、ってことです。で、そんな身体能力がなくても冒険者をやるならそれを補うだけの能力、つまり魔法が必要になるというわけです」

「つまり、僕でも魔法が使えるなら冒険者になれるということでしょうか？」

なぜか冒険者に食いついてきた。これはあまりよくない流れだな

ぁと思いつつもそこは真面目に説明する。

「なるのはなれると思いますよ。というか、冒険者なんてのはみなさん勝手に自称されてるだけです。国が認定している職業一覧で当てはめると日雇い作業員となります。それに冒険者なんて言いながらもほとんどは、ならず者とかゴロツキとかそんな感じですよ。組合だか互助会だか作って徒党を組んだりしてますけどマフィアと変わりないような……まぁうちとも日雇いの仕事なんかは融通し合ったりはしてるんですが……」

最後の一言は余計だったがベティはそのあたり正直者だった。

「えぇっと、冒険者は貴族がほとんどと言うことですがゴロツキなんですか？」

「貴族といいましても、領地を持たない3等貴族がほとんどですね。このあたりの人たちは意識は平民とそう変わらないです」

「すいません、3等貴族ってなんですか？」

「えーと私もあまり詳しくはないんですが、1等が公爵で自治権のある領地を持っている貴族ですね。2等が伯爵とか子爵とかで領地はあっても自治権が無い。3等は騎士で領地がないってことだったと思います。3等の場合は一応貴族の身体能力はあるというだけで、貴族様！　って感じの雰囲気の方たちじゃないですねぇ」

騎士様！　で手を組み天井を見上げたベティを見てその年でそれはないんじゃないかなとアルは思ったがそんなことはもちろん口には出さない。

「……要は下っ端の貴族ということでいいんでしょうか」

途中でよくわからなくなったアルは大雑把にまとめた。

「いいですけど、貴族様にそんなこと絶対に言わないでくださいよ！　で、さっきの続きですが冒険者の組合はあることはあるんですが、入ってなくても冒険者自称してる人は結構います。あ、組合に入るのはお勧めしませんよ！　組合にも色々あるんですが大抵はならず者の集まりですし、みかじめ料とか取るところとかもありますし、足洗うのも大変ですよ！」

「え、でもさっき付き合いがあるようなこともおっしゃってたような……」

「ま、まぁ色々あるんですよ。魔物相手の仕事とかは彼らに一日の長があるといいますか……どうしてもということでしたら比較的穏当な組合を紹介することも可能ですが……と、いうか冒険者がどうこうじゃなくて魔法使いの話じゃありませんでしたっけ？」

「そうですね。ではその、職業とかはおいておいて魔法を使えるようになるにはどうすればいいんでしょうか」

「それを……この私に聞きますか……うーん、正直わからないです。魔法学院なんてのがあるぐらいですから教えているんでしょうけど、魔法学院なんて所に縁がないものですからどうやって入学するのかもサッパリです。後やはりお金はかかると思いますよ。失礼ですけど、アルさんお金はそんなに持ってないですよね」

「そうですね……わかりました。ありがとうございます。世の中そんなに甘くないってことですね。勉強になりました」

と言ってアルはそのまま帰ろうとした。

「ちょっ、ちょっと待ってください！　魔法使いはともかくとして、職の当てはあるんですか？　アルさん今無職ですよね？」

「あ、そうでした、すっかり忘れてました、明日のご飯にも事欠く身でした」

忘れんなよ、餓死しちゃうだろ！　と、ベティは思った。

「とりあえずですね、日雇い作業員で登録しませんか？」

「あぁ先ほどの話で出てきましたね」

「とりあえず、今のアルさんは住所不定無職という非常に危うい立場です」

「はい、そうですね、そう言われると危機感が募りますね」

「で、とりあえず日雇い作業員でもなんでも職業につけば、就労者番号を発行できます。就労者番号があれば職安を通して身分証明が可能です。すぐには無理ですが真面目に仕事をしていただければそのうち様々な保証も受けれるようになりますよ」

「わかりました。ではそれでお願いします」

ベティはさっそく就労者番号の発行手続きを行った。未記入の就労者証明書には予め就労者番号が振ってある。就労者証明書にアルの名前を記入し、エントリーシートには就労者証明書に書いてある

就労者番号を書き写す。それぞれに職安の判子を押して出来上がりだ。後はこの番号で照会して管理する。

「お待たせしました」

出来上がった就労者証明書は名刺大のカードになっていた。それをベティはアルに手渡した。

「再発行は手数料がかかりますので無くさないようにお願いします。さっそくお仕事を探されるなら、入り口入ってすぐが日雇い、もう一つ奥が短期、長くて1ヶ月程度のお仕事が掲示板に貼り出されています。こちらのお仕事を希望であれば、募集用紙の右上の数字を控えて、就労者証明書と一緒に受付にお持ちください。壁面に並んでいるキャビネットの中には長期のお仕事が入ってますが、こちらは職業更新が必要になります。まぁその場合もとにかく受付に来てください」

アルは礼をいい、さっそく掲示板を見に行った。結構な時間を受付のベティと話をしていた気もするが、暇そうだったのでいいのだろう。アルの他には誰も掲示板を見ているものはいなかった。

明日のご飯もないというのは本当なのでとりあえずなんでもいいからやってみるかと適当に物色してみた。引越しの手伝いなんかがよさそうだと見ていると、受付から「アルさん！」と大きな声がかけられた。

「なんでしょう？」

受付に行くとベティが一枚の紙をぴらぴらと振っていた。

「これ！　これどうですか？」

募集用紙を見てみた。どうやらこれから貼り出す分らしい。内容は屋内清掃とあった。アルは掃除なら得意な方だな、ずっとやってたしと思うも何故これを薦めるのかといぶかしく思った。

「掃除ならやれると思いますけど、これがどうかしましたか？」

「この依頼者です！　この方はキャシーさんと言うんですが魔法使いですよ！　うまく話せば魔法について教えてくれるかもしれません」

アルはそれはいい、なんとか話してみようとこの仕事を請けることにした。

＊＊＊＊＊

「どうだった？」

職業安定所と隣の建物の間の陰に隠れていた少女がアルに声をかけた。巨乳だ。

下世話な話だがまず目がそこに向かってしまうのは仕方がない。顔立ちも平均以上の可愛さだし、金色の髪はさらさらと腰のあたりまで真っ直ぐ流れていてとても綺麗だ。胸を含めた全身のスタイルもよい。だがこの少女を一言で表すなら先の言葉になってしまう。本人としては常に劣情のまなざしを受けるこの特徴を疎んじてもいた。

だがこの少女の今の状態は酷い有様で胸がどうとかいってる場合でもなかった。元はエプロンドレスだったと思われる服が血と泥で

汚れており、所々すり切れ、破れ、千切れ、穴が開いている。扇情的にも見えるが、それよりも痛々しさを感じさせた。まるで襲われた後のような姿だが、本人はいたって元気そうだ。

さすがにこの状態で天下の往来に身を晒す勇気はなかったのでこうやって建物の隙間に身を隠していた。

「日雇い作業員ていうのに登録した。これから屋内掃除の仕事に行くよ。リーリアはどうする？　就労証は持ってるんだっけ？」

「私は侍女で登録してますよ。立派な勤労少女です」

リーリアと呼ばれた少女は懐から自分の就労証を取り出した。片手を腰に当て胸を張りアルに自慢気にに付き出す。胸ばっか見るなとかいう癖に無意識に強調しちゃうんだもんなぁとアルは思ったが口に出すのは自重した。

「ふーん、じゃ二人で行ってもいいのかな。その場合は給金は一人分なんだろうか。募集は一人だったし」

「確かにねぇ。余分な報酬は用意してないかも」

「まぁお金もいるんだけど、魔法について聞きたいんだ。これから行くのは魔法使いの家なんだよ」

「え？　本当に職安で魔法の事聞けたの？」

「なんだよそれ、さてはわかってたんだな。受付のお姉さんにすっごい変な顔されたよ」

「それより、私の服どうにかしてよ。いつまでもこんなの嫌だよ」

「僕お金持ってないし無理だよ。それにリーリアの服まで僕が用意するのか？　出来れば自分でなんとかして欲しいんだけど」

「私もお金持ってないし、うちまで遠いしどうしろって言うのよ！」

二人は一文無しだった。

アルはシンプルなズボンとシャツを着ている。手にはズタ袋を持っているが中に入っているのは、少量の食料と火起こしの道具、ナイフ、毛布が1枚ぐらいのものだった。

リーリアはぼろぼろの服のみでポケットに入っているのは先ほど見せた就労証だけだった。身分証明に使うことが多いのでこれだけは持ち歩いていたようだ。

「まぁ余裕があればリーリアの服のことも考えてみるよ。これから街で生活するならとにかくお金はいるし、この仕事をしてみる。今更森に戻る気もないし」

「その仕事いくら貰えるの？」

アルは紹介状を確認した。

「えーと、１万リル。作業内容は屋内清掃としか書いてない。あまりお金に詳しくないんだけど、１万リルってどれぐらいの価値なの？」

「１万かぁ、古着なら結構買えるかな、そこらのお店でお昼食べるとだいたい１０００リルぐらい？　宿屋素泊まりで３０００リルかな」

「なんでまず服の話なんだよ。でもそうなると1万リルで二人が1日過ごすのは厳しいのか？　……ねぇ、例えばだけどさ、そこらへんで野宿するとどうなる？」

「巡回員に見つかったら街追い出されると思うよ。せっかく取った就労証も取り消されるかも」

「うーん、あ、本で読んだんだけど、こういう大きな街の周辺だと、貧民街みたいなのがあるんじゃないの？」

「ちょっと！　女の子をどこに連れてく気よ！　なんでそんな危ない所！」

「あるの？」

「……確かベイヤー街だと、北側の壁の外側にあるって聞いたけど、そんなとこ行くの絶対やだからね！」

「まぁ、リーリアはともかく僕も荒事は得意じゃない。最悪街の外で野宿か」

「私も得意じゃないよ！　え？　やっと街まで来たのにまた野宿するの？」

「まぁ、1万リルでもいいからとにかく手に入れよう」

「はぁ、この格好で街を歩くの嫌だなぁ……」

リーリアは自分の様子をあらためて確認してため息を付いた。これはひどすぎる。この街までやってくるのに2週間近くこの格好で

過ごしているが慣れるわけもない。
ここまでは道中出来るだけ人目につかないようにしてきたが、街についた以上そういうわけにも行かない。
リーリアにとってはご飯よりも泊まる所よりもまず服だった。

「毛布でも被る？」

アルの提案にリーリアは少し考えこんだが断念した。毛布を被ってうろうろするのも目立って仕方がない。
二人は魔法使いの家に向かうことにした。

2話　訪問

二人は散々迷った挙げ句ようやく魔法使いの家へたどり着いた。
何しろ初めて来た街だし土地鑑もない。おまけに大きな街が物珍しいアルはキョロキョロと挙動不審だし、リーリアは格好を気にしてこそこそしている。
道を聞けばよかったのだが、それは人前に出るのが億劫なリーリアが嫌がった。紹介状には住所の補足として「アレがヤバイ亭のすぐそば」とあったので最近有名なこの店の場所はそこらの人に聞けば簡単にわかったことだろう。
結局、街路標識や案内板の地図を駆使して魔法使いの家に辿り着いたのは夕方になる頃だった。

「やっとついたね」

「アル君迷いすぎ」

「……リーリア、地図にある矢印と説明文を見て説明文の方に進んだ君に言われたくないよ。ああいう表記は矢印の先に目的地があると普通は思う」

リーリアは地図の読めない女だった。
魔法使いの家はごく普通の佇まいの平凡なものだった。石造りで道に面した側が狭く奥行きがあり2階建てになっている。このあたりには似たような住宅が立ち並んでいた。
魔法使いの家と聞いて、怪しげな煙がもくもくと湧き出る不気味な森の奥の一軒家のような物を想像していたアルはその普通さに少し落胆した。

「魔法使いって普通の家に住んでるんだね」

「私も魔法使いの知り合いはいないけど、平民ならこんなものじゃないの？」

「なんかどの家も狭くない？　何人も住めなさそうだけど」

「これはねえ、奥にびよーんと伸びてるのよ、だから中は結構広いらしいよ？　なんでも道に面してる広さで税金が変わるんだって」

リーリアは自慢気に言った。何かとアルに大して上位に立とうとする。

ふーん、そうなんだと頷きながらアルは魔法使い宅の扉の前に立ちノッカーを数回叩きつけた。

はーい、と気楽な感じの声が聞こえた。中でがたがたと音がする。声がしてからしばらく立って扉が開かれた。いくら奥行きが長いといっても時間がかかりすぎだろうとアルが思っていると扉から顔を出した若い女性と目があった。

女性はまずリーリアを見た。驚きが素直に顔に出ている。次にアルを見て、最後にもう一度リーリアを見ると何か納得したのか、静かに扉を閉ざした。

「え？」

二人は顔を見合わせた。意味が分からない。

アルがノッカーをドンドンと叩く。

「すいません！　職安の紹介で清掃の仕事をしに来たのですが！」

再び扉が開かれた。半開きだ。扉の隙間から女性が顔を出してい

る。

「いくつか言っていいかい？」

「なんなりと」

「確かに清掃の依頼はした。期限は3日以内だったから今日来るのは別にいい。けど夕食時にくるのはどうだろう？　それと君らの格好。物乞いかと思ったよ。君の格好も酷いが、特にそっちの娘！　熊にでも襲われたのか？　私は掃除を頼んだんだが、君らがやると余計汚れるようにしか思えない！」

言い切った。少し息が切れている。

アルの顔に理解の色が見えた。なるほどと頷き女性に話しかけた。

「仰る事はごもっともで言い訳のしようもないんですが何とか仕事をいただけないでしょうか？　こちらの勝手な都合で大変申し訳ないのですが今日の食べ物にも困る身の上でしてどうしてもお金がいるんです」

「なんだい、それじゃ本物の物乞いじゃないか」

そう言うと二人をじっくりと見る。アルは言い方こそ下手に出ているが立ち姿は堂々としたものだ。物怖じする様子がない。

一方、リーリアは服装の指摘で受けたショックから立ち直れず泣きそうな顔をしていた。

女性はリーリアを見つめた。憐憫が表情に出ている。同じ女として思う所があったのだろう。しばらく考えこんだ後、ため息を付いてから言った。

「とりあえず風呂に入れてやる！　服も貸してやるから元気だせ。あと男物はないから君は我慢しな」

女性は扉を全開にし二人を中へと誘った。ようやく女性の姿がはっきりと見える。

威圧感のある美人だった。

肩の辺りまであるプラチナブロンドの髪は自然にうねり獅子を思わせる。肉感的な体を包む、胸元の大きく開いた赤いドレスは返り血を浴びたようでもあり、その攻めてくるような美貌に気圧されずに立ち向かえる男がいるとしたら余程の勇者だろう。背丈はアルより頭一つ分高く、スタイルの良さと合わせて圧倒的な美女を作り上げていた。

この女性こそがこの家の主、魔法使いで名をキャシーといった。

＊＊＊＊＊

部屋に一歩足を踏み入れたアルは、なるほどこれは掃除を頼みたくもなるはずだと思った。

足の踏み場もないとは正にこの事だ。物が溢れかえっている。ゴミとそれ以外の区別がつかない。重要そうな物もそうでない物も一緒くたに渾然一体となっていた。

隣のリーリアはこの有様を見て呆然としている様に見えたが、先ほどのショックからまだ立ち直れていないだけかも知れない。

「ここは何の部屋なんでしょうか」

「見てわかんない？　居間だよ。応接室も兼ねている」

「ここにお客さん通すんでしょうか？」

「ん？　君らは客じゃないぞ？」

「はい、それはわかってますが」

「風呂は一番奥だ」

「ありがとうございます、では早速」

アルはゴミだかなんだかよくわからない物をかき分けて奥へ行こうとした。

「待て待て、ここは普通女の子が先じゃないのか？」

「はぁ、そういうものなんでしょうか。じゃあリーリア先に行ってよ」

と話を促すもリーリアは上の空だ。

「服は適当に見繕って置いておく。終わったら寝室に来てくれ。そこが一番ましな部屋だ」

「じゃあとりあえず寝室までは一緒に行きましょうか」

がさごそと荷物をよけながらアルたちは進んだ。よけてもよけても奥の何かがずり落ちてくるためちっとも前に進まない。これを片付けるとしたら1万リルは安いんじゃないかともアルは思う。

居間を出ると長い廊下が続いている。廊下に面して部屋が4つあり一番奥の部屋が風呂だった。寝室はその隣だ。居間を含めて1階

には5部屋があることになる。2階も同じ様子なら全部で10部屋ということだ。外見の印象よりも居住空間は広かった。

その廊下も居間程でもないが物に溢れていたため、アルたちは足で荷物をどかしながら寝室まで進んだ。

「風呂とトイレは隣だ。あぁ、そうだ。お湯がないな。少年よ、廊下の突き当たりから裏庭に出れる。マキが積んであるから風呂釜に突っ込んで火を起こしてくれ。少女はとりあえず風呂に行って水で体を洗い流せ」

「すいません、掃除に来たのにお風呂まで使わせてもらって」

呆然としていたリーリアがやっと口を開いた。

「あぁ、さっきは部屋が汚れるなんて言ってすまなかったな。見てのとおりこれ以上汚れようもない状態だ、あまり気にしてくれるな」

「じゃお湯をわかしてきます」

「じゃあ、一通り終わったら寝室にきてくれ」

と言ってキャシーは寝室に入っていった。リーリアも風呂に入ったので、アルは裏庭に出た。

裏庭まではさすがにゴミで溢れているようなことはなかった。ハーブが植わった花壇もあり、手入れもされているようで、ここだけはキャシーの家の中でもまともな雰囲気だった。アルはさっそく風呂釜の隣においてあったままきを風呂釜に入れ、自前の火起こしの道具で火をつけた。

薪が燃え始めた所でアルは壁に背を預けぼーっと裏庭を眺めた。風呂が沸いてリーリアが入浴をすませるまではそれなりに時間がか

かるだろう。
裏庭は隣家の裏庭にもつながっているし、向かいの家の裏庭も見えている。それなりに開放感があった。
――なるほど、他所に迷惑をかけないように外から見えるところはちゃんとしているのか。
そう思うと、キャシーの人となりがなんとなくわかったようにアルは思った。
夕焼けで赤くなった空を見上げるとあちらこちらの家から煙があがっているのが見えた。そういえば夕飯時だと言っていたなとアルは思った。

＊＊＊＊＊

アルが入浴を終え脱衣所に出てくるとキャシーが男物の服を持って立っていた。
「よぉ！　探したらあるもんだな。男物もあったよ。なんだろな、賭けで身ぐるみを剥いだか、やってきた男が忘れていったかそんなもんだと思うが」
「それはありがとうございます」
アルは丁寧に頭を下げる。今までの服はずっと旅で着続けていたのでかなり汚れている。せっかく風呂に入ったのにあれをもう一度着るのは気が進まないと思っていたところだった。

「しかし、なんだな、君はまったくこういう場面で物怖じせんな。少しは恥ずかしがるとかないのか？」

とキャシーは全裸のアルを上から下までゆっくりと見た。意外に引き締まった体をしている。

「恥ずかしいんでしょうか？」

「いや、立派なものだよ」

何が、とは言わなかった。

アルはさっそく借りた服に着替えた。単純な作りの貫頭衣だ。穴の開いた布に手と頭を通し、腰のあたりを紐でくくるだけだ。それだけのものだが、今までの薄汚れた服に比べるととても清潔で気持ちがいいものだった。

「すっきりした気分です。ありがとうございます」

アルはもう一度お礼を言った。

「まぁいいさ。そんなものでよければやるよ。使い道もないしな。じゃ、寝室に行こう。簡単なもので悪いが食事もある」

「何から何まですいません。そういえば夕食時ということでしたね」

「あぁ、まぁたいしたもんじゃない」

二人は連れ立って隣の寝室へと移動した。

そこには見違えるように綺麗になったリーリアがベッドに腰掛けていた。アルが入ってくるのをみて少し照れたような顔をする。

入念に梳かされた金髪は窓からの夕日を受けて輝いていた。服はキャシーのものを借りたのだろう、同じような胸元の開いた赤いドレスだった。こぼれ落ちそうな双丘の創り出す谷間がアルの視線を釘付にする。服の丈はキャシーに取っては際どいミニスカートになる所だが、リーリアにとっては膝上ぐらいまでを隠すぐらいになっていた。ちらりと見える白い太ももも艶かしい。

アルは黙って隣のキャシーの胸を見た。そしてもう一度リーリアを見る。

――大きさは同じぐらいか？　だが、リーリアには若さがある。内側から弾けるような瑞瑞しい弾力を感じさせる。一方キャシーの方はリーリアと比べれば少し垂れ気味な気もする。だが問題ない範囲だろう、それも艶熟を感じさせる彩りのひとつだ。どちらが上とも言いがたい、甲乙付けがたいな……。

「アル君！　何考えてんの！」

リーリアは顔を真っ赤にして、両腕で胸を抱くように隠しながら叫んだ。

「要約するとどっちが大きいかな？　ということを考えていた」

「あははは！　少年！　君は素直でいいな！　私は好きだぞ」

「ちょ！　何言ってるんですがキャシーさん！　アル君もジロジロ見ないで！」

「そうだな、少年。私のならいくらでも見ていて構わないが、常識的にはあまり不躾にジロジロと女性の胸元を見るものではないな」

「そうですか。勉強になります」

アルに反省の色はほとんど見られなかった。

「キャシーさん！　借りておいてこんなことを言うのもなんなのですが、もう少しおとなしい服はないんでしょうか！」

照れたり、真っ赤になったり、怒ったり忙しいなぁとアルは思った。口には出さない。

「あぁそんな感じのものしか持っていないな。それより胸周りのサイズがあうことに驚いたよ。丈が違うのは当たり前としても腰回りが余っているのは少し癪だな」

「はぁ、それはどうも」

リーリアも褒められたのだかなんだかよくわからなくなってとりあえず頭を下げる。

「そういや前の服はどうしたの？　捨てたの？」

「捨てないよ！　あれ１０万リルもしたの！　私の一張羅！」

「いや、あれは直せないだろう？　そうですよね？」

とキャシーに話を振る。

「そうだなぁ。あれはもう一度買ったほうが早いんじゃないか？まぁ、とりあえず夕食にしよう。パンとスープぐらいしかないんだがな。キッチンから持ってくる。キッチンもあまり片付いていなく

てな。最近はここで食べているんだ。折りたたみの椅子が隅にあるから3脚分用意しておいてくれ」

キャシーはそういって食事の準備をするために寝室を出ていった。

「アル君……掃除しに来てご飯食べさせてもらうのもなんだか悪い気がするんだけど……」

「まぁそうだけど渡りに船ってやつだよ。お金もないし、残ってる食料は干し肉が一欠片だけだ。どっちにしろ今日をなんとか過ごさないと明日以降ますます困ることになる。貰えるものはもらっておこう」

「アル君は度胸あるよね……」

「そうかな？」

「……アル君も着替え貸してもらえたんだね。よかったよ、私だけ貸してもらうのも気が引けるし……そーゆー格好も似合ってるよ」

「リーリアほどひどい格好じゃなかったけどね、まぁリーリアもそういうのも似合ってると思うよ。わかりやすいしね」

「何が！？」

リーリアは似合ってると言われて少し頬を赤くしたが続く言葉に落胆する。褒めるならちゃんと褒めて欲しい。

アルはそんな会話を続けながらも椅子の準備をしていた。ベッド脇にあるそう大きくもないテーブルの周りに椅子を設置する。

キッチンからキャシーがパンの入った籠と、トレイに乗った3人

分のスープを持ってきた。

「こんなもんしかなくて悪いね」

リーリアは食事の前の祈りを捧げ、残りの二人は黙ってそれを見ている。祈りが終わった所で3人で食事を始めた。

「あぁ、パン！　パンよ！　おいしいよ！　ねぇ、アル君！　パンだよ！」

「見りゃわかるよ。悪かったね、干し肉ばかりで」

「……どんな食料事情だったんだ？　その……この娘のはしゃぎっぷりは……」

「1日に干し肉を一かじりずつで過ごしてきました」

「……パンぐらいなら遠慮するな、もっと食っていいぞ……」

「あの……ここまで何から何までお世話になりっぱなしなのですが、僕達職安から紹介されて掃除の仕事に来たんですけど……」

「まぁ食事やら何やらは報酬の一部ということでいい。給金も二人分出そう。もともと何日かに分けてやってもらうつもりだったから、二人なら早く終わるだろうしこっちが払う分は変わらんと思う」

「それはありがとうございます。それで仕事内容はどのような感じでしょうか」

「そうだな、この家の中を整理してゴミとそうでないものに分けて、

ゴミはゴミ捨て場に持って行ってもらう。ゴミかどうかわからんものは聞いてくれ。一応捨てる前の最終確認はするから常識的に判断して分別してくれればいい。それで、仕事は明日からかな。今日は泊まっていけ。その様子だと泊まる所もないんだろう？」

「そのお申し出はありがたいんですが、本当にいいんでしょうか？自分で言うのもなんなのですが、こんなどこの誰ともわからないような二人を出会っていきなり家に泊めるというのは？」

「うーん、じゃぁ、就労証を出しな」

二人は言われた通りに就労証を出してキャシーに見せた。

「うん、おっけ！　一応確認はした。後はまぁ、私の人を見る目の問題だろう。君らなら大丈夫だ。アル君にリーリアちゃんだな、よろしくな！　私はキャシーだ」

キャシーは二人と順に握手をした。

「でだ、このうちには今使える部屋はここしかないのだな。幸いベッドが大きいしここで3人で寝ることになるが構わんよな？」

とキャシーは平民の常識で言った。この家には部屋もありベッドも複数あるため当てはまらないが、平民は普通家族で大きめのベッドを共有して一緒に使っている。家族でなかったとしてもそれほど抵抗はない。

「はい、いいですよ」

アルの常識も似たようなものだった。昔住んでいた場所では母親

と一緒に寝ていたのでそういうものかと思っている。

「え！　ちょっと！　なんでそういうことになるんですか！」

リーリアは少し違った。彼女の家は裕福で子供の頃から一人部屋を与えられ、プライバシーの守られた空間で寝起きするのが当たり前だった。

「いや、そう言ってもな。使えるのはこのベッドだけなんだが」

「リーリア、わがまま言うなよ……せっかく泊めてもらえるのに。野宿は嫌だってあんなに言ってたじゃないか」

「え？　え？　わがままなの？　いやそういうことじゃ？　え？　おかしいですよ？」

「嫌ならリーリアは床で寝ればいいんじゃないか？」

「ちょっと！　それどういうこと！　なんでキャシーさんと寝るのよ！」

「寝るって……なんかいやらしい言い方だな」

「ちがーう！」

リーリアの叫びが夕闇の街に響き渡った。

3話　掃除（前書き）

すいません、全然話進んでません。

3話　掃除

「あなたはなぜ床で寝ているのでしょう？　お仕置きされているのですか？」

そんな声でアルは目覚めた。

眼の前にはまだ夢を見ているのかと目を疑うような美しい少女の顔があった。少女はアルの側にしゃがみ込み上から覗き込んでいる。

――え？　誰？

キャシーから家族構成を聞いた覚えはないが勝手に一人暮らしだと思い込んでいたアルは混乱した。

昨日はどこで寝るかで散々揉め、結局アルが床で寝る以外の選択を頑なに拒否したリーリアのせいでこのような状況に至っていた。夕食後は特にすることもなく早めに寝たのだが、それまでの間に3人以外の気配を感じたことはなかった。

「おはようございます……君……キャシーさんの妹さん？」

「さて？　キャシーさんとはどなたのことでしょうか？」

黒衣の少女は可愛らしく首をかしげる。まだ寝起きで頭のはっきりしないアルもなんだかおかしな気がしてきた。

「……どこから来たの？」

家の中でする質問じゃないなぁ、とアルも思ったが思わず口をついた。

「そこの窓からです」

「泥棒！？」

「まさか盗んだりはしませんよ。私は朝の散歩をしていて家と家の間をたまたま通った所、床で寝ているあなたをみかけて何故床で寝ているのか聞いてみたくて入ってきたのです」

「え？　駄目だろ？　それは？」

「駄目なんでしょうか？」

会話がかみ合っていない。

「それであなたが床で寝ているのはどうしてなんですか？　ベッドが嫌いなんでしょうか。私もたまに外で寝転んだりするのでその気持ちもわからなくもないですよ」

「あー、ベッドで寝ようと思ったんだけど、そこの女の子に一緒に寝るのは嫌だと言われて仕方なくだよ」

言ってるうちになんだか負けたような気がしてきたアルは少し落ち込んだ。

「閨を共にするのを断られたということは……振られたのでしょうか？」

思わず、振られてないよ！　と反論しようとしたが、それを抑えるように少女の手が頭に伸びてきてなでられた。慰めているのだろう。

「勝手に人の家に入ってこないでよ」

「ここはあなたのお家ですか？」

「違うけど」

「ではあなたと私の立場は同じなのではないでしょうか？」

「僕はこのうちの主人のキャシーさんに泊めてもらってる。勝手に入ったわけじゃない」

「では私もキャシーさんに許可を得ればいいのですね。そちらの方ですか？」

少女は立ち上がりベッドの方に向かう。そして、おぉ！　という声を上げた。口を丸くしている。

「大きいですよ！」

何が？　とアルが上体を起こしそちらを見ると少女はネグリジェ姿のリーリアを指さしていた。その先には仰向けながらも重力に逆らう見事な膨らみがある。普通彼女程の大きさでこの状態なら押し潰されるように広がるものだが彼女の胸はネグリジェを形よく押し上げていた。

ネグリジェもキャシーから借りたものだ。キャシーとおそろいで無闇に扇情的な作りになっている。ベビードールと呼ばれるものに近い。ちなみにアルの格好はそのままだ。男物の寝間着はなかったらしい。

「プルンプルンですよ！」

少女はあっさりとリーリアの胸に手を伸ばし胸を左右からそっと押さえ離した。反動でたゆん、と揺れる。少女はそれだけでは飽きたらず鷲掴みにするとムニュムニュと動かし始めた。柔らかな塊が少女の小さな手の中には収まりきらず自在に形を変える。

――なにやってんのこの人！

と思うも目が離せない。

「んっ……アル君……やめて……んん……」

なんだか悩ましげな寝言まで言い始めた。

――なんで僕がやってることになってるんだよ。

「ほら！　面白いですよ！」

少女は嬉々としてリーリアの胸を弄んでいる。

――僕この状況でどうしたらいいんだろう……。

「おはよう少年。なんだ我慢しきれなくなったのか？　こんな状況で勇気があるな……って誰だお前は？」

キャシーが目覚めてにやつきながら言ったのだが途端に表情を変えた。

「おはようございます。あなたがキャシーさんでしょうか。それともこのむにむにの方がキャシーさんでしょうか？」

――いい加減しつこいよ。というかリーリアもさっさと起きろよ。

少女はリーリアを揉みしだきながらキャシーに挨拶をしていた。

「私がキャシーだが……あぁ、お前は大魔王か。私のうちにまで来るとはな。うちにたかりにきても大したものはないぞ」

「大したものはさっきから触ってますよ」

「……いい加減やめてやってくれないか……おもちゃじゃないんだ、それは」

少女は素直に言うことを聞いた。たっぷり堪能したようでとても満足そうだった。

「何しに来たんだ？」

「……揉みに？」

少女は自分でもよくわからないという態度を見せた。最初の理由はもうすっかりどこかへ行っている。

「なんか僕が床に寝てるのが気になって聞きに来たそうですが、お知り合いですか？」

「……間近で見るのはこれが初めてだが……この国で一番えらい人間だ。いや、人間なのか？　大魔王様らしいぞ」

「大魔王様という割には存在な扱いですね。こんな口の聞き方でいいんでしょうか」

本人の前で言うようなことではなかったがキャシーの態度から許される気がしたアルは思ったことをそのまま言った。

「あぁ別に口の聞き方は気にしないという噂だな。実際本人も気にしてない感じだしな」

「えぇ好きなように話してくださってかまいません」

「その……魔族なの？　そうは見えないんだけど」

大魔王などと言われてそのまま信じることは到底できない。アルの知る魔族は全員が黒い肌をしていたし、魔王も見たことがあったがとても威圧感のある存在だった。とてもこのような少女がそれらの上に君臨しているものとは思えない。それに大魔王は魔族領の奥深く、魔族国家エルシアからは滅多に出てこないはずだ。

「魔族じゃないですよ。多分あなた達が大魔王と聞いて想像する存在と私は異なるものです」

アルはそれを聞いて少し納得した。彼の知る魔族とはやはり違うと思ったからだ。

リーリアがようやく目覚めた。目を擦りながら上体を起こす。キョロキョロとあたりを見回し場の微妙な空気に戸惑った。

「おはようございます。……おっぱいさん？」

大魔王の挨拶に、リーリアが泣きそうな顔でアルを見た。

「アル君……目が覚めたらよくわからない美人さんがいて、私のことをおっぱいって言うんだけどどうしたらいいんだろう？」

「笑うしかないんじゃないか？」

アルは投げやりに応えた。この状況をうまく説明する解答を持ち合わせてはいなかった。

＊＊＊＊＊

朝の食卓。寝室に設けられたそれはせせこましいことになっていた。本来ダイニングテーブルとしての用途など考えられていない小さなテーブルの上にパンがありそれを４人で囲んでいる。

あれから、着替えるからとアルは廊下に追い出されついでにキッチンから食事を運ぶ役目を任された。キッチンも散々な状態だったがなんとかパンを発掘すると寝室に戻って来た。

「堅いですね」

大魔王がパンに文句を付ける。

「勝手に食べといて文句を言うんじゃない。まぁ賞味期限ぎりぎりではあるだろうな。いい加減部屋を片付けないと生活もままならなくなってきた」

キャシーがぼやく。

「え？　パンおいしいですよ？」

リーリアはなんでもいいようだ。本来もっと豪華な朝食も食べていただろう裕福な家庭で過ごしていたはずだが、ここ最近の旅でなんでもおいしく食べれるようになっていた。

「今朝からさっそく掃除を始めればいいんでしょうか？」

「そうだな、じゃ朝食が終わったら早速やってもらおうか。ゴミと思われるものは一旦裏庭に出してくれ。ある程度たまったらゴミ捨て場に持って行ってもらおう」

「わかりました。ゴミ捨て場はどこなんでしょう？」

「あぁ、忘れていた。困ったな。北壁の外だ。そっちはゴミ目当てにかスラムが出来てるからな。子供二人だと危ないかもしれん。少量のゴミなら業者が定期的に回収しているんだが、大量に出そうだからな。どうしても直接捨てに行く必要がある」

「あぁ、それなら大丈夫ですよ。僕……いや、リーリアはとても強いです」

「強くないよ！？」

リーリアが即座に言い返す。そんな理不尽なことを言われても困るといったところだ。

「まぁ今日のところは一旦ゴミをまとめよう。運ぶのはそれからだな」

掃除は一階の廊下から始めた。昨日はアル達も相当汚れて臭っているためあまり気にしなかったが結構生ごみの類もあるようだ。生ごみであればわかりやすいのでそれらをまとめ裏庭に出す。

このあたりは侍女をやっていたというリーリアもてきぱきとこなしていった。

何故か大魔王もそのまま居座りゴミを運んでいる。何をどうしろ

とも言っていないのだが、何をするかはわかっているようだ。
掃除を始めるとそこら辺に転がっているものはもう全てゴミと判断してもいいと思えてきたので途中からはペースがあがり、昼には廊下の片付けは終わった。
昼時になると大魔王はご飯を食べに行くと言って窓から出ていった。まだ居間はゴミで溢れかえっているのでそのほうが手っ取り早いのだろう。
アル達も昼食を食べると、居間に手をつけた。こちらは若干判断に困るものもあったがやはりほとんどはゴミだ。アルとリーリアは協力して手早く裏庭にゴミを運んでいった。
夕方になる頃には居間にあった荷物はほとんど運び出せていた。居間を整頓するにはもう少しかかりそうだが一山は超えたというところだ。裏庭には大量のゴミが山と積まれていた。

「調子にのって運びだしたのはいいけど、これを持っていくのは大変だな」

アルがゴミの山を見上げる。

「手押し車か何かで運べばいいのかな？」

リーリアも呆れたように裏庭を見渡す。ほぼ裏庭いっぱいになっていた。これ以上ゴミをここに集めるのは無理だろう。

「今日はここまでだね。お疲れ様」

「うん、アル君もお疲れ」

アルはそこで何かに気がついたような顔をした。

「どうしたの？　アル君？」

「……魔法のことをすっかり忘れていた！」

＊＊＊＊＊

「で、あらたまってなんだい？」

今日の掃除を終え、一風呂浴び、夕食を終えた所でアルがキャシーに相談があると話しかけた。

「実はキャシーさんの家の掃除依頼を引き受けたのには、お金に困っていたというのもあるんですがそれ以外にも理由があるんです」

「ふむ」

「キャシーさんは魔法使いなんですよね？」

「ん？　どこで聞いた？　隠してはいないが、公言しているわけでもないんだがな」

「職安のベティさんから聞いたんですが」

「あぁ、あいつか。あいつは私の姪だよ。なるほどね」

姪と言われてアルは訝しげに思った。どう見ても姪と叔母というほど年齢が離れているように思えない。どちらかと言えばキャシーの方が若く見えるぐらいだ。

「まぁ魔法使いではあるんだがな。そう言えば私の職業を言ってなかったかな？　彫金細工をやっている。アクセサリー作りだ。世間一般的にはそれで通っている」

「魔法使いになりたいんです。職安では魔法使いのなりかたは教えてもらえませんでした。魔法使いの方なら何か教えていただけるんじゃないかと思ったんです」

「そりゃ、職安で魔法使いにはなれんだろうさ。んー、しかしどうかな、魔法か……。教えてもいいんだが、只というわけにもいかないんだ。魔法の知識はそう世間に広まっているわけじゃない。そこそこ値が張るんだよ。秘伝だからね。多分君たちの今回の仕事の給金じゃ払いきれるかどうか。せっかくお金を得る機会を得たんだ。また無一文に戻るのもどうかと思うが」

「そうなんですか……」

「アル君、もうやめとこうよ。掃除でお金結構もらえるしさ。これが終わったら私の街に行こうよ。私も実家に顔を出したいし。お金があったら馬車で行けるよ」

「……何かお金以外で支払うことは出来ませんか？」

「ちょっ！　なに考えてんのアル君！」

リーリアが慌てた。アルは不思議そうな顔をする。

「何って……もしかして体で払うとか言うとでも思ったのか？　そんなわけないだろう」

図星だったのかリーリアが顔を真赤にした。

「体か……悪くはないが……」

「キャシーさんも乗らないでください！」

「まぁ半分冗談だ。しかし君の様子を見るに体以外で支払えそうなものもなさそうだが」

半分だけなの！　とさらに騒ぎそうなリーリアを押さえてアルが言った。

「そうですね……では、こういうのはどうですか。僕達の身の上話しです。なぜ僕達があんな格好で旅を続けてここにやってきたのか？　興味はありませんか？」

「ほう？」

キャシーの興味を引けたようだ。

「……確かに気になるところではあるな。これまで話を促してもそれとなくかわされてきた。出会ってすぐに言われても興味を持たなかったかも知れないが……2日も一緒にいてそれなりお互いのことを知るようになると、そこに興味が行くのは確かだが……これは計算のうちかね？」

「そうですね、それもありましたが、あまりおおっぴらにすることでもないとも思ってました」

「ふむ……まぁいいよ。魔法について教えてやろう」

「いいんですか！」

「ああは言ったが別に魔法の情報の値段なんて適当だしな。前に教えてやった奴からそれぐらいぶんどったというだけのことだ。私の胸三寸というやつだな。それにどこまで教えるかにもよる。とりあえずは基本的なことは教えてやろう」

「僕の話はいいんですか？」

「それは後でもいいよ。魔法講座の基本が終わったら聞かせてもらおうか」

アル達はそろって居間へ移動した。ここの方が何かと都合がいいという話で、ここで魔法講座が始められた。

＊＊＊＊＊

マテウ国側の命名によると第３魔族領と呼ばれていた森、その奥深く魔王城のあったあたりから少し離れた川沿いに一件の小屋が立っていた。

そう大きいものでも無い。木造の小屋で平民なら４、５人が暮らせるぐらいのものだ。

中に入ると目につくのは一面を覆う本棚だ。そこには本がみっしりと詰まっていた。どれもかなり読み込んだものか手垢に塗れている。内容は人間の文化や、戦争、戦闘に関するものが多かった。

他にあるのは大きめのベッドや、ダイニングテーブルなどありき

たりのものだ。
人が住んでいる気配はないが、住まなくなってからそう時間が経ってないのかそれほど荒れてはいない。住人が出て行く前に整頓したのか整然とした室内だった。
そこに一人の男が立っていた。怜悧な美貌を持つ痩身の青年だ。黒いマントを羽織り、右手には節くれだった木の枝から作られた杖を持っている。左手に持つのは人間の子供だ。裸の赤ん坊の首根っこを掴んでいる。およそ人の情を持つものが出来る持ち方ではなかった。
男は部屋の中を見回すと子供をゴミのように放り投げた。この男に取って必要なくなったということなのだろう。赤ん坊はまだ生きてはいるのだろうが、ほとんど動くことはなかった。このままここに放置されるのならもう幾許の寿命も残されてはいないだろう。
開け放された扉から一人の少女が入ってきた。まだ幼い少女は男に報告を行った。

「この魔族領は既に崩壊しています。魔王アルベリクは勇者の手で倒されました。すでに人間による入植が行われています」

「人間風情に倒せる魔王か、不甲斐ないな」

「テオバルト様も人間では……」

途端、杖が振るわれた。男が容赦なく少女の顔を殴りつけると少女の口の端が切れ血が垂れ落ちた。
だがそれだけだ。貴族でない人間の全力などたかが知れている。少女にとってそれは常のことであり特になにも感じないし、失言をしたとも思っていない。戯れに殴り飛ばそうが全く動じる所のないそれは男にとって頑丈なおもちゃに過ぎなかった。

「前のが失敗したからな、次を育てさせようと思ったが無駄足だったか。前のはどうした？　勇者とやらに殺されたか？」

「いえ、人間に保護されたようです。最初の勇者は一度帰還し、別の勇者が残党の殲滅にやって来ました。その折に人間に保護されたようです。その後の消息は不明ですが、首都の施設を紹介したものがおりますので恐らくはそちらへ向かったのでしょう」

「生きているなら回収しよう。あれは中途半端だが、その状態で身体各部、特に脳がどうなっているか見ておくのは研究の一助になるだろう」

「では首都ベイヤーへ向かいますか？」

「そうだな」

男は小屋を出た。しばらく往くと小屋が突如として炎に包まれた。男はそれを確認もせずにそのまま立ち去った。

＊＊＊＊＊

開拓団からの定期連絡が途絶えたとの報を受け急使が走った。辿り着いた彼らが見たのは全てが焼き払われ一切が灰と化した荒野だった。

彼らは魔族領全域の完全焼失と開拓団３００名、勇者率いる第２、３遊撃隊の８名の全滅を報告した。

4話　講義（前書き）

今回は会話による説明ばかりです。すいません。
こんなうぜぇの読んでられるか！　という方も出てこられるかも…。
続きは読んでやってもいいが設定説明ばっか読むのめんどくさい。
という方のために後書きに今回の説明をまとめておきましたのでそちらだけでも御覧ください

4話　講義

多少は片付いた居間に3人は集まった。応接室としても使っているということでソファーとローテーブルがある。そこにアルとリーリアが並んで座り、向かいにキャシーが座った。

テーブルには、いっぱいに満たした水差しとコップが用意してある。長い話になると思ったのかキャシーが運んできたものだ。

「まぁこの後その辺についても話してもらえるのかもしれんがまず聞いておこうか。何故魔法使いになりたい？」

「……力がいります」

「それは、剣や槍では駄目かね？　そこらの道場で教わればそこそこは強くなれると思うが」

「キャシーさんから見て、僕が剣を習ったとしてどれぐらい強くなれると思いますか？」

「ふむ、中々締まった体付きをしていたな。それなりに鍛えていたのか。でもまぁ、そう言われるとな、平民がどれだけ鍛えたとしても貴族には到底及ばんし……街の力自慢といった所がせいぜいだろうな」

リーリアは、え？　どこで見たの？　と言おうとしたが、アルの真剣な様子に押し黙った。とても口を挟めるような雰囲気ではない。

「それでは駄目です。話にもならない」

「貴族にでも挑むつもりか？　それはやめておいたほうがいいと思うが……そういうわけでもないのか」

「貴族なら倒すのに力はいらないでしょう。肉体的に及ばなくても策を弄すればどうとでもなると思います。彼らは少々頑丈なだけのただの人間です」

「ほう、大きく出たな。まぁ平民が力を得るには魔法が手っ取り早いだろうがな。しかしな、ただの人間が覚悟もなしに身につけるようなものでもないな。魔法は確かにアル君が求めるような力だよ。それは剣や弓と同じ様な武装と言える。ただし、剣や弓と違ってその武装は目に見えない。想像してみてくれ、見えない剣を身につけた極普通の平民のふりをした奴が街に紛れ込んでいる。これがどれだけ危ないことかはわかるだろう？　こんな奴がほいほいいてみろ。治安の維持なんて出きっこない。だから魔法使いにはそれなりの自制心やら克己心やらが求められるし、軽々しく魔法を使うやつを制裁する自浄作用も求められる」

「そう簡単には魔法は教えないということでしょうか」

「そうだな、魔法を使えるかどうかは、知識の有無だけだ。誰にでも使える可能性はある。だからこそ魔法を教えていい相手は厳選する。……普通はな。まぁ金があるなら魔法学院に行けばいい。あそこなら誰にでもとは言わないが、条件さえ合えば教えてくれる」

「僕では無理ですか？」

「無理ってことは無いんだが……私がアル君を魔法使いにするのは難しいな。こればかりは相性がな。普通は弟子にして様子を見たりする、魔法を伝授するに相応しい相手かをな。こう言ってはなんだ

が君とは出会ってまだ2日目だ。まだ判断は付きかねるね」

「……僕に魔法を使う資格がないというならそれはそれで構いません。なら僕は魔法に打ち勝つ方法が知りたい。魔法使いを倒す方法が知りたい！」

今までのアルにはなかった熱のこもった口調だった。目には奇妙な光を帯びている。様々な感情が垣間見えた。

「なるほど。だが別に魔法使いを倒すのは難しくはないぞ？　例えば私とアル君が今からヨーイドン！　で、戦いを始めればまず私が負けるな。けど知りたいのはそんなことじゃないよな。まぁいいさ、まずは基本的なことを教えようか」

「まずは魔法の種類から入るのがわかりやすいか。横軸に契約魔法、神聖魔法、精霊魔法の3種。これらの違いは魔法の覚え方の違いだな。次に縦軸、因果魔法、奇跡魔法の2種。これはどういった原理で魔法現象を発生させるかの違い」

「まぁ覚え方の違いはそう重要じゃないな。どれも魔法としては同じ原理だ。なので魔法の原理から教えるとしよう」

「因果魔法はこの世界のルールから外れない範囲で現象を起こす。奇跡魔法はこの世界のルールから外れたように見える現象でも起こせる。まぁこの2つも究極的には同じ原理だとされている。要は火のない所に煙を立たせるのが奇跡魔法だ。それに対して火のある所から出てきた煙が自分の都合のいいようにたまたま動くのが因果魔法というところか」

アルとリーリア、二人が揃って首を傾げる。よく分からないらし

い。

「因果魔法てのは偶然こうなりましたってことだ。確率の操作といってもいい。全体のエネルギーの総和は変わらんということなんだが……」

さらに首をかしげる二人。

「まぁ絶対に起こりっこないことは起こせないってことだ」

「え？　それはおかしくないですか？　物を燃やす魔法とか、怪我を治す魔法があると本で読んだことがあります。そんなことがたまたま起こるんですか？」

「起こるんだ。すごく低い確率でね。物が勝手に燃え出すことはある。例えばこの机だが、この机が勝手に燃え出すことは理論上はありえる。ただ一生この机を見張っていても燃え出すことはないだろうがね」

そう言って目の前の机をキャシーは指さした。

「怪我にしてもそうだ。切り傷が出来たとしよう。別に魔法を使わなくても怪我は治る。何故だと思う？」

そう言われるとアルには分からない。

「これも簡単に言うとだ、体を作っている細かい部品が傷口に集まってきてその部分を作り直している。でだ、たまたま何故か傷口に作りなおす部品が集まってきた、というのもありえないことじゃないだろう？　魔法はそういう状態を作り出せる。でもこれも程度問

題だ。大怪我になればなるほど、魔法でも治療は難しくなる」

「これらは物質の性質を知るとよくわかるんだが、その物質の性質を超える変化を起こすことは基本的には出来ない」

「例えばこの水だな」

そういってキャシーはコップに口をつけた。

「水は冷たくなれば凍るし、沸騰させれば蒸発する、といった性質を持つがこの性質は因果魔法では変えられない」

「え？　え？　どういうことなんですか？　もう全然わからないんですけど」

リーリアが混乱した。話についていけていない。

「まぁ、今のところは、簡単に起きそうな事は魔法で再現しやすい。起きなさそうなことは魔法で再現しにくい。という当たり前のことを言っていただけだな」

「で、次は奇跡魔法だが、こちらについてはあまり気にしなくてもいいな。普通は使わないし、使えない。先ほど説明した因果魔法で出来ない、正に奇跡を起こすことが出来る。これも、物質を非常に細かく分けていくと出てくる最小単位のふるまいに対する確率操作ということで、規模の違いらしいんだが、目に見える現象は全然違うな」

「魔法の種類についてはこんなものか。では次は魔力についてかな。魔法を使うには魔力を使う。この魔力というものは何にでもある。

この机にもあるし、私にも、アル君にも、リーリアちゃんにも何にでもある」

「魔力は存在力とも我力とも呼ばれる。魔力の多寡はその存在の力強さそのものだ。存在感と言うやつだな。同じような体格の人間がいるとして、一方が武術の達人だというならその達人の方が魔力が多いな。ほらそーゆー達人には強者の気配というか物々しい雰囲気があるだろう？　気の強いやつもそうだ。逆に気弱で自己主張に乏しい奴は魔力が少ないから魔法使いには向かない」

「だからまぁ、アル君もリーリアちゃんも魔法使いに向いているな」

「え？　私がですか？」

「顔が可愛くてスタイルがよくて胸も大きい。存在感はあるだろう？」

そう真っ直ぐ言われてリーリアは照れた。

「で、この魔力だが半分以上失うと存在が維持できなくなると言われているな。人間なら死ぬし、石なんかだとボロボロと崩れて砂みたいになる」

「半分までなら大丈夫だ。自然に回復してそのうち元の状態に戻る」

「だからまぁ最大限注意する必要があるんだが、この魔力量と言うのは客観的に定量化する方法が存在しない」

「魔力が減っている人を見ても、最近この人疲れてるのかなぁ、と感じるぐらいのものだし、本人もそうだな。疲れたなぁ、ぐらいの

ものだろう。減ってるのは存在感というか人間力というかそんな感じのものだ。人間そのものが希薄になる。あぁ体が透明になったりとかそういうことじゃないぞ。気配とかそーゆーものだ」

「だから、「なんだこの強大な魔力は！」なんていうのはないな。別にどんな大魔法使いを見たって魔力量なんてわからんよ」

急に演技がかった大声を出されたリーリアはびくっとした。アルは特に変わりなく、なにやってんのこの人、という生暖かい目で見つめていた。

「まぁ、あまり魔法は使いすぎるなと言うことだ。限界はやってるうちになんとなくわかるがギリギリまで使うもんじゃないな」

「魔力がその存在を定義する。人間が人間でいられるのは人間であろうとする魔力が存在するからだな」

「その説明ですと、人間が死ぬというのはどういうことなんですか？」

「まぁ生物と元生物のただの物体をわけるのが、生物の魔力と言うことだな。なので死体には当然、死体という存在の魔力が存在する。まぁその死体も放っておけば土に帰るわけだ。それも死体という状態をだんだん維持できなくなるからだな、その際にも死体という存在の魔力が失われていっているわけだ」

「それは……この家があんな状態だったというのと同じようなことでしょうか？」

「む？　そう言われると忸怩たるものがあるんだが、ま、そうだな、

誰も何もしなければあんな風にどんどん汚くなっていくが、このように掃除をすれば綺麗になる。例えるならこの場合、アル君とリーリアちゃんがこの部屋を元の状態に維持しようとする魔力ということになるな。この例えでいうなら、死ぬというのは、アル君とリーリアちゃんがいなくなって誰もこの部屋を片付けなくなって、限界まで部屋が荒れる、という状態かな」

「でも、普通はあんな状態にはならないよな」

アルはぼそりと誰にも聞こえないようにつぶやいた。

「まあ、このへんはなんとなくでいいんだがな。別にこのあたりのことを知っていた所で魔法を使うにはあまり関係がない。一応これで原理的な所と魔力については話したわけだが……えー、コホン。ここでお知らせがある」

キャシーはあらたまって咳払いをし、イタズラでも思いついた子供のような、にやついた顔をして言った。

「実は人間には魔力を操る術がない、よって人間に魔法は使えない」

＊＊＊＊＊

「へ？」

二人は間抜けな顔をして言った。多分このような顔を見たかったのだろうキャシーはそれに十分満足した。

「うんうん、初めて聞いた奴は大抵そんな顔をする」

「まぁ考えてみればあたりまえの話だ。リーリアちゃん、魔力を操ってみたまえ」

「え？　そんなこと言われても出来ませんよ！」

リーリアは戸惑った。急にそんなことを言われても出来ないものは出来ない。

「まぁそうだな。実際私も魔力なんぞ操れんし、そう言われても困るな。アル君はどう思う？　魔力を操るとしてどうすればいいと思う？」

「何か強力にイメージするとか、精神集中するとか？」

「まぁ世間的には魔法使いはそんな感じのことをやっているように思っているのかな。でも心に思ったことで物理的に干渉するなど出来るはずもない。そんなことが出来るなら、思春期の少年の周りなど大変なことになるな」

キャシーはにやりと笑う。

「でだ、最初の話に戻るんだが魔法の横軸の3種。契約魔法、神聖魔法、精霊魔法だ。これらは全て他力本願だな。要は何かにお願いしてやってもらうわけだ」

「精霊魔法は産まれついてのものだな。何故か精霊に好かれ、精霊と意思を通わせることの出来る存在がたまに生まれてくる。こいつらは精霊に命令して様々なことをやらせることが出来る。好かれ方

は様々だ。特定の精霊にのみ好かれる奴もいるし、複数の精霊に好かれる奴もいる。聖剣の勇者は４元素の精霊を使役できると聞いたな」

「神聖魔法は中央正教の神職が使うものだ。神様にお願いして色々やってもらうってことだな。これは中央正教で司祭やらになる修行をすれば使えるようになる」

「そして契約魔法。普通は魔法使いとはこれの使い手を指す。これは悪魔と契約して力を貸してもらうという魔法だ。君らが使えるようになるとしてもこれだな。精霊魔法は生来のものだし、神聖魔法は子供の頃からの修行が必要だ。今更無理だろう。それらに比べれば契約魔法はまだ可能性がある」

「私は子供の頃から教会でお祈りしてますけど神聖魔法は駄目なんでしょうか」

「それはだな、神聖魔法をかけてもらう側としてはいいんだが、使う側としては駄目だな。なんでも特殊な祈祷を長年続けて初めて神の力を借りれるようになるらしいしな。そんな修行はしていないだろう？」

「はい……普通のお祈りしかしてません」

ちょっと残念そうだった。その心の内には怪我したアルを祈りで癒す神官服を来たリーリアがいたようだ。

「それはそうと神聖魔法は色々制限があるんだ。さっきも言ったように信者にしか有効では無いとかな。なので神聖魔法の癒しなんかは私には効かない。まぁ悪魔と契約してる時点で信者じゃないから

な、当然なんだが」

「アル君も食事の時にお祈りをしていなかったから信者と言うわけでもないんだろう？」

「はい。では僕も神聖魔法では怪我を治してもらったりは出来ないと言うことでしょうか」

「そうだね。まぁ今からでも入信して毎日お祈りを捧げればいいんだろうが今更だな」

「で、契約魔法だが、これは悪魔を呼び出す儀式をして契約をする。儀式の方法は一門の秘伝だな。門外不出だ。ぶっちゃけこの契約の儀式さえ知っていれば魔法使いになれる。なのでそう簡単には教えない」

「でだ、魔法使いの実力とは即ち契約している悪魔の実力だ。本人の力は一切関係ない。まぁ魔力は本人のものが使われるからそこは関係あるか」

「なので強力な魔法使いとは、強力な悪魔と契約しているものを指す。そのために必要なのは交渉力だな。そして悪魔は基本的にメンクイだ。なのでまとめると強い魔法使いとは、見目麗しく社交的な奴ということになる、私のようにな」

「え？」

「いやいや、そこで疑問を持たれると悲しくなるだろ」

「いえ、キャシーさんはお美しいとは思うんですが、なんだか思っ

ていたのと少し違いまして」

「魔法使いというのは精神修行をしたり、魔法の研究をしているわけじゃないんだ。日々コミュニケーション能力を鍛え美貌に磨きをかけている。魔法の研究なんてしたところで、自分で魔力を操れない以上興味本位の暇つぶしにしかならんよ」

「だからな、魔法学院なんて行ってみろ、美少年、美少女のバーゲンセールだ。一山いくらってぐらいにうじゃうじゃいるぞ」

「悪魔と契約し、美貌でたぶらかして有利な条件で契約を結ぶ。契約は魔法一つずつというのもあるし、定期的に契約を更新する悪魔もいる。いろいろだな。何にしろ、悪魔の性格やら趣味嗜好を把握し交渉する実力。これがイコール魔法使いの実力だ」

「悪魔ってのも結構ややこしくてな、悪魔同士でも上下関係やら、交流関係やら、敵対関係やらがある。それらの把握も重要だ」

「で、私がアル君に魔法を教えるのが難しいと言ったのはつまりだな、私の契約している悪魔は全て男だ。私の知っている儀式を教えたとしても、男の悪魔は普通男とは契約しないな。まぁ、男色の悪魔もいないことはないが、私は知らない」

「逆にリーリアちゃんなら向いてるな。あいつらおっぱい大好きだからな、リーリアちゃんなら二つ返事で契約するだろう」

「え？　いや、その、それはなんかいやな感じがするんですけど」

リーリアは困った顔をした。おっぱい見て大喜びで契約する悪魔なんか嫌過ぎる。

「だから、アル君が魔法を使いたいなら、女の悪魔を呼び出す儀式が必要だ。まぁ、アルくんも中々の美少年だとは思うので見た目は問題ないと思うんだが」

「そ、その女の悪魔って響きがその、いやらしい感じがするんですけど……」

リーリアがおずおずと問う。頭の中では何故か全裸の女悪魔が悩ましげなポーズを取っていた。

「……何を考えたかはわかるがあいつら実体はこっち側に出てこれない。姿を表すときもなんだか、もやっとした影のような感じだな。まぁ依り代を準備したりすればその限りでもないが。だからリーリアちゃんが心配するようなことはないよ」

キャシーはさもわかってるというように頷いた。リーリアもそれを聞いて安心したようだ。アルはそんな二人を見て不思議そうな顔をした。

「で、それとは別の話だが、私は何歳に見える?」

アルは少々困った。女性の年齢を当てろというのは色々と考えてしまう。だが答えないことには話が進まないので若干低めに答えることにした。

「20歳ぐらいでしょうか?」

「ハズレ。リーリアちゃんはどう思う?」

「２５歳ぐらいでしょうか」

リーリアは正直だった。

「それもハズレ。正解は今年で６０歳だ。月の物もとっくにあがっちまってる」

「え？」

二人は同時に驚きの声をだした。見た目からはまったく想像出来る事ではない。

「これは悪魔契約の副産物だな。悪魔契約で悪魔好みの肉体年齢が維持されるようになる。ただこれは見た目だけでね。実際体力は衰えるし、老眼にもなる。寿命も伸びたりはしないので不老不死ってわけじゃない。まぁそれもあって掃除を頼んだりもしてるわけだ。流石にこの年になると片付けるのも一苦労でね」

「それは……」

リーリアが物欲しそうな顔をした。女なら誰でも羨ましいと思うだろう。

アルは年齢だけの問題じゃ無い気もするなぁと思った。

「だからあまり若いうちに悪魔契約をすると困ったことになる場合もある。見た目が子供のまま変わらなくなったりな」

「さて次に具体的な魔法の使い方だ。アルくんの目的にも関係あるだろう。魔法使いと戦うならな」

「魔法は悪魔に具体的に何をしたいのか伝える必要がある」

「そのために必要なのが、魔器だ。魔器は様々な形態を持つ。私が持っているのは指輪だな」

キャシーは左手の甲を見せた。人差し指、中指、薬指にそれぞれ1つずつ大きめの宝石のついた指輪を付けていた。

「これは悪魔ごとに別の魔器を使っているんだが、複数の悪魔と一つの魔器で契約しているものもいる。この辺は交渉次第だな。あまり多くなっても面倒だしな」

「この指輪の場合は音声を悪魔に伝えてくれる。これは魔器によって異なる。何か図形を書いて魔器に見せるというやり方もあるし、匂いに反応する魔器や、温度に反応する魔器など様々だな。だから、魔法使いとの闘いで注意する点はまずはここだ。魔器はかならず具体的な何かに反応して悪魔に伝達する。注意深く見れば必ず魔法を使う予兆は発見できるはずだ。心のなかで思うだけで発動する魔法なんてのはないからな」

「私の場合は呪文を唱える。だがここで一つ注意点だ。呪文を他者に知られるのは非常に不味い。なぜならこの魔器は単純に音声に反応するだけだ、私じゃなくてもいい。つまり目の前のアル君が何か呪文を唱えたとしても、私の魔力を使って魔法が発動される。この場合はアル君が魔法使いである必要はない。ただ該当する呪文を唱えればいい」

「あぁ言い忘れていたな。魔法を使うのは悪魔だが、その際には魔法使いの魔力が使用される。なので凄い悪魔と契約したとしても、魔力量がないと宝の持ち腐れなんてこともある」

「呪文の話に戻ると、呪文の場合は普通暗号化する。他人が聞いてもわからないようにね」

「例え暗号化していても、全く同じように復唱すればいいんじゃないんですか？」

「そうだな。だから暗号化にはめくり暗号を使うことが多い。私の場合は使い捨ての暗号鍵を契約更新毎に１００用意している。一回使う毎に暗号方式が変わるからな。理論的には解読不可能だ。まぁ１００ともなると全て覚えられなくてメモに取ってあるから、このメモを奪われてしまうとまずいことになるな。その場合もメモを失ったことに気づけば契約を更新してその暗号鍵を破棄すればいいんだが」

「まぁその辺の工夫は人それぞれだ。呪文と手印を組み合わせたり、歌ったり踊ったりな」

「後、重要なのは悪魔は一度に一つしか魔法を使わない。これは魔法使い同士の戦いでは特に重要だ。魔法使いのアル君とリーリアちゃんがいるとしよう。この二人は同じ悪魔と契約している。この場合先にアルくんが魔法を使うと、リーリアちゃんはアル君の魔法が終わるまで魔法が使えない」

「なのであまり人と契約していないレア悪魔は重要だな。出来れば自分以外と契約していない悪魔が望ましい所だが、まぁ普通は無理だな。なので普通の魔法使いは複数の悪魔と契約するな。魔法を使おうとしてその時たまたま他の人が使ってました、じゃ困るからな。保険が必要だ」

「どの悪魔と契約しているかという情報はかなり重要だ。悪魔同士の人間関係というのか悪魔関係もあるしな。友達同士の悪魔なんてのもいる。防御魔法を使っていても、相手の悪魔に気をつかって防御を解除したなんて例もあるらしいぞ。それとは逆に敵対してる悪魔同士だと対抗意識のせいか必要以上に張り切って威力が上がるなんてのもあるな。そーいった悪魔同士の関係を熟知するのも魔法を効果的に発動するのに必要だな」

「そういえば先ほど話しに出た魔法学院、ここの魔法は少々特殊でな。学校として魔法を教える以上は全員がばらばらの魔法をそれぞれ覚えるということであればあまり教える意味が無いだろう？　そこでここでは悪魔のグループと契約をしている。悪魔側が同じ魔法体系を使用するグループを形成するように綿密な交渉をしたんだな。一度に一つしか悪魔が魔法を使わないなら授業もままならない。そこで、悪魔側も同じ魔法を使えるものを組織化したというわけだ。なので魔法学院に行けばそれなりの魔法をシステマチックに教わることが出来るようになっている」

「後はそうだな、魔法を使う方法がもう一つある。古代遺物の中には魔法が使える魔導具があるのでこれを使う。有名なところではレガリアがそうだな。各国の国王が持ってる。これは持ってるだけで特定の魔法が使える。こいつはかなり強力で個人が太刀打ち出来るようなレベルのもんじゃないな。レガリア以外でもあるらしいがそんなに世に出回るもんでもない。これを探すのは無謀だろうな」

「ふう、結構喋ったな。魔法の基本的な所はこんなものか。まぁこれで魔法が即座に使えるようになるものでもないが、結構貴重な情報だとは思うぞ。普通は知らんしな。こんなこと」

「ありがとうございます。参考になりました」

「そうか？　ならいいんだが」

「その例えばなんですが、魔法使いと戦う場合、呪文使いなら大声で妨害するというのはありなのでは？」

「少し厳しいな。よっぽど大きな音を立て続けないと妨害は無理な気もするが」

「魔器を破壊するというのはどうでしょう」

「魔法使いと戦うなら常套手段だが、それは相手も気をつけるだろうな。それに隠し持っていることもあるだろう。壊したと思って油断したらドカン！　なんてのもあるかもな」

「魔法を使う前に倒すのは」

「結局それが一番だとは思う。魔法を使うにはどうしてもタイムラグがあるからな。まぁその辺も戦闘専門の魔法使いなら対策は考えていると思うが」

「魔法使いとはどれぐらいの悪魔と契約しているものでしょうか？」

「うーん、普通は2，3体と言ったところじゃないか？　あまり多くても扱いきれないしな」

「一体の悪魔はどれぐらいの魔法を使えるんでしょうか？」

「それも悪魔によるが……10程度かな。悪魔は大体専門にわかれている。炎の悪魔なら炎を操るのが得意で炎の魔法で契約する。炎

の魔法とか言ってもそんなにバリエーションはなかったりするしな。一体あたりが扱う魔法はそう多くはないな」

そこまでを聞いてアルは黙考し、少し経った後更なる質問を口にした。

「……万の魔法を使うというのはありえるんでしょうか……」

「ン？　万って一万ってことか？　いやそれはないな、そんなもの扱いきれるわけがない。あぁ、待てよ何かで聞いたな。……あぁ、あれか！　『テオバルトと千柱の悪魔』そういう童話だかお伽話だかに出てくる奴が確かそんな感じだったな。あらゆる悪魔と契約し万の魔法を使いこなすとか。まぁお伽話のことだしな、実在の人物だとしてもとっくの昔に死んでるだろうさ」

「……テオバルト……」

「おいおい、真に受けるなよ。そんな奴がいるわけがない。そんなことを吹いてる奴がアル君の敵だとしてもだ、そりゃハッタリだ。断言してもいいよ」

「……そうですね。わかりました。色々ありがとうございます。結局僕が魔法を使うのはすぐには難しいと言うことですね」

「そうだな。地道に系統の似た魔法使いを探して師事するしかないだろうな。悪魔の好みの傾向はわかりやすいからな。アル君に似た姿の魔法使いを探すのが早いかもしれない。後は魔法学院か。あそこは容姿選考があるが、アル君ならいけるだろう。ただ金がいるから無理だろうな。授業料は馬鹿高い。平民じゃまず無理だ」

「まぁ直ぐに魔法使いになれないとして、対魔法使いのアドバイスなんだが……気をしっかりもて」

「はい？」

「魔力は存在力とも言ったよな。だから魔法を食らっても諦めるな。結局最後にモノを言うのは根性だ。魔法に対抗するのは気合いだよ。直接魔法をかけられたとしてもだ、強力な自我を保っていればなんとかなる場合もある」

「はいありがとうございます」

そこで一旦の区切りが付いたのかキャシーがコップに手を伸ばす。アルとリーリアも同じように水を口にした。

そしてアルが姿勢を改めてキャシーをまっすぐに見た。

「それでは僕達の話をしてもいいでしょうか？」

「あぁそういう話だったしな。じゃぁ聞かせてもらおうか、二人のボーイミーツガールストーリーをな！」

「いえ、そんな大げさなもんじゃないので拍子抜けされるかもしれませんが……」

無闇に大きくなっている期待を前に若干押され気味ではあったが、アルがこれまでの話を語り始めた。

4話　講義（後書き）

この世界の魔法の簡単な説明

・魔法を使うには悪魔と契約する必要がある。

・魔法の威力は契約する悪魔の実力に依存。魔法使いの能力は無関係。

・ただし魔法に使用する魔力は魔法使いのものが使用される。

・使える魔法の種類は悪魔による。悪魔はそれぞれ得意系統がある。

・悪魔は美人が好き。ブサイクとは契約してくれない。

・悪魔は一度に一つの魔法しか使えない。一柱の悪魔が複数人と契約している場合は順番待ちが発生することもある。

・魔法を使うには悪魔へ使いたい魔法を伝達する必要がある。それに使用するのが魔器。

・魔器は様々な形態を取る。今回の話の例で出てきたのは指輪。

・魔力は半分失うと死んでしまう。

5話　出会い

月明かりの元、少女が穴を掘っていた。
乾燥し堅くなった地面はそう簡単に掘れるものではないが、少女は指先を鈎のように曲げ安々と大地を抉っていく。
森の中は樹木の密集度が高く穴を掘れる広さを確保するのは難しかったが、そこは切り立った崖の側のためか樹木はまばらで平らな地面が露出している。
少女は一心不乱に機械的に同じ動作を繰り返す。穴は徐々に広がっていき、やがて人が入れる程の大きさになった。
成人男性が横たわるには少し窮屈なそれは見るものにその用途を簡単に想像させるだろう。これは墓穴だ。
中天に達した月が優しく少女を照らす。
無表情だがとても綺麗な少女だった。その無表情もいつかその笑顔を見てみたいと思わせる愛らしいものだ。
目的の大きさの穴が掘れたのか少女は動きを止めた。その様子はひどい有様だ。
ボロボロと言っていい。エプロンドレスと思われるものを着ているが、そこら中が血と泥で汚れているし、千切れ、破れ、穴だらけだ。そんな状態ではあるが腰まである金髪だけは汚れもなく月の光を受け輝いていた。
どうすればこんな状態になるのかといえば、その答えはすぐそこにある。切り立った崖だ。崖には何かが何度もぶつかりながら落ちてきた後があったし、所々血が跡を引いていた。この崖から落ちてきたのだということは容易に想像が付く。
少女はゆっくりと土まみれの、爪の隙間にまでびっしりと土の詰まった手を顔の前に持ってきて呆然と見つめた。その目には光が取り戻りつつある。
しゃがみ込んだままの少女の隣で栗色の髪の少年が腕を組んで墓

穴を見下ろしていた。簡素なくたびれた服を着た少年は墓穴を見て、まだ浅いかなと考えていた。

手を突っ込めば肘までが入る深さだ。人を横たえるには十分だがここは森の中で、あまり浅いと野生の獣に掘り返されてしまうだろう。それではわざわざ墓穴を掘る意味が無い。

さてどうしたものか、もう少し掘ってみようかと考えていると少女の方から音がした。少女を見るとぶるぶると震えゆっくりと口を開こうとしていた。

「あ……う……私は……何を……ここは……」

不明瞭な小さな声だったが、少女が声を出したことに少年はひどく驚いた。だがすぐに冷静さを取り戻すと「困ったな」と対して困っているようには聞こえない声でつぶやいた。

＊＊＊＊＊

少女は混乱の極みにあった。何がなんだか全くわからない。しゃがみ込み、ただ呆然と土だらけの手を見つめ、先ほど少年から聞いた話を何度も何度も思い返している。

ひと通りの説明を終え、自分の役目は終わったと言わんばかりの少年は墓穴をどうするかを考えていた。さらに倍も掘れば十分だろうか。１ｍも掘ればさすがにそこらの獣は手を出すまい。方針が決まったのでさっそく続きをやってもらおうと少年はいまだに呆けた状態の少女を見た。

「もう一度説明しようか？」

あまりにも反応がないため先ほどの話をよく理解してくれなかったのかと不安になった少年は訊ねた。

「……待って、私に話させて。順を追って整理していくから！」

少女が少年を見上げて言うと、やっと口を開いてくれた事に少年はほっとした。少しはまともに物を言える状態になったらしい。

「いいよ」

「君は森の中を歩いていた。すると崖の下に倒れている女の子を見かけた。近寄って確認してみるとその女の子は死んでいた。君はその少女を可哀想だと思った」

「うん」

「君はその女の子をそのまま放って置けなくなった。可哀想な少女を葬ってあげようと思った。田舎育ちで弔い方なんてろくにしらないけどその少年はお墓を作ってあげようと思った」

「うん」

「ここまではわかるの。ここまでは！」

少女は立ち上がった。本人は凄い剣幕で必死に訴えているつもりだが、そんな表情も可愛らしくあまり切羽つまったようには見えない。

「でも少年は自分で墓穴を掘るのが面倒だった。それに土を掘るような道具もない。そうだ、本人にやらせればいい。少年はそう考え

ると、少女を動けるようにした。そして少女に命じ穴を掘らせた。
少女は穴を必死で掘り続け人が入れる程の穴を掘った所で気づいた。
私はなんでこんなコトしてるの！」

「うん、わかってるじゃないか。どこがわからなかったの？」

「わかったけどわからない！　問題はその少女が私ってことよ！
え？　なに？　私死んでたの？」

「死んでたっていうか今でも死んでるんだけど」

「はい？」

「僕死体を操れるんだよ。何故かはわからないんだけど。人間にこの力を使ったのは初めてだったんだけどこんなことになるとは思わなかった」

「はい？」

「今まで僕が操った死体は簡単な命令に従ってくれるぐらいで自意識なんてなかった。だから穴を掘ってた君が急に喋りかけてきた時はびっくりしたよ」

「なんなのそれ！　全然わかんない！」

「……うーん、今思うと試したことがあるのは、動物ばかりだったから自意識があったとしてもそんなのわかんなかったか。何でも試してみないと駄目だな」

「……私どうしたらいいのよ！　ねぇ、なんにもわかんない！　ね

ぇどうしたらいいの！」

少女は混乱のあまり叫び始めた。じわじわと不安が押し寄せてくる。この少年の言うことが本当なら自分は動く死体だ。周りの状況を見るに自分が死ぬほどの大怪我をしたようにも見える。しかし服はボロボロだが体には傷一つない。それはこの混乱の中、一筋の光明に思えた。

「ねぇ、私怪我してないんだけど！　ほら！　服は凄い汚れちゃってるけど！　だから私崖から落ちたのかも知れないけど、奇跡的に無傷で助かったんじゃないの！」

「……僕の力は死体を操ることなんだけど、その際には死体はちゃんと動けるように再生するんだ。ほら、腐乱死体を動かそうったって筋肉が腐ってたら動きようがないだろう？」

腐乱死体。その言葉に少女がビクッとした。自分は腐っていたのだろうか。

「私……どんな状態だったの？」

「聞かないほうがいいと思うけど？」

「いいから」

「死後そんなに経っているようには見えなかったな。全身骨折していたのか、そこら中がぐにゃぐにゃだった。頭蓋が陥没して、顔は……」

「もういい！　やめて！」

「自分が聞かせろっていったんじゃないか」

少年は不満気に言った。

「顔……顔も怪我してたの？」

「うん、元の顔がどんなかわからない状態だったけど……可愛くてよかったよ。ん？　でも僕は君の怪我をする前の顔を知らないんだから、本当に元に戻っているのかはわからないのか？」

少年の自問自答を聞き少女は焦った。

「鏡！　鏡はないの！」

「そんなの持ってないよ」

「じゃ、水！　川とかないの！」

「あっちに……って、月明かりしかないのに走るなよ！　危ないだろ」

少女は少年の言葉を最後まで聞かずに走りだした。少年も慌てて後を追う。森の中に突入するというのに何も考えていない速度だ。足を引っ掛けなかったのは運が良かったのだろう。少女はあっさりと川に辿り付いていた。少年も少し遅れて少女のそばにやってくる。

「今日は天気がいいのか特に明るいな。で、どう？」

少女は河縁にしゃがみ込み川を覗き込んでいた。月明かりが反射

する穏やかな川面がなんとか鏡の代わりになっている。そこにあるのは少女が毎日のように見ていた、平均よりは上なんじゃないかと密かに自惚れている顔だった。少しほっとして息を吐く。

「大丈夫……おかしくなってない……」

「それは良かったけど、あんまり勝手に動かないでよ。離れすぎると困ることになる。……いや、僕からしたその方が良かったのか？　まぁいいや。じゃ戻ろうか」

「……なんで？」

「なんでってこんなとこでずっとぼーっとしてるつもりか？　これからどうするんだよ」

「どうしたらいいの？」

「知らないよ。わからないなら当初の予定通り君があの穴に横になってくれればいいよ。土は僕がかけてあげるから」

「なんで！　なんで私がお墓に入んなきゃならないの！」

「そう言われても、僕は親切で言ってるんだ。あんな所にほったらかしておいたら獣に食い散らかされると思ったからせめて埋めてあげようと思ったのに」

「私生きてる！　生きてるよ！」

「うーん、確かに意識のある君を無理やり埋めてしまうのは抵抗がある。だからここは君が自ら埋まってくれれば問題ないんだけど」

「問題ある！」

「困ったな。君死んでるのに」

先程から何度も死んでると主張され少女は不安になった。もしかしたら本当にもう死んで少年の言うように生きた屍なんていう魔物のような存在になってしまったのかも知れない。少女は自らの胸をそっと抑えた。確認する。そこには確かにいつものように脈打つ鼓動があった。

少女は勢い良く立ち上がった。

「ねぇ！　私の心臓動いてる！　はら、ドクンドクンって！　元気いっぱいだよ！　頑張ってるよ！　これ！　死んでないよ！　ほら！　ほら！」

そう言って少女は少年の手を取るとふくやかな胸に押し当てた。

「ねぇ！　動いてるよね！　私死んでないよね！」

「……えーと、やわらかいね」

少女は困り顔の少年をまじまじと見た。両手でしっかりと少年の手をつかみぎゅっと自分の胸に押し当てているのに気づくと大慌てでその手を放り出し離れた。

「きゃー！　変態！　エロ！　痴漢！」

少年に背を向け、胸をかき抱き大声で叫ぶ。。

「自分で触らせておいてそれは無いと思うなぁ」

「もう嫌！　私帰る！」

少女はそのまま少年の方を見もせずにどこかへ行こうとする。

「帰るのはいいけど君はどこから来たんだ？」

「え？」

「崖から落ちたみたいだけどその辺の事は覚えているの」

言われた瞬間目の前が真っ白になった。そして思い出した。

少女は水をくみに出かけた。一人では危ないと言われ二人で出かけ、帰り道で崖から足を踏み外した。もう一人に押されたのだ。重い水桶を持っていた少女は簡単にバランスを崩し崖に落ちた。最後に見えたのは自分と同じようなエプロンドレスを着た少女の微笑だった。

「え？　アレ？　私崖から……」

確かに落ちていた。それをはっきりと思い出した。足を踏み外した瞬間に死んだと思い気を失った。その後気づけば土を掘っていたのだ。気を失ったのは不幸中の幸いだったのだろうか、痛みに苦しんだ記憶はなかった。

「そもそも君は誰で、なんでこんな森の奥深くにいたんだ？」

「え……私は……」

第３魔族領開拓団。それを率いるのは第２遊撃隊と出発直前になって割り込んできた第３遊撃隊だ。第３遊撃隊は開拓団とは別に自分達専属の従者を求めた。

募集人員は１０名。仕事内容は第３遊撃隊隊員の身の回りの世話ということで特に難しくもないし、勇者の従者ともなれば箔が付く、魔族領が危険とはいえ勇者の側なら安全だと思われる。応募は殺到した。

厳正な面接が行われ最終的に見目麗しい１０名の乙女達が選出された。少女もその一人だ。

「えっと、私は勇者様の従者で……」

道中は何台もの大型の馬車を連ね、まるでパレードのようだった。それなりに裕福だった少女にとっても見たこともないような豪華な内装の馬車はとてもゆっくりと進む。少女はその間ほとんど何もしなかった。遊撃隊員１名ごとに馬車が用意されそれぞれ二人の従者が付く。隊員は４人なので、従者は二人あぶれることになる。少女はその二名のうちの一人だった。あぶれた彼女ら二人にも専用の馬車が用意され特に何をすることもなく過ごした。

何日もかけてやっと森に辿り着くとそこからは徒歩だ。従者ということで大量に持ってきている荷物を運んだりするのかと思えばそれは開拓団の人間が行う。従者は勇者達の後をぞろぞろと付いて歩くだけだった。

勇者はさすがに強く、時折現われた魔族の残党を苦もなく倒していった。魔王城とされる館のある集落に辿りつくとそこを拠点とすることになった。

罠が仕掛けられていないか入念に調べたあと、使えそうな建物はそのまま使い、後は天幕などを設置し生活環境を整える。簡単な柵や鳴子なども用意し敵の襲撃に備えた。

「私何の役にも立ってなかったから……」

それまで特に従者としてこれといった活躍をしていない少女は、勇者様になんとか尽くそうと料理をふるまうことにした。開拓団の中にも料理の担当者はいたがとりあえず食べれればいいというものだった。これまでの道中では難しかったが拠点を構え落ち着いた今なら遊撃隊員の分だけでももう少し凝った料理を作れるはずだし、少女にはその自負があった。

その旨を申し出ると料理に不満のあった遊撃隊員達は二つ返事で了承した。

少女は料理の準備を始める。食材はふんだんに持ち込まれていたし、調理器具もそれなりのものがあった。ただ、料理をするには肝心の水がない。この集落には井戸の類がなく近場の川まで水をくみに行っていたらしい。水をくみにでかけようとすると従者仲間の少女が声を掛けてきた。森の中は一人では危ない、それに二人の方が効率がいい。そう言われると断る理由もなく同行することになった。

「なんで……」

なんで突き落とされたんだろう。事故などではなかった。今思えばわざと崖の方に誘導した節も感じられる。明確な殺意とともに体を押されたことをはっきりと思い出すと少女の体は震え始めた。

「もういや！」

少女は取り乱しそのまま駆け出した。また森の中へと入っていく。今度は少年も追わなかった。

＊＊＊＊＊

どれだけ走り続けたのか少女は森の更なる奥へと足を踏み入れていた。いつまでも走り続けられるわけもなく少女は全力疾走をやめとぼとぼと歩いている。無闇に走り続けてもどこに行くあてもないし今自分がどこにいるのかも分からない。

行くとすれば開拓団の拠点ぐらいしか思いつかないが崖から落ちてしまった今、どうやって戻ればいいのか分からない。

あの崖を登ればすくなくとも水をくみに出かけた道のどこかには戻れるはずだがとても登れそうには無い。それならば崖沿いに歩いてなんとか崖上に戻る方法を模索するべきだったが時既に遅い。完全に迷子だ。

自然に涙があふれ出てくる。止まらない。

明らかな殺意を向けられそして殺された。何故なんだろう。そんなに嫌われるようなことをしたんだろうか。少女は考え続ける。

あの少女は名はなんといったのか。それも覚えていない。ほとんど接点はなかった。最初から遊撃隊の側に仕えていたはずだ。彼女ら従者の間には仕える隊員に応じて序列が出来始めていた。筆頭はやはり聖棍の勇者ヴァルターに仕える二人だ。後は順に魔法使いセルジュ、短槍使いのエーヴェルト、司祭ギャリの従者と続く。その例で言えば少女は専任の担当者がおらず最下位に位置するだろう。

あの少女は勇者に仕えていた。なので嫌われるほどの接触はなかったはずだ。水をくみに向かう道中そんなそぶりはまるでなかった。普通に会話をしていたし、これから仲良くなれるのだと思っていた。

どこかで獣の遠吠えが響いた。少女は身をすくめる。ここは最近まで魔族が支配していた土地だ。レガリアの破壊により魔獣の類は自然といなくなると聞いていたが、完全にいなくなるにはまだ時間がかかるだろう。魔獣でなくてもただの獣に襲われても少女には対抗する術はない。

少女は半ばやけになっていた。もうどうでもいい。死んでいると

いうのだ。何に襲われようともう一度死ぬだけなんだろう。だがそんな考えはあっさりと翻ってしまった。

少女の体がくらりと揺れた。立っていられなくなり樹木に身を預けた。体に力が入らない。

「え？」

樹にもたれかかったままずり落ちると意図せずしゃがみ込んでしまった。立ち上がれない。まるで足がなくなったかのようだ。

慌てて手を伸ばそうとするもそのまま地面に倒れこんでしまった。

少女は慌てた。だんだんと力が入らなくなっていく。なんとか手を胸に伸ばし鼓動を確認するとひどく弱々しく、先ほど心臓の頑張り具合を誉めたたえていたのが嘘のようだった。

嫌だ死にたくない！

泣き続けぐしゃぐしゃになった顔をさらに歪め必死に土をかく。それしか出来なかった。

もう指先ぐらいしか動かない。呼吸もその頻度を緩めていく。体は酸素を熱烈に求めているが呼吸器系の麻痺が進みそれもままならない。

叫ぶことも出来ずそのまま息絶えようとしたその時声がかかった。

「このまま放っとこうかと思ったんだけど、さすがにそれは寝覚めが悪くなりそうだ」

少年が少女を見下ろしていた。しゃがみ込むと少女と目線をあわせる。泣きはらした少女の顔を見、少年は少しドキリとした。

「落ち着いてよ。大丈夫。僕が側にいれば元に戻る」

「ほんと？」

ぐずりながらも声が出た。呼吸が元に戻っている。

「あぁ、大丈夫だよ。すぐに戻る。だから安心して」

程なくして少女の鼓動は力を取り戻す。くにゃりとして力の入らなかった手足の感覚も戻ってきた。

「僕の能力には有効範囲がある。正確な所はわからないが、１ｋｍぐらい離れた所でこうなったのかな」

少女はゆっくりと上体を起こした。もうほとんど回復したらしい。

少女は樹にもたれかかると大声で泣いた。号泣だ。先程から泣き続けていたがさらに涙が溢れてくる。死の恐怖とそこからの回復による安堵。わけのわからない状況、知り合いに向けられた明確な殺意。色んな思いがごちゃまぜになり心のなかを吹き荒れる。

その姿は少年の心を打った。飄々とした体の少年ではあるがほぼ初めて見る女の子の涙に動揺した。多少泣いたぐらいでは動じないだろうがこの慟哭といっていい少女の姿には参った。

少年はおずおずと手を伸ばし少女の肩にそっと置いた。

「なぁ……悪かった。君の境遇は僕のせいだ。出来る限り君に協力すると約束する。勝手に骸に戻すようなこともしないし、君の望むようになるよう努力しよう。だから泣かないでくれ。大丈夫だ。僕が側にいればこんなことはもう起こらない」

少女は泣き続けた。少年は優しく声をかけ、辛抱強く泣きやむのを待った。

やがて気力が尽きたのか少女は泣き止む。泣いたおかげでかある程度の心の整理はついたようで少し落ち着きを取り戻しつつあった。

「そういえば自己紹介をしていなかったな。僕はアルだ。この森を出て旅に出るつもりだったんだけど、いきなり君を見つけてこんなことになってしまったわけだ。それで君の名前は？」

「……リーリア……」

「そうか女の子らしい、いい名前だね」

アルはあまり常識的なことは知らなかったが、本をよく読んでいたので女の子の名前の末尾がリアになることが多いことを知っていた。

「とりあえずさっきの穴の所まで戻ろうか。大したものじゃないけど荷物が置きっぱなしなんだ」

少年は立ち上がった。リーリアに手を差し出す。リーリアは手をとろうとして直前でためらった。そういって墓穴に埋めるつもりなのではないかと少し思ってしまった。

「ん？　あぁ、さっきも言ったようにもう君を屍に戻すようなことはしない。元々は君のためと思ってやったことだ。君の意に沿わないことはしないよ。いきなり信用はできないかもしれないが、僕がその気ならいつでも能力を解除して君を屍に戻すことが出来るんだ。それをしていないんだから、とりあえずそこは信用してくれてもいいだろう？」

つまり面倒になってリーリアを屍に戻すならわざわざ墓穴に埋める必要などないということだ。それは理解できたので、少女は少年の手を取り立ち上がった。

「じゃあこれからどうするかはまだ決めてないけど、よろしく」

つないだ手はそのまま握手となった。

「……よろしく……」

リーリアは泣きすぎて枯れた声でぼそぼそと返した。まだ何がどうなっているのか全然理解していない。そもそもこのアルという少年が謎だった。森から旅立つとか死体を操るとかわけが分からない。ただ、それでも泣き続けるリーリアに優しくしてくれたアルのことは少しだけ信用してもいいと思った。

6話　野族

かなりの距離を移動していたのか、墓穴のある崖下に辿り着くには時間がかかった。途中川に寄り手と顔を洗った事もあるが、月が常に無いほど明るいとはいえ鬱蒼とした森の中を移動するのに手間がかかったせいだ。リーリアのように勢いに任せて駆けるわけにもいかない。

リーリアは自分がどこにいるのやら見当もついていなかったが、アルはこの森には詳しいらしく特に迷うこともなかった。

「よかった。荷物は置いたままだ」

アルが荷物を前にいう。只のズタ袋だ。中には数日分の食料として干し肉が入っている。匂いを嗅ぎつかれれば獣に奪われている可能性もあった。

「さてどうしようかな。今夜はとりあえずここで野営するしかないんだけど。困ったことにそんな装備の持ち合わせがない」

そのアルの言いようにリーリアは訝しく思った。リーリアは森に入ってから拠点まで2日はかかった。なのでその間に野営は経験している。アルがどこから来たのかは聞いていないが、今ここにいるということから考えるとアルも森を出るには何度か夜を迎えるはずだ。野営のことを考えていないはずがない。

「野営のこと考えてなかったの？」

「あぁ、僕一人ならなんとかなるんだ。でも今は君がいるからね」

そう言うと荷物から一枚の毛布を取り出した。

「こんなものしかない」

「えーと、一人で野営って危険じゃないの？　その……普通は不寝番みたいな人がいると思うんだけど」

一人で夜の森で寝るなど自殺行為にしか思えない。

「あぁ、それも君を見つけるまでは問題なかったんだ」

と、アルは少し離れた場所を指さした。リーリアがそちらを見ると何かの塊のようなものがある。よく見てみるとそれは二匹の狼の死骸が重なりあったものだった。

「元はアレを操って護衛にしてたんだ。何かあれば起こしてくれるし、野生の獣ならまずあれにわざわざ近づいてくることはないよ」

「狼も操れるの？」

「うん、動物なら大抵大丈夫。でも脳があまりにも小さいのは言うこと聞かないけどね。あまり原始的なのは駄目みたいだ」

しかし狼は今のところ動く気配がない。見たままの通りあれは死骸だ。

「なんで今は動いてないの？　まさか時間がくると死んじゃうとか……」

リーリアは先ほどの息苦しさが脳裏に蘇ってきて嫌な気分になっ

た。

「僕が一度に操作出来るのは大きめの成人男性ぐらいのサイズまでだ。だからリーリアを操るのに狼二匹に対しての能力は解除するしかなかったんだ。だから解除しない限りはリーリアは大丈夫だ」

と言って狼の元に歩いて行く。アルが手を触れると狼が動き始めた。

しかし、操るとは言うがそうは見えなかった。リーリアも別に操られているような気はまるでしていない。狼もその動作をいちいち操っているわけではなく勝手に動いているように見えた。

「リーリアと狼一匹ならギリギリでいけるみたいだな」

狼に一言二言話しかけ、連れて戻ってきたアルは毛布を地面にひいた。幸い現在は中立地帯となっているこの森にも、マテウ国の常春の余波があり気温はあまり下がることはない。周囲の環境さえ許せばそこらに寝転がって眠ることも可能だ。

「じゃあこれからの事は明日考えるとして、とりあえず今日は寝よう。もうかなり夜も遅いし」

そう言ってアルは毛布の上に横たわった。狼は少し離れた位置で寝そべっている。

「えーと……私はどうしたら……」

リーリアは困った。寝る場所がない。

「毛布はこれしかないよ？」

リーリアは大きく息を吐いた。特大サイズのため息だ。見ず知らずの男の側で眠るなんて耐えられそうになかったがここで毛布を譲れとまで図々しいことも言い出せない。仕方なくリーリアはアルの隣に寝そべった。背を向けて横になる。毛布の下のごつごつした地面が直接感じられるようであまり意味がないようだったが、何もないよりはましといったところだろう。

こんな状態で眠れるのかとリーリアは心配したがそれは杞憂に終わる。すぐにまどろみ始めた。

＊＊＊＊＊

翌朝二人はこれからのことについて話しあうことにした。毛布の上に座ったまま向き合っている。

「さて今後どうするかなんだけど、リーリアはどうしたい？」

「え？　私？」

「うん、まず君がどうしたいかから考えよう。僕のことは後回しでもいい。現状僕から離れると君は骸に戻る。僕が好き勝手にやれば君はそれに振り回されることになるしね。僕も反省はしてるんだ。だから君がしたいように言ってくれればいい」

「その……私も昨日は混乱してて……でもこうやって生きて話してられるのもアル君のおかげだから、別にアル君が悪いってわけじゃないと思うんだ。その、昨日はいろいろと……ごめんね」

「いいよ。気にしなくて」

「それで……私勇者様の従者をやってるんだ。崖から落ちたのも水をくみに行った帰りで……みんな心配してるんじゃないかな……」

「勇者と言うと今、魔王の館のある集落にいるのか……そこから来たの？」

「うん」

「じゃあとりあえずそこに向かうか。まぁ、旅立ってすぐに戻るのもなんだけどね。ちょっと間抜けだな」

アルは頬をかいた。少しばつが悪そうだ

「いいの？　でもそうしたら、アル君旅はどうするの？」

「もともと母さんだけの事だったんだ。母さんが死んだ今あそこに留まる意味がないと思ったから旅立とうと思った。けど、別に今すぐじゃなくてもいい」

リーリアには少し意味がわからなかった。けれど死んだという言葉にすこしぎくりとさせられる。

「その……お母さんって……」

「勇者に殺された」

リーリアが衝撃に目を見張った。まさか勇者様が人殺しを。俄には信じられない。

「あぁ違うんだ。母さんは魔族なんだよ。だから仕方ないんだ。勇者は……それが使命なんだろう」

アルの目には諦めがあった。本当にどうしようもない思っているようだ。

リーリアは座ったままの姿勢で思わず後ずさる。魔族。最初からおかしいとは思っていた。つい最近まで魔族が支配していた深い森の中を一人で旅をする少年。しかも死体を操るなどという謎の能力を持っている。疑ってしかるべき状況だ。素直に考えればこの少年が魔族だと簡単に答えが出る。

「おーい。何か誤解してるだろ。僕は魔族じゃないぞ。人間だ。ほら肌が白いだろ？　この森の魔族の肌は黒い。見たことないか？」

そういえば、と思い出す。森の中を勇者一行は魔族を倒しながらやってきた。その際に見かけた魔族は全員真っ黒な肌をしていた。だがそれだけで警戒を解くことはできない。この少年は確かに怪しい。

「どう思われようといいんだけどさ。僕は物心ついたころにはもうここにいたんだ。そして魔族の母さんに育てられた。事情はわからない。多分さらわれて来たんだろうな」

あの男に。最後にそう言ったようにも聞こえたがはっきりとはしなかった。

「でも、今君に危害を加えてるわけでも無いんだ。そう怯えないでくれよ」

「それは……わかるけど」

「もう少し僕のことを言っておくと、魔族に育てられたと言っても関係のあったのはほとんど母さんだけだ。他の魔族には無視されるかいじめられるかそんな感じだった。だから魔族のことも実はよく知らないんだ。まぁそれ以上に人間についても知らないんだけど。人間については本で読んだぐらいだな」

「お母さんは優しくしてくれたの？　その……魔族なのに？」

「優しかったよ。いつかは人間の世界に戻るべきだと思ってくれたのかな、人間の言葉の読み書きも教えてくれたし。他の魔族とも僕のことでしょっちゅうもめてたけどいつもかばってくれた。いじめ殺されるようなことがなかったのも母さんがいてくれたからだし」

「お母さんを生き返らせようとは思わなかったの？」

思わず口をついたがリーリアは後悔した。そこまで踏み込んでいいとは思えない。

「うん。そもそも僕の能力が生き返らせるとかいうものじゃないしね。リーリアみたいになるなんてわかったのは今回が初めてなんだ。これがリーリアだけに起こることなのか人間なら誰でもこうなるのかも分からない。まぁ今後人間に使うことはないと思うけどね」

「ごめん、変なこと聞いて」

「いいよ。でもどうだろうな、もし自意識を持った状態で復活するってわかってたなら。……それでも使わなかったと思う。やっと母さんは休めたんだ。このまま眠らせてあげたい」

しんみりとした雰囲気になってしまった。それを破るようにアルが慌てて言う。

「あぁ、話がずれたな。で、どうする。開拓団に行くかい？」

「ほんとにいいの？　私が開拓団に戻ったらアル君どこにも行けなくなっちゃう」

「構わないよ。別にあそこにずっといるわけじゃないだろ？」

「うん、出発前に聞いた話だと最短で一ヶ月、長くても半年って話だったよ。それで中立地帯はマテウ国の領地になるって」

「そうか、なら全然問題ないよ。それからはどうするんだ？」

「街に戻るかな。実家に帰ると思うけど……」

本来の目的は勇者様にお近づきになり、そのまま仕えることだったがそのまま言うのは何故か躊躇われた。

「うん、僕も街に行きたいと思っていたんだ。リーリアが一緒なら都合もいい。僕は人間社会の事は本で読んだだけなんだ。色々常識的なことを教えてもらえると助かるし」

「でもアル君から離れられないっていうのはどうするの？」

それが問題だった。四六時中一緒にいるわけにも行かないだろう。有効範囲は１ｋｍというが何かのおりに離れ離れになってしまうことがないとも限らない。

「そうだな。しばらくは一緒にいるしかないね。でもそれはある程度時間が解決してくれると思う。僕のこの能力は少しずつ成長している。最初は１０ｍも有効範囲はなかったんだ。だから有効範囲はそのうちもっと広がると思う。まぁ先の事はわからないし、まずは開拓団だな」

そう言うとアルは立ち上がりリーリアに手を差し出した。こういう所作はごく自然で気遣いに溢れている。アルの先ほどの言葉からすると母親から学んだものなのだろう。リーリアも素直に手を握って立ち上がった。

撤収はすぐに終わった。毛布をズタ袋に突っ込んだぐらいのものだ。墓穴は放置することになった。埋め戻すのも面倒だしこんなところに穴があった所で誰に迷惑を掛けるものでもない。

二人が崖沿いに歩き始めると、今まで彫像のようにぴくりとも動かなかった狼がその身を起こし、後をついて歩き始めた。

＊＊＊＊＊

まず二人は崖の上へ移動する必要があった。この森は緩やかではあるが全体で高低差が１００ｍほどあり裾野が広い山のようになっていた。そのため崖のようになっている箇所が結構あり直線的に移動するのが難しい。開拓団の拠点はほぼ森の中央、山頂部分に位置している。

崖を登るのは無理なのでかなりの距離を歩くことになる。

「すぐそこだと思ったんだけど結構かかるね」

「リーリアはかなり落ちてきたんだ。戻るのは大分かかるね」

朝出発し既に昼を過ぎているが、まだ崖の上までも辿りついていない。

二人はとりとめもない会話をしながらゆっくりと歩く。リーリアはあまり体力には自信がない方だったのだが、特に疲れることもなく不思議に思っていた。

「それは僕の能力のせいだな。最適な状態で動くように体を再生するみたいだし」

リーリアは少し複雑な気分にはなったが現状の疲れ知らずな状態は便利でありそれは受け入れた。

「アル君てさぁ何歳なの？」

不思議に思っていたことを他にも聞いてみた。見た目は自分とそう変わらないように思えるが童顔なだけかもしれない。それに喋り方があまり子供っぽくないようにも感じる。

「１５歳ぐらいだと思う」

「私１６歳！」

「なんでそれだけで微妙に自慢気なんだ？　１歳しか違わないじゃないか」

「１歳だろうとなんだろうと私の方がお姉さんということです！」

そんなことでムキになるのがお姉さんなのか？　と思ったが口に

は出さない。それに15歳というのも大体これぐらいだろうと言うことだ。誕生日も知らないし本当の所何歳なのかは分からない。だがそれを言うとリーリアはまた失敗したと思ってしまうだろう。

「そのお姉さんはなんでこんな森にやってきたんだ？　開拓団なんてつまらないだろう？」

開拓団などという名前だが別に開拓は行わない。ただ居続けるだけだ。リーリアのような少女が好む職業とも思えない。

「えーとね……勇者様なの」

リーリアが少し照れたように言う。

「あぁ、そういえば勇者の従者だとか言ってたね。何？　その勇者が好きなの？」

「違うの！　本当はね、第一遊撃隊のフォグ様なの！」

バタバタと手を振りながら慌てて言う。

「何が違うんだ？　そのフォグってのが勇者なんだろ？」

「えとね、今この森に来てるのは第二遊撃隊と第三遊撃隊なの。でね私は第三遊撃隊の従者なの」

「ん？　よく分からないな。第一遊撃隊ってのは来てないんだろ？」

「そうなんだけどね、とにかく勇者様にお近づきになれば、そこから第一遊撃隊のフォグ様にもつながるんじゃないかと思ってね、そ

の……」

「はぁ……何だそれ？　えらく遠回りだな。そのフォグってのが好きなら、そっちに直接行けばいいじゃないか」

「い、いきなりは無理！　そ、それにフォグ様に会える機会なんて滅多に無いし。だから他の勇者様の従者でも、なれればお見かけする機会も増えるんじゃないかなぁって。第一遊撃隊では従者の募集なんてしてなかったし……」

「まぁリーリアがそうしたいんならそれでいいよ。何か手伝えることがあるなら僕も協力するよ。フォグってのと仲良くなれればいいんだろう？」

「ほんとに！？」

「あぁ、別に急ぐ目的もないしね。最終的には結婚出来ればいいのか？」

「け、けけけ結婚て！　そのそりゃ最終的にはそうなのかもしれないけど、その、まずは自然に話せる感じからですね、そのお友達ってゆーか……その……」

リーリアが顔を真赤にしてすごい勢いで話しているがアルは途中から聞き流している。

そんな話をしながらも歩き続け崖の上へと辿り着く頃には陽が落ちようとしていた。

「ここまで来ればもう一息ってところだな」

「夜になるまえにこれてよかったね」

後は道なりに進めば開拓団の拠点に行ける。そう二人が思った時前方に人影が現われた。

5人だ。道を塞ぐように扇形に展開している。アルが後方を確認するとそちらには3人。囲まれていた。

全員が同じような格好をしている。胴を覆う革鎧と手足を部分的に覆う装甲、機動性を重視した装備だった。アルとリーリアが大した武装をしていないのを見て舐めているのか武器は手にしていない。剣は腰や背に帯びたままだ。

下卑た面をしている。アルはそう思った。

「リーリア、念の為に聞くけど、開拓団の知り合いか？」

「わ、わかんない。けど開拓団の人たちはこんな感じじゃないよ」

しかし開拓団以外の人間がここにいる筈もない。まだここは魔獣がうろつくような魔境だ。盗賊の類もわざわざこんな所へはこないだろう。

「何か用かな？　あなたたちに見覚えは無いんだけど」

とりあえず声をかけてみた。

「はっ！　見覚えなんかあるわきゃねーだろーが！」

前方の5人の中央の男が一歩踏み出し脅すように喚いた。リーリアは驚きアルの腕にしがみつく。柔らかい胸がアルの腕に押し付けられ形を変えた。

「見た感じ盗賊の類か？　見ての通り僕らは大したものは持ってない。一番価値のあるもので乾し肉の塊ぐらいだけどこんなものが欲しいのか？　それで良ければ譲るからここを通してくれないか？」

「ガキが！　舐めてんじゃねーぞ！」

まぁそうだろうな。とアルは思う。そんなものが目的のはずもない。まず盗賊がわざわざこんな所で獲物を物色しているはずがない。盗賊がこんな所までやってくる理由としてまずあげられるのは開拓団の存在だろう。開拓団は勇者を除けば戦力は無いに等しい。陽動等で勇者をおびき出すことが出来れば勝算は十分にある。最長半年をここで過ごすつもりでやってきている開拓団だ。物資を全て奪うことが出来るなら相当な利益になるだろう。だがそれならその盗賊団はかなりの規模になるはずだ。この程度の少人数ということはない。ならばこいつらは、別働隊か偵察隊、見張りというような役割の小集団だ。この行動はこいつらの独断だろう。僕達がここに来たのは偶然が重なってのことだ。なら目的は……。

そこまで思索を進めた所で鈍い音が大地を揺らした。

中央の男が剣を抜き大地に斬りつけたのだ。その剣は刀身を全て大地にめり込ませている。ずっと無視している体のアルに業を煮やしての行動だ。その膂力は人間業ではない。

「貴族か？」

「ア、アル君、野族だよ。どうしよう……」

野族とはその身を犯罪者へと堕とした貴族の蔑称だ。世界中のどの国でも魔族以上に恐れられていた。貴族の身体能力を持ち、人の欲望で襲いかかってくる。魔族も恐れられてはいるが基本的には魔族領から出てこない。しかし野族はどこにでも現れ思うがままに暴

れた。
リーリアはすでに絶望していた。ただの盗賊相手でも勝てるとは思えないが、野族を相手にどうにかなるとは全く思えない。
「隊長、遊んでないでさっさとやりましょうぜ」
部下と思しき男が欲望にぎらついた目でリーリアを見て言う。
中央の男が隊長か。アルは全員を見渡した。武器は全員剣だ。野族なら当然なのだろう。貴族や野族は基本的には飛び道具を用いない。彼らの移動速度では飛び道具などまどろっこしいだけだからだ。弓を引いて放つ暇があるなら、敵に突っ込んで武器を振り回せばそれで済む。
「目的はリーリアか、けどこんな臭い女でいいのか？」
「く、臭くないよ！　え、もしかして腐ってるの！？」
「服が臭うよ。血肉が付着したまま乾いてるし」
「え、嘘！　わかんないんだけど！」
「慣れちゃったんじゃないか？」
野族の隊長が地面に埋まった剣を抜き、アルに突きつけた。
「黙れガキ、てめえは黙って女をよこせばそれでいいんだよ！」
アルはその剣先を見つめながら冷静に語りかけた。
「何故僕を殺さない？　その剣で僕を貫けば終わりだ。その後女を

連れていけばいい」

「お前は人質だよ、その女を手懐ける為のな！　女に抵抗されるとむかついて、つい殺しちまうしな。おい、女！　お前は今から俺ら全員の相手をするんだ。逆らうならその男を殺す！」

「アル君……」

リーリアは不安にかられアルを見つめた。もうおしまいだ。どうしようもないと思いアルを見たのだがアルはいつもの生意気な顔のままだ。怯えている様子はまるでない。

「大丈夫だよ」

そう言われてもリーリアには全くそのようには思えない。

「早くしろ、腕の一本も落としてやろうか、あぁ！」

野族が焦れて叫ぶ。

リーリアは観念してアルの腕を放した。どんなひどい目にあうのかは想像もつかなかったが、アルが怪我をするのを見過ごすことは出来なかった。短い付き合いだったがそれでも今まで十分自分を気遣い優しくしてくれたと思っている。

リーリアは野族に向け足を踏み出した。

隊長の淫靡な期待に満ちた左手がリーリアの胸に伸びる。触れようとした瞬間にそれは起こった。

リーリアの右手が隊長の左手首に上から絡みつき、左の掌が下から隊長の肘を押さえた。そのまま強く引いてテコの要領で肘を砕き、同時に隊長の左膝を右足で蹴り折る。ここまでは正に一瞬の出来事だ。簡単に言うと伸ばしてきた腕を掴んで引っ張り、体重が一方の

足にかかった瞬間に膝を蹴り、ついでに肘を折ったということだ。
膝を砕いた時点で勝負は決していたが攻撃はまだ終わらなかった。右足を戻すと同時にリーリアの左膝が跳ね上がる。膝を折られ前のめりに倒れてきた隊長の顎を粉砕した。舌が血の糸を引いて飛び、だらし無く開いた口からは砕けた歯がぼろぼろとこぼれ落ちる。止めとばかりに右肘を側頭部に叩きつけると頭蓋の砕ける音がし隊長は森の中に吹っ飛んでいった。何かが潰れる音と、木がへし折れる音、木が倒れ森を揺らす音が続けて聞こえた。

「え？」

アルを除いて全員が驚愕に動きを止めていた。中でも一番驚いているのはリーリアだろう。体が勝手に動いて野族の隊長を粉砕し、何がなんだかわからないうちに右肘を振り切った止めのポーズを取っていた。その動きについていけず乱れ浮いていた金髪がふわりと下りてくる。

「リーリア、僕が常識に疎いって話をしたと思うけど、こういう場合はどうしたらいい？　殺しちゃっていいよな？」

「う、うん盗賊は死罪だし、殺してもお咎めはないけど……」

リーリアはぼーっとしたまま聞かれたままに応えた。

「よしやろう」

狩られる側にまわった野族達はもろかった。普段その圧倒的な身体能力で敵を蹂躙する戦い方しか知らない彼らにとってそれ以上の力を振るい、術技を行使する相手を前に為す術がなかった。
単純に振り回した剣は簡単にそらされ、懐に入られ、そのまま投

げ飛ばされる。地に投げ倒された彼らを待つ運命は、全力の踏み下ろしでの顔面の破壊だ。

突き込んだ剣は手首を打たれ簡単に落とされた。落とした剣は馬鹿みたいな力で蹴られて彼らの胴に突き刺さる。革鎧など何の役にも立たない。

背を見せ逃げようとした者はたちまち追いつかれた。後ろから眼窩に指を引っ掛けられ、そのまま引き倒される。これも踏み下ろしの餌食だ。

終わってみれば圧勝だった。1分もかかっていない。この結果にリーリアはますます呆けた。

「え？　なにこれ？」

リーリアは悲壮な決意を固め、野族に身を任せようとしていた。それがいつの間にか死屍累々といった有様だ。わけがわからない。

「ちょっと複雑な気分だな。僕がやるよりずっとうまい。これはあれかな、外から見てるから体重のかけ方やら、姿勢が本で見たイメージ通りに出来るからかな。思ってた以上だ」

「へ？　どういうこと？」

「あぁ、ごめん。今のは僕が直接リーリアを動かしたんだ」

「ほぇ？」

変な声が出た。

「言っただろう？　死体を操れるって。今のがそうだよ」

「はい？」

「今までは、狼とか猿とか動物しか動かしたことがなかったんだけど、やっぱり人間はいいね。自分の体と同じ感覚で動かせる」

そういうとアルは森の中へ入っていった。そして男を一人ずるずると引きずってくる。最初に吹っ飛ばした野族の隊長だ。

「さすが隊長って所かな？　殺したつもりだったんだけど」

「えっと……生きてるの？」

見るも無残な状態だった。ぴくぴくと痙攣している。生きているのかもしれないが、死んでいないだけというように見えた。

「こいつどうしたらいいと思う？」

「わかんないよ、そんなの！」

「生きてるなら話を聞こうと思ったんだけど、この状態じゃ無理だな。僕が想像するにこいつらはもっと大規模な盗賊団の一部だ。多分開拓団を狙っているんだろう」

「え？　それまずいんじゃないの？」

「うん、開拓団に伝えないとね。とりあえずこいつは開拓団に引き渡そうか」

このまま引きずって連れていくんだろうか？　リーリアが疑問に思うといつのまにか側に狼が現れていた。

狼は野族の隊長の襟首を咥えるとそのまま引きずり始めた。そういえばずっと付いてきてたんだった、とリーリアは今まで目立つことのなかった狼を見た。こうやって忠実に言うことを聞いているのをみるとなんだか可愛く見えてくる。

「じゃ行こうか」

そう言ってアルは歩きだした。

リーリアはそのままついていこうとしたがある疑問からその歩みを止めた。

なんだかすごく重要なことを適当に流された気がする。

「アル君」

「なに？」

「私を……直接操れるってどういうこと？」

「そのままの意味だけど、より詳しく言うと感覚の同調と筋肉の操作が出来る」

「感覚の同調って……」

「リーリアが何か触った感じがわかったりとか、何かを殴ったらその反動を感じたりとか」

「操作って……」

「全身を自由に動かすことが出来る。感覚の同調と合わせればかなりの事が出来るね。まぁ男女の違いがあるから誤差はあるんだけど

人間同士だと余計な事を考えなくていいから楽だ。そーいや胸の感じはすごいね。すっごい揺れてた。びっくりしたよ」

「あ、あああああ」

リーリアにはそれを大したことのないように言うアルが信じられなかった。全身の感覚を隅々まで探られ、自由に操作される。アルがその気になればリーリアには抵抗する術がない。健康な15歳の少年に思うがままに操られてしまうという状況からは卑猥な想像しか出来なかった。

「ア、アル君……へ、変なことしないよね？」

リーリアは自分を抱きしめる。身を守ろうと全身をすくめた。

「ん？　あぁ何を心配してるのかと思ったらそんなことか」

アルはリーリアの心情を察した。確かに全身の自由を奪われたりするのは年頃の少女としては不安なことだろう。

アルはリーリアを安心させるために爽やかな笑顔を浮かべて言った。

「大丈夫だよ！　僕、死姦には興味ないから！」

一瞬、何を言われたのか分からなかった。しかん、シカン、死姦？

「えぇえええぇー！？」

乙女としてはかなり複雑な心境になってリーリアが叫んだ。夕闇に沈む森にその声は反響した。

7話　第3の勇者

暗い森の中、アルとリーリアが歩いている。
既に陽は落ち、残照がかろうじて地平の端をぼんやりと赤く染めている程度だ。森の中は夜と言ってもいい。まだ月も出ていないためこの時間帯の方が深夜よりも暗い程だろう。
リーリアは闇におびえ、アルの腕にしがみついておっかなびっくり歩いていた。
アルはというとこんな状況でも夜目が効くのか迷う所がない。目的地である開拓団のある集落をまっすぐに目指していた。

「ねぇアル君。何か明かりとかないのかな？」

リーリアは少し落ち着きを取り戻していた。先ほどの発言は安心させるための冗談だと無理やり自分に言い聞かせている。
――すっごい爽やかに言われたのがむかつくけど。

「ないよ。元々暗くなったら適当に寝ればいいと思ってたからね。そんな用意はない」

二人の後ろを大きな塊を咥えて引きずる狼が黙ってついてきている。その大きな塊は時折耳障りな唸りを上げた。

「ねぇアル君。薄情なようなんだけど……この人置いて行かない？」
「なんで？」
「怖いよ！　なんでこんな森の中、明かりもなしで、うーうー、唸ってる人引きずりながら行かなきゃならないの！」
「でもなぁ、こいつらが開拓団を襲うかもしれないって説明するなら、連れていくのが手っ取り早いだろう？」

「そんなのなくても話せばわかってくれるよ！　勇者様だし」

本心ではまったくそんなことは思っていなかったが、この状況が嫌だったのでリーリアは適当なことを言った。

「まぁ説明の役にはあまり立たないかもな。喋れる状態じゃないし」

そういって狼がずるずると引きずっている塊を見る。野族の成れの果てだ。頭蓋が陥没し、顎が砕け、全身の骨が折れている。引きずられたせいで露出している肌は地面にすりおろされ赤い肉が剥き出ていた。赤くないところは紫だ。呼吸がうまく出来ていないせいだろう。

死んでいるようにも見える状態だが、喉のあたりからはヒューヒューという甲高い喘鳴が聞こえ、時折唸りをあげることから生きてはいるのだろう。平民ならとっくの昔に死んでいるはずだが、貴族の身体が無理やり命を繋ぎ止めていた。

アルは返り討ちにしたことについてはなんとも思っていない。

リーリアも野族については同情する気にはなれなかった。各地での暴虐無人な振る舞いは事実として広く伝えられている。ただの盗賊ならまだ同情の余地はあるのかもしれない。だが、彼らは貴族として平民を守る義務を捨て、身勝手に己の欲望を満たすだけのためにその生まれついての強靱な肉体を行使している。平穏な暮らしを望み営む者から彼らは敵視されていた。

「そうだな。あまり時間をかけるとその間に襲撃されていたら意味ないし……どうした？」

狼がくわえていた野族を放し唸りをあげていた。見ているのは森の奥だ。警戒しているように見える。

「どうしたの、ベアくまちゃん」
「ちょっと待て！　名前をつけたのか！？」
森の奥を見ようとしたアルは、即座にリーリアの方を見た。
「え？　可愛いでしょ？」
アルはため息をついた。
――ちゃんと説明しとけば良かったのか？　いや、でもこいつが最終的にどうなるかなんて僕の今までの話を聞いていれば分かりそうなもんだけどな。
「いろいろ言いたいことはあるが、まずその名前はなんだ？」
「うちで飼ってる犬の名前」
「……せめて、ウルフおおかみ、じゃないのか、そこは？　それに飼ってる犬と同じ名前にするなよ、区別がつかないだろ」
「うちには、ベアくま以外にも、とりバードが3匹いるけど特に困ってないよ？」
――どうやって呼びわけてるんだよ
「念のため聞くけど、そのとりバードとやらは鳥か？」
「猫」
「なんでだよ！」
「ベアくまちゃん、アルくんが人のペットの名前に文句つけるよ。センスないよねー」
「あぁ、もう。というかね。その狼は使い捨てなんだよ。いちいち名前なんてつけるもんじゃない」
リーリアは信じられないものを見るような目でアルを見た。

「ちょっと！　可哀想なこと言わないで！」

「そう言われてもな。そもそも二匹いたうちの一匹しか再利用してないんだ。残してきた一匹は可哀想じゃないのか？　それに森を出る時には連れていけない。街には狼なんていないだろう？」

「……犬だって言うとか？」

「一目でバレるよ……」

ベアくまと呼ばれた狼は言い合う二人を交互に見ていた。困っているようだ。先ほどの警戒行動も忘れている。

「あぁ、こんなことを言っている場合じゃない。さっき何かに反応してたよな？　なんだったんだ？」

思い出したようにアルは狼を見た。狼もそれに応じ再度森の奥を見る。

「何かいるのか？」

「ねぇ、アル君！　アル君は操ってる人の感覚がわかるんだよね？　だったらさ、ベアくまちゃんの耳の感覚ってわからないの？」

「そうだな、一応やってみるか」

そういうとアルは森の奥を見て精神を集中させる。

だがこの試みはうまく行かなかった。これは人間と狼の耳の構造が違いすぎるからだ。聴覚に特化した犬型の獣と人間ではそもそも耳の筋肉の数すら違う。それに音を分解して解釈するのは狼の脳の機能だ。鼓膜の振動を同調したとしてそれを分析出来る能力が人間にはない。

「駄目だな。雑音しか聞こえない……そうだ、リーリアでも試してみよう。いいかな？」
「え？　いいけど、耳だけだよ。変なことはしないでね」

再度聴覚に集中する。人間同士のせいか相性がよかったのか音は普通に聞こえてきた。それならばと戦闘中のように能力の強化を行う。

風に揺れる草木、虫の音色、地をゆく獣の足音、鳥の風切り音、夜行性の動物のかすかな鳴き声、森の中には様々な音が満ちていた。それら一定のパターンで奏でられる森の音色はノイズとして全て無視する。

すると静寂の中、人の気配が感じられた。それらは最大限隠密性を維持するべく身動ぎ一つしていないが、微かな衣擦れ、呼吸、心音をリーリアの耳は捉えていた。

２人。狼が見ていた方に一人。反対側の森に一人。感覚を強化された聴覚はその位置を正確に捉えた。

さらに感覚を広げていくと驚くべき情景が脳裏に描かれた。

「え？　え？　なに？」

リーリアはその感覚に戸惑った。人の群れだ。開拓団を窺える位置にかなりの数の人間がいた。数が多すぎてその全貌が捉えられない。それは開拓団を囲むように布陣していた。それらは今アル達を見張っている二人ほどの隠密性を持った集団ではなかったが、それでもこのまま近づいていたとしたら気付けなかっただろう。

「遅かったかな。開拓団が囲まれてるよ」
「それって……野族？」
「多分そうだろう。遠巻きに見ているって感じか。開拓団ってかな

り追い詰められてないか？」

アルは少し考え込んだ。かなりの数の野族がいた。現在地と開拓団の間しか感覚は捉えていなかったがわかる範囲で野族は密集していた。この調子なら開拓団の周囲はどこも似たようなものだろう。開拓団の包囲は既に完成してる。そこには勇者もろとも完全に殲滅するという意思が感じられた。もう終わっているとしか思えない。

ただの盗賊ならともかく野族ならある程度の数であたれば勇者といえど押しつぶせるだろう。

「リーリア。開拓団は放っといて森を出ないか？　集落に行って巻き込まれるとまずいと思うんだけど」

「……駄目だよ！　行って教えてあげなきゃ！」

リーリアは逡巡した後そう言った。野族は怖いがそれでも開拓団を見捨てる事は出来なかった。短い間とはいえ旅を共にしてきた仲間たちだ。

「教えても教えなくてもさほど状況に変わりはないと思うんだけど……逆にそれがきっかけになって一気に攻めてくるなんてこともあるかもな」

「でも！　勇者様は強いからなんとかしてくれるよ……」

あまり自信がないのかリーリアの声はだんだん小さくなり、語尾などほとんど聞こえなかった。勇者が魔族を圧倒するのは知っているが野族が相手となるとどうなるのかはわからない。

「勇者……ねぇ。まぁいいや。よし、じゃあこの野族はここに置いていこう。もしかしたら今見張っている二人が回収に来て、僕らを追わないかもしれない。この二人が本隊と連絡して、僕らに目を向

けるとさすがにやっかいだろうし」

――まぁそんな間抜けじゃなさそうだけど。

口にはしなかった。気休めでも言っておけばリーリアも安心するだろうという単純な考えだ。

「いいの？」

リーリアが不安そうにアルを見た。勢いで開拓団に向かうべきだとは言ったが、同じ感覚を共有していたのだ。開拓団を包むように布陣した無数の野族の脅威は肌で感じていた。

「いいよ、リーリアが行きたいっていうなら付き合う。そう言っただろう？」

「……ありがとう」

二人は開拓団の拠点、魔王の集落に向けて歩き出した。

＊＊＊＊＊

何の妨害もなく集落の入口まで二人は辿り着いた。

集落の周りは１ｍ程の感覚を空けて杭が打ち込まれていた。柵のつもりだとしたらあまり意味はないが、杭の間は細い糸で結ばれており、間には木の板が何枚か通してあった。触れるとぶつかり合い音がなる仕掛けだ。

――それでもあんまり意味はないよな。飛び越えるかくぐるかすればいいし。こんな程度のものならなくてもいいのに。

アルが馬鹿にしたようにその柵もどきを見ていると、カランカランと音がして、どてっと何かが倒れる音がした。ちらりと横を見ると無様な格好でリーリアが転がっている。

「何をやっているんだ？　確か水をくみにここを出たんだよな？」
「暗くて見えないよ！」
「見えなくたってそれぐらい覚えてないか？　それに何勝手に行こうとしてるんだよ」
「え？　だって早く伝えないと！」

アルは鳴子の仕掛けを軽々と飛び越えた。

「わかったよ。ほら立って。一緒に行こう」

リーリアの手を取り立ち上がらせる。

「しかし誰も様子を見に来ないな。ますますこの仕掛の意味がないと思うんだけど」
「どうなんだろう。私もこの仕掛が鳴ったの初めて見たんだけど……」

実際は自分で鳴らしたわけなので少々バツが悪そうにリーリアは言う。

「で、伝えるというのは勇者でいいのか？　開拓団の団長とかでなくて」
「うん、ディーンさんはおじいちゃんで戦うとか無理だし、野族がくるって言ってもどうにもならないと思う」
「そうか。所でリーリアは服の替えはないの？　勇者の所に行く前に着替えるとか」

「いいよ。まずは勇者様の所に行こうよ、あっち。あの大きい天幕の所」

そういってリーリアが先導する。周囲ではいたるところで篝火が焚かれ、大小様々な天幕を照らしていた。既に寝ているのか人の気配は特に感じられない。

勇者がいるという天幕は確かに大きく豪華だった。周辺の小屋を圧倒するサイズだ。天幕とはいうもののしっかりと大きな柱が立てられており分厚い布で全体を覆っている。布には所々に紋章や風景、人物などが描かれている。芸術作品の一種にも見えた。

「これは凄いな。そこの魔王の館より豪華なんじゃないのか？」

アルが2階建ての粗末な建物を指さす。

「うん、勇者様は1等貴族で凄いお金持ちらしいよ。凄く内装に凝ってるんだって。見たことはないんだけど」

そう言った時かすかに心が傷んだ。勇者様の天幕の内装が凝っているというのは一緒に水汲みに言った従者仲間からの情報だったからだ。

「こんなものを持って来たのならそりゃ、こっちに住むよな」

「でも、ギャリさんとセルジュさんはあっちの2階建ての館に住むって聞いたよ」

「魔王の館か。そいつらは勇者の仲間？」

「うん、第三遊撃隊の隊員で司祭さんと魔法使いさん」

「そもそも遊撃隊ってのがなんなのか聞いてないんだけど」

「王様直属の部隊で4人組なんだよ。すごく強くて魔族領を取り返しにいくの」

「なんで4人なんだ？　もっと大勢で行けばいいだろう？」

もっともな疑問だ。一応理由としては最小単位の二人編成を二組束ねて可用性を上げたということになっている。遊撃隊の主な任務は少数精鋭による魔王の暗殺。5人以上では隠密性に劣り、指揮統制も若干ながら乱れやすい。

もっともらしくそう言われてはいるが、実際の所は伝統的に勇者は4人組ということになっており、それが踏襲されているだけだった。

「よくわかんないけど、普通の貴族が魔族と戦っても負けちゃうから少数精鋭だって聞いたことあるよ」

「そういうものか。じゃあ行こう。とりあえずリーリアが説明してくれ。僕もここの人たちと多少の面識はあるけど勇者とは会ったことが無い」

「う、うん」

二人は天幕へと近づく。だが近づくと共にリーリアの足取りは重くなりやがて止まってしまった。最初はかすかに聞こえたその音が近づくに連れはっきりとしてきた為だ。

嬌声が聞こえる。あたりをはばからない艶めいた女の喘ぎ声が天幕の中から漏れていた。

リーリアは顔を真っ赤にしてアルを見た。

「ア、アル君！　こここ、これって……」

「邪魔しないほうがいいんじゃないか？」

「ど、どうしよう。早く伝えないと行けないのに！」

「だったら入れば？　緊急事態なんだしちゃんと説明すれば問題ないんじゃないか？」

「む、無理！　だって、中でその……」

「なら終わるまで待つしかないだろう？」

そんなことを言い合う内に一際高い声が響き渡り、あたりが静まり返った。中でごそごそと音がしたかと思うと天幕の中から上半身が裸の男が姿を表す。

女のような顔をした男だった。肩まである金髪と合わせると顔だけを見て男だと判別するのは難しいだろう。だがその鍛えられ引き締まった上半身が男であることを強烈に主張する。その顔に不釣合なような鍛えられた身体も全体としてみれば調和がとれていた。とても美しい貴族の戦士だ。

外で騒いでいる者達を不審に思い、様子を見に出てきたといった風だった。

「あ、あの勇者様」

リーリアが顔を伏せながら言う。勇者の汗だらけの上半身が天幕の中での事を想像させた。

「リーリア！　無事だったのか！　崖から落ちて死んだと聞いたぞ！」

勇者は驚きの声を上げ、そして微笑みかけた。安否を気遣う様が感じられる。

「え、と、落ちたんですけど、あまり怪我をせずに無事でした。戻ってくるのに時間がかかってすいません」

本当の事は言えないので実は死んでいたなどということは伏せた。それ以外は本当なのでそれほど疑われることはないだろうとリーリアは考える。

「いや、よかったよ！　ん、そこの君は？」
「崖の下にいたリーリアを保護したものだ」
アルがぶっきらぼうに答えた。
「そうか、連れてきてくれてありがとう。心配していたんだよ」
アルはその爽やかな笑顔にすこしいらついた。心配していたという割には探そうとしていた風には見えない。すごく軽い感じが癪に障った。
「でも、そうならヘルミーネの報告はおかしいな？　おい、ヘルミーネ！」
勇者が天幕に呼びかける。少しして女が出てきた。裸の上に薄い布をかぶり、くるまっただけの姿だ。あまり隠れていない上気した肌と、整っていない息遣いが生々しく情事の後を感じさせる。
その後からもう一人。こちらは男だ。筋骨隆々の大男。この男も上半身は裸で体液に塗れていた。
リーリアはそれまで名前も知らなかったヘルミーネという女と目を合わせた。
ヘルミーネの目に浮かんだのは怯えと怒りが混ざったものだった。ヘルミーネが少し後ずさった。
「ヘルミーネ。崖から落ちて死んだリーリアを見たと言ったな？」
勇者がヘルミーネを問い詰める。

「はい！　確かにそうです！　確実に死んでいました！　あんなぐちゃぐちゃの状態で生きているわけがありません！　あの高さから落ちて死なないわけがないです！　なんで……なんであんたが生きてんの！　おかしいでしょ！　ねぇ！　どうして！　化けててこないでよ！　あたしの邪魔をしないで！　ねぇ！　死んでないならちゃんと死んでよ！　ふざけないで！　あたしの居場所はここなの！　あんたなんかに奪われるわけには行かないのよ！」

ヘルミーネは必死に言い募った。興奮のあまり早口になっている。

彼女は確かに崖から落ちたリーリアを見ている。そして崖下で血の花を咲かせ、動かなくなったところまで確実に視認していた。側に寄って生死を確認したわけではないが、誰が見てもこの状況で生きているとは言わないはずだ。

勇者への返答は途中からリーリアに対する罵倒へと変化していた。混乱のあまり周りが見えなくなっている。

「おい、おちつけヘルミーナ。生きてたってんだから、それでいいじゃねーか。それとも何か？　死んでた方がいいってことか？　あぁ？」

大男がヘルミーナを脅すように諭した。ヘルミーナも自分が言ってはならないことを喚いたことに気づき口を閉ざす。

「ちょうどいい！　おい巨乳！　今から2回戦目だ。次はお前の相手をしてやる。それしか能がないんだからよ、せいぜい楽しませろよ」

何を言われたのかリーリアには解らなかった。なんでエーヴェルト様に巨乳呼ばわりされているんだろう？　相手って？

「エーヴェルト。初物は私が頂くと決まっているでしょう？　いつからあなたにそんな権利が？」

勇者がエーヴェルトと呼ばれた男を、底冷えのするような座った目付きで見た。

「す、すまねぇ。つい、調子に乗っちまった。許せよ。そいつはお前のもんだ。取ったりしねーよ」

エーヴェルトは即座に己のうかつさに気づいた。勇者にこの手の冗談は通用しない。それを身をもって知っているエーヴェルトの変わり身は早かった。

リーリアは自分のことが話題になっていることがうまく頭の中でつながらなかった。まったく想定外の状況だ。

「あまりふざけないほうが身のためですよ。さぁ、リーリア。行きましょう。随分と汚い格好ですが、脱いでしまえば関係ありませんしね。服ならヘルミーナの予備がありますし後でそれを着てください」

そう言って勇者は手を差し出し一歩近づいた。リーリアは後退り同じ距離を保つ。

「ちょ、ちょっと待ってください！　なんの話か知りませんがそんな場合じゃないです！　野族が！　すぐそこまで野族が来てるんです。それを伝えに急いで戻ってきたんです！」

「あぁ、彼らですか。知っていますよ」

「へ？」

リーリアは間抜けな声をあげた。既に知っていると言われるとは思っていなかった。

「この場にいるのは我々だけです。開拓団の皆さんは物資と共に安全な場所で待機していますよ。第二遊撃隊が守っています」

――なるほど。これは罠なのか。そして、勇者はあの野族の群れを遊撃隊４人で撃破出来ると思っている。勇者とはそこまでのものなのか？

「なので我々は彼らが襲いかかってくるまで十分楽しんでいればいいのですよ。リーリア、あなたを一目見た時に思いました。なんて美味しそうなんだろうって！　あなたが死んだと聞いた時はとても落胆しましたが……失ったと思っていたものがこの手に戻ってきたんです。期待も最高潮というものですよ！　もう我慢できない！　さぁ！」

ようやくリーリアの頭の中がまとまった。そして馬鹿みたいだと思った。従者など名ばかりで彼らが求めていたのは慰安婦だったのだ。身の回りの世話をさせたいだけなら開拓団の中からいくらでも集めればいい。彼らはわざわざ自分たちの好みに合う女性を選別して連れてきたのだ。

リーリアともう一人、道中で別の馬車にいた二人は特にお気に入りということだったのだろう。勇者の言動から察するにおいしい物は最後に味わう性質らしかった。

リーリアとて子供ではない。慰安婦そのものを否定はしないが従者として集めたというのでは話が違う。騙し討ちに等しい。

「違います！　そんなつもりじゃ！」

リーリアは大声を上げた。自分が馬鹿だとは思ったが、こんなことを当たり前のように言う勇者達も馬鹿だとしか思えなかった。

「そんなつもりも何もここまで来て何を言っているんです？　皆それはわかって来ているんですよ？」

そんなことはない。そう言おうとしたが口がうまく動かない。詰め寄る勇者の情欲に濡れた目を前にして足がすくむ。

射すくめられ身動きの取れないリーリアが取り乱しそうになった時、リーリアと勇者の間にアルが割り込んだ。

その存在などすっかり忘れていた勇者はアルを訝しげに見た。勇者の頭の中にはもうこの後のリーリアとの睦み合いしかない。それを邪魔された勇者はいらだたしげに言った。

「おや、あなたまだいたんですか？　さっさとどこかへ行ってください。目障りです。それとも何か報酬でも期待しているんですか？　そんなものあるわけないでしょう？」

アルを馬鹿にし見下す。アルは勇者とか言った所でさっきの野族と変わらないと思った。

「リーリアは嫌だと言ってるんだ。振られたんだよ、色男」

アルは侮蔑を隠そうともせず言った。無性に腹が立つ。

勇者は無言だった。表情を無くして呆然と立っている。何か言い返してくるかと待ち構えていたが、特に動きが見られないと見てアルは行動を起こした。

リーリアの方に振り向き手を取るとそのまま森へと向かい始めた。

「行こう。リーリア。こんな奴らほっとけばいい。開拓団も逃げてるなら大したことにはならない」
「う、うん」

少し戸惑いながらもリーリアはそれを受け入れた。このままここにいて勇者達の玩具になるつもりはない。

「聖棍よ！」

勇者が聖棍の名を叫ぶと同時に突風が吹き荒れた。

＊＊＊＊＊

思わぬ突風に身をすくめ、顔を伏せると前方で何かの降り立つ音がした。アル達が顔を上げるとそこにあったのは半ば予想通り、勇者の姿だ。

その右手には白い棍が握られている。棍などというと大層なものと思われるかもしれないが実質それはただの棒だ。長さは勇者の身長を少し上回る程度、２ｍほどだった。

「随分と大人気ないな。それ勇者の武器ってやつだろう？　いきり立ってるようだけど平民相手にむきになるってのはどうなんだ？」
「そ、そうですよ。貴族には、勇者には国民を守る義務があるはずですよ！」
「えぇ、そして守るからには国民は勇者に尽くすべきだと思いますよ？　なのでリーリア。あなたが戻り我々に尽くせばそれで問題ありません。そこの身の程知らずは叩き潰しますがそれも勇者の娯楽として許容される範囲でしょう。我々はそれが許される程度には国

民に尽くしているのですから」

アルは勇者が本気で言っていると感じた。宣言通り確実に攻撃を加えてくることだろう。

視線を一瞬後ろにやる。天幕の前の男女は動いていない。今のところ様子を見ているようだ。ならば勇者を打ち破りそのまま森へ突っ込めば逃げられるかも知れない。

勇者は余裕なのか一瞬視線を切ったアルを見下すように見ていた。棍を手慰みにか指先でくるくると回転させている。

「お前のくだらない思想なんてどうでもいい。リーリア。前に言ったよな。母さんの事は仕方ないって。あれは撤回する。こんな奴らが仇だと思うと我慢出来ない。ぶっ飛ばしていいか？」

「う、うん、やっちゃえ！　こんな人勇者の資格ないよ！」

勇者がアルの母親を殺した。それは仕方ないことだとリーリアも思っていた。しかしこんな勇者としておかしい人間に殺されたのが仕方ないなんて思えなくなった。それはアルも同じ気持ちだろうと思う。

「平民ごときに勇者の資格を問われたくはありませんが……」

勇者が言い終わる前にアルがわずかに前傾姿勢を取った。攻撃の前兆と捉えた勇者が棍の先を僅かに下げ迎撃の態勢をとろうとする。その一瞬にリーリアが動いた。

勇者の視界からはまるでリーリアが消えたように見えた。リーリアを全く警戒していなかったこともあるがその速度は貴族の目を持ってしても捉えきれないものだった。

リーリアは間合いを詰めながら両手を地に付けしゃがみ込み、右足を外から回すようにして足払いを放っていた。

さすがに勇者ともあろうものが両足もろとも刈られるようなことはなかったが、前に出していた左足を弾き飛ばされた。まるで鉄塊でもぶつけられたような感触に勇者の意識が足元へと集中する。この時点でほぼ勝負は決まっていた。

リーリアは足払いの勢いそのままに回転して右足で踏み切り、そのまま飛び上がった。回転の勢いを殺さずに威力をのせた左足の蹴りが勇者の顔面を捉える。

勇者はその間、棍で蹴りを受けようと動き出していたが間にあわなかった。上下の揺さぶりに全く対応出来ていない。

顔面を蹴り飛ばされ勇者の足が地を離れた。それでも勇者はなんとか反撃しようとした。だがそれも失敗に終わる。リーリアの足払いから続いた攻撃は終わっていなかったのだ。回転の勢いを余すことなく利用するための右足の蹴りだ。左足が宙にある間にすでに右足は左足を追いかけるように跳ね上がっていた。水平に振られた右足が棍を弾き飛ばす。

勇者の顔が絶望に歪んだ。彼の闘法は棍に依存している。攻撃も防御も棍を中心に組み立てられているため棍を失えば為す術がない。

左足から着地したリーリアはまだ宙に浮いている勇者に接近する。このまま攻撃してもはじき飛ばしてしまうだけでさほどダメージが与えられない所だがその解決法は簡単だった。

右腕で背を抱くように抱え、左の掌を腹部に叩きつけた。挟み撃ちだ。逃げ場のない衝撃が身体の中心で弾ける。十分に威力が浸透したことを確信すると、リーリアは勇者を天幕の方に投げ捨てた。

天幕がその場にいた男女を巻き込んで崩れ落ちる。

アルとリーリアのその後の行動は迅速だった。勇者がどうなったかは見もしない。

リーリアは落ちた聖棍を手にして、アルを背におぶると一心不乱に森へと駆け出した。

「おい！　野族共！　勇者は丸腰だ！　襲うなら今だ！」

アルはそう叫んだ。次にリーリアに言う。

「すまないがこのまま森を抜けるまで全力疾走だ。一気に行く」

闇の森をアルを背負ったリーリアが一気に駆け抜ける。夜目の効くアルが補助するため暗闇はさほど問題ではない。野族の間を途中通り抜けたが相手も何がなんだがわからなかったのかぽかんとした顔をして二人を黙って見送った。

二人は一直線に移動する。崖も川も勢いにまかせて飛び越えた。リーリア自身はめまぐるしく変わっていく風景にあわてふためき、混乱したままだったが、身体はそんなリーリアを無視して限界までその能力を行使する。

あっと言う間に森を抜けそこでリーリアはやっと止まった。

「なんていうのか、その……こんだけ無茶苦茶やってるのに全然疲れてないんだけど……」

リーリアがぼやいて森の方に振り返った。アルもようやくリーリアの背から降りる。

「まだ油断するな」

リーリアが「なんで?」と聞こうとした時、聖棍がかたかたと揺れだした。勇者の叫び声が聞こえたような気もしたが、かなりの距離だ。聞こえるはずもない。

「そいつは呼ばれたら飛んでいくみたいだ。そのまま抑えてて」

リーリアは手をすり抜け飛んでいこうとする聖棍を必死に抑えた。

かなりの力でリーリアの手を逃れようと蠢くが、握り続けているうちに次第に弱まっていきやがて沈黙した。

「よし、終わったみたいだな」

「え？」

目論見通り野族は勇者に襲いかかったのだろう。あの場にいたのは勇者を含めて3人。あの状態の勇者を中心に戦っても勝ち目はなかっただろう。天幕の中や、他の建物に従者や勇者の仲間がいたのかも知れないがそれでも結果はそう変わらないと思われる。

彼らがどうなったのかアルは特に興味もなく、その事をわざわざリーリアに説明する気もなかった。

「とりあえず難は逃れたということだよ、じゃあ行こうか。ここからは普通に歩いて行こう。あれを人に見られるのも困るしね」

「これどうしたらいいの？」

リーリアは手にした聖棍を振った。

「持っていくのも面倒なことになりそうだな。その辺に捨てていこう」

「え？　大丈夫？　これ一応国宝みたいなものだったと思うんだけど」

「見た目ただの棒だしいいだろ。それに多分勇者が呼んだら飛んでいくし」

――多分死んでるから呼ばれることはないと思うけど。

それはリーリアには言わなかった。

「そ、そう？　だったらいいけど」

リーリアはあっさりとその場に投げ捨てた。

「それよりリーリアの服をどうするかだな。今更取りに戻るわけにも行かないし」

「もういいよ……なんとか街に行ければ……」

「お金は？」

「え？」

リーリアは着の身着のままなため金品の類は身につけていない。アルも魔族の集落では人間の金は必要なかったので持っていなかった。

「まぁいいや。とりあえず街に行こう。ベイヤーってとこに行きたいんだけど行き方わかる？」

「うん。ここからだと東だから真っ直ぐ道に沿って行けばいいと思う」

「じゃあ行こう」

「あれ？　何か忘れてない？」

「ん？　なんだ？」

リーリアの疑問に応えるかのように、森からすごい勢いで何かが飛び出してきた。

「ベアくま！」

「あぁ、お前か……」

それはアルが使役していた狼だ。全力で追いかけてきたのかかなり息が上がっている。

「一緒にくる？」
「街までは無理だろ？」
「街の外にいればいいじゃない、ねぇ一緒にいこうよ」
アルはこんなことで押し問答するのも馬鹿らしくなったのか黙って歩き始めた。リーリアもそれを肯定と見て取って狼を引き連れアルの後を追う。
二人と一匹は明るい月の照らす中、東へと歩き始めた。

＊＊＊＊＊

「と、まぁこんな感じの事があったわけなんですが」
アルはこの街までやってくるまでの事をキャシーに話し終えた。
「なんというのか……つまらん」
「え？」
まさかつまらないと言われるとは思わなかった。ここまでの話はリーリアにしてみれば大冒険だったのだ。
「私の想像していたのはこうだ。性欲を持てあます健康な少年のアルはある日、男好きのする魅惑的な肢体を持った美少女リーリアを見かけ、辛抱たまらなくなり、その獣欲を迸らせて思わず襲いかかってしまった。リーリアがボロボロになるまでその身体を貪り尽くした後、我に返ったアル少年はとても反省し、なんとかその罪を償おうとリーリアと……」

「ちょちょちょ、何言ってるんですか！」

リーリアが慌てて口をはさむ。

「お気に召しませんでしたか」

アルはいつも通り冷静に返す。

「あぁ、いや半分冗談だよ。概ねは理解できた。しかしなんだな、その能力か？　それは私の知る魔法にはないものだな。どちらかというと悪魔そのものが行使する能力に近いように思う。アル君は人間だよな？」

「はい。悪魔というのがどのようなものか知りませんが、魔族ではありません」

「ふむ。魔族がそのような力を使うといったことも聞いたことがないな」

「そうですか」

「その能力はあまりおおっぴらにはしないほうがいいな。わかるだろ？」

「そうですね。死者が蘇ったように見えるというのが、とてもまずいということは、常識に疎い僕でもわかります」

「さて、しかしこうなると先ほどの魔法講義と釣り合う話かというと微妙な感じだな。どちらかと言えばもらいすぎな気もする」

「そう思ってくださるなら、掃除の報酬に多少色をつけていただければ」

「そうかね。ではそうするとするか。じゃあ明日からもよろしく頼むよ」

キャシーはそう言って話を切り上げようとした。話をしているうちに夜も更けている。そろそろ寝ようと言うことだろう。

「あ、あの！　私の事なんですけど……その、元に戻ることは出来ませんか？」

リーリアがずっと気になっていたことについて訊ねた。ずっとこのままなのか？　というのは意識を取り戻して以来、常に頭のどこかある不安だった。

「ふむ。アル君の話が本当なら、元に戻るというのは骸に戻るということだが……。そうだな、先ほどの話で言えば、今のリーリアちゃんはリーリアという存在の魔力が失われた状態だな。そしてアル君が操作するリーリアという存在の魔力で生きていることになる。これをなんとかリーリアの存在として定着させる事が出来ればあるいは。とは思うがその方法は見当もつかないな」

「そうですか……」

そんな簡単に答えが見つかるとも思っていなかったためリーリアの落胆はそれほどでもなかった。何か方法があるのかも知れないと前向きに考える。アルが一緒にいてくれるなら今のままでもそれほど問題ではないのだ。それに完全に元に戻ったのならアルと一緒にいる理由も特にはなくなってしまう。そう考えるとリーリアは少し複雑な気分になった。

8話　夢（前書き）

お気に入り登録が１００件超えました。ありがとうございます。
２章の話としては多分折り返しに入ったぐらいだと思います。
文章量的にはどうなるかはわかりませんが……。
これからもよろしくお願いします。

8話　夢

これは夢だ。
母さんが愛おしげに僕を見詰めている。
母さんが優しく僕に微笑みかけている。
母さんが僕の頭に柔らかい手をのせて撫でてくれる。
母さんの優しく甘い匂いに包まれて僕はとても幸せな気分になる。
だからこれは夢だ。
最近の母さんはとても遠い所を見ている。僕が側にいても見向きもせずに虚ろな瞳を宙へ向けている。
たまに僕の方をとろんとした目でみて「テオ様」と呼び掛ける。
そんな母さんは少し嫌だったけど、それでも僕は話しかけてくれたことに嬉しくなって「違うよ、僕はアルだよ」と返事をする。
すると母さんは何かに気づいたような風で、よそむきの顔をつくって「あら、アルのお友達かしら？」と言う。
僕は悲しくなるけど、それはもういつものことだから何も言い返さない。
だから母さんが僕の手を優しく握り外へ連れていってくれるなんて夢でしかない。
僕は母さんの優しい顔を黙って見上げる。
僕は母さんの腰のあたりまでしか背がなくて、だからこれはとても昔の夢だ。
母さんは僕の手を引いて森の奥へ歩いて行く。
一人で行ってはいけないといつも言われていて、僕はいいつけをちゃんと守っていたから、初めて行くそこに何があるかなんて知らなかった。
段々まわりが明るくなっていって、木が光るなんて珍しくてはしゃぐ僕を母さんは黙って見つめていた。
でもそんな楽しい気分もすぐになくなってしまう。光る木に囲ま

れてぽっかりと空いた空間にあの男がいるのを見てしまったから。
まぶしいぐらいに輝く広場の中でその男の周りだけが闇に沈み込んでいるようだったけど、母さんは遠くから見えた時から早足になって僕をひっぱるように連れて行く。

「テオ様！」

母さんがさっきまでの僕よりもはしゃいだような声を出す。ひどくいやな気分になる。
男を見上げると目が会った。とても冷たい目で僕を見ているようだったけど、僕自身じゃない何かを見ているようで心が通じあう気がまるでしなかった。

「始めろ」

母さんはそんなどうでもよさそうに声をかけられてもとても嬉しそうで、それが逆に心を感じさせなくて怖くなる。
母さんは地面に作られたいびつな図形の前に立つ。光る石がいっぱい並べてあってそれが大きな円を作ってる。中には大小様々な石が文字の様な形に置いてあるけれど、それは僕がいままでに読んだ本には出てこないものだったから、本当に文字かはわからなかった。
中心には人のかたちをした何かが積まれている。人間なのか魔族なのかはわからないけどとても生きているようには見えなかった。ゴミのようにおかれた、黒や紫や灰色でまだらになった腐った肉には蛆がたかっていて、そいつらだけが眩しいぐらいに白かった。
見ていると気分が悪くなってきて、僕は母さんに「もう帰ろう、こんなところいやだよ」と言ったけど母さんはぶつぶつと何かを言うだけで僕の方を見てもくれなかった。
母さんの視線がだんだんと上に向いていって空を見上げた。僕もつられるように天を見上げる。そこには金色に光る細長い龍がいた。

そういえば今月は龍の月だ。その龍がこちらを見ているような気がした。天高くにいるそれがどれぐらい遠いところにいるのかはわからないけどにらみつけるような目がこの広場をじっと見ていると思えた。

「姉さん！　私よ！　デリアよ！　お願い！　出てきてちょうだい！」

母さんがまるで空の龍に語りかけるように訴える。その声は龍に届いたんだろうか。円の中で何かが変わったように思えた。

僕はその光景を呆然と見つめていた。死体が段々と茶色くなっていく。死体を貪り尽くすように蠢いていた蛆たちが次から次へと茶色い蛹になっていく。やがて腐った肌は蛹で埋め尽くされた。

ピチッという小さな、何かが破れるような音がする。蛹が割れる音だ。まばらに聞こえてきたその音は、だんだんと切れ間がなくなっていって一つの鳴り続ける大きな音になった。

ここまでくると僕にも次にどうなるかはわかった。

蝿だ。

一斉に羽化した蝿が飛びたって広場の対して大きくない空間をまっくろにした。蝿はしばらく飛び回ったあと円の中心、積み上げられた死体の上にあつまると人の形になる。

一目見た僕にはそれが死そのものに思えた。蝿がよせ集まったそれはとてもみにくくて、でも悩ましげに身をくねらせるその姿態から僕は目を離せなくなった。それは真っ黒な蝿の集まりで濃淡のない影のようだったけど、どこか母さんに似ていた。

蝿の羽音が声になって広場を震わせる。そいつは母さんの呼びかけで出てきたようだったけど、母さんの方を見ずに不吉な男の方を見ていた。

「テオバルト！　貴様！　まだ繰り返すというのか！」

蝿は怒っていた。僕はその炎のような怒りに身をすくませたけど、男は何も感じていないようだった。

「出来るまでやる」

なんの話なのか僕にはわからなかったけど、男にとってはそれはあたりまえのことのようだった。

「姉さん、何を怒っているの？　ほらテオ様と私の子、アルよ！　こんなに大きくなったの」

母さんは僕の後ろにやってきてそっと手を僕の両肩に置いて蝿に紹介する。

「何を……何を言っている！　わからないのか？　それは5人目だ！　お前の子なんかじゃない！」

蝿の羽音ではとても人の声には聞こえなかったけど、それでもそこには悲しみがあったような気がした。

「ふふっ、姉さんこそおかしいわ。どこから見ても私とテオ様の子供じゃない。ほら、目元なんてテオ様そっくり！　鼻は私似かしら？　肌は私と同じで、青みがかった艶のある黒よ、これならいずれ氏族の元に帰ってもおかしくなんてないわ！」

僕は母さんを見上げた。母さんは僕に微笑みかける。僕は僕が母さんの本当の子供じゃないなんてことは知っている。だからそんなことは言ってほしくなかった。

「テオバルト！　デリアを解放しろ！」
「成功すれば解放する」
男はまったく動じず、すぐに返事を返した。それ以上何も言う気がないようだった。
蝿が怒りのあまり激しくふるえた。そして僕の方を初めて見た。
蝿で出来たうつろな目が僕を捉える。僕の足が勝手にガタガタとふるえだした。
「どこから攫われて来たかは知らんが……恨むならそこの男を恨むがいい！　死霊の王の力！　くれてやろう！」
蝿が人の形を無くして一気に弾けた。蝿の群れが一斉に僕に襲いかかってきて目の前が真っ暗になる。
何もわからないまま僕は蝿にたかられる。蝿が口の中に入ってくる。鼻に、耳に、目に入ってくる。蝿が身体中を這いまわり、穴という穴から入ってくる。
僕は手を振り回した。立っていられなくなって地面を転がり回った。叫ぼうとして開けた口にはさらに蝿が入ってこようとする。
僕は……。

＊＊＊＊＊

そこで目が覚めた。
アルは一瞬どこにいるのかわからなくなったが、すぐにここがキャシーの家の寝室で昨日と同じく床に寝ているのだと思いだした。
叫んだりはしなかったが、かなりうなされていたようで体中汗まみれになっている。

上体を起こし大きく息を吸って、ゆっくりと吐き出す。さすがにすぐには無理だったが、何度か深呼吸を繰り返すことでなんとか落ち着きを取り戻すことが出来た。

嫌な夢だった。5年ほど前のことだろうか。妙にはっきりとした夢だった。

――テオバルト、どこかで聞いたと思ったがやはりあいつか……。

テオバルトと千柱の悪魔。キャシーに聞いたとき微かに記憶を刺激されたがようやく思い出した。

ならばあの蝿は悪魔で、あれは悪魔契約の儀式だったということか、とアルは思い至る。

――死霊の王か……。この能力はやはりあいつが……。

あの後どうなったのかは覚えていなかった。気がつけばアルは自宅に戻りベッドで寝ていたし、母親もいつものように朦朧とした状態だったのでそんな儀式があったようには思えなかった。

その後しばらくは声が聞こえていた。それは能力のありかたについてアルに何度も質問を繰り返し、辟易しながらもアルはそれに応え続けた。

声が聴こえなくなった時アルは能力を把握していた。

夢の内容がだんだんとぼやけていく。結局何があったのか詳細は思い出せなかったが、テオバルトの名だけはしっかりと心に刻み込んだ。

アルは窓の外を見る。夜明け前だ。わずかに明るくなりつつある。

立ち上がると寝具を畳んで部屋の外へ出た。そのまま廊下を進み裏庭に出る。

今更寝る気になれなかったアルは軽く身体を動かすことにした。旅にでる前は日課のようにしていた練習だ。

裏庭にはゴミの山があったが、真っ直ぐ進めるほどの広さがあればよかった。

呼吸を整えると右足を前に出し腰を落とした。体重は後ろ足に多めにかける。左手は拳を作り甲を下にして前に突き出す。右拳は腰のあたりだ。

フッ、と息を吐きながら左足を前に進め、右拳を左腕の上をこするようにしながら前に打ち出す。左手は同じ勢いで腰まで引いた。拳は縦拳と呼ばれる手の甲が横を向く形だ。

その状態から右手を胸の前を通して回転させ右甲を下にする。最初の構えと逆の形になった。

アルはこの動作を左右交互に続けた。真っ直ぐに進んで行き、庭の端にたどりつくと両手を交差させて頭の上にやり、その状態で振り向いて最初の構えに戻る。このただ振り向くという動作にも意味は込められており、一つの動きで受けや投げとして応用が利くようになっていた。

今度は庭を逆方向に進む。アルは庭の端を何度も往復した。打ち出す度に角度を調整し、体内の感覚に注意を払う。足元から伝わる力が途切れない動きを求めて何度も愚直に型を繰り返す。

汗だくになってきたため少し休もうと、両足をそろえ終了の型を取ろうとしたときアルは視界の端に黒い影を捉えた。

裏庭にやってきた時にはなかったそれが気になり振り向くとそこには黒衣の少女、大魔王がいた。

「懐かしいですね。久しぶりにその動きを見ました」

「なんで毎朝ここにいるんだ？」

アルは大魔王だというのだから敬意を払うべきと最初は思っていたのだが、昨日しばらく一緒に過ごすうちにそんな気はなくなっていた。

「最近はこのあたりが私の朝のお散歩コースです」

そう言いながら大魔王は近づいてくる。

「私のお父さんがその技を得意としていました」

お父さんと言われても面識もないし、そもそも大魔王のことがまだよくわかっていない。

「大魔王の父親というと先代大魔王とか？」

「お父さんは人間ですよ？」

「いや、そんなあたりまえみたいに言われてもこっちは何もしらないんだけど」

「それは独学ですか？」

話しの流れをぶちきって大魔王は次の話題を振ってくる。大魔王は自分がしたい話を勝手にしてくるだけだった。

「本で読んだんだ。それで見よう見まねでやってる」

「それなら大したものですよ。大きな破綻はありませんでした」

「あんたはこの技を知っているのか？」

「知ってはいますよ。ただ習ったことはありません。お父さんは女の子は拳を使うもんじゃないと言って手刀や掌の技しか教えてはくれませんでしたが……盗み見て勝手に覚えました」

大魔王は照れるよう舌を出して言った。アルには今の話しのどこに照れる要素があったのかわからなかったが、大魔王はこういうものだと大体わかってきていたのでそれは気にしないことにした。

「その私から見てあなたの場合は、少し腰を落す事を意識しすぎで

すね。それでは居着いてしまいますよ」

そう言って大魔王は先程アルが行なっていたのと同じ構えを取った。黒いドレスのスカート部分が足元を完全に隠しているためよくわからないが、腰を落とし、左手を前に出し、右手を腰だめにしたその構えはとても様になっている。

アルは自分の構えて比べてどうなのか考えてみたがよくわからなかった。確かに構えだけを見ても佇まいから大魔王が自分の何歩も先にいるのはわかる。

だが自分がどう駄目なのか客観的にわからなかった。

大魔王は考えこむアルを見て微笑を浮かべた。

「では、大サービスです」

そういうと、大魔王はスカートをたくし上げた。すそからくるくると巻きあげていき腰のあたりでうまく挟み込んで固定する。

黒い下着と肉感的な白い太ももとの対照が眩しかった。

「なんで黒なんだ！」

アルは混乱して突っ込みどころを少し間違えた。

「これは闇の下着です。ちなみに私の着ているドレスは闇の衣といいまして、合わせて大魔王の正装らしいです。ふふっ、光の玉があれば闇の衣をはぎとることができますよ。挑戦してみますか？」

「いや、じゃなくて何してんだよ！」

「だから大サービスです」

「いや、サービスなのかも知れないけども！」

「ん？　あぁ、なるほど。なにを考えられたのかはわかりましたが、私のサービスは特別に足元を見せてあげようということです。特に

股関節の角度が重要ですのでよく確認してください」
「えーと、いいのか？」
「はい、近づいてよく見てください」

そう言われると確かに好奇心を刺激されたアルは大魔王の足元に近づき黒い下着を間近で見た。近くで見ると細かな意匠がレースで施されており、薄っすらと素肌が透けて見えている。これ大事なところも見えるんじゃないか？　などと目的を見失いそうになったが、大事なのは股関節の角度だ。だがそれは太ももと股の境目を必然的に見てしまうし、そうなると下着の中心部分も目に入る。
――いや、これで見えても僕が悪いわけじゃ……。

「アアアア、アル君！　なにしてんの！」

裏口の扉の前でネグリジェ姿のリーリアが裏声で叫んでいた。
リーリアは今信じられないものを目の当たりにしている。アルがスカートをたくしあげた大魔王の側にしゃがみ込み下着を凝視しているという、どうしてそうなるのかわからない光景だ。

「大魔王の股間を見ていた」

アルがリーリアの方を振り向いてひどく真面目な顔で答えた。

「なんで！」

見たままの光景をアルが説明した。その通りだがそれはリーリアの求める答えではない。
リーリアは大魔王に早足で近づくとたくしあげられたスカート部分を引っ張り出し元の状態に戻した。

「大魔王さん！　何があったか知りませんけどアル君は多分悪気はないんです！　許してあげてください」
「ちょっと待てリーリア。それじゃ僕が悪いように聞こえるんだが」
「悪い！　どんないきさつがあったって今のはアル君が完全に悪いよ！」
「なんか納得がいかないんだけど」

アルがぶつくさ言いながら立ち上がった。

「おはようございます。お、リーリアさん」
「今おっぱいって言おうとした……」

リーリアが半閉じの目で大魔王を見る。

「えーと大魔王さん。というかですね、お名前はなんとおっしゃるんですか？　自然に大魔王さんと読んでましたが、それもどうかと思ったんですけど」
「私の名前はすごく長いので誰も覚えられないと思うのですが」

そう聞いたリーリアは確か王族なんかはすごく長い名前が付いてたなぁと思いだした。だが、それはそれで別に問題ないはずだ。

「あの、名前が長くても、ファーストネームとか愛称とかあると思うんですが……」

すこし自信がない感じでリーリアが言うと、大魔王は驚いた顔をした。

「あぁ！　名前を聞かれると教えるのが面倒くさいので大魔王と名乗っていたんですが、それでよかったんですね！」

「そんなに嬉しそうにされるほどすごいことを言ったつもりもなかったんですが」

大魔王は満面の笑みを浮かべている。

「そうですね、では。私のファーストネームは、パエリアと言います」

「え？」

リーリアは何かの聞き間違いだろうかと思った。そんな名前の料理があったような。確か海沿いの街の名物料理だったはずだ。

「パエリアさん、ですか？」

「はい。お父さんが付けてくれました」

「その……名前の由来なんかはあるんでしょうか？」

「はい。お父さんが好きな料理の名前です！」

大魔王が溌剌と応える。父親の話題をするのは嬉しそうだった。

――やっぱり……お父さん適当すぎますよ……。

「この街ではパエリアと言う料理を出しているお店はないようでしたのでいつかは食べに行きたいと思っています。どんな料理か楽しみにしているんですよ？」

「そ、そうですか、食べれるといいですね……」

そんな会話をアルは黙って聞いていた。確かに女性の下着を穴が開くように見つめている所を見られたのはバツが悪い。このままそれは忘れてくれないかと思っていた。

「それはさておきアルさんは悪くないのですよ。私が技について教えていたのです」

軌道修正されてしまい、アルは苦々しく思った。

――なんでだ！　この流れならパエリアとかいう料理の話だろう？

「技って？」

「リーリアがたまにやるやつだよ、ほら、膝折ったり、投げ飛ばしたり」

「私はやってないよ！　あれアル君のせいだよ！」

「いやね、僕が練習してたら、大魔王がその技に詳しいっていうから教えてもらってたんだよ」

「だったらなんでパンツ見てるの？」

リーリアが疑いの目でアルを見る。論理が大跳躍しているように思えた。

「立ち方を教えてもらってたんだ。それには股関節の角度とかが重要なんだよ」

「……それ、アル君の立ち方を大魔王さんが見てアドバイスしたらいいんじゃないの？」

「あ！」

「なるほど。そうすると私は下着の見せ損ということですね」

何かを納得した大魔王はぽんと手を打った。

――損とか得とか関係無く、のりのりで見せつけてたくせに……。

「では、損した分はそうですね、ちょっとだけ遊んでもらいましょ

うか」
「あ、遊ぶって？」
リーリアがまた余計な方面に先走る前にアルが遮る。短い付き合いだがこういう場合に、どういう反応を返すかは大体わかっていた。
「それはいいけど、大魔王ってのはすごく強いって聞いた。僕じゃどうしようもないんじゃないか？」
「あぁ、それなら心配いりませんよ。はい。力を抑えました。これで私はそこらの町娘と同様の力しか持ちあわせていない状態です。ふふっ、私を押し倒してしまうチャンスですよ？　どこからでもかかって来てください」
――なんでパエリアさんはアル君に対してこう、挑発的なんだろう……。
アルは大魔王を戦うつもりで観た。普通に立っている。隙だらけだ。どこに打ち込んでもあたりそうな気がする。ならとりあえず攻撃してみる。
そう決めたアルは先程まで練習していた技を繰り出していた。左足を踏み込み右拳を突き出す。
大魔王はその拳が伸びきる前に動いていた。左の手刀がアルの手首に上から軽く落とされる。ただの手刀がからみつくようにくっついて拳の起動をそらした。大魔王は一歩前進しアルの空いた胸に右掌を軽く当てた。同時に大魔王の右足はアルの左足首の後ろに回り込んでいる。勝負としてはここで終わりだ。
「飛んでみましょうか」
そういうと大魔王は胸に当てていた右掌を下に滑らした。そのま

まアルの足の間に右手を挿しれると全身を使って右手を振り上げた。
アルの身体がふわりと浮く。そう大した勢いでもないがそれでも空中にいる間は身動きがとれない。泡を食っている間にアルはゴミの山に突っ込んでいた。

「えぇ!?　ちょっと待ってください！　さっき普通の女の子の力だって言ってませんでしたか？」

リーリアが疑問を呈した。普通の女の子だというなら自分が正にそうだと思っているが、あんなことが出来るとはとても思えない。

「そうですよ。今のは技ですね。うまく身体を使うことで今の程度の力は発揮できます」

アルがゴミの山から出てきた。そうダメージはない。軽く浮かされただけだった。

「私への攻撃で今の選択は間違ってはいません。どうするか迷ったならまず一番自信のある技で挑むべきです」
「でも簡単に逸らされ懐に入られた」

実力差があるとはわかっていたがここまで簡単にあしらわれるとは思っていなかった。アルは少し悔しそうだ。

「それは練度の問題ですね。ちゃんと習得すれば今ぐらいの邪魔は無視して攻撃を入れる事ができます。あの技の特徴は愚直なまでの直進性です。ちょっとやそっとで逸らされるようなもんじゃ本来ないですよ？」
「どうすればいいんだ？」
「型の反復練習しかないでしょう。完全な型があるとして、それに

いかに近づけるかがポイントです。それさえ出来るなら他の技は一切必要ないとすらいえますよ。私のお父さんなんかはいろいろな技を習得していましたが、ほとんどこの技で片付けていました。まぁ普通はそれができないから様々な技があり、それを連携し、晦まして、不意を討つわけです。ですが私のお薦めはやはり一つの技を中心に極めることですね。極めるとはいかなくてもこれという技が一つあれば、他の技もそれなりに出来るようになっていきますよ」

「なるほど、勉強になったよ」

武術の本は繰り返しすり切れるほど読み頭に入れてある。自分でも何度も繰り返し様々な技を練習していた。だが自分の身体をイメージ通りに動かすのは難しい。その為伝統ある武術の独習はまず無理だ。師による外から見た矯正が必要になる。

それが、リーリアを外から見ながら操作することでうまく噛みあってしまった。自分のイメージしたとおりに自分の身体を動かすのは難しいが、自分のイメージしたとおりに他者を直接動かし、外部からの視点で動作を修正しイメージにあわせる。これがリーリアの強さの根底にあった。

だが、これでは常にリーリアを戦わせることになってしまうし、それはアルの本意ではなかった。自分自身がもっと強くなる必要があると決意を新たにする。

「……リーリアにもさっきの技の型を教えてやってくれないか？」

アルがしばらく考えた後に大魔王に教えをこう。

「え？　なんで？」

「もちろん、僕も教えてもらうよ。でも、やはり外からどんな姿勢になっているのか確認するのも重要だ。大魔王を見てて文句言われるなら、リーリアならいいだろう？」

「なんで私ならいいの！」

リーリアが文句を言っている間に、大魔王はいつのまにかリーリアの後ろの回りこんで腰を両手で掴んでいた。

「左足を一歩前に出してください」

「え？」

リーリアは少し考えて言われたとおりに足を前に出した。先ほどの光景は衝撃的だった。いくらなんでも女性の股間にあれほど顔を近づけるというのはありえない。しかも話を聞いてみれば大魔王が自らあの状況に持っていったと言う。また同じことになるんじゃないかと思うと、ただ断るのも躊躇われた。

大魔王は掴んだ腰を下に押し下げ落とさせる。右足を外側に捻り、腕の角度を調整した。随分と窮屈な姿勢だった。

「こんなところでしょうか。では最初の話しの続きなんですが、ここです。後ろ足の付け根。腰を落としているつもりでもこの部分の折りたたみが甘くなっていますね。これでは後ろ足をつっぱらせて体重を支えているだけですので移動に制限が出てしまいます。体重は全体の構造で支えて分散させる必要があります」

大魔王とアルはしゃがみ込みリーリアの股関節を注視している。ネグリジェはかなり透けているため大魔王のようにたくしあげる必要はなかったが、リーリアは顔を真っ赤にしてうつむいた。下着も透けているのだが、ネグリジェの上から見ると重なりあってモアレ状になり微妙に陰影がわかるかどうかという程度になっている。

――あ、あれ？　私、朝起きたらアル君がいないから探しに来ただけだったのになんでこんなことしてるんだろう？

「お前ら何やってるんだ？」

キャシーが裏口の扉にもたれかかり腕を組みながら、呆れたように言った。

朝食の準備が出来たと言いに来たのだが、そこにあったのは妙な態勢でぷるぷると震えるリーリアの下半身を見つめ続ける二人の男女が、股間を指さしながらうなずいたりしている姿だ。しかも一方はこの国の最高権力者である所の大魔王。

どんなプレイだと呆れるのも無理はなかったがそういうキャシーも扇情的な寝間着姿だったので、裏庭のゴミの山と４人を合わせて傍から見るとますますよくわからない光景と化していた。

＊＊＊＊＊

中天を少し過ぎた陽が照らす中、ガタガタと妙な震えかたをする馬車が走っている。大型の屋根の付いた馬車だ。２頭のこれも大型の分厚い筋肉に覆われた力強い馬に牽引されている。

第３魔族領と首都ベイヤー間には大して重要な土地もなく道はあまり整備されていないが、それでもある程度踏み固められ道として機能しているためそうひどい状態でもない。もっとも馬車などは元々揺れるものだが、それでもこの馬車の状態は異常だった。

４輪のうち右前方の車輪が歪んでおり一回転する間にかなりの上下動がある。それに加えて左後方には車輪そのものが無かった。そこは妙な生き物が支えている。

蟇蛙だ。大人が一抱えに出来るかどうかとういうサイズの大型の蛙が馬車を支えていた。それは馬車とどう結合しているものか、半ば引きずられており、時折思い出したように低く跳ねる。それもこ

の馬車の妙な挙動に一役買っていた。何をどう考えればこのような利用法を考えるのかはわからないが狂気の沙汰としか思えない。

馬車はボロボロで今直ぐにでも瓦解しそうだった。

近くで見るとボロボロなのは馬車だけではなく、御者や肝心の馬もそうであることがわかる。

体中に穴を開けた御者が、腐肉と血を滴らせる馬に機械的に鞭をくれている。打たれる度にどす黒い血と肉片が撒き散っていた。

とても生きているようには見えない。事実彼らは動く死体でしかなかった。生前に行なっていた動作を馬鹿みたいに繰り返している。御者は鞭を打ち続け、馬は前へと駆け続けた。

それは馬車の中でもそうだ。眼窩から眼球を溢れ落とした商人が、計数器を何度も操作する。傭兵と思しき戦士は欠けた身体で無様に剣を振り回していた。おかげで馬車の中は無残なものだ。商人の扱う商品だったものか、荷箱や粉類の入った袋などが切り刻まれ内容物を散乱させている。

だがそれを咎めるものは誰もいない。激しく揺れる馬車の中で死者による奇妙な踊りは延々と繰り返されていた。

「テオバルト様。馬車はもう限界です。後1時間も持たないかと」

動き続ける死体から少し離れた席にまだ幼い少女とテオバルトと呼ばれた男が座ったいた。

「構わん。首都にはもう着く」

テオバルトは言葉少なに答えた。彼らは魔族領からベイヤーへと向かうため、たまたま目についた馬車を奪い取りこうやって利用している。

魔法による安全な高速移動の手段というのは案外少ないためだ。

それは悪魔が提供する能力のほとんどが攻撃的なものだからに他

ならない。悪魔がどういった思惑で人間に力を与えているのかは定かではないが、ほとんどが破壊や殺戮のための力をさずける。
そのため高速で物体を移動させること自体は出来ても、安全性には疑問が残る。高速で物を飛ばすとしてもそれは攻撃の手段だ。自らを砲弾にしても待ち受ける運命は自滅しかない。
空間跳躍と行った高度な魔法もあるにはあるが、これは通常の物理的手段では再現出来ず奇跡と呼ばれる部類に入る。そう簡単に使えるものではなかった。

「見えてきたようです」

馬車の行く先に一際高い塔がいくつか見えてきた。城壁都市であるベイヤーの城壁に等間隔で配置されている監視塔だ。
少女の発言と同時に馬車ががくんと一気に傾いた。蟇蛙がとうとう耐えられなくなってへしゃげて潰れ、負担の増えた左前方の車輪もはじけ飛んだからだ。
馬車の胴体が斜めになり地面を削る。一気に負荷が増えたため馬車はみるみるうちに速度を落としていった。

「これではすぐに馬がつぶれてしまいますが？」

斜めになった車内で少女は平然と言った。そこには蟇蛙を支えに使うなどという発想に対する疑問ものせられている。
テオバルトは少女の言葉に杖で殴りつけることで答えた。適当に振り抜いた杖が少女の頬を打つ。

「お前が支えろ」

少女は切れた口の端を拭い、何も答えずに馬車から飛び降りた。
馬車に並走し車体に近づくと軽々と馬車を持ち上げそのまま支え

る。

持ち直した馬車はそのまま走り続けた。

首都までは後わずかの距離だ。少女の見据える先には街道の交差する辻が見えた。そこにはこれから夕方までになんとか首都に辿り着こうとする人々が集まって来ていた。

9話　買い物（前書き）

すいません、なんとか週一ぐらいで更新したいと思って無理やり間に合わせた感じもあります。あまり推敲出来てない状態なので細かい部分は治すかもしれません。

9話　買い物

「大型ごみの廃棄許可を取ってくるが君たちはどうする？」

朝の食卓でキャシーがアル達に聞いてきた。

大魔王はひとしきりアル達に技を教えたら満足したのか、散歩の続きに出かけたので既にここにはいない。

「そうですね。一旦裏庭のゴミを捨ててしまわないと、これ以上掃除も出来ませんし……とりあえずうちの中でやれるだけやってまとめておくというぐらいでしょうか？」

「まぁそうだが別にそんなに焦らなくてもいい。昼には帰ってくるからそれまでは街にでも遊びに行くというのはどうだ？」

「それいいよ！　こないだは格好ばかり気になってろくに街なんて見れなかったから！」

リーリアは乗り気だったが、アルは若干顔をしかめた。

「その格好ならいいのか？　ボロ布を着てるような状態よりはましだとは思うけど」

そういってリーリアを見る。リーリアはキャシーから貸してもらった胸元の大きく開いた真っ赤なドレスを来ていた。街に出れば注目の的だろう。

「うぅ、これはこれで……嫌かも……」

リーリアはキャシーを恨めしそうに見た。

――なんでこんな挑発的な服しか持ってないんだろう。

「でだ、2日分の給金を先に渡しておこう。リーリアはどうも私の服が気に入らないようだからな。二人で4万リル。服を買うぐらいならなんとかなるだろう？」
「いいんですか？」
とアル。まだ1日しか働いていない。金だけ持って逃げるつもりはないが、先にもらってしまうのも気が引ける。
「いいよ。別に。全部やってもらおうと思うとまだまだかかりそうだしな。後か先かだけの話だ」
そういってキャシーは胸元から財布を取り出した。
「なんでそこから出てくるんですか！」
「リーリアちゃんもやってみるといい。そこらの親父ならほいほい負けてくれるぞ？　ポイントは見えそうで見えない感じだな。相手が乗り出すようにしてきたらまず成功だ」
キャシーは財布から紙幣を4枚取り出すとアルに手渡したが、渡されたアルは戸惑った。
「ん？　どうした？」
「いえ……お金を見るのが初めてだったもので。こういったものだったんですね」
アルの知識は殆どが本で得たものだ。お金と言われて想像するのは絵本か何かで見た、宝箱からあふれるような金貨の山だった。
「あぁ、それは1万リル紙幣だ。他には5千リル紙幣や、2千リル

紙幣なんてのもあるな」
「これただの紙切れじゃないんですか？」
アルが疑うように言う。こんな紙に価値があると言われても俄には信じがたい。
「そうだな、それを窓の外、明るい所に向けてみてくれ。何か見えないか？」
言われたようにしてみた。すると紙幣の中央部分の空白に薄っすらと人の顔が見える。
「これは……」
「透かしだよ。そんな感じで明かりに透かしてみると模様が浮かぶ。それは今の王様の顔だな。というわけでそれはただの紙ってわけでもない。簡単に偽造されないようにそんな仕組みが施してあるんだな。ちなみにその透かしの技術は非公開でな、作り方を漏らしたり勝手に透かしを入れた紙を作ったりすれば極刑になる」
「あの……金貨とか銀貨とかは使わないんですか？」
「あぁ、一応流通はしているんだがな、都市部では紙幣が多いな。田舎では、今のアル君のような気持ちの人が多いのかな、紙幣は信用されないことが多いが」
田舎者扱いは少々癪に感じはしたが、アルは納得するとズタ袋に紙幣をしまい込んだ。
「他にも細かい単位の硬貨なんかがあるんだが、その辺は実際に買い物するときにでもリーリアちゃんに聞いてくれ」
「わかりました」
「買い物ならまかせておいて！　これでも商人の娘だからね！」

リーリアが豊かな胸を張り自慢気に言う。それをアルは不安気に見つめた。

「あーそうそう、リーリアちゃん。値段を聞かれたらはっきりと断るんだぞ」

キャシーが思い出したように言う。

「キャシーさん……やっぱりこの格好はそーゆー風に見えるんですね……」

リーリアがじろりとキャシーを睨む。キャシーはとぼけるようにアルに声をかけた。

「いや、格好もそうだがこの場合問題は中身だろう？　なあアル君？」

「そうなんですかね」

「いやいや……ちょっと前から思っていたんだが蛋白が過ぎないか？　女の私から見てもリーリアはなんかすごいぞ。これまで二人きりだったんだろう？　どうにかしてやろうとは思わなかったのか？」

「まさか、そんなこと思わないですよ」

そう言われてリーリアは少し心が沈んだ。確かにアルからは、大抵の男から受けるような邪な視線を感じることはなかった。だからと言って邪険に扱われたわけでもなく十分優しく紳士的でもあった。だが、こうまで女として無視されているような状況はどうだろうかとも思う。自分でもそれなりに可愛い方だとは自負していたので全く相手にされていないというは、やはり自分が死んでいるというのが原因なんだろうかと漠然と不安になる。

「どうした？　具合でも悪いのか？」

物思いに耽っていたリーリアが視線を上げると、目の前に心配そうに見ているアルの顔がある。

「ううん、大丈夫。なんでもないよ」

「キャシーさん、せめて上に何か羽織るものでもないですか？」

アルが気を回してキャシーに求める。キャシーも少しからかい過ぎたと思ったのか素直に羽織れるものを持ってきた。黒い薄手のストールだ。

「キャシーさん、一応これも借りますけど、あんまり変わらないような気もします……」

リーリアは早速羽織ってみた。胸元のあたりが隠れるように軽く結ぶ。だが結局はその見えない部分をなんとか見てみたいと思わせる演出にしかなっていなかった。

＊＊＊＊＊

アルとリーリアはまず広場に向かうことにした。キャシーに服屋などいくつかの店の地図を書いてもらったのだが、どこに行くにしてもまず街の中心である広場に行くのが早い。

この街は大雑把に言うと中心を南東にずらした3重の同心円状になっている。一番外側に城壁がありその周りを川を利用して作られた水堀が囲んでいる。

そのすぐ内側にもう一つ城壁があり、次は街の中心部から少し南東にいった丘の上の王城でその周りも城壁と掘に囲まれている。
広場は街の中心にあり、ここから大通りが放射状に伸びて各城門につながっている。広場は普段は街の憩いの場として、時には大規模な宗教儀式や公開処刑などにも使われることがあった。

「僕は魔法使いに付いては大体わかったから、この街には特に用はなくなったんだけど、リーリアは何かあるか？」

アルが広場へと歩きながらリーリアに話しかける。

「私も特にはないよ」
「じゃあこの後どうする？　リーリアの住んでた街へ行く？　どこにあるんだっけ？」
「ここからだと、さらに東。そんなに遠くないよ。駅馬車で半日ってところかな」
「駅馬車って？」
「街の間を行ったり来たりしてる馬車。一人５千リルぐらいかな」
「結構するんだな、いや、それが妥当かはわかんないんだけどね。なんとなく」
「どうなんだろ、護衛の人とかもいて、盗賊とか魔獣とかから守ってくれたりとかもあるんだけど」
「街に帰ったらリーリアはどうするんだ？　勇者の従者はもう無理だろう？　侍女をやってたんだったらそれをまたやるの？」
「……侍女ってあんまりやってないんだよね……」

リーリアは少し言い淀んだ。アルは訝しげな様子でリーリアを見る。

「え？　前に、侍女だ！　って自慢してなかったか？」

「あはは、実は実家で侍女ってことにしてただけだったり……。結構あるの、１４歳で職につかないといけないからそういうことにしておくってのが。一応花嫁修業ってことで家の手伝いみたいなことしてただけで……」

「実家に帰ってそれをまたするの？」

「多分。でも、もう家を出してもらえなくなるかも。勇者の従者になるってのも結構反対されてたのを無理に押し切るような形で出ていったから……。あ、アル君はどうするの？　魔法使いになりたいって言ってたんだから魔法で何かしたかったんでしょ？」

「魔法使いの師匠を探すって言っても漠然としすぎてどうしようもないし、しばらくはリーリアの街にでも住むよ、日雇いの仕事でもしながらね。僕の目的は焦るようなものじゃない」

「私のお父さん交易やってる商人だし顔も広いからどこかで魔法使いの話を聞いてるかもしれないよ。家に帰ったらちょっと相談してみる！」

「うん、なんの当てもないからね。お願いするよ」

大通りを歩いているため元々賑やかではあったが、広場に行くにつれさらに騒々しくなっていく。

派手な格好をした美少女のリーリアはもちろん注目を浴びているのだが、不安感よりもアルが隣にいることによる安心感が勝っていたためあまり不快に感じることはなかった。

アルは殺意にも似た嫉妬と羨望の入り混じった視線を受けていたが、いつも通りだ。全く動じる所がない。

広場は円形の広大な空間で中心には噴水があったのだが今は修復中だ。噴水以外も大魔王との戦闘でひどい有様だったがほぼ修復は終わっていた。

その修復中の噴水のあたりに人だかりが出来ていた。何かを大勢の観客が取り巻いている様子だ。

「アル君、あれなんだろう」
「気になるならちょっと見ていこう」

二人は人だかりを押しのけ中が見える所まで進んだ。アルはなんとなくそんな気がしていたので見た瞬間ため息がもれた。そこに居たのは大魔王だった。

大魔王はぼーっとつったっており、その隣には男が二人両膝をついて座っている。いわゆる正座なのだが、リーリアにはそれが拷問でも受けているかのように見えた。その二人の対面には職人のような格好の男が仁王立ちしている。

「アル君！」
「どうした？　知り合いか？」
「勇者様……フォグ様とアイゼン様だよ！」
「あれがか？」

アルの目からみてそれは随分と情けない姿に映った。両膝を付き、両手は膝に置いてうつむいている。先程から、正面の男に罵倒されていた。

「で、あっちの怒ってる人がドレイクさん。私の住んでる街で有名な芸術家さん」
「なんで怒られてるんだ？　……まぁリーリアに聞いてもしょうがないか」
「うん。わかんない」

様子を見るにこの噴水を壊したのがこの二人だということらしい。

「おい、聞いてんのか！　お前らが壊したこれはな！　三人の女神が柱となって天盤と呼ばれるこの、俺達の世界、大地を支えている

姿を表したもんだ！　俺様の一大傑作よ！　それをだな壊したってことは、えぇ！　世界全体を壊したにも等しいってことだよ！　わかってんのか！」

この広場にあった噴水は一般的な、中心部から水が吹き上がるものではない。柱に支えられた大きな円盤が上にあり、その円盤の縁から水が流れ落ちてくるというものだった。

この円盤が大地で、円盤の端が世界の果て、水が海を表していた。勇者たちは黙って耐えている。壊したのには大魔王も関わっていた気もするが責任の一端は確かにあるため言い返すことが出来ない。

「三人の女神という方はいませんでしたよ」

「あぁ？」

大魔王が空気をよまずに口を挟んだ。

「天盤の下を見たことはありますが女神という方はいませんでした。天盤は天軸という柱が貫いているんですよ。ですので天盤の上も下もあるのは天軸です」

ドレイクは大魔王のホラとは思えない妙な自身に満ちあふれた発言に気圧された。ここまで真っ向から見たと言われてしまえば反論できない。

「おめぇ、見たってどういうことよ、どうやって天盤の下に行くってんだ？」

「天軸の周りは巨大な穴になっているのです。その穴を落ちてもいいですし、天軸は内部が空洞になっていて出入りできまして、中には昇降施設がありますのでそれを使えば簡単に行けますよ」

「天軸ってどこにあんのよ？」

「中央大陸の真ん中ですね。ここからでは遠すぎてその姿を確認出来ませんが、近づけばすぐわかりますよ」

話がすっかりそれてしまった。世界の真の姿という話題は、芸術家としての好奇心を疼かせたようだ。

見向きもされなくなった勇者たちはこっそりと立ち上がり人の輪を抜けだそうとしている。

「なぁ、リーリア。憧れてる勇者ってのはあいつだろ？　いいのか？　今なら話しかけたり出来るんじゃないか？」

「え、いいよ別に」

アルが思ったより、リーリアの態度はそっけないものだった。

「直接声をかけるのが恥ずかしいなら僕が呼んできてやるよ」

アルはリーリアがかなり遠回りな方法で勇者に近づこうとしていたのを思い出す。それをまどろっこしく感じていたので、ここは一つ協力してやろうと思った。

「いいって！　もう行こう！　早く買い物して帰らないと、キャシーさん戻ってきちゃうよ！」

リーリアは慌てて、今にも勇者に声をかけに行きそうなアルの手を取り人ごみを抜けだした。

アルはリーリアに黙って従った。少し怒っているようにも見えたし、ただの照れ隠しなのかもしれないとも思ったアルは無理強いするのはやめておいた。

リーリアは店につくまでその手を掴んだままだった。

＊＊＊＊＊

その店は古着を中心に扱う古物商といった店だった。そう大きくもない店内には古着が山のように積まれている。店主が面倒くさがりなのかはわからないが、この店では商品の品質は関係なく重量で価格が決められていた。

どこで仕入れてきたのか、汚れたままのものがほとんどだ。洗濯をするのも面倒らしい。だが玉石混交とはこのことで、中には掘り出し物もあるようだった。

アルは様々な商品があふれる店内を物色し、比較的ましな状態の麻で出来た上下と、靴、マントなどを選んだ。次の街までは馬車で移動すると決めていたが、何があるか分からないので予備も考えてそれぞれ何着か余分に籠に入れる。

「アル君、マントなんているの？」

「便利じゃないか？　ここに来るまでだけでもそう思うことはあったじゃないか。厚手のマントなら毛布がわりにもなるだろう？」

「別に次の街まですぐだから、野宿とか考えなくてもいいと思うけど？」

「近いって言っても街の外に出るんだ。魔獣が出ることもあるって話だろ？」

魔獣は基本的には彼らにとって居心地のいい魔族領から出てくることをあまりない。だが、人肉を好む類の魔獣は越境してやってくるものも多かった。

それ以外にも旅の危険としては、盗賊や、野族の襲撃もある。

アルは自分たちだけならなんとか逃げ延びることも可能だと思っているが、そうなるとやはり徒歩で移動するはめになることもある。

そういった可能性を考えるとあまり呑気にしているのもどうかと考えていた。

「リーリアはそれでいいの？」

リーリアの手には服の山をひっくり返してひっぱり出してきた女物の服が1着だけあった。

「アル君は適当すぎると思う」

「別にそこそこ丈夫そうであまり汚れてなかったらなんでもいいよ」

「試着もしないの？」

「大体サイズがあってるならいいよ」

「そう、じゃ私はこれを試着してくる」

そう言うとリーリアは一室しかない試着室へと入っていった。

アルは服以外にも、古くなったズタ袋の代わりになるような大きめの鞄も探して籠に入れる。

「なあ、にいちゃんよ」

「はい？」

店主がアルに声をかけてきた。だらしない感じの服装に、無精髭、髪も整っていない小太りの中年だ。この店の店主として相応しいとも言える。

「あの子は貴族か？」

「いえ、そんなことはないですがなにか？」

「いや、あの子に似合いそうなもんはうちにはないんじゃねーかと思ってよ、もっといいもん買ってやったらどうだ？」

「そう言われましてもね、お金ないですし。その、そんなに目立っ

てましたか？」
「あぁ、いや。こんな店に来るような子じゃなさそうだったからな、びっくりしちまっただけだよ。ま、せいぜいましなもんでも探してくれ」
店主はそう言うと奥に引っ込む。変わりにリーリアが試着室から出てきた。
ゆったりとした白いワンピースを着ている。
「どう？」
「リーリア、僕が言うのもなんだけど、ずいぶんとやぼったくないか？」
身体のサイズに全くあっていないぶかぶかの服に見えた。身体のラインが出ないことを優先したのだろう。
「い、いいの！　これで！　これぐらいで丁度いいの！　……えっと……アル君はさっきのみたいな方がよかったの？」
最初は威勢がよかったが、段々自信がなくなってきたようだった。上目遣いにアルを見る。
先ほどまでの身体にフィットし胸元の開いたドレスがよほどいやだったのか、反動でこんな服を選んだとアルは解釈した。
――まぁ、本人がいいって言ってるならそれでいいか。
「いや、別にそれでいいんじゃないか」
「そ、そう……」
なんだか元気がなくなったようにも見えた。
他にも似たようなサイズの女物の服を選び会計を済ませる。全部

で１０ｋｇほどになった。１ｋｇが千リルという価格付けだったので１万リルを支払う。

リーリアは先ほどのワンピースにその場で着替えて帰ることにした。他にも深めの麦わら帽子を被りあまり顔が目立たないようにもする。

アルも同じく着替えた。麻のシャツとズボンだ。これで街の住民と比較しても違和感はなくなった。貫頭衣を着ているような人間はあまり見かけなかったので、アルもそれなりに目立っていることは自覚していた。

当初の目的は達成出来たので二人はキャシーの家に帰ることにし広場を目指して歩き始めた。

「後は食料品……は旅にでる前でいいか」
「なんか慎重だよね。馬車で半日だって言ってるのに」
「あって困るもんでもないだろ」
「で、また乾し肉なの？　もう本当に飽きたんだけど」

リーリアが憎々しげに言う。心底嫌になったらしい。

「すぐ齧れるから楽だと思うんだけどな。保存食って他になにかある？」
「ドライフルーツとかいいよ！」
「それはお菓子だろ？」
「えぇ！　いいと思うけどなぁ。他だと、豆煎餅とか？　豆を押しつぶして固めたやつなんだけど結構おいしいよ」

そんなたわいない会話をしながら広場を通りかかる。先ほどの人だかりはすでになく、ドレイクにこき使われている勇者たちの姿がそこにはあった。

＊＊＊＊＊

首都ベイヤーには主要な門が7つある。それは街の中心の広場から、大通りが放射状に伸び城壁に至る部分に存在する。8方位に対応した名称がついているのだが、南東門は存在しない。広場から南東に進むと王城があるためだ。

この門のうち北側だけは他のものと比べて少々特殊な位置づけとなってしまっていた。北門の外側にはバラックが立ち並び、瓦礫とゴミと糞尿が散乱している。スラム街と化していた。

本来この国ではこのような状況はありえないことだった。マテウ国は他の国と比べても特にレガリアの恩恵が大きい。気象の完全制御により旱魃は発生しないし、大規模な自然災害も起こらない。そのため農業による食料生産はかなりの規模で安定しており、国全体がとても裕福な状態だ。

どんな仕事でもよければ働く口はあるし、例え働けないとしても社会保障、福祉が充実しているためある程度の保証は受けられる。

だがスラムは発生する。住人がこのような環境に甘んじる理由は様々だ。難民もいれば、ただまっとうな社会生活に背を向けた者、業病により街中にいられなくなった者、ここで産まれ育ったため外の世界を知らない者。

生活環境があまりに異なるため今更単純に街へと受け入れることも出来なくなっている。この国が抱える大きな問題の一つだった。

そんなスラムの中をアルはゴミを山積みにした台車を引きながら歩いていた。リーリアはいない。北門の詰所で廃棄許可証を示し通行しようとした際に女が行くのは危険だと諭されたためだ。リーリアは詰所でアルが戻るまで待機することとなった。

迷うことなくまっすぐと進むアルをみすぼらしい格好のスラムの住人が遠巻きに見ている。

アルの行く先には大きな穴があった。この街がここに出来るまえからあるという巨大な穴だ。底なしというわけではないが、覗き込んでもあまりに深くその全貌を知ることは出来ない。

この穴の中心には塔が立っている。塔の最上部には入り口があり、不安定で心もとない吊り橋がかけられていた。

この塔は古代の遺跡とされているが踏破したものはいないため、なんの為の施設かは判明していない。ただ勇者の武具がここから発見されているため神域の類と思われていた。

特に侵入は制限されていないため命知らずの冒険者がたまに挑むことはあるがほとんどは戻ってこない。生きて聖なる武具を持ち帰れるものこそが勇者ということなのだろう。

アルは穴の縁まで進むと台車を傾けゴミをばら撒いた。危ないのであまり近づかずに周辺に置いていけばいいと言われていた。

引き返すアルの後ろでは、スラムの住人たちによる争奪戦が始まっている。彼らがどうにかするのでこの様な段取りになっている。必要なものを奪った後はいらないものは穴の底へと蹴落とすのだろう。

本来神域と目されていた塔の周囲をごみ処理施設として利用しようとしたのは、数代前の国王だという。街の発展と共にふくれ上がっていくゴミの処理方法として塔の周囲の穴に目を付けた。今のところこの穴があふれるような自体には至っていないが、それも時間の問題だろう。それは次代への課題として後回しにされていた。

アルは背後の様子にはまったく目もくれなかった。この程度の距離なら問題ないとはわかってはいたが、リーリアと離れたことには不安を覚える。軽くなった台車を足早に引いていた。

＊＊＊＊＊

リーリアは詰所でお茶を飲んでいた。
北側の門は周囲の状況からゴミ処理場への通用門としてしか利用されておらず、検問所としては機能していない。通行税の徴収も行なっておらず基本的には暇な部署だった。
リーリアの前にはお菓子が山積みになっている。お茶うけとして出されたものだが少し張り切り過ぎなんじゃないかとリーリアは思っていた。
テーブルの対面には暇そうにしているまだ若い門番が鼻の下を伸ばしてリーリアを見つめている。

――アル君早く戻ってこないかなぁ。

当初はついていくつもりだったが、女が行くのは危ないと言われたためここで待機している。こんなことならキャシー宅で待っていればよかったのだが、そうなるとアルの能力の有効範囲に不安が出てくる。結局最大限近い位置にいるしかなかった。

「ねぇ、さっきの彼氏？」
「え、ち、違いますよ。仕事仲間です。そんなんじゃないです」

急に振られた話に慌てて返事を返す。リーリアとしてはあまり話をしたくはなかったが、一応もてなされているような状況なのであまり無下な態度も取れない。

「へぇ、じゃあ俺でも可能性あるかなぁ」

門番の男はあからさまな笑みを浮かべていた。下心しか感じられない。

「あのう、すいません」

リーリアがどう対処したらいいのか悩んでいると詰所の入り口から声がかけられた。

「あ、ほら！　お客さんですよ！」

リーリアは助かったとばかりに門番に促す。門番は隠そうともせずに舌打ちをし、立ち上がると応対に出た。

「なんすか？　ゴミ捨てに来たんなら許可証いりますよ？　持ってます？」

――その対応は公務員としてどうなんだろう……。

リーリアは入り口の二人を見た。やってきたのは若い男だった。中肉中背で取り立てて特徴がない、３日もすれば忘れるような印象の男だ。

「あぁ、違うんですよ」

と言う男とリーリアは目があった。

「そちらの彼女に用事が。依頼主の方からなんですが」

「え？」

リーリアは目を丸くした。まさかここで自分が呼ばれるとは思っていなかった。自分を指さしながら、

「私ですか？」

と問いかける。

「はい」

「えーと、依頼主というとキャシーさんですか？」

「はい、キャシーさんが言い忘れたことがあるので伝えて欲しいと」

リーリアはなんだろうと思いながら立ち上がり男の元へと近づいた。

「なんでしょうか？」

「あー、ここじゃちょっと……外で話せませんか？」

と男は門番の方を見る。何か言いづらそうにしていた。

「わかりました」

リーリアは門番にちょっと出てきますね、と言って男の後をついて詰所を出た。

――キャシーさんが言い忘れたことってなんだろう？　もしかして捨てちゃいけないものでも混ざってたのかな？

男はゆっくりとリーリアの前を歩いている。しばらくして、門からは少し離れた建物の隙間に入っていった。

リーリアも特に疑問にも思わずついていく。男があまりにも人畜無害に見えたせいもあった。

少し薄暗い路地だ。人通りはない。ここにいたってリーリアは若干の不安を覚えた。

「あの……それで何でしょうか。アル君にも関係あるなら戻って来

てからでも……」

最後まで言い終えることは出来なかった。後ろから何者かに抱きすくめられ何かが口元にあてがわれる。リーリアは一瞬で気を失っていた。

「お疲れ様です」

特徴のない男が、やはり特徴のない口調でリーリアの背後の男に声をかけた。

背後の男が口元に当てていた布切れをしまい、リーリアを石畳に横たえる。

「随分と簡単にいったな」

こちらの男は頬に傷のある見るからにチンピラといった風情の男だった。

「素直な娘ですね。まるで疑われていませんでした」

「で、どうよ、こいつは？」

「えぇかなりの上物ですね。高く売れるでしょう」

「あぁ、さっきちょっと触ったんだがたまんねーな、特にこの……」

とリーリアの胸に手を伸ばす。触れる直前、男は殴り飛ばされていた。壁に激突してずるずると腰を落とす。

「あなたは馬鹿ですか？　仕入れたばかりの商品に手を出す商人がどこの世界にいるというんです？」

「てめぇ！」

足腰の立たなくなった状態でいきがった所で何ほどのこともない。
特徴のない男はさらに蹴り飛ばした。

「最近は軍の質も落ちてきたんでしょうか。あなたに取ってこれは軍事行動の一巻で、私はその上官にあたるのですよ？　任務遂行の障害になるなら……」
「わかった、余計なことはしない」

特に脅そうとはせず淡々と事実を述べただけだという風だったがそれが、逆に男を怯えさせた。

「では商品の箱詰めと行きましょう」

二人の男はリーリアを、用意してあった木箱に入れた。木箱は予め台車にのせてある。

「ではあなたはその木箱を隠れ家に運んでください。私はあと二人ほど目星をつけている少女がいますので、尾行して行動パターンの把握に務めます。今回のノルマはそれで達成出来るでしょう。わかっているとは思いますが……」

特徴のない男はチンピラ風の男を静かに見つめた。

「あ、あぁわかってるよ。もう手は出さねぇ」
「そうですか。ならいいです。行ってください」

二人はそれぞれの目的のため速やかにその場を離れた。
寂しげな裏路地にはなんの痕跡も残ってはいなかった。

１０話　嵐

馬鹿過ぎる。リーリアはどん底まで落ち込んでいた。なんだってのこのこと見知らぬ人物について行ったのだろう。

それにまんまと誘導されていたことにも気づいた。あの男は依頼主と言った。キャシーの名を出したのは自分だ。相手はそこから話を合わせてきた。ということは、何らかの仕事で門までやってきたことぐらいしか知らず適当に鎌をかけてきたということだ。

路地に入った途端後ろから誰かに抱きつかれ、変な匂いのする布を口にあてがわれたと思うと意識がなくなった。そして気づいた時にはここで横たわっていた。

周囲は薄暗く周りの様子はあまりよく分からない。

同じように連れてこられたのか数人の少女がめそめそと泣いていた。あまり大声で泣くと見張りの男が大声でがなりたてるため皆、涙を押し殺している。

目の前には鉄格子があった。牢屋の類だろう。気を失ってからどれぐらい経ったのかはよく分からない。ここには窓がないため昼なのか夜なのかもわからなかった。

幸いそう遠くへ連れてこられたわけではなさそうだ。それはリーリアにだけはわかることだった。今生きているということはアルとそう離れているわけではないということだ。建物の中なので少なくとも首都から出たわけではなさそうだとわかる。

――でもどうなんだろう。アル君は私を見つけてくれるかな……。

それがわからない。感覚の同調と操作が出来るというのは身を持って知っていたがそれはアルが見ている前でのことだ。離れていても場所がわかるなんてことは聞いていなかった。

――大丈夫。私がいないって気づいたらアル君がなんとかしてくれる。

大した根拠はなかったがアルを信用していたリーリアは多少冷静さを取り戻した。そしてアルが助けに来てくれるとしても、自分は自分で最善を尽くすべきだと考える。

あたりを見回す。そう広くはない。１０歩も歩けば端から端まで辿り着く正方形の部屋。その一面が鉄格子になっている。見える範囲には窓がなく、頼りない蝋燭の炎が鉄格子ごしに照らしている。リーリアはここは地下なんだろうと判断した。

全体的に灰色の石のようなもので出来ている。床も壁も天井もそうだった。

部屋の隅にはトイレと簡単な洗面設備がある。衝立もあったのでそれには少し安心した。

鉄格子の向こうでは男が一人椅子に座ってこちらを見張っていた。鉄格子の扉を見る。外から錠前が付けられているのがわかった。鍵がかけられている。

外の様子はそれぐらいしかわからなかった。もう少し動けば廊下の先も見えるのかもしれないが、今はまだ目立ったことはしたくない。

次に牢屋の中を見る。リーリアを合わせて８名、全員が女だった。皆しゃがみこんでいる。年齢は上が２０歳ぐらい、下は１０歳ぐらいまでと幅広かった。

皆さらわれてきたのだろう。それぞれがこれからの境遇に思いを巡らせ絶望に沈んでいた。

――話しかけるのもまずいかな。

見張りの男をさりげなく見てみた。頬に傷のある男だ。油断なくこちらを見ている。リーリアは野族みたいだと思った。暴力沙汰に

身を置き続ける者の独特の匂いのようなものを感じる。手は腰の剣をいつでも抜けるように隙なく構えられていた。

その剣呑な雰囲気に怯えながらも観察を続ける。何かないかと男の身体を見ていると剣とは反対側の腰に鍵がぶら下げられているのに気づいた。

鍵を奪うことは出来ないかと考えてみたが、すぐに無理だと諦めた。鉄格子越しに手を伸ばしたとして、まったく届く気がしない。

今わかるのはこれぐらいのことだった。

リーリアは次にこの状況について考えてみた。女ばかり8名が集められている。いかがわしいことしか思いつかないが、今のところ何をされたわけでもなかった。周りの様子をみるに他の少女達も同様のようだ。となると今目の前にいる男がそういう目的で集めたわけでもなさそうに思える。

牢屋を用意していることにしろ、気を失わせる薬品が使用されたことにしろ、なんらかの組織的な行為に思える。

そう考えると思いつく答えは一つだった。セプテム王国の人さらい部隊。

拉致国家、奴隷王朝、誘拐王国、様々な悪名で呼ばれるセプテム王国。その所業としか思えない。

他の国ではともかくマテウ国では奴隷は完全に禁止されている。歴史上も奴隷制が行われたことは一度もない。それはそもそもが奴隷など使わなくても十分に裕福だったということもあるが国の雰囲気として常春の、のんきなこの国には制度として見合わなかったということだ。

国の政策、指向はレガリアに多大な影響を受ける。セプテム王国は建国当初から常に奴隷労働を前提としていた。レガリアの能力を最大限有効活用すると自然とこうなる。

レガリア、支配の王錫。対象に絶対の忠誠を植えつけ掌握するこのレガリアに一度でも支配されれば逃れる術はない。レガリアの効力は国内のみなので、国外に出ればその支配から逃れることは出来

るが、支配された時点でそもそも国外に出ようという意識すら発生しなくなる。セプテム国側は、本人の意思でこの国に留まり、忠誠を誓っているのだからとやかく言われる筋合いはないと放言している。他国もそこにレガリアが関わっているのが自明だとしてもどうすることも出来なかった。

セプテム王国はレガリアで支配した奴隷を使い捨てることによって発展してきた。そこには一切躊躇はなく完全に道具として割りきっており、減ったならば補充すればいいと考えている。その補充方法の一つが人さらい部隊だ。他国へと何食わぬ顔をして侵入し、密やかに人さらいを行う。この事は広く知れわたり警戒されてはいるが、事前に十分な調査と計画を立てて行われる少人数を対象とした拉致を防ぐのは中々難しい。セプテム国と国交のある国はほとんどなくマテウ国も例外ではない。一度拉致されてしまえば、外交交渉で取り戻すのはほぼ不可能で今までに戻ったものはなかった。

リーリアはセプテム国の悪行を思い出すと、ますます絶望的な気分になった。それならこれはそこらのチンピラの仕業ではなく、国家ぐるみの犯罪的行為ということだ。

人さらいは、商品の目利きをする奴隷商人と諜報部隊で構成されていると言われている。素人のリーリアにはそんな輩を出し抜いて脱出など出来る気がしなかった。

人さらい部隊は、高名な科学者、芸術家、商人、政治家などの有能な人物や、見目麗しい男女を狙うとされている。多少強引にでもさらってしまえば確実に支配出来るので、国家の振興には有効な手段として認識されていた。

セプテム国が相手なら国に連れ帰られるまではひどい目にあうことはないだろう。人さらい側からすれば、下手に手を出して自暴自棄になって暴れられるのも厄介だ。国に帰れば従順な奴隷へと変えることが出来るのだから焦って事を起こす必要はない。

それに、とリーリアは思う。このまま連れて行かれればアルとの距離が離れて自分は死んでしまうだろう。他の娘達には悪い気もす

るが綺麗なまま死ねると思うと少し心が安らいだ。

――アル君は私のことどう思ってるんだろう。

勝手に生き返らせたことに責任を感じているのか、何か目的があっただろうにそれを置いてでも付いて来てくれると言う。だがそれは義務のようなものにも思える。

リーリアは旅の間にアルの真摯さというようなものを十分に理解した。ちゃんと気を使ってくれるし、つっけんどんに思えることもあったが優しい言葉もかけてくれるし、それを態度で示してくれる。ただリーリアは壁のようなものも感じてもいた。仲良くはなった気はするが、ある一定以上の距離からは踏み込んでこないような印象だ。女としてはあまり見てもらえていないと感じていた。

――死体は嫌だとか言ってたのは冗談じゃなかったのかな……。

たまにアルが顔を赤くするようなことがあったので、女が嫌いだとか興味がないとかではないはずだ。なら何が駄目なんだろうかとリーリアは考えに耽る。胸が大きい娘は好きじゃないんだろうか。確か小さい方が好みだという男性も少なくない数がいると聞いたことがあった。それか魔族の間で育ったということだから魔族の女の子がいいんだろうか、などと詮なきことを考えていると泣きたくなってくる。

――私がいなくなったら、アル君は自由になれるかな。

ますます悲観的な考えが浮かんでくる。今はアルを自分が縛り付けているとしか思えない状況だ。あまり気にしていなかったがよく考えるとアルが可哀想にも思えてくる。

――私なんかと会わなければよかったのに。

リーリアは自らの胸をもみしだきながら思った。

「え？」

思わず目を疑う。自らの右手が胸をぐにぐにとまさぐっている。絶望のあまりにおかしくなったのかと思うと、右手はそのままゆっくりと上半身を這い上がってきた。首筋を通って行き、口のあたりにやってくると口を塞ぐようにする。

『おい』

口が勝手に動いた。囁くような声だ。思わず周りを見渡すも誰も気づいてはいないようだった。

『僕だ。いいか、突然で混乱したかもしれないがまずは落ち着いてくれ。それまではこのままの姿勢だ。落ち着いたなら左手を握ったり開いたりしてくれ』

リーリアはものすごい勢いで左手を開け閉めした。

『元気そうだね。というかその勢いじゃ落ち着いているようにも思えないけど。僕に話しかける時は小さな声で喋ってくれればいい。声にならなくても口の動きでだいたいわかる。周りには誰かいるのか？』

「う、うん。女の子がいっぱい。牢屋の中にいるんだけど」

リーリアは意識してささやくように応えた。

『そうか。じゃあ、わかっていることがあったら教えてくれ』

安心した。今確かに自分が何か絆のようなものでアルと繋がっていると感じられた。もう大丈夫だと思ったらリーリアの身体から一気に力が抜ける。

気を落ち着かせるとリーリアは周囲の状況と考えたことをアルに伝えた。

『セプテム国か。初めて聞くが無茶苦茶だな』

「アル君……さっきはびっくりしてたから気にしてなかったんだけど、最初に胸揉んでたよね？」

『あぁ、それは感覚の同調を確かめていただけだ』

アルは当然のことのように言った。その後一気に説明を始めたのは何かごまかそうという意思も若干感じられる

『でだ、よく聞いてくれ。感覚の同調は聴覚と触覚のみだ。だからそちらの様子が僕には直接分からない。これは気をつけて欲しいんだけどこれから戦闘中には絶対に転けないでくれ。今の僕には上下の感覚がわかりづらい。接地面の感触でなんとなくはわかるけど、転けてしまうと立ち直るのに時間がかかる』

「え？　戦うって？」

『リーリアが戦うしかそこから逃れる術はない。僕も今街中を探してはいるが、組織的な誘拐だというなら簡単に行き先がわかるような証拠は残っていないだろう。リーリアがそこから出てくるしかない』

「む、無理！」

『やるんだよ。僕がサポートする。大丈夫。こないだ大魔王に技を教わっただろう？』

＊＊＊＊＊

男は牢の入り口の前に椅子を置いて座っていた。牢屋はほぼ正方形で一面が鉄格子になっておりその左端に扉が付いている。中には女が8名。トイレが右奥にある。

女達は全員が平民と聞いていたため、見張りなどは特に必要ないと思われたが念には念をということで、交代で見張りが一人以上立てられることになっていた。

この牢屋の鉄格子はかなり頑丈に出来ている。時には貴族を捕らえる事もあるからだ。貴族の力を持ってしてもびくともしない強度を誇っていた。

中にいるのは様々なタイプの美少女達だ。男にはその基準はよくわからなかったが、依頼主の付けた細かな条件に合致する少女が厳選されているらしい。

全員がうつむき座り込んでいる。先程は大声で泣き叫ぶ者もいたから大声で怒鳴りつけた。そのせいかしくしくと押し殺すように泣くばかりになったのだがそれでも鬱陶しいものだ。

特にすることもないため男は少女達を物色する。やはり一番は最後に連れてきた金髪の少女だと思った。体型に合わない大柄な服を着ているため見た目からはわからないが、後ろから抱きすくめた時の感触は最高だった。あの奴隷商人の邪魔がなければその場で襲いかかっていたかもしれない。組み伏せ、その可憐な顔を絶望に歪ませることを想像すると自然と身体の一部が熱くなった。

男が注目していると少女は奇妙な行動を取り始めた。右手で胸を揉みしだいた後、口を抑え、左手を開けしめしている。男がその様子を凝視すると少女は背を向けてしまった。

気でも触れたのかと思うと少し不安になる。多少反抗的なぐらいなら問題ないが、完全におかしくなってしまうとレガリアで支配し

たとしても使い物にならないことがあるからだ。この中でもかなりの上物の少女の商品価値が下がってしまったとなると男の責任も問われるだろう。

しばらく見ていると少女は立ち上がった。部屋の右側へと歩いて行く。男はトイレへ向かうのかと思ったが、少女は奥へは向かわずそのまま右端まで行った。

何をするのかと男が見ていると鉄格子を両手で掴む。

「えい！」

可愛らしい掛け声と共に少女が力をこめ鉄格子を左右に引っ張る。何を馬鹿なことをと呆れて見ていると信じがたいことが起こった。男は思わず腰を浮かせる。

鉄格子はぐにゃりと歪んでいた。

「な！」

男が思わず声を漏らした。見たままのことが信じられない。この隠れ家には設計段階から関わっている。この鉄格子がそんな簡単に変形したりするものではないことは何度も確かめていた。

「アル君、鉄格子はちょっと動いたけど通るのは無理だよ。鉄格子の間隔が狭いし」

『そうか。じゃあ次の手だな』

「みなさん、ちょっと後ろの方にいっててもらえますか？」

少女は独り言をつぶやいている。やはりおかしくなってしまったのか、一人で会話をしているように見えた。

金髪の少女の言葉に反応してしゃがみ込んでいた少女達は立ち上がり壁側へのろのろと歩き始めた。

何をする気かわからないがこれはまずいと判断した男は牢屋の右端へと走った。少女の前へと向かう。だが鉄格子の前へ辿り着いたときには少女はそこにいなかった。

男が駆け出すと同時に、滑るように移動して牢の扉の前で構えを取っている。腰を落とし右手を腰のあたりまで引いていた。まさか、と思う。何をするつもりなのかはわかったがそんなことが出来るとはとても思えない。

爆発でも起こったかのような音がした。扉を殴りつけた音だ。音と共に錠前と蝶番ははじけ飛び、鉄格子で出来た扉は廊下の壁に轟音を立ててめり込み、地下全体を揺らした。

『やはりね。扉が一番もろいと思ったよ』

そう言うと少女は悠々と牢屋の外に出てきた。

「だったら最初からそうすればよかったのに」

『見張りが扉の前にいるって聞いたからね。フェイントはかけておいたほうがいいだろう?』

「今の勢いだったら、扉ごと倒せたような気もするけど」

『武器を持ってるんだろう? 邪魔される可能性もある』

「あ、みなさんはもう少し待っててくださいね」

少女が牢屋の中に声をかける。呆然とした男はそれをただ黙って見つめていた。

少女が歩いてくる。剣の間合いまでもう少しと言う所で立ち止まった。

『相手はどんな様子だ』

「剣を構えてる。あと5，6歩ぐらいの距離」

『肌も強化されてるから多分切られても大丈夫だけど、攻撃された

らリーリアの判断で避けてくれ』
「そんなの無理！」
『大丈夫だって。そして殴れる距離まで近づいたら合図をしてくれ』
「う、うんやってみる」

またぶつぶつと何事かをつぶやいている少女が不気味に思える。
男は剣を中段に構えた。廊下は狭く横に振り回すには適していない。取れる攻撃手段は突くか、振り下ろし、振り上げぐらいのものだろう。
中段はそのどれかに派生するためのものだったが、この選択は相手に剣を突きつけ、これ以上こちらに来てくれるなという守りの姿勢でしかなかった。先ほど扉をぶち破った攻撃を見ている。あんな力で殴られて生きていられるとはとても思えなかった。
少女も突き付けられた剣を前に戸惑っていた。攻撃されたならば避けるつもりだったようだが男は防御を固めることを優先している。

「ど、どうしよう。剣をまっすぐ向けられてるんだけど」
『相手までは6歩ぐらいか、天井の高さはどうだ？』
「私二人分ぐらいかな？」
『よし』

そう言うと少女の姿が消えた。天井とそして背後で軽いトントンという音が立て続けに鳴った。男は咄嗟に振り向こうとした。

「アル君、今！」

少女が何かを叫びながら拳を繰り出す。拳は男の背中側にめり込み腎臓と周囲の器官を破壊し、男の意識を刈り取った。

＊＊＊＊＊

「みなさん大丈夫ですか？」

リーリアが牢屋の中に声をかける。皆あっけにとられたような顔をしていた。

連行用にかロープがあったので、これで男を縛り付ける。意識が戻った所で動きようもなさそうだったが念の為だ。

「もうちょっと待っててくださいね。廊下の先を見てきます」

牢屋から廊下に出た位置から左を見ると、同じような構造の牢が2つあった。廊下は行き止まりになっている。

右側を見るとすぐに階段があった。急勾配の木製の階段だ。ほとんど梯子に近い。

階段を登ってみるとすぐに天井にぶつかる。天井には四角く切れ目がある。ここが出入り口なのだろう。軽く押してみたり、スライドするように動かしてみたが開く気配がなかった。外から鍵がかけられているらしい。

「アル君どうしよう？」

『見張り役は自由に出られなかったのかな？　となると定期的に外から開かれるのか、何か合図がいるのか。……いつ開くのかわからないものを待っても仕方が無いしな。壊そう』

リーリアが掌を天井に設けられた扉に押し付ける。そのまま真上に力を入れると、分厚い石で出来た扉は勢いよく開いた。扉と天井の間には施錠のために金属で出来た閂が行き交うような仕組みがあったがそれはひしゃげてしまっていた。元通りに閉めることはもう

無理だろう。
　入り口から顔だけ出して様子を見る。厨房のようだった。料理中の料理人と目が合う。リーリアは愛想笑いを浮かべた。
　料理人達は予想外の出来事に身動きができなくなっていた。手を止めてしまった炒め物が焦げ臭い煙を立てている。

『どうだ？　何がある？』
「レストランの厨房かな？　コックさんが5人ぐらいいるけど」
『無関係とは思えないな。敵だと思ったほうがいい』

　リーリアはそのまま階段を上がると厨房に出た。先程からのアルのサポートで段々大胆になってきている。堂々としたものだった。

「あなた達も人さらいの仲間なんですか？」

　その言葉で止まっていた料理人達は叫び声をあげて逃げ出した。この態度から関係者であることは確実だろう。
　リーリアは放ったらかしの料理が気になってしまった。このままでは火事になってしまいそうだったので慌てて火を止めた。

「逃げちゃったけど……」
『まぁいいよ。レストランの厨房なら裏口みたいなのがないか？多分そこからさらって来た人たちを運び込んだと思うんだけど』

　裏口は簡単に見つかった。食材の搬入口だ。リーリア達は食材の入った木箱に偽装されてここから運び込まれていた。念のため扉を開けてみたが、内側から鍵がかけれるようになっているだけなので外に出る分には問題はなかった。
　あたりの様子を伺う。厨房には誰もいなくなっている。裏口とは反対側に行けばレストランの食堂だった。こっそりと覗き込むと、

コックが慌てふためいて飛び出したせいか少しざわついていた。誰も料理を作っていないのだから時間が経てばさらに混乱することだろう。

『一旦戻って中の女の子達を連れてこよう。外に出て大通りにでも出れば大丈夫なはずだ』

地下に戻ろうとリーリアは振り向いた。そこで何か違和感のようなものを感じた。何かがさっきと違っている気がする。

「ねぇ、アル君、なにか気になるんだけど……」

もう一度よく見る。気になるのは裏口だった。先ほどドアが開くかを確認した際に開けっ放しにしていた。閉めた覚えはないので開いているのは問題ないが、開き方が大きくなっている気がする。

「アル君……」

アルに相談しようとした時、何かが顔をめがけて飛んできた。リーリアは思わず目をつぶり手を交差させてその何かを防いだ。カランと音を立てて何かが床に落ちる。包丁だった。

「え？」

リーリアの服の腕の部分が切り裂かれていた。肌はアルが言うようにに強化されているせいか傷一つない。

調理台の陰から男が立ち上がった。北門でリーリアを誘い出した男だ。

「これはどういったことでしょうかね」

やはり特徴のない顔としか思えなかった。本当にこの男にさらわれたのかと言われるとリーリアも自信を持っては言い切れない。

「平民だと聞いていたんですが、間違いだったようですね。あなたどうやって出てきたんです？」

どうしたらいいんだろう。リーリアは戸惑う。攻撃自体はアルがやってくれるとしても、近づくのはリーリアの仕事だ。先ほどのように狭い廊下のような限定された空間ならアルにもやりようはあったが、障害物の多い広い空間ではそれも難しい。

「色仕掛けですかね？　あの男はあなたにご執心だったようですし。まぁそれでもあの男がただやられるとも思えないんですが」

リーリアは試しに横に一歩動いてみた。男は同じだけ横に動いた。一定の距離を保っている。油断はしていないようだった。

ならば地下へ誘いこむというのはどうだろう。警戒して近づいてこないということであれば地下へ逃げ込めるかもしれない。狭い廊下でなら闘いようもある。

しかし誘いにのってこなければまた閉じ込められてしまうかもしれない。そう考えるとためらわれる。

食堂側からなら逃げるのは出来るはずだがそうしてしまうと、地下の女の子達を置いていってしまうことになる。それは絶対に嫌だった。

「アル君どうしたらいい？」

つぶやいたがアルの返事は返ってこない。途端に心細くなった。

「誰かいる振りですか？　無駄ですよ。この厨房に他に誰もいないことは確認していますから」

男はリーリアのつぶやきを聞きとがめたのかそう言ってきた。

リーリアは地下の入口へと走った。アルは返事をしないしあまりいい方法も思いつかない。

しかし先ほどまであった馬鹿みたいな力を発揮することは出来ず足を滑らせた。

「あ」

リーリアのイメージでは一足飛びに入り口まで行けるはずだった。アルのサポートがあれば可能なはずだ。だが何故か力が失われている。そして絶対に転けるなと言われていたことを思いだしパニックに陥った。

その様子を男は冷静に見ている。

リーリアは立ち上がろうとじたばたしたが混乱のためか足に力がはいらない。このままではまずいと仰向けになり男の方を見る。男は慌てふためくリーリアをじっくりと観察していた。

男は何かを確信したのか、ゆっくりと近づいてきた。リーリアは必死に後ずさったが、何かにぶつかってそれ以上下がれない。

男はリーリアの足元までやってくると、そこでも冷静に見下ろした。抵抗の様子がないと見るとリーリアの腰を両足ではさみ込むように馬乗りになった。そのまま両手を抑えつける。

「包丁で傷つかないんですから貴族なんでしょうが、私も貴族なんですよ。そして貴族同士なら男のほうが力は上です。ご存知でしょうがね」

「いやっ！」

リーリアは必死に身動ぎするも完全に抑え込まれていた、まったく動けない。

「私の依頼主はね、貴族の性奴隷は求めていないのですよ。ですのであなたは連れていけない」

平民の主人は貴族の奴隷を嫌う。それは完全に支配していたとしても何かの折に本人が意図せずに力を発揮してしまうことがあるためだ。戦奴隷としてなら慎重に運用すればいいが、性奴隷でそれはまずいと忌避されている。

リーリアは何故すぐに殺そうとしないのか不審に思った。極秘任務の内容をある程度知ってしまったのだ。始末されて然るべき状況だ。リーリアは男の顔を見た。そしてわかった。先ほどまでの商品を吟味するような商人の顔が、獣欲を滾らせた男の顔になっていることを。

商品としての価値を失った途端、男にはリーリアがひどく魅力的な自分個人の嗜好に合った獲物に見えてきていた。

「アル君！」

リーリアがもがきながら必死に叫ぶ。

「助けなど呼んでも無駄だと……」

リーリアの手が動いた。男が掴んでいる手をまったく無視した動きだ。

鈍い音がした。骨をへし折り、肉を押しつぶし、肺を破裂させた音だ。リーリアの右拳は男の左胸を陥没させていた。鍛えられた筋肉も肋骨も何の障害にもならない。見る間に左胸が萎んでいく。喀血がリーリアの顔を汚した。

『そっちから近づいてくれて助かったよ』

力の抜けた男の手をリーリアは左手で掴んだ。そのまま男を跳ね除けると逆に馬乗りになる。

男は右手を必死に伸ばし、首を振る。助けを求めているようにも見えた。

『悪いけど逃がすつもりはまったくないんだ。このままやられてくれよ』

無造作に振り下ろされた鉄槌が男の顔を打った。技でもなんでもなかったが力任せに振るわれたそれは男の顔の中心を捉え鼻を中心に陥没させる。

男が完全に沈黙したのを確認するとリーリアは立ち上がった。

『こいつが馬鹿で助かったよ。素のリーリアを見せれば油断するかと思ったんだけど、まんまとひっかかってくれた』

「な、何それ！　私ほんとに怖かったのに！」

リーリアは怒りの声を上げた。なんの相談もなく勝手にそんなことをされてはたまったものではない。

『悪かったよ。でも、あいつから近づいてくれないとどうしようもなかっただろう？』

アルはあくまで冷静だ。それがさらにリーリアの怒りに火をつける。

「アル君の馬鹿！　アホ！　変態！　えーっと、カバッ！」

リーリアの罵倒の語彙は大したことはなかった。

＊＊＊＊＊

貴族同士の戦いでは近接戦闘になる公算が高い。アルはこれまでの戦闘からそう考察している。

初手の包丁でリーリアが貴族であると男が確信したように、飛び道具は役に立たないことが多いからだ。

故になんらかのタイミングで近づいてくるだろうとは思っていた。だが実際の所危ない賭けであったことには変わりはない。アルは胸をなでおろした。

ぷりぷりと怒るリーリアをなだめながら周囲の様子を強化した聴覚でうかがう。さらに援軍がやってこなさそうなことを確認すると、地下の女性たちを開放した。

裏口から出ると裏路地につながっており、そこから大通りに出られる。

『アル君、ここどこかわかんないんだけど！』

同調したアルの聴覚にリーリアの声が聞こえてきた。

「大通りなんだろう？　城壁と反対側へ行けば広場だ。僕も広場へ行くからそこで合流しよう」

『わかった。みんなも連れていけばいい？』

「そうだな。役所にでも行った方がいいだろう。一緒に行こう」

アルも大通りに出て、広場へと向かう。

雨粒が一滴アルの頬を打った。空を見上げる。珍しいことに灰色の雨雲が空を覆いつつあった。アルがマテウ国にやってきてから初めての雨だ。

マテウ国ではレガリアにより気象制御がされているため昼間に雨が降ることはまれだ。通常は耕作に必要な量の雨が定期的に夜間に降るように調節されていた。ただ降雨調節はある程度ゆらぎをもたせてあるため、にわか雨程度ならたまに降ることはある。

アルは足を早めた。広場にはほどなくして到着する。雨除けを求めてカフェの軒先に入ることにした。軒先はテント状になっていて、その下にはテーブルがいくつかおいてある。雨が降ってきたせいか客はそれほどでもないため、端の方にいれば邪魔になることはないだろう。

風が強くなり始めていた。広場の人影はまばらだ。その少数の人々も突然の雨に驚き足早に去っていく。しばらくすると広場には誰もいなくなっていた。滅多に雨の降らないこの国で傘を用意しているものはおらず、雨の中をうろつくような物好きはほとんどいない。

――リーリアは大丈夫かな?

8名という大人数だ。雨宿りするのも大変だろうと思う。アルが感覚を探ってみると歩いていたのでこのままこちらへ真っ直ぐ来ているようだった。

遠くから雷鳴が聞こえてきた。ますます雨足が強くなり、風も強く吹き荒れる。

何かがおかしい。この国でここまで天気が荒れるのは異常事態といっていい程だ。アルは周りを見渡した。広場も端の方はけぶる様な雨にかすんでしまいよく見えないが何かが動くのが見えた。

さっきまではいなかったはずの人影だ。はっきりとはわからないが、かなりの大人数がゆっくりと広場を横断している。東からやってきたそれらの影は中央の噴水までやってくるとばらけた。7つあ

る大通りにそれぞれ向かい始める。
明らかに不自然だった。この雨の中悠長に歩いているのはおかしい。アルはよく見ようと目を凝らした。
ずるり、と一人の人物の上半身がずれた。そのままばしゃん、と水たまりに上半身が落ちる。

「!?」

近くにいた人影が上半身を拾い上げた。足だけで動き続ける下半身に追いつき、その上に上半身を置く。元の姿に戻った何者かは何事もなかったようにそのまま歩き続けた。

――なんだこれは？　何が起こっている？

「見つけました」

少女の声にアルは振り向いた。
衝撃。少女の拳がアルの脇腹にめり込む。振り抜かれた拳にアルは吹っ飛ばされた。店内のテーブルを派手に巻き込みながら壁に激突したが、まだ止まらない。
そのまま壁をぶち抜いてさらに中へと飛んで行き、反対側の壁にぶつかってようやく止まった。
激痛に声も出ない。地べたに這いつくばりながらアルは必死に状況を把握しようとつとめた。
わき腹に手をやる。あまりの衝撃に腹が爆発でもしたかと思ったが、感触はわき腹がその存在をとどめていることを伝えてきた。ただ内臓の状態はあまりよくない。口から血があふれてきた。
周りを見る。倉庫のような場所だった。カフェのバックヤードだろう。樽や木箱が整然と並べられていたようだったが、衝撃で崩れている。

背を壁にあずけたまま、なんとか立ち上がろうとする。足がふらついた。壁がなければ立ってはいられないだろう。

「殺すなと言われていたのを忘れていましたが、生きているようで助かりました。あなたも貴族ですか。私がそうなんですから、被験者は全て貴族と考えるべきでしょうか？」

大穴の開いた壁の向こうにまだ幼い少女が立っていた。髪は銀色で肩のあたりで適当に切られていた。前髪も眉の上あたりで適当にまっすぐに切ってある。服装もボロ布を巻きつけただけのような物で、何もかもがどうでもいいといった格好だった。

その背後には数人の男女が立っている。先ほど広場で不自然に歩いていた者達だ。近くでみればそれが生きた人間ではないことがはっきりと分かった。生気をまるで感じない。手足の長さが不揃いで歪なシルエットは、まるで一度ばらした後に適当にくっつけたかのようだった。

「テオバルト様にカテゴリーRの被験者5号を発見したと伝えてください」

少女は背後の者達に指示を出す。

アルは必死に呼吸を整えていた。だがそう簡単には動けるようにはならない。少女の一撃はアルをほぼ無力化していた。

「さぁ、テオバルト様がおいでになられますよ。こんな薄汚い倉庫でお迎えするのは失礼でしょう？」

少女が近づいてきてアルの髪を掴むと引き倒した。支えを失ったアルは簡単に倒れる。抵抗する余裕すらない。

少女は倒れたアルをそのままずるずると引きずり、広場へとやっ

てくると無造作に放り出した。
外は既に嵐と化している。横殴りの雨がアルを打ち付けた。なんとか起き上がろうと腕に力をいれ上半身を起こす。
目に入ったのは死者の群れだ。その死者の群れが2つに別れ道を作る。死者たちは次々とひざまずいていった。
死者が作る道を悠然と男が歩いてくる。それは千の悪魔を従える者、大魔導師テオバルトと呼ばれる男だった。

11話　対峙（前書き）

サブタイトルは適当なので後で変えるかも知れません。
あと、冒頭時間が若干戻っています。

11話　対峙

首都ベイヤーの西門には検問を待つ馬車や人々で溢れかえっていた。

主に商人が多い。商売でやってきた者達はここで荷を検められ、商材に応じた税を徴収される。

そんな人々の最後尾に今にも壊れそうな異様な馬車が現われた。

人々の注目を浴びる中、車輪が外れ大きな音を立てて傾いた。車輪の反対側を支えていた少女は役目を終えた馬車の本体をゆっくりと地面に下ろす。

銀髪のまだ幼い少女だ。ボロ布のような服がその愛らしい顔とは不釣り合いに思える。

全身を腐らせ血を滴らせる馬は車輪のない馬車をそれでも引こうと、懸命に前へと進もうとしている。ギチギチと音を立て、引き棒に連結した胸当てが食い込むが車輪のない馬車はほとんど動かない。

少女は馬との連結部を引き千切った。馬は抑えつけられていた力を開放しあたりの人をはね飛ばしながら進むと城壁に激突した。

反対側の連結部も同じように壊す。同じことが繰り返された。馬は再度城壁に激突する。この馬は前に進む以外のことが出来なくなっており用済みになれば放棄するしかなかった。

その場にいた者達はそれを呆然と見ていた。白昼夢のようだった。とても現実とは思えないことが起こっている。

「テオバルト様、街へ到着しました」

少女が馬車の中へと声をかける。

中から一人の男が現われた。全身黒尽くめの男だ。肩まである黒い髪、黒い目、黒いコートで全身を覆っている。手には節くれだった杖を持っていた。

「何故こんなにも人がいる?」
「数百年もこなければ街も発展します。これぐらいの人がいるのはあたりまえです」

男が手に持った杖で少女を殴りつけた。少女はそれを黙って受け入れる。

男は少女に思ったことを包み隠さず全て口にするように命令している。ただそれはこの男の寛大さを示すものでない。その言葉が気に入らなければこのように殴りつけた。

ここに至って呆けたようになっていた人々が動いた。商団を護衛する傭兵たちが防御態勢を取る。商人たちはその身を馬車の影へと隠した。

誰何の声など誰もあげなかった。下手に声をかけるのも恐ろしい。男は余りにも美しすぎた。そしてそれは傭兵たちの本能が最大限の警鐘をかき鳴らす要因でもあった。魔法使い。ここまで美しい人間が魔法使い以外のわけがない。

傭兵たちは男の一挙手一投足に注目した。魔法使いが魔法を使うには魔器を通して悪魔を使役しなくてはならない。そこには必ずなんらかの動きがあるはずだ。

先制攻撃を考える者もいた。だが足を一歩前に出すことすら出来なかい。彼らの本能は逃げろと叫び続けていた。

「邪魔だな」

男がそう言った。一陣の風が吹き荒れるとその場にあったもの全てが同時にずれた。血しぶきをあげて上半身が落ちる。子供たちは頭部か胸のあたりを切り裂かれ、馬は足を、馬車は車輪と本体の狭間で分断されていた。大地は瞬く間に血で染めあげられる。門の前にいた数百人の人間がただ風が吹いたという、それだけで骸と化し

ていた。
　魔法による攻撃だった。魔法で攻撃する場合にもっとも有力とされるのが空気を利用したものだ。空気は簡単に動くため魔力効率がいいし、どこにでもあるため事前準備もいらない。この場合は薄い刃状に固定した空気を大人の腰ぐらいの高さで広範囲にばらまいた。ただ殺戮を行いたいだけならほとんどの場合これで事足りると言えるだろう。

「テオバルト様、ここにターゲットがいた可能性も……」

　殴りつけた。それが日常となっている少女はもう一々反応したりはしない。
　小雨が降り始めていた。先ほどの魔法は狂嵐の悪魔ゼトによるものだ。この魔法を使うと大気を依代に具現化した悪魔本体が嬉々として暴れまわり始める。その動きは大気に乱れを生じさせ暗雲を呼び寄せた。魔法の行使自体は素直に受け付けるがそれ以外の制御はできない。気がすむまで暴れまわるにまかせるしかなかった。

「あれはどんな姿をしている？」
「はい、聞いた所では栗色の髪をしている１５，６歳ぐらいの少年とのことです」
「ここにいないか一応確認しろ」
「はい、いないですね」

　少女はさっとあたりを見回しただけだったがそれだけで確認が済んだようだった。男もそれについては信用しているようで特に咎めることはない

「見つけられるか？」
「条件に該当するものはこの街に無数にいるものと思われます。グ

ラウシェル症候群の罹患者ですから目視出来れば判別は可能ですが」
「ならばこいつらに探させよう。街中に放ち似たような者を全て確保させる。お前は検分を行えば良い」
「発見後はどのように？」
「拘束しろ。私が直々に見極めよう。殺すなよ」

血まみれの死体達が蠢き始めた。上下にわかれた死体がそれぞれ片割れを探し出し元に戻ろうとする。手近な所にあった人体の一部を接合して人の形となったものが次々と立ち上がる。
たまたましゃがみ込んでいた数少ない生き残りは、声を押し殺しその様子を見ていた。
先程からこの魔法使いは魔法を使っている様子をまるで見せていなかった。詠唱も印も陣もない。一言二言喋っただけだ。生き残りの傭兵たちにはそれが信じられなかった。彼らの常識ではとても考えられない。
立ち上がった死者達はそこかしこに落ちている武器を拾い始める。生き残り達は怯えあっさりと武器を捨て逃げ去った。そこには幼すぎたため攻撃のあたらなかった幼子達も取り残されている。
簡易的な武装を終えた死者たちは行進を始める。統率のとれたものではないが、全員が街を目指してゆっくりと動き始めた。
死者の行進が門を通過していく。咎めるものはいない。一部始終を目撃していた検問所の兵士達はそれを黙って見送った。異常事態だ。想定外の事態に何も出来ない。何か余計なことをすると、こちらにやってくるのではないかと思うと身じろぎすら出来なかった。
検問所の女性兵士ダフニーは、ほぼ全ての死者が通り過ぎたあとにやっと動き出した。受話器を取り上げると交換手を呼び出し王城への緊急回線をつなぐ。そして死者の軍勢の襲撃を一気呵成に伝えた。

＊＊＊＊＊

アルはその男を数度しか見たことはなく、直接何かをされたわけでもない。だが見た瞬間からゆっくりと怒りが込み上げてきた。アルの中にあったのは理詰めの怒りだ。自分の境遇について思いを巡らせるとこの男がその始まりにいる。全ての元凶だ。一時的な激情ではない。常にこの男に対する燠火のような怒りがどこかでくすぶっていた。

怒りに我を忘れる事はない。だが自然と痛みは抑えられていった。怒りを足に込め立ち上がるとその男を睨みつけた。

「そっちから来てくれるとはね。探す手間がはぶけたよ」

せいいっぱいの強がりを言ったアルを、男は一瞥するとそれ以上の関心は見せずに隣にやってきた少女に目をやった。

「テオバルト様、被験者を発見しました」

「ふむ、私は何故これを見極めねばと思ったのか？」

その言葉に少女は呆れてしまった。わざわざやってきて目的を忘れているというのか。

「回収して解体するという話だったと思いますが」

「これをか？　見たところ取るに足らん。解体するだけ無駄だが、研究の痕跡を残すのはまずいか。お前の意見を聞こう。こいつは４号までと何か違うか？」

少女がアルを見つめた。その鳶色だった瞳はいつの間にか真紅へと変わっている。アルの背筋を悪寒が走った。とても重要な、だが

自分には絶対気付けない何かが進行してしまっているという感覚。
何かのきまぐれで簡単に首を落とされる、生殺与奪を握られてしまっている恐怖。このままではまずい。だが打つ手がない。

「これまでと違うのは死者の完全蘇生能力でしょう。ただこれは、完全に蘇生させないと動かせないという意味では劣化しているとも取れます。そして死者の支配が不完全です。直接操作出来るのは数体で、しかも操作している者以外は自由意志を持つため反逆すら許してしまいます。魔力量、有効範囲等は今までの被験者と大差ありません。カテゴリーRとしては完全な失敗作です。この場での消去を提案します」

「本来意図していた造魔としても失敗で、君臨する者（レイン・オブ・テラー）にもなれなかったか。ゴミだな」

言葉通りだ。ゴミを見るような目でアルを見下す。
アルは銀髪の少女を見た。今の自分はあの少女にすら勝つのは難しい。一撃でほぼ行動不能にされた。万全の状態でも無理だろう。
周囲は死者の群れに囲まれていた。死者は愚鈍だ。現時点では襲ってくる様子はない。そして目の前のテオバルト。実力は未知数だ。だが、この天候と死者の群れはこの男の力だろうし、千の悪魔を従えるというのだ。これ以上の強力なものをいくらでも用意しているのだろう。
最悪だ。アルはこの男と対峙する前に、なんらかの魔法に対抗しうる力を手に入れるつもりだった。そのために魔法の力を求めたのだ。だが、結局の所魔法についてはろくな手がかりも得ていない。
死を覚悟した。ろくに走れない状態で死者の囲いを突破することなどとても出来そうにない。

――リーリア……

覚悟とも思い浮かんだのはリーリアの顔だった。自分が死ねばリーリアも死ぬ。そんな単純なことにすら思い至れなくなってしまっていた自分に呆れる。

どうすればいい。リーリアはこちらに向かっている。リーリアだけを逃しても無駄だ。だが、ここに来れば死よりも恐ろしい無惨な事態になるかもしれない。

『リーリア！　広場にはくるな！　近くに建物があればすぐに入ってそこから出るな！』

自分が死ねばリーリアも死ぬ。それはわかっている。だがそれでもリーリアが死ぬところなど見たくはなかった。死者の群れに蹂躙され殺されるのは自分だけでいい。瞬時に決意しリーリアに伝えた。そしてリーリアが何か言う前に同調を解除した。

無理でもなんでも逃げる努力だけはするつもりだった。リーリアと同調しながらではろくに動けない。

一か八か、死者の群れに飛び込む。目の前の少女に適わない以上それしかない。後ろに飛びすさろうとタイミングを見計らう。

まさに動こうとしたその時、死者の群れが１０人ばかり吹き飛んだ。アルから見て右側から飛んできた死者たちは、アルとテオバルト達の間に落ちて潰れた。元々接合が弱かったのか簡単にその身体をバラけさせる。

アルは死者の包囲が崩れた箇所を見た。白銀の鎧を身につけた男が猛然と剣をふるい死者たちを手当たり次第になぎ倒し、ふっ飛ばし、両断している。以前に広場で見かけたことのある勇者がそこで大立ち回りを繰り広げていた。

＊＊＊＊＊

聖剣の一撃で死者の群れが切り裂かれ吹き飛ぶ。フォグは確かな手応えを感じていた。聖剣が通用するならこいつらは魔族と同様と考えていい。

アイゼンは率いてきた王直轄の首都防衛軍、その一隊に死者への攻撃を指示していた。痛みを感じず、多少の損傷をものともしない死者の群れを相手にするにはまず心構えが必要だ。それをわかっていたアイゼンは即座に全隊にそれを伝えた。矢や刺突攻撃はあまり効果がない。切断や打撃による押しつぶすような攻撃が有効であることを。

「アイゼン、こいつらは一体何だ？」

「アンデッドでしょう。マキノさんがいればよかったんですが」

マキノは中央正教の本拠地、聖都へと旅立っていた。信仰への疑問からか最近のマキノは様子がおかしく悩んだ末に数日前、信仰を見つめ直すと言い出し聖都へと向かってしまった。同じようにここ最近飲んだくれていたゲルンも何か考えがあったのか同行を申し出、道中の守護を担うこととなった。

アンデッドは自然に発生することもあるため、教会ではその対策も考えられている。神聖魔法はその有効な対策の一つだった。

「ですが、特別アンデッドが脅威というわけでもありません。ここにいるような者達なら一般兵でも対処出来るでしょう」

死者達は特別な能力を持っているわけではなかった。多少頑丈ではあるが、何度も切りつけ動けなくなるまでばらしてしまえば無力化出来る。燃やすのも効果的だったが雨の中ではそれは無理と早々に諦めた。

防衛軍の数は凡そ５００人。死者も多いとはいえその動きは鈍く、

練度の高い防衛軍は慎重に着実に仕留めつつあった。

「うらぁ！」

フォグが聖剣を振るう度に数十人単位で死者達が吹っ飛んでいく。

修復の済んだ聖剣は本来の力を取り戻しつつあった。

アイゼンは少し後方から全体の指揮をとりつつ様子を見ている。

「しかし彼らは何故ここに現われたのでしょうか？　幸い雨のせいか街の方への被害は出ていないようですが」

「んなもん知るかよ！　とにかく全滅させる！　つーか、そこにいるのが街の方じゃないのか？」

フォグが切り開いた死者の壁の間から3人の人間が見えた。アンデッドではなさそうだ。

黒尽くめの痩身の男に、銀髪の少女。その向かいには腹を押さえて、今にも倒れそうな様子の少年がいた。

「ありゃ、あっちの黒いのが悪もんだろう？　ん？　どうしたアイゼン？」

アイゼンは黒尽くめの男を見た瞬間から凍りついたようになっていた。

あまりにも動かないものだから、フォグがアイゼンのもとまでやってきて肩を掴み揺さぶる。

「おい！　どうしたんだよ！」

「あ、あれは……」

何度もゆさぶってようやくアイゼンは動き出した。

「あいつが誰か知ってんのか？　アイゼン？」
「テオバルト……千の悪魔を従える者、人界の魔王、殺戮と鏖殺の貴公子など数多くの異名で畏怖されている、大魔導師ですよ！　彼のきまぐれで滅び去ったという街の噂は数知れず、ただ一人で一国すら落としたことがあると聞きます！」
「そんなすげーやつなら俺でも知ってなきゃおかしくねーか？」
「彼は数千年を生きていると言われています。数々の逸話は数百年前のものですよ。ここ最近見かけたという話は聞いたことがなかったのですが……」
「つーか、アレは本当にそのテオバルトってやつなのか？」
「はい。あの美貌！　一度見れば忘れることは出来ません。古い資料に残っていた絵姿で見たものと同一です。レガリアに逆らい嵐を巻き起こし、アンデッドの群れを操る強大な魔力、こんな存在が二人といるとは思えません。間違いないでしょう」
「魔族か？　魔王なんだろう？」
「いえ、彼は人間です。魔導の研究の果てに究極の理を見出したとも言われており、畏敬の念を込めて人から産まれし魔王、人界の魔王と呼ばれているのです！」
「チッ！　あいつがそれだとしてだ、どうする？　勝ち目はあるのか？」
「撤退します」
「は？　ふざけてんのか？」
「ふざけてなどいません。彼が何の目的でやってきたかはわかりませんが、おそらくあの少年が関係あるのでしょう。ならば、目的を達して立ち去るのをただ待つしかありません！　下手に手を出せばこの街が、国が壊滅してしまいます！　これまでもそうだったのです！　決して彼に関わってはならない！」
フォグがアイゼンの襟元を掴み睨みつける。アイゼンは真剣な眼

差しでフォグを見つめ返した。にらみ合いはしばらく続いたが、やがてフォグが目を逸した。

「ちっ、わかったよ。お前は隊を撤退させろ。だが俺は逃げない」

「馬鹿な！　あなたは何もわかっていない！　大魔導師の恐ろしさを！」

「どーみたってあいつが悪もんでガキがやられそうになってんだろうが！　勇者だなんだとちやほやされて、おだてられてよ！　そりゃいざって時になんとかしてくれるってみんなが思ってるからだろうが！　ここで退くような奴がどの面下げて勇者だなんて名乗れるってんだ！」

「わかりました、お気をつけて！」

そう言ったアイゼンの行動は速やかだった。すぐさま隊をまとめて退却の指示を出そうとしてる。

「いや、そこは、私もお供します！　みたいなシーンじゃねーのかよ！」

フォグがアイゼンの方を振り向き慌てて言う。それとガツンと言う音がしたのはほぼ同時だった。

顎だ。巨大な顎があった。それが閉じた音だ。閉じた顎には全身を甲冑で覆った兵士が咥えられていた。鋭い牙は甲冑ごと肉を貫いている。退却を正に始めようとした兵士たちが、食い殺されていた。

顎が上へと伸び上がり、天を向く。それは甲冑もろともぐちゃぐちゃと咀嚼を始め、十分に噛み砕いた後飲み下す。

少し後ずさったフォグにその全容が見えた。蜥蜴だ。死者を押し混ぜ、形を無理やり整えた巨大な蜥蜴の様な物がそこにいた。

死者達はどれほど細切れにされようが関係無かったのだ。それはどのような姿になろう別の形で利用されるように出来ていた。

消化器官などない死肉の塊が肉を飲み込んでなにをするというのか、それはすぐに分かった。背から骨と鉄と肉で出来た翼がせり出し始める。それは取り込んだ血肉を元に、竜のような姿を形作ろうとしていた。

「なんだあれはアイゼン！」

「ドラゴン……のようなものとしか……しかし、何故我々が攻撃されるのです！　テオバルトは目的以外のことには目もくれないはずでは！」

その答えはテオバルトの側の少女から聞くことが出来た。

「テオバルト様……竜が目標をそれましたが」

テオバルトは杖で少女を殴りつけた。

少年を食い殺すべく創造された竜は、少年を無視して防衛軍を襲った。それだけの事だった。

フォグは竜に立ち向かうべく行動を起こした。この状況で少年を守るという選択はない。このままでは防衛軍５００名が全滅してしまう。

＊＊＊＊＊

状況は大して変わっていない。アルはこの僅かに訪れた好機を活かすことが出来なかった。

囲みが破られた時はそれに乗じて逃げようとしたが、思った以上のダメージで素早く動くことは無理だった。

眼の前で死体が組みあがり巨大な蜥蜴になる間も黙って見ている

ことしか出来なかった。その蜥蜴が自分には見向きもせず、やって来た兵士たちに向かったのはただの偶然だ。まっすぐ向かって来られれば、ただ食われるしかなかった。

――手詰まりか。さっきのは勇者だったが、僕への加勢は無理なようだ。

勇者がいた所でこの局面が好転するとも思えなかったがさらに時間を稼げたかもしれない。

――僕は馬鹿か。時間を稼いでどうなる。……いや、回復出来ればあるいは……。

今まで意識したことはなかったが目の前の少女が自分のことを貴族だと言っていた。あの馬鹿力で殴られて生きていたのだから確かにそうなのだろう。ならば即座にとはいかなくても回復は可能なはずだ。貴族は戦闘に特化した頑健な肉体を持っている。戦闘中の負傷をものともせずに死ぬまで戦い続けることが出来ると聞いたことがあった。

アルは今までのような漠然としたものではなく、回復が出来るはずだと信じて負傷した脇腹に意識を集中する。身体の中で何かが蠢いた。内臓が元の形に戻ろうと蠕動を始めたのが感じられる。

悠長にそんなことをしていていいのかなどとは考えない。テオバルトが次にいつ何をしてくるのか分からない以上、今出来ることをするだけだった。

「私が殺しましょうか？」

少女がテオバルトに問う。

「そうだな。竜などと戯れが過ぎた。お前がやれ」

少女がゆっくりと近づいてくる。アルはギリギリまで回復に努めることにした。こいつらがその気になればいつでも殺せるのだろう。何を考えているのか遊んでいるというのならそれは最大限まで利用するだけだ。

少女が拳を大きく引いて顔の横まで持っていく。あからさまな構えだ。ならばカウンターだ。最も練習した中段突きを食らわせる。それだけを考えた。

少女がアルの間合いの一歩手前で止まった。身体のサイズが違うため単純に殴り合えば、アルの攻撃が先に届く。流石にそこまでは油断していないようだった。

少女の目が赤く光っている。本気を出しているということか。先程と同じように覗き込むような目で何かを探っている。

「なるほど。私が相手でなければうまくいったかもしれないですね」

少女は振り向くとリーリアの拳をその両手で受け止めた。

アルの失策ははこの少女の能力を推し量ろうとしなかったことだ。少女の赤い瞳は相手の能力を読み取る。発動状態の能力の構成までも把握することができる。アルが何者かを操作していることまで完全に把握されてしまっていた。

そして少女の誤算はリーリアとアルの力を見誤ったことだ。死者を強化し、操作して襲ってくる。それはわかっていた。どの程度強化され、どのタイミングで発動されるのか、それも手に取るように分かる。少女は振り向き自分めがけて繰り出された右拳を余裕を持って受け止めた。だが止まらない。それは突きのように見えるが実質体当たりに近い。足元から生み出された力は余すことなく前方への突進力へと変換される。完璧な構えが創り出す構造は突きの反動すら再利用しさらなる威力を加えた。受け止めるべく前に構えた両

腕が跳ね飛ばされた。拳はその軌道をまったく変えることなく心臓に叩き込まれる。

少女は崩れ落ちそうになる足元に力をいれ必死に踏みとどまった。反撃を考えたのだ。だがそれは悪手だ。素直に吹き飛ばされればまだ次の手もあったのだろう。リーリアがさらに右足踏み込む。腰を落とし体を開き右肘を繰り出す。それは再度身体の中心に突き刺さった。

少女はアルの後方へと吹き飛んだ。だがアルはそんなことはどうでもよく、リーリアを睨みつけると大声で叫んだ。

「馬鹿か！　何しにきたんだ！　隠れてろと言っただろう！」

「だ、だって！　絶対おかしかったよ！　何かあるって思うよ！　それに助かったでしょ？」

「全然だ！　なんにも状況は変わってないよ！」

リーリアの性格を考えていなかった。ただ来るなと言った所でこの少女が、明らかに慌てた様子のアルを見捨てるわけがない。冷静に論理的に説得すべきだった。

広場に駆け込んできたリーリアを見た時、アルは咄嗟に同調を開始しそのまま突っ込ませた。リーリアを逃がすために操作すれば自分の身動きがとれずただ殺されてしまう。そうなればリーリアも死ぬ為さほど意味はない。それよりも攻撃に参加させることで局面の打開をはかるほうが二人が生き残れる可能性が高いと判断した。

少女は倒した。確かな手応えがあった。だがアルが言うように状況は大して変わっていない。テオバルトにはなんの痛痒も与えていない。

そのテオバルトはアルの目前から忽然と消え失せていた。目を放したつもりはない。常に意識の片隅でテオバルトの動向に注目していた。

「え？」

リーリアが何かに驚いた。アルはリーリアの見ている方、先程少女が飛んでいった方を振り向く。無様に転がったままの少女の隣にテオバルトが立っていた。

「ア、アル君、あの人急にぱって出てきたんだけど……」

アルの目前から消え、リーリアが見ている前に突然現れる。アルは戦慄を覚えた。瞬間移動。そんな事が出来る相手にどう立ち向かえと言うのだ。

「テオバルト様……、申し訳……ありません……」

少女がテオバルトを見上げ、きれぎれの小さな声を振り絞って謝罪する。

「あれは面白いな。……ところでお前はどうなった？」

テオバルトがリーリアを見ながら、あまり関心のないそぶりで少女に様子を尋ねる。

「心臓に致命的な障害が発生しました。余命は5分ありません」

「そうか」

どうでもいいようだった。少女に対する興味を失ったテオバルトはリーリアを見続けていた。

「それはもらっていこう」

アルはテオバルトの動きに全神経を集中させていた。瞬間移動などいう馬鹿げた力でもそれが魔法なら、魔器を通して発動する必要がある。予備動作があるはずだ。

だがその期待はあっけなく裏切られた。

気づけば隣にリーリアがいない。テオバルトの足元、傷ついた少女の隣に横たわっていた。その身体には死者の骨で作られたと思しき拘束具が絡みついてる。骨で出来た人間一人を完全に拘束する牢獄だ。

「な！」

驚きのあまりアルは声を漏らした。

わけがわからない。テオバルトは一切何もしていない。そして瞬間移動だとしてもここまであっさりとリーリアを奪われてしまうというのが理解出来ない。

アルはリーリアの身体を操作したが全く身動きが取れなかった。拘束具は全身に絡みつき可動箇所を完全に抑えつけている。これでは力が発揮出来なかった。

「お前はもういい」

テオバルトが初めてアルの目をまっすぐと見た。虫けらを見るような目だ。

アルはテオバルトへ向かって一直線に駆け出した。冷静さはかけらもなかった。今のアルにはリーリアを取り戻す、それしか頭にない。ただ突っ込んで一撃を喰らわせ、リーリアを手に離脱する。それ以外は全て意識の外へと追いやられた。

回復はある程度出来ていた。貴族の力を意識したアルが一撃を加えることができれば、一矢報いるぐらいは出来たのかもしれない。

「死ね」

ただ一言。つぶやくようなその言葉はアルの身体に劇的な変化をもたらした。

駆け出した足がすぐに止まった。力が入らなくなり足元がぐらつく、目の前が暗くなる、激しく打ちつける雨の音も小さくなっていく。

――なんだこれは？　何が起こっている？

そう思ったのも束の間、アルの心臓が止まった。

12話　覚醒（前書き）

今回は書き方でなんかしっくりこない所もあったのですが、悩んでるといつまで経っても投稿できないのでとりあえずアップします。後で表現的な部分でいじるかも知れません。シナリオ自体はいじりませんので読み直しは必要ないと思いますが……。いろいろとすいません。

12話　覚醒

心臓が止まった。アルは全身を凍りづけにでもされたような感覚に陥った。実際に体温がこれから下がっていくのだろう。いまこの瞬間からそれは始まっている。

だが直ぐには死なない。死ぬつもりもない。リーリアを取り戻す。思考はその一点に集約される。

身体はなんとか生きようともがいていた。心臓は強引にでも血液を送り出そうと震えるが、何かに掴まれでもしたかのようにそれ以上動かない。

貴族の身体はそれでも生き長らえようと全身の筋肉を収縮させ無理やり血液を押し流す。それによりかろうじて脳の機能を維持させていた。

――どうすればいい。このままでは遠からず全身の機能が止まる。死ぬ。

死を意識した瞬間思考が加速した。この状況を打破すべく記憶を洗いざらいひっくり返す。

――何かあったはずだ。なんのために魔法使いになりたいなんて思っていたんだ。こういう時のためだろう！

「魔力は存在力とも言ったよな。だから魔法を食らっても諦めるな。結局最後にモノを言うのは根性だ。魔法に対抗するのは気合いだよ。直接魔法をかけられたとしてもだ、強力な自我を保っていればなんとかなる場合もある」

聞いた時はなにを馬鹿なと思ったキャシーの言葉だ。こんなもの

にでもすがるしかない。気合、根性。だがどうすればいい？

――自我の補強。今更なにか裏打ちのある自信でも用意しろというのか？　なんでもいい、思い出せ！　自分を肯定出来る何かを！　自負を！　誇りを！

――そうだ、本を読んだ。何度も何度も、すり切れるほど！　人間の子供と馬鹿にされ、罵られ、嘲られる他、何もない森での生活で僕を支えたのは本だ。人の言葉で、魔族の言葉で、竜の言葉で、妖精の言葉で、様々な言葉で書かれた様々な本を読んだ。

そして見つけた。それは印刷物ではない、手書きの書物だった。武術について書かれたものだ。アルは魅了される。そこらの魔族の子供では到底及びもつかない、武の深奥を垣間見た。全てを一撃で屠る突きを。攻防一体の構えを。神速の歩法を！

それこそ飽きることもなく読みふけり、ほんの僅かな汚れも虫の食った後も全てを完全に記憶した。その本には曖昧な言葉と稚拙な図しかなかったため、ただ読んだだけでは表面的なことしかわからない。それを推量し、検討し、自らの身体を用いて再構成していった。

それを身に着けるべく練習を重ねた。同じ動作を何度も何度も繰り返した。家の裏手は何度も踏みつけられ、固められ、石のようになり、いまや雑草の一本も生えない。同年代の魔族たちはそのうち手を出して来なくなった。

「アルはすごいわねぇ、何でも知ってるのねぇ」

母の言葉が聞こえる。本で読んだばかりの知識を母親に繰り返し聞かせた。新たに知ったその知識を聞かせたくてたまらなかった。その度に母はそう言ってアルを褒めた。それがとても嬉しかった。

アルの他者との関わりはとても薄い。そんな中での数少ない母による肯定はアルの自信の一部だ。

他には？　もっと何か！

そう、野族を、勇者を圧倒的な力でぶち倒した。本で読み、アルの中で再構成された武術は通用したのだ。それはただ膂力を振るうしか能のない輩を、理と術で捩じ伏せた。

――そう、僕は強い。僕達は強い！　僕とリーリアが力を合わせれば！

そしてリーリア。

「アル君は度胸あるよね……」

なんてことのない一言。これはいつのことか、アルのささいな言動に感嘆するリーリアが思い浮かぶ。

「そうかな？」

素っ気なく返したが、リーリアから寄せられる無条件の信頼が心地よかった。

いつからだろう、リーリアの隣にいるのがこんなにも居心地がいいと感じるようになったのは。

こんなどこの誰ともわからないような奴をよく信用出来るものだと呆れもしたが、一緒にいるのが当たり前になっていた。

――だけど、だめだ！　リーリアから向けられる想いは力には出来ない。してはならない！　あれが歪められた気持ちでないとどうしていえる？

そう思う。だがリーリアの無邪気な、疑うことのないアルにだけ見せた笑顔を思った時、心臓は応えた。ドクン！　と一度脈打つ。

右手が無意識に動いて胸を押さえた。

一度だけだった。心臓はそれ以上ピクリとも動かない。

だが僅かなチャンスを無駄にしたとは思わない。これには意味がある。

アルは生きようと喘ぎのたうつ身体を抑えつけると死をそのまま受け入れることにした。

意識が急速に薄れていく。これは賭けだ。

――心臓が止まった。ならば僕は死んでいる。そして……死んでいるなら……。

アルは自らを死者と無理やり認識した上で能力を使用した。死者の完全蘇生と強化と操作。

心臓を強引に動かす。抵抗はあったが強化した肉体はそれを打ち破る。血流が戻ることにより意識がはっきりとしてくる。

奇妙なものが見えた。煤の塊のような黒い人影だ。小人のような真っ黒な影は目前に立っておりその手をアルの胸につき入れていた。

――お前か！

アルは左手の裏拳を影に叩きつけた。ただ影のようなものが凝り固まったそれはあっさりとその身を散らす。アルは身の自由を取り戻していた。

＊＊＊＊＊

テオバルトは動かなくなったアルを観察していた。
心停止の魔法。対人であればこれほど有効な魔法はない。複数に向けて同時に使えないのが欠点だが使いようでどうにでもなることだろう。
相手の魔力に干渉し、心臓を強制的に停止する。生物の本能として多少の抵抗はあってもテオバルトの魔力があればそれは些細なことだ。よほど魔法に精通して、対抗可能な悪魔と契約でもしていなければまず助かる術はない。
本来心臓が停止した段階で即死する。少なくとも立ってなどいられない。血流の止まった身体は最大限生き長らえるために、生命の維持に全力を尽くそうとする。ただ立つだけに割く労力などなくなってしまうはずだ。
だがアルはその場で立ち止まっている。
テオバルトは少々訝しく思った。あまりにも時間が経ちすぎている。本来ならすでにその場に倒れ込み屍をさらしているはずだ。
アルの右手が動き胸を抑えた。
しかしそれも最後の足掻きかと、テオバルトはそのまま経緯をうかがう。

「シッ！」

息吹と共にアルの左手が勢い良く横に振られた。まるで目の前にいる何かを殴りつけたようだ。
再び目が合った。呼吸は大きく乱れているが、目は光を取り戻している。
どうやら抵抗に成功したらしい。テオバルトはそう判断した。
アルがそこから一歩踏み出した。完全に復帰出来ていないのか足取りが怪しい。
テオバルトの目が細められた。それは踏みつぶして殺したはずの羽虫の羽がぴくりと動いたので注目したといった程度の興味でしか

なかったが、今までのゴミを見るような目からは変わりつつあった。
テオバルトは傍らで倒れ伏している少女を蹴った。

「おい、あれはどうなっている？」

少女はもうほとんど意識を失っていたが、蹴られたことにより朦朧としながらも最後の力を振り絞り返事を返した。

「はい……あれは……自己参照によりループバックか再帰が形成されています。それにより自我、魔力を安定させ、ミクトラを打破したようです。……それに関係あると思われますが魔力知覚野の拡張を感知しました」

「ほう、面白いな。眼球を奪えば使えるか？」

「いえ、魔力知覚野は脳の……機能です。そう単純には……」

「これなら造魔としてまだ期待出来そうだな、何が原因だ？」

少女は答えなかった。テオバルトは再度蹴りつける。だが少女がそれ以上口を開くことはなかった。余命を使い尽くしたようだ。そう判断するとただ邪魔なものをどかすように、大きく少女を蹴飛ばした。見た目どおりの軽い身体は簡単に雨に濡れた石畳を滑りアルの前までやってきた。

「もう少し追い詰めてみるか」

テオバルトはそう言うとアルへと杖を向けた。

＊＊＊＊＊

世界がまるで違うように見える。うすぼんやりとした紗幕が目の前を覆っているようだった。

その幕のようなものには濃淡がある。

天をみれば巨人のような影が駆けている。暴れまわる度に雷が辺りを照らし、雷鳴を轟かせた。

死者たちには黒い影が取り巻いていた。ぼんやりとした影は死者たちの手を取り、足を取りその動きを操っている。

そしてテオバルト。その内から闇を溢れ出させ、あたりを覆いつくさんとしているように見えた。

アルの目には今までとは違う光景が広がっている。

先ほどアルの心臓を鷲掴みにしていた黒い小人もこれらと同一なのだろう。そこから類推するに、魔力や魔法現象の元のようなものが形となって見えているように思えた。

テオバルトを睨みつける。同じ手は食わない。先ほどの小人ならもう怖くはない。あんなものを蹴散らすのはいまや造作も無いことだった。

テオバルトが杖をアルへと向ける。

空から影が奔った。

とっさにアルは避ける。魔力らしき影が見えるようになっているのだ。発動タイミングを読むのは容易い。

だが中途半端に避けることに意味はなかった。影はアルの傍で一気に展開しあたりの大気を支配した。

「ぐッ！」

激痛に声が漏れた。アルの腕がみちみちと音を立てて肘からねじれていく。必死に抵抗したが無駄だった。強大な力で押さえつけられゆっくりと力がかかっていく。やがて右腕は肘からねじ切られ、水溜りにばしゃんと落ちた。その間まったく身動きが出来なかった。

大気に生じた気圧差はアルの右腕をあっさり奪っていった。

苦痛は一瞬だ。出血もそれほどではない。貴族の身体は戦闘を続行するため、痛みを抑え、血流の制御を行う。

だが、問題はそんなことではない。まるで勝ち目がない。絶望的な気分でアルはテオバルトを見つめた。

今のはわざとだ。手加減して右腕だけを狙っていた。その気なら全身のどこにでも攻撃を加えることが出来るだろうし、大気を操れるのなら吹っ飛ばそうが、窒息させようが自由自在だ。そんなもの魔力が見えようがかわしようもない。

「見えているようだな。だが対抗手段がないか。これでは追い詰めるどころかあっさり死んでしまいそうだな」

テオバルトの目はあくまで実験動物を観察するようなものだった。不意に剣が現われた。目の前だ。拳ひとつ分も離れていない。慌てて首を傾けかわす。剣はアルの頬を掠めて飛んでいき、石畳の上にカランと転がった。

大した威力ではない。だが、突然現われた。アルはそれを誰かが投げた瞬間を確認出来なかった。

次に3本の剣が同時に目の前の空間に現われた時にその疑問はより色濃くなった。まさか、時間が止められている？　リーリアを奪われた時もそうだ。まったく知覚出来なかった。

3本の剣を前に、左腕を顔の前に掲げかばいつつ避ける。剣は、肩を腕を脇腹を傷つけ後方へと飛び去った。

「うっ！」

太ももに生じた痛みに動きが止まる。背後からやってきたそれをアルは全く感知出来なかった。短剣が後ろから左の太ももに突き刺さっている。

全方位からの突然の攻撃。為す術がない。

「くそっ！」

アルは刺さった短剣を抜き取るとそのまま構えるか一瞬悩み、捨て去った。今更使い慣れていない武器に頼っている場合ではない判断したためだ。

「アル君、逃げて！」

めまぐるしく変わる状況に呆然としていたリーリアが叫んだ。アルは石畳に横たわり雨に打たれ続けているリーリアを見た。泣いているように見えた。怪我をしたアルを見て、アルの身を案じて悲しみで顔を歪めている。

――大丈夫、助けるから。それが身勝手に生き返らせたりした僕の義務だから。

一歩近づく。テオバルトは動かない。近づけばどうにかできるだろうか？　わからないが他に手段はなかった。

足が銀髪の少女に触れた。ぴくりとも動かない。事切れているのがわかった。手にかけたのは自分だが特に罪悪感はない。ただやり返しただけだ。相手が幼く見える少女だろうとそれは関係なかった。

リーリアを見る。拘束されているためまったく身動きが取れない状態だ。だがその左手が動いているように見えた。必死に左手を開け閉めしている。合図だった。それに気づいたアルはリーリアとの同調を開始した。

『アル君、もういいから！　私のことはもういい！　だから逃げて！』

「無理だよ、逃げる気はないし、こいつも逃がす気なんてないだろ

う」

しかしなぜわざわざそんなことを言うために合図をしてきたのかと訝しむとリーリアが言った。

『作戦があるの！』

リーリアはテオバルトに聞かれないように声を抑え口だけを動かしアルにその作戦を伝えた。

「ふざけるな！　そんなことが出来るか！」

『ほんとにいいの。だって私は本当はもうとっくに死んじゃってるんだから。今はただ何かのおまけみたいに生きてるだけなの。いつかこうなるって覚悟は出来てた。アル君が死ぬ必要なんて全然ない！　アル君は生きて！　だから……さよなら』

リーリアの作戦を聞いてしまえばもうそれ以外のことは思いつかなくなった。悩んでいる暇はない。テオバルトがいつまで遊んでいるのかわからない。

逃げるのは無理だろう。戦って倒すか、倒せずとも何とか隙を作らなくてはならない。

リーリアは覚悟を決めてぎゅっと目をつぶった。震えている。それ以上何もしゃべるつもりはないらしい。

――二人共死ぬ意味はない。それは分かる。けど、その作戦にしても非常に危うい。成功した所で意味がないかもしれない。

「これ以上の変化が無いならやはりお前には意味がなかったな。終わりにするとしよう」

もう迷っていられない。アルは覚悟を決めた。傷ついていない右足で全力で踏み切るとリーリアがいる反対側、テオバルトの右側へと一気に飛んだ。

後半歩の間合い。アルはなくなった右腕を前へと構える。左手は引き腰だめにし、左足は前へ、体重を落とす。呼吸を整える。

テオバルトは一瞬遅れてアルの側を見た。ここまで肉薄されてもまるで焦る気配はない。何事でもない様子だった。

――喰らえ！

銀髪の少女の一撃がテオバルトの腹部に襲いかかった。右足で踏み込み、左拳の縦拳を叩きこむ。

リーリアの作戦は単純なことだった。リーリアとのリンクを切って、足元にいた銀髪の少女を操り攻撃する。リーリアが動けない以上、それが最大の攻撃力を産むことの出来る手段だった。

これが成功する確証はなかった。足で触れ、蘇生し、強化し、操作する。リーリア以外で成功するかはやってみるまで解らなかった。

アルの構えはフェイントだ。死者の精密操作時に同時にはうまく動けない。構えを取った状態で後は銀髪の少女に任せることにした。

それは成功した。だが、そこまでだった。

銀髪の少女の左腕はぐちゃりとひしゃげる。最大限の力が込められた攻撃に少女の腕は耐えられなかった。拳が突き刺さったはずのテオバルトの腹部には触れることすら出来ていない。触れる直前何かに遮られていた。

一拍おいて少女は吹き飛んだ。さらに一拍後、遠くで激突音がする。全てを込めた全力の一撃がそっくりそのまま跳ね返され少女を打ち据えていた。

アルはそれでも自ら一撃を繰り出した。半歩右足を踏み込み、左拳を叩きこむ。

ガツン、と壁の様なものにぶつかった。微動だにしない大地を殴

りつけたような感触。テオバルトまでの指一本分程度の距離が絶望的なまでに遠く感じた。それは加えられた攻撃をそのまま反射しアルを吹き飛ばし、意識も同時に消し飛ばしていた。

＊＊＊＊＊

雨は弱まりつつあった。テオバルトが離れたからか、それとも魔法の効果が切れつつあるのか。

アルはゆっくりと目を開いた。あたりは暗い。既に太陽は沈み、雲の切れ間からは龍の月があたりを照らしていた。

夜空を彩る星以外の天体は、月と呼ばれていた。それらは巨大な生き物の姿で天をゆっくりと移動する。一定周期でその姿を変え、同じ姿でいる期間が一月とされていた。

アルは全身が砕かれたように感じていた。もう動けない。身体は回復すればいいのかもしれないが心が折れた。あんなものにかなうわけがない。

大気を操り、時間を止め、全ての攻撃を跳ね返す。大量の死体を操り、死竜を作り上げ、心臓を直接止める。

勝てるビジョンが全く思い浮かばない。しかもあれはまったく全力ではない。遊んでいただけだ。本気を出されればどれほどのことが出来るのか。アルの心を諦めが支配した。

自分が死んでいない理由はわからない。死んだと思われたのか、殺すまでもないと思われたのか。

アルは仰向けのまま天を見る。視界に端に短剣が映った。少し頭を起こして自らの胸部を確認すればそこには短剣が突き立っていた。

――きっちり止めを刺したつもりだったか。

その短剣はゆっくりと筋肉の収縮によって押し戻されていき、やがてカランと音を立てて転がった。

短剣を突き刺し殺したと思ったテオバルトは去ったのだろう。

だが、そう大した力で刺したわけでもない短剣は心臓には達していない。

――あいつも適当な奴だ。しかし、どんどん人間離れしていくな。この程度では死なないか。

自嘲する。たいした能力だとは思うが、テオバルトを前にしてこんなもの何の役にも立たないと思う。

首を動かしあたりを見回す。月に照らされた広場には誰もいなかった。あるのは死体の山だけだ。用済みとなった屍は広場に打ち捨てられていた。

テオバルトも兵士達も勇者もどこかに行ってしまった。リーリアの姿もない。

自分は生きている。だが、リーリアは再び死に、その骸も奪われた。これはリーリアの思惑通りなのだろうか。自分はこのまま行き続けていいのかとぼんやりと思う。

復讐。何を考えていたのかと思う。あんなものに復讐。笑えてきた。何もわかっていなかった。あんなものが想定できるわけがない。不可侵、絶対に手を出してはいけない存在だ。それが身にしみてわかった。

復讐をあきらめ、リーリアも死に、では自分には何が残るというのか？　今更のんびりと人間の世界を見て回りたいなどとほざくというのか？

もう無理だ。何も考えられない。虚無が心を占めていく。自分がゆっくりと壊れていくのを感じていた。

「何を呆けている！」

アルは声の聞こえた方にゆっくりと目をやった。
血まみれの狼がそこにいた。血は雨に流され足元を真っ赤に染めている。元は灰色なのだろうが、赤ばかりが目についた。その目は月の光を反射し爛々と輝いている。
まさか、と思う。だが狼以外には誰もいない。
その狼は足元にあった、アルの右腕を加えると足をひきずりながら近づいてきた。側までやってくるとその右腕を放り出す。

「お前……どこから……」
「ベアくまと呼べ！　リーリア様から頂いた名だ！　お前などと軽々しく言われたくはないわ！」
「いや……お前、喋れたのか？」
「喋れないなどと言った覚えはない！」
「それはそうだけど……」

アルはますます呆然とした。考えがまとまらない。なぜここにあの狼がいる？　この狼とは街に入る前に分かれた。リーリアの言ったように犬の振りなど出来るわけがないからだ。

「わざわざ持ってきてやったのだ！　さっさとくっ付けて立ち上がれ！　リーリア様を取り戻しに行くぞ！」
「お前どうした、怪我をしてるのか？」
「あの魔導師にやられたのだ！　貴様と同じくな！」
「さっきから、なんで怒鳴りっぱなしなんだよ……」
「不甲斐ない貴様に喝を入れてやっているのであろうが！」
「どうしろって言うんだ？　お前も戦ったのんならわかっただろう？　あれはどうしようもない」
「貴様！」
「それに今更リーリアを取り戻してどうするんだ。また生き返らせ

るのか？　本人の意思を無視して。自分の都合のいい用に想いをねじ曲げて」

アルは力なく答えた。唸りを上げる狼を前にしても恐れを抱くことすらなかった。感情が麻痺している。狼が何を言おうと今更関係がないと思った。

「なるほどな。貴様のおかしな態度はそれが原因か。道中おかしいと思っていたのだ、いいだろう。貴様のその腐れた性根を叩き直してくれるわ」

そう吼えると狼はアルの肩口に噛み付いた。鎖骨のあたりに牙を突き立てる。身動きの取れないアルは苦痛に顔を歪めた。

「何をする！」

「まだわからんのか！　私は貴様の支配下になどないということだ！　いつでも貴様の寝首をかくことが出来るぞ！　リーリア様も同じ事だ！　お前に支配されてなどいない！　あの方の想いはあの方だけのものだ！　断じて貴様などにいいようにされたものではないわ！」

狼はアルに噛み付きながら叫んでいた。器用なことだが、元々狼の口で人の言葉が話せるとも思えない。発声器官以外の何かで会話をしているのだろう。

アルはそれをただ黙って聞いていた。意味がよくわからない。そんなはずはない。生き返らせた者は自然と忠誠を近い支配されるはずだ。アルはそう思っていた。

「……なら何故、お前は僕に従っていた」

「魔獣は元々魔力を操る術を持っている。故に蘇生され自らの魔力

が主により置き換えられていることを自然と悟る。主が死ねば自分も死ぬのだ。そんな状態で逆らうようなものがいると思うのか？人間であるリーリア様は魔力などまったく感じておられないわ！故に貴様の都合や、欲情など一切がリーリア様に関係がない！」

「そんなわけがあるか……僕が試した動物たちは……いや、まさか……」

「あの森にいるのはほとんどが魔獣よ！　そこらの脆弱な生き物と一緒にするでないわ！」

狼がアルの肩からその顎を放し顔を上げ、アルを見下ろす。まだごちゃごちゃ言うようなら今度は首筋にかぶりつくつもりだった。

アルは左手を顔に持って行くと両目を覆った。

「あははははは、そうか、そういうことか、僕は馬鹿だな、少しは賢いつもりでいたんだが……馬鹿丸出だな」

「貴様が馬鹿なのは最初からわかっておるわ！」

「……僕はリーリアを侮辱していたんだな……ちゃんと謝らないとな……」

リーリアがアルの事を満更でもなく思っていることはわかっていた。だが、それは能力の支配下にあるため自然とそのような感情が発生しているものだとばかり思っていた。自作自演の感情になど意味はない。能力を使用して美少女をかしずかせ、好意を向けさせる。こんな惨めなことはないと思っていた。だから距離をおいた。それに流されてしまえば歯止めが効かなくなる。支配者と被支配者という関係などまっぴら御免だと思っていた。

リーリアの顔を思い浮かべる。とても綺麗だ。蘇生し初めて見た時からそう思った。蘇生時に自らの願望が入り混じったのかと思ったぐらいだ。

その碧い大きな瞳で真っ直ぐにアルを見て、楽しそうに笑ってい

たのを思い出す。その純粋な眼差しを自分の邪な想いが創り上げたのかと思うと、己の低劣さにたまらなく嫌気が刺した。

だが、そうではないと言う。あれがリーリア自身の素直な感情の現われだというなら、とても幸せな想いに浸ることが出来る。

「やる気が出てきたよ」

「ふん！　雄は現金だな！　リーリア様の想いがわかればそれか！」

「どうとでもいえ」

まずは回復だ。アルは石畳に転がる自分の右腕を見る。これは死体だ。そう思いながら左手を向ける。左手から黒い影が伸びた。アルの目にはそう見える。なんらかの魔力現象が黒い影のように見えている。影は右腕を包み込んだ。これまでは対象となる死体に触れる必要があったが、少し離れた距離ぐらいなら問題なく能力を行使出来るようになっていた。

右腕がぴくりと動く。右腕は指を器用に動かして這いよってきた。左手で右腕を掴み右肘に押し付ける。死体に対しての蘇生を行った。切断部の接合が行われ、その腕が死体ではなくなったと、アルが認識した時点で能力の効果は切れた。

右手を軽く握り、開く。問題ない。

上体を起こす。全身を鈍痛が包んでいたが、動かすには問題なかった。先ほどまで動けなかったのは精神的な問題だ。

「おい！　私も回復させろ！」

「えらそうだな」

アルは治ったばかりの右腕で狼の頭に触れた。足を痛めているようだったが、その程度はすぐに修復が出来た。

「じゃあ死ににいくか。ベアくま、お前も付き合え」

「無論！」

勝ち目はない。戦えば確実に死ぬ。だが、勝てないことは戦わない理由にならない。死ぬから戦わないなどということはありえない。ここで生きながらえてのうのうと余生を送るなど出来るわけがなかった。

リーリアのために死ぬ。本人は嫌がるかもしれない。だが自然とそう思えた。

「死ぬにしても何か手はないか？」

「知るか！　この牙を突き立てるだけよ！」

「そんなことだろうと思ったよ、お前、直情っぽいからな」

膝を立てゆっくりと力を入れる。両手を膝において立ち上がった。空を見上げる。月の光と、弱くなった雨が降り注いでいた。

あたりを見回した。立って周囲を見回しても様子は変わらなかった。あたりにあるのは死体だけだ。

――この死体を利用するか？

そう考えもしたが、先程散々やられたのだ。同じ事を繰り返すだけだろうと思われた。

――これに似た状況を見たな……死体の山と龍の月。あの儀式だ。他には何がいるのか、地面に書いてあった図がいるのか？

アルは夢で見た情景を思い出していた。悪魔召喚の儀式。だが、地面に描かれていた円陣の詳細までは覚えていなかった。

天を見上げる。龍がこちらを見ている気がした。

アルは大声で叫んだ。

「おい！　見ているのか！　悪魔でも何でもいい！　出てこい！　どんな代償でも払ってやる！」
「貴様！　おかしくなったのか？　何をほざいている！」
「試してみただけだよ。もしかしたら悪魔に伝わるかもしれない」
「そんなもので呼べれば苦労はないわ！」
「呼びましたか？」

そんな声が背後から聞こえてきた。アルと狼はそろって振り向いた。
そこには黒衣の大魔王が穏やかな笑みを浮かべて佇んでいた。

＊＊＊＊＊

悪魔だと言われてもそう信じるしかない。月の明かりに照らされた大魔王は人間離れした美しさを醸し出していた。
ゆっくりとこちらにやってくる。

「こんばんは、いい天気ですね」

いつもの大魔王だった。穏やかな口調だ。実際の天気などまるで頓着していない。
大魔王はこの雨の中まるで濡れていなかった。アルは雨つぶが大魔王にあたる直前に軌道を変えてしまう所を目の当たりにした。まるで雨粒自信に意思があり、大魔王を汚すのを恐れているかのように見えた。

「大魔王……何しに来た？」

「おや？　先程呼ばれた気がしたのですが？」
「悪魔なのか？」
「大魔王ですよ？」

大魔王が可愛く小首を傾げる。いつも通り過ぎて調子が狂いそうだった。

「……まぁいい、力を貸してくれるのか？」
「お父さんは常々「男は死ね！　女は助ける！」言っている人だったのですが、リーリアさんが連れていかれた以上助けないわけにも行きませんね」
「なぜ、リーリアが連れて行かれた事を知っている？」
「見てましたから」
「なに？」
「あなたが戦っている所を最初から見ていましたよ」

当たり前のようにそう言われて、アルは頭に血が上りそうになったが抑えた。大魔王には助力するような義理は元々ない。

「あぁ、何か誤解されているかもしれませんから言っておきますけどリーリアさんとアルさんの事はお友達だと思っていますよ？　戦いに横入りしないと言うのが私のポリシーだというだけのことです」
「なんだよそれは。魔界の流儀か何かか？」
「魔界にはそんなものはありませんよ？　横入り、裏切り、不意打ちなんでもありです。このポリシーはお父さんのものですね。私もそれに従っています」
「……今なら助けてくれるのか？」
「えぇ、戦いは終わりましたからね。それにリーリアさんをあんな男にいいようにされるわけには行きません！　きっとおっぱいが気にいったのですね！　あんなのに触られたらリーリアさんのおっぱ

いが減ってしまいます。それは許せません！」

妙な所に力点がおかれている気がしたがそれは無視することにした。

「しかしリーリアは死んでるんだ。それでも助けてくれるのか？」

「死んでませんよ」

「何？」

「よく目を凝らして左手を見てください、うっすらと線のような者が見えませんか？」

そう言われてもよく分からない。言われたように左手をじっくりと見てみた。

薄い、とても薄い墨で引かれたような頼りない線が左手から中空へと伸びていた。その線はそのまま広場の端、北門へと続く大通りへと伸びている。

「……これは？」

「魔力肢と呼ばれるものですね。それがリーリアさんに繋がっています。ですのでリーリアさんとの絆はまだ切れていませんよ、ふふっ、愛の力でしょうか」

「恥ずかしいんだよ、大魔王」

「それとおめでとうございます」

「何が？」

「それが見えると言うことは魔力知覚が出来ているということです。魔力を見るのは、魔人への第一歩です。その調子でがんばってください」

のんびりした大魔王の言葉を聞いているとやはりおかしな調子になってくる。

こんなことをしている場合ではない。リーリアがどちらへ行ったか検討をしようと思っていた所で図らずもその方角を知ることが出来たのだ。速やかに追うべきだった。

「代償はどうする？　大魔王に頼みごとをするには何が必要だ？」
「これは借りということにしてくださいませんか？」
「借り？　貸しじゃないのか？」
「えぇ、私がアルさんから借りるのです。アルさんの大事な敵と復讐の機会を私の都合で取ってしまうわけですからね」
「ははは、なんだそれ！　優しすぎるんじゃないのか？　大魔王！」
「そうですか？　きまぐれなだけだと思いますけどね」

大魔王が目を逸らしとぼけるように言った。素直じゃない、アルはそう思った。友達だと言ったのは本心だったのだろう。アルが勝てないのは大魔王もわかっているのだ。でもそうは言わなかった。代わりにやってやるとも言わない。借りなのだと、アルには不本意だろうが自分がその機会を奪うのだと言う。

「その借りを僕はどうやって返してもらえばいいんだ？」

これではただ助けられているだけだと思ったアルは聞いた。借りだとは言うがこれは実質貸しでしかない。

「そうですね。では私でもかなわないような凄い敵があらわれたら、それを代わりに差し上げます。それで貸し借りなしです」
「大魔王の敵ってなんだよ」
「それはもう、物凄い敵ですよ」
「ははっ、わかったよ。それでいい」

アルは即答した。もしそれがとんでもない敵だったとしてもその

時は大魔王の代わりに死ねばいい。そう思った。

「では、行きましょうか。あまりのんびりしていると、リーリアさんのおっぱいが減ってしまいます！」

「のんびりしてる原因のほぼ全ては大魔王のせいだと思うけど」

「少し急いで行きましょうか。移動に力を使うのはポリシーから外れるのですが、今回はやむを得ませんね」

そう言うとアルの腰を左手で抱いた。右手は猫の子でも掴むように狼の首根っこを持っている。

大魔王に密着されアルは少し心拍数が上がった。大魔王の柔らかい感触に顔を赤くする。

「さぁ！　私のおっぱいを取り返しに行きますよ！」

「あれは僕のだ、お前のじゃない！」

「むぅ、仕方ないですね……たまには貸してください」

「考えておくよ」

そんな軽口を叩いていたかと思うと、次の瞬間には二人と一匹の姿は広場から消えていた。

雨の止んだ広場には死体の山だけが残っていた。

13話　対決（前書き）

拍手でメッセージもらって嬉しくて調子にのって一気に書いてしまいました。
とりあえず更新します。おかしなとこ見つけたら直すのはいつも通りということでｗ

13話　対決

ゴミの中に、ゴミと見紛うようなバラックが立ち並んでいる。この一帯は夜になっても何かしらの人が蠢いていた。

そこかしこで篝火が焚かれている。その回りに集まり何かを焼いてそれを食すものや、ただふらふらと歩きまわるもの、何かを殴りつけ、切りつけ乱闘を繰り返すものなど様々だ。

ここはベイヤーの北門外、貧民街と化したゴミ捨て場だ。

ゴミの中、雨でぬかるんだ大地を異形の集団が行進している。

全身を欠損し、腐らせ、血をしたたらせる歪んだ身体を持つ死者が歩いて行く。

死者たちは一人の少女を数人がかりで掲げていた。

絹のようになめらかな金の髪が垂れ下がり、行進にあわせてさらさらと揺れている。その肌は青白くとても綺麗に見えたが生きているようには見えなかった。

少女は全身を骨で出来た拘束具に囚われていたが、それがなくとも動くことはないだろう。

その集団の先頭には黒衣の魔導師、テオバルトがいる。

北側へとやってきたことにはそれほど意味はない。自らの居城へ帰るつもりだったが、それはここから西側にある。ここで乗り物を調達して移動手段とするつもりだった。

高速移動魔法を使用してもよかったが、それは一度使用するたびに再契約が必要となる面倒なものだった。それよりも、北門の外でうろうろしている人間を材料に乗騎を作成するほうがまだ簡単だった。

テオバルトは拘束されたままの少女を見た。面白い。そう思う。

従者の少女を倒した一撃は、数千年の時を生きたこの男も思わず見惚れるようなものだった。

操っていたのはあの失敗作だったのかも知れないが、この少女の

美しさはそれを除いてもあるように感じた。自分が手を加えればさらなる芸術品として美しさを増すだろうと思いこうやって持ってきている。

周囲では死んだような目をしたスラムの住人たちが、遠巻きに見ていた。あからさまに怪しい集団を見ても逃げようとはしない。どうでもいいという様子だ。ただそこにいられるのが邪魔なのだろう。

こいつらを利用してまた竜でも作るか。飛んでいくのが早いだろうとテオバルトが考えていると、不意に突風が吹き荒れた。

妙な風だった。それは上空から大地へと吹き降ろしている。

その場にいた者達でその不自然さに気づいた者が天を見上げた。

何かがやって来る。

そう身構えた時それは起きた。大爆発だ。貧民達は天から地をめがけて放たれる巨大な槌を幻視した。そのようなものでしかこの有様はありえない。辻褄が合わない。

耳をつんざくような爆発音と共にそれはバラックを、ゴミの山を根こそぎ吹き飛ばし、大地を抉った。土と泥が柱のように上方へと吹き上げられ立ち上る。

土砂が雨のように降り注ぐ、その爆発の中心には何かが立っていた。それは抉られ、すり鉢状となった穴の底からゆっくりと上がってくる。

その手に少年と狼を抱えた少女、大魔王だった。

「大丈夫ですか？」

大魔王は、少年と狼を適当に放り出した。べしゃっとぬかるみに落ちる。一人と一匹は不快さに顔をしかめ猛烈に抗議した。

「死ぬかと思ったよ！　なんだあれは！」

「貴様！　殺す気か！」

「走ってみたのですが？」

「走ってない！　一歩でここまで飛んでくるのを走るとは言わない！」

「走ると歩くの違いをご存知ですか？　両足が地面から離れることがあるのを走ると言うのですよ？」

「それぐらい知ってるよ！　その説明からは両足で交互に地面を蹴るっての抜けてるよね！」

アルと狼は何がなんだかわからないうちに瞬時に北門外までやってきていた。ただの人間と狼なら死んでいただろうという急激な負荷をかけられての高速移動だ。

だがアルにはそんなことに拘泥している暇はない。

「リーリア！」

アルがリーリアを見つけて叫ぶ。

「そうです、そうです、まずはリーリアさんですね」

大魔王がふわりと浮いた。軽く跳躍したのだろう。リーリアを担いでいる死者の頭部に降り立つと、リーリアをその手に抱いた。抵抗の様子を見せた死者の腐りかけた腕は簡単に引き千切られる。

リーリアを横抱きにした大魔王は、死者の頭を蹴り飛びたつと直ぐにアルの元へと戻ってきた。拍子抜けするほどあっさりとリーリアを奪還している。

大魔王はリーリアをそっとぬかるんだ地面に横たえた。

その間テオバルトは何もしなかったわけではない。狂嵐の悪魔ゼトによる気圧操作を行い、大魔王に攻撃をしかけていた。だがそれは大魔王になんらダメージを与えてはいない。

テオバルトはさして驚かない。空気を操る魔法は攻撃手段として魔法使いの間で広く普及しているため対抗手段も無数に考案されて

いる。相手がそれなりの魔法使いなら通用しないことがあると知っているからだ。テオバルトは黒衣の少女をそれなりのレベルの魔法使いだと認識した。

「これは……ただのおっぱい好きの男かと思っていたのですが、なかなかいい趣味をしていますね」

大魔王がリーリア見ている。骨で出来た拘束具は全身を絡めとっている。その骨の隙間から胸が押し出されるように強調されていた。アルはリーリアの傍らにしゃがみ込むと骨の拘束具を外そうと力を込めてみたがびくともしない。

「おい！　これはなんとか出来ないのか？」
「少々惜しいですが、仕方ないですね」

そう言うと大魔王はあっさりと拘束具を引き千切った。ぶちぶちと数カ所をちぎり取ると拘束具はぼろぼろと崩れ去る。
アルは呆然と大魔王を見上げた。まるでこよりで出来た紐でもちぎるようだった。まったく力をこめているように見えない。

「お前……何者だよ」
「大魔王です」

大魔王が腰に手を当て胸を張る。妙に子供っぽいしぐさだ。

「あぁ、そうだな。聞いた僕が馬鹿だった」
「ではリーリアさんはお任せしますね。私はあちらのお馬鹿さんにお仕置きです。それとも一緒に戦いますか？」

少し考えこんでからアルは言った。

「いや、これはもう大魔王、あんたに貸した戦いだ。まかせる」
「まかされました」
大魔王はテオバルトの方へとゆっくりと歩き出した。

＊＊＊＊＊

「おい、リーリア！」
いつもより青白い顔をしたリーリアを見てアルは焦った。首筋に手をあて鼓動を確かめる。微かに脈動を感じた。口の前に手をやると呼吸が感じられる。アルは胸をなでおろした。
ベアくまがリーリアの頬をぺろぺろと慈しむように舐めている。アルに対しての威勢のいい態度とはまるで違い、とても心配そうにしている様子だ。
アルは首の後ろに手をやりそっと上体を持ち上げ、頭を自分の太ももの上に置いた。意識を失っている人間をどうしていいかはわからなかったが、泥だらけの地面に横たえたままというのが可哀想に思えたからだ。
額に手をやりそっと撫でる。冷たかった。触れて直接能力を行使する。大丈夫なはずだ。
「う……」
リーリアが軽く呻いた。そしてゆっくりと目を開く。
「おい！　リーリア！　僕だ！　わかるか？」

「……え、アル君？」
「そうだ、アルだ！　忘れてないか！」
「忘れるって……なんで？」

アルの心配は、蘇生時にどこまで生前の状態が保持できているか確証が持てていない所にある。今回の場合は、結局リンクは維持できていたようなので問題はなかったが、再度死んで蘇生させたとなるとそこが不安な点だった。だがそれは杞憂に終わった。

「なんか……大げさだね、あれ、ベアくまちゃん？」
「わん！」
「お前……いまさら、わん！　はないだろ？」
「黙れガキが！」
「え？　え？　ベアくまちゃん？　え？　夢？」
「こいつについては後で説明するよ。身体の調子はどうだ？」
「う、うん、別になんともない……と、思う」
「そうか、よかった」
「私……どうなったの？」
「あの男に連れていかれそうになったのを、大魔王が助けてくれた」
「え、パエリアさん？」
「そうだよ」
「そっか……そうだね、大魔王だもんね」
「あぁ……その、すまなかった」

逡巡した末にアルは謝った。どう切り出していいのかわからなかった。リーリアの想いとアルの想い、どうまとめればいいのかわからなかった。とりあえず謝った。

「え、何が？」
「リーリアを見捨てるような真似をした」

「いいよ、そんな、私なんてもういつ死んだって……」
「そんなことをもう二度と言うな！」
「だ、だって……私アル君に迷惑かけてるじゃない……私がいなかったらアル君だってもっと自由に……」
「迷惑なんかじゃない、いつまでだってリーリアと一緒にいる。そう言っただろう？」
「でも……それはアル君が責任を感じて……」

そうじゃない。そう言って思いの丈をぶつけてしまうのは簡単だったがそれは躊躇われた。今ここで単に口にだして言った言葉にどれだけの価値があるというのか。

それはこれからの行動で示すべきだ。アルはそう思った。

アルが真っ直ぐにリーリアを見つめた。今までにない真剣な眼差しにリーリアの心拍数が上がった。じっと見つめられ続け、恥ずかしさで真っ赤になってしまう。

リーリアの心臓がますます早鐘を打つようになっていった。

――こ、これは、まさか、でも、なんかそれっぽいと言うか。この状況がそういう感じって言うか……。それなりにロマンチックでもあるというか、助けられた囚われのお姫様的というか……。

リーリアはアルが口を開くのを今かと待ち構えた。これ以上焦らされると早くなりすぎた心臓が逆に止まってしまいそうだと思う。

「責任か。確かにそれもある。だから……その責任は果たす。リーリア、君をちゃんと生き返らせる。大魔王だとか、大魔導師だとか馬鹿げた連中がいるんだ。どこかにそんな手段もきっとある！　だから……それまではずっと一緒だ」
「……なんかビミョー……」

それはリーリアの期待していたものとは少し違っていた。これでは期限付だということになってしまう。では、無事生き返ればどうなるのか。その先のビジョンがない。落胆に目を細めた。

「え？」

「もっと情熱的な……まぁいいや！　わかったよ、ちゃんと生き返らせてね！　それまではずっと一緒なんでしょ？」

「あぁ」

「だったら今はそれでいいや！　これからもよろしくね！」

リーリアはまだアルの心の壁のようなものを感じてはいたが、それは随分ともろくなってしまっているようにも感じた。もう一押しでガラガラと崩れ去ってしまいそうだ。それを想像するとなんだか楽しい気分になった。

リーリアが微笑んで手を伸ばす。アルはその手を取って握りしめた。

その様子をベアくまは苦々しげに見つめていたが、リーリアが嬉しそうにしているのを見てそれはそれでよいかと思い直した。

＊＊＊＊＊

「直接挑戦された訳でもないですし、普段ならあなた程度は無視すると思うのですが、今回はアルさんとリーリアさんの事がありますからね。申し訳ありませんが少しお付き合いください」

大魔王はテオバルトの前にやってきてそう言った。

テオバルトは目の前の敵を推し量る。魔法使いだろうと思う。それならばそこにいる失敗作よりは多少警戒度は上がる。だがそれだ

けだ。魔法使いとしての実力で自分に適うものなどいない。そのことをこの男は数千年の生の中で確信している。

少々思い上がっている小娘に実力差を見せつける。そう思い軽く手を振った。まずは小手調べだ。

テオバルトの前に炎弾が現われ、高速で大魔王に放たれた。

拳大の炎の塊だ。大魔王はそれをなんなく右手で受け止めた。

「これは……何がしたいのでしょうか？　意味がわからないのですが……これは燐の様なものを地中から集めて発火させ、投げつけたということだと思うんですが？」

大魔王は手の中の炎を不思議そうに見つめる。しげしげと見た後軽く握りつぶすと納得の顔をした。

「あぁ、もしかして私を燃やそうとしたのですか？　でもそれならこんな回りくどいことをしなくてもいいんじゃないですか？　こうすればいいだけでしょう？」

大魔王のその言葉と、テオバルトの黒衣が炎を上げて燃え始めたのは同時だ。テオバルトはあくまで冷静だ。警戒レベルをもう少しあげる。思った以上の実力者らしい。

まず発動の瞬間が見えない。これには自分と同じような仕掛けを使用していると推測した。テオバルト自身は魔器を体内に内蔵することで発動手順が外部に悟られないようにしていた。具体的には眼球だ。眼球を魔器と入れ替えている。焦点を合わせる眼の筋肉の力で魔器を操作し、契約悪魔への指示を出している。他にもいくつか体内に予備の魔器も仕込んでいた。なので発動動作が見えないということ自体はテオバルトに取っては意外ではなかった。この発想にいたる者も少数ながらいることを知っている。

それよりもやっかいなのが、魔術防御を全てすり抜けられたこと

だ。テオバルトは常時様々な防御用の魔法を使用し続けている。それらが全く用をなさなかった。これも、幾重にも重ねられたそれぞれの魔法を識別し、それぞれに対しての対抗手段を取ることで可能ではあった。だが、そうなるとこの小娘の魔法使いとしての実力はかなりのものということになる。

テオバルトは黒衣の炎を打ち消した。特殊な炎というわけではなかったので、単純な延焼制御でそれは可能だ。

「あなた……もしかして今何故燃やされたのかわかってないんじゃないですか？」

大魔王は呆れたように言った。

テオバルトは少女のその言葉をはったりと決めつけた。炎を司る悪魔はそれこそ無数に存在する。テオバルトが知らないものもあるだろう、ただ燃やされただけでそこまで警戒する必要はないと考えた。対処出来るなら問題ない。

「その様子だと私から攻撃するとすぐに終わってしまいそうですね、いいですよ。お好きなようにやってみてください」

これまでの人生でテオバルトに対してここまで見下すような物言いをした者は数少ない。契約悪魔数が１０００を超えてからの千年では皆無といっていい。

それはテオバルトの逆鱗に触れた。すぐに終わらせるつもりはない。まずは全く抵抗できずに為す術もなく襲われる恐怖を与える。それから数千年練り上げた魔の真髄と言うものを見せつけてやろうと考えた。

時を司る悪魔テテス、その力を行使する。

テオバルトの主観において全てが停止した。これはテオバルトの切り札でもあるし、常用している魔法でもあった。時間を止める。

その効果は劇的だ。どんな強者であろうとこの魔法を前に太刀打ち出来るはずもない。他の魔法に比べて魔力消費が極端に大きいと言う訳でもないし、ほぼ不老を獲得しているテオバルトに取って自分だけ時を重ねてしまうというのは大した問題ではなく気軽に使用できた。

テオバルトは動きを止めた大魔王へとゆっくりと近づいた。特にこの魔法の制限時間はないため焦る必要はない。

大魔王の前までやってきたテオバルトはじっくりとその美しい顔を眺めた。「い」と言った状態で口が開いたまま止まっている。そんな一瞬でさえ美しいというのは驚嘆に値した。

このふざけた小娘をどうしてくれようと、テオバルトは考える。この状態でただ殺すのは簡単だがそれでは気が済まない。たっぷりと恐怖をその身に刻み込まねばならない。

手足をもぐか、眼球を抉るか、内臓を引きずりだすか。それでは駄目だ。単純すぎると考えたテオバルトはまず辱めを与えることに決めた。ゆっくりと己の愚かしさを染みるように教え込みたい。そう思えば肉体に損傷を与えるのは後回しだ。

まず服を剥ぐ。そう決めたテオバルトは大魔王の胸元へと手を伸ばした。

「やっぱりおっぱいが好きなのですか？」

テオバルトの手が止まった。衝撃を感じていた。これまでの人生で最大の衝撃と言ってもいい。ありえないことが起きていた。ほぼ表情というものを失っているとすら見えたテオバルトの顔が驚きに歪む。

「なんだと？」

そんな単純な一言しか出てこない。

「私の支配した時の止まった世界で何故貴様が動ける！」

声を荒らげたことなど記憶の彼方だ。ここまで取り乱せる自分が信じられない。

「そう言われましても……時間が止まるなんてあるわけないですよ？」

「ふ……ふざけるな！」

激昂した。ただ怒りのままに叫んだ。

「テテスさんもお茶目ですよね。あなたの魔法は、高速思考制御と、流体制御、肉体強化、高速移動による衝撃の中和等の複数の魔法の合わせ技でしかないですよ。そもそも時間が止まった中であなただけが動けるってどんな理屈なんですか？」

テオバルトは声を失った。

「私は今、あなたの速度に合わせて動いているだけです。時が止まったふりというのもめんどくさいですね。間抜けな顔をしたままあなたが近づいてくるのを待つのは嫌な気分でした、こんな顔を見られたらファンが減ってしまうかもしれません。まぁテテスさんは時を司るなんて引込み付かないこと言っちゃって後に引けなくなったんでしょうか？」

テオバルトは一歩後ずさる。何も言う気になれない。

「では、そろそろこんな状態は止めにしましょうか。アルさん達が見ていない前で決着がつくというのもつまらないでしょう？」

時が動き出した。時が止まっているように見えた世界からテオバルトは解放された。
思わず膝をついた。そのまま大魔王を見上げる。

「貴様！　何者だ！」
「そういえば名乗っていませんでしたか。大魔王、大魔王パエリアと言います。以後お見知りおきを。まぁ、以後はないですけどね」
「そんなわけはあるまい……大魔王がエルシアから出てくるなどありえん、大魔王はここ千年以上代替わりなどしていない」

魔族国家エルシアの大魔王。幾度か謁見の機会があったためその姿には覚えがある。だがそれは、壮年の男の姿をしていた。このような少女とは似ても似つかない。

「あぁ、またその話ですか。めんどくさいです。そのうちそっちの大魔王さんとも話をつけないといけませんね。私が大魔王だと言ってるんですからそれでいいじゃないですか」

大魔王は拗ねたように言った。
テオバルトは立ち上がる。この少女が何を言っているのかわからない。それは尽く己の常識に反している。
理解不能だ。ではどうするか？　己の理解が及ばないような存在なら消してしまうしかない。自我を保つにはそうするしかなかった。
狂嵐の悪魔ゼトに再度指示を出す。だが何も起こらない。ここに至って最初に少女に対して行使した魔法が、防がれたわけではなく、ただ発動しなかったということに気づいた。

「なぜだ！」

己の支配下の悪魔がその命令に逆らったことなど一度もない。何かがおかしい。この少女が現れてから己の見ている世界が変質していくようだ。

「あぁ、できたら西方系の方を使うのはやめておいたほうがいいですよ。西方の方はまず私に逆らいませんし、こちらが引くぐらい従順です。先ほどのテテスさんのように南方系の方がいと思います。南方の方はいまだに私に逆らって何かと喧嘩売ってきますからね。喜んで戦ってくれるんじゃないですか？」

西方？　南方？　なんのことだかわからない。悪魔をそのように分類する方法など聞いたこともなかった。

「なんだかわからないって顔ですね。単純なことですよ？　魔界では同じような気性の方が集まることが多いですからね。地方ごとに固まっているんです。西とか南とかはそのままです。魔界のどの方面にその方達がおられるかということです」

テオバルトは悪魔との交渉過程で魔界についてもある程度の知識は得ていた。だがこの少女の知識は自分よりもより奥深いと感じる。それは認めることにした。自分が最強に近い存在だと自負はしているが、絶対の存在であるとまで自惚れているわけでもない。更に警戒度をあげる。ただ未だ相手は何もしてこない。その為その脅威をどの程度と判断すればいいのか、まだ確証がつかめない。だが今までで最強の存在だと仮定することに決めた。

この場で使用できる最大の魔法を考える。大規模な儀式や設備がいらず、即座に発動出来るなかで最強の魔法。一つ思い浮かんだ。

星落とし。

天を彷徨う、小さな星を引きずり落とし敵にぶつける。小さいとはいってもそれは直径１ｋｍを超える質量の塊だ。サイズによって

威力は増減するが、直撃すれば首都といえども壊滅は間違いなく、国ですら危うい。

テオバルトは即座にそれを発動した。人間の営みになど興味はない。この程度の国がどうなろうと知ったことではなかった。

テオバルトは大魔王を見た。つまらなさそうにしている。暇を持て余しているようだった。

「やっぱり魔法なんてつまらないですよ。手が尽きたということなら終わらせますけどいいですか？」

「その余裕も終わりだ」

テオバルトが無表情で言い放つ。先ほどまでの混乱はなりを潜めていた。最強に類する魔法の発動により勝算を得た。発動さえしてしまえば、後はただの大質量をぶつけるだけの攻撃だ。どれほどの魔法を使えようと今更この魔法を止めることはできない。それは発動したテオバルトにすら無理な話だ。

テオバルトの知る限りこの規模の物理攻撃を防ぐことの出来る魔法は皆無だ。

大魔王が何かに気づいたのか空を見上げた。龍の月と満点の星々。雨雲は既に去り眩しいほどに輝いている。そこに赤い点が一つ現われた。赤熱化した直径１０ｋｍの鉱石の塊。小隕石（メテオ）。それは真っ直ぐに大魔王を目掛けてやってきていた。もちろんその被害は大魔王だけに留まるものではない。周囲一帯が壊滅するのはもちろん、激突時に発生する土砂は大気中に巻き上げられ百年単位で空を覆うだろう。それは陽の光を遮り寒冷の時代をもたらす。

「はぁ、なんでこう面倒くさいことをするんでしょうか。人の迷惑を考えてくださいよ」

テオバルトは隕石の直撃の寸前に逃げ去るつもりだった。この場

にいてはテオバルトといえども無事ではいられない。直接攻撃を反射する魔術もこの規模の質量の直撃には耐えられない。

大魔王はテオバルトなど、どうでもいいようでゴミの山を漁り始めた。ごそごそとやっていたかと思うと何かを取り出す。

ずるりと引き出されたそれは金属の塊だった。アイロンストーブと呼ばれるものだ。複数のアイロンを同時に熱するための設備で一抱えほどもある。

それを空めがけて投げた。下手投げだ。無造作にひきずるように持っていたアイロンストーブを軽くぶん投げた。一切重さを感じさせない動きだ。大魔王を見ていると、重量や硬度に関する感覚が狂ってくるようだった。

テオバルトは無意識にそれを目で追ってしまった。

目視出来るほどの大きさになっていた赤熱化した塊は、テオバルトが見ている前で、ふっとその姿を消した。砕かれたのか、弾かれたのかそれはわからなかった。

「大体ですね、人の力を使って何かしようというのがいただけません。魔法使いなんて言っても自分で何もしていないじゃないですか」

大魔王は何事もなかったかのようにテオバルトに語りかけてきた。

「一々対応するのもめんどくさいので、周りを巻き込むようなのはやめてもらいたいですね。他に私だけに効くような攻撃はないんですか？」

大魔王は本当に面倒くさそうにそう言った。

テオバルトは空の彼方を見たままだった。その衝撃は時の止まった世界で話しかけられた時以上だ。あれはまだ分かる。相手も同じような魔法を使ってきたとすれば、あの状況はありえる。大魔王の悪戯によって必要以上に驚愕したが今考えれば同じ程度の実力者同

士であればありえたのだ。
だが、これはどうしたことか？　星を砕いたにせよ、弾いたにせよそれは小隕石の質量に打ち勝ったということだ。それ程の魔法が存在するというのか？　テオバルトにはわからなかった。心当たりはある。星落としが最強の魔法というわけではない。ただそれらには儀式や設備が必要だ。より強力な悪魔を使役する為の準備を必要とする。
少女は特に何をしたようにも見えなかった。魔法を使ったようにも見えない。ただ何かの塊を投げつけただけだった。
ここまでくればテオバルトにもわかった。この少女は常識の埒外、とても今のままで適う相手ではないということがだ。そう、今のままでは。何も諦めたわけではない。負けを認めることなど出来ない。準備が必要だ。一旦仕切り直す必要がある。
テオバルトは大魔王を睨みつける。憤怒の形相。ここまで荒ぶったことはかつてない。必ずこの少女を蹂躙し、跪かせると心に誓った。

「いいだろう、この場は退いてやる」

忸怩たる思いだ。ここまで打ちのめされ、無様な気分になったのはいつ以来か。彼とて最初から最強の大魔導師として君臨していたわけではない。魔法使いとして歩み出してすぐの頃は何度も死にそうな目にあい、それを乗り越えてきた。
久しぶりのこの感覚をテオバルトは必要なものだと考えた。最近の退屈とすらいえる日常を思えば気概すら湧いてこようというものだ。
テオバルトの姿が掻き消えた。使用回数制限があるため使いあぐねていた高速移動魔法。それを使用した。

「え？　おい！　大魔王！」

ここまでの戦っているのかそうでないのかよくわからない経緯を見ていたアルは叫んだ。これは不味い。逃げられてしまえば、今度いつ何時やってこられるかわからない。これからもその恐怖に怯えながら暮らすことになる。

「まぁまぁ、アルさん、これは私の戦いなんですから口出しは無用ですよ？」

大魔王はいつものように可憐に笑った。

＊＊＊＊＊

そこは第一魔族領と呼ばれる地域のすぐ側だ。巨大な城がある。第一魔族領の発生ともに廃棄された元王城だ。

周囲には城下街が広がっている。この城下街の半分程は魔族領の圏内だ。そこには魔族が生息している。

王城のすぐそば、魔族領圏外の城下街はどれほどの年月が経っているのかわからないがとうの昔に朽ち果てていた。

魔族は基本的には魔族領から出てこないとはいえ、目と鼻の先にある王城については何度も占領を試みていた。

だが、それは一人の人間によってことごとく退けられた。

大魔導師テオバルト、この男の手によってだ。現在では魔族とは同盟関係にある。魔族側もこの人間離れした大魔導師と敵対するより協力関係にあったほうが都合がいいと判断したためだ。元々人間側の立場かどうかも怪しいテオバルトはあっさりと魔族側についた。

テオバルトは廃棄されたこの城を居城として使用している。

元々そう大した城でもなかったが、幾重にも重ねられた魔導的改

良により異形の城と化している。無秩序に増築された城は歪で巨大な姿をしていた。

この城は魔族に対するためにこのような姿になったわけではない。目的は別のところにあった。テオバルトに敵対する7人の魔女。その襲撃から身を守り、撃退するためだ。その目的は4人の魔女を打ち倒した時点で半ば達成されていた。魔女たちもそれ以来沈黙している。7人で無理だったものを3人で襲撃したところで結果は目に見えているためだ。

テオバルトはその城の門前に現れた。高速移動魔法はどれほど早かろうが空間転移のようなものではない。建物内には入れなかった。自らの居城を見上げる。数千年をかけて改良に改良を重ねた伏魔殿。久々にその全機能を稼働させようと考えた。

「面白いですね。こういうの好きですよ。あなたを倒したら私のものということでいいですよね？」

まさか、という思いとやはりという思いが半々だ。今日何度目の衝撃か。テオバルトはゆっくりと振り向いた。

大魔王が城を見上げている。天高くそびえる尖塔を追うように見上げていき、そり返りそうになっている。どこか楽しげだった。

「貴様……どうやってここに……」

思ったことがそのまま口に出た。取り繕うことも出来ない。

「知らなかったんですか？　大魔王からは逃げられないんですよ？」

大魔王は当たり前のようにそう言った。

１４話　光（前書き）

なにか急にアクセスが増えて戸惑っています。

急に注目されるようになってから初めての更新ですが、いつも勢いで書いたまま投稿して、後でちょくちょく直すような感じです。誤字脱字等ご指摘いただければありがたいです。今までの分も誤字脱字は山ほどあるんですが、それも2章終わった時点でいろいろ手を入れようと思っていますのでご協力お願いします。

あと、１５話も書きました。この後に投稿します。

14話　光

「逃げられて追いかけてきたというのが正確な所ですが、場所を変えていただけるならありがたいと思いまして便乗してみました。でも、本当に逃さないでおこうと思ったら出来たんですよ？」

テオバルトの形容しがたい表情を非難と捉えたのか、少し言い訳がましく大魔王が言った。

城門と城壁の間はちょっとした庭園になっている。月の光が異様な庭園を照らし出していた。

草花の類はあまりないがそれなりに手入れが行われている様子が見受けられる。異様なのは庭園の各所に設置された彫像だ。ほとんどが人の姿で苦悶の表情を浮かべていた。生きていた人間をそのまま固めたかのような生々しいオブジェだ。正面から乗り込んで来たものはこの異様な雰囲気に恐れをなすことだろう。

大魔王は見あげるのには飽きたのか庭園を見渡していた。テオバルトは少しずつ後ずさり距離を取ろうとしている。

テオバルトの帰還を察知したのか城が動きを見せた。

この城は土台となっている部分は、古い時代の物で石造りの砦のような武骨なものだ。その上に無秩序に増築された部分がのっている。その増築部分に設置されていた彫像が動き出した。人と蝙蝠を混ぜあわせたような醜悪な容姿の怪物。ガーゴイルと呼ばれる魔導人形だ。それらが一斉に飛び立つと、テオバルトと大魔王の間に降り立つ。

それに呼応するかのように重厚な木製の城門も内側へと開きだし、中からは全身を甲冑で固めた兵士達が現われた。テオバルトを囲むように布陣する。

ガーゴイルの一体が大魔王に襲いかかる。突進してくると鋭い鉤爪を大魔王の顔目掛けて振り下ろした。

大魔王はその鉤爪を受け止めると、ガーゴイルをつかんだまま水平になぎ払う。石が砕け散る音が連続して発生し、ほとんどのガーゴイルが破壊されていた。大魔王の右手には、ガーゴイルの肘から先だけが残っている。ガーゴイルの破砕で発生した破片はまわりの彫像をも巻き込んで庭園を瓦礫の山へと変えていた。

テオバルトはそのすきに兵士たちと共に城内へと逃げ去っている。大魔王もそれは見逃した。何かをするためにここまでやってきたのだろうから、それを見ずにここで決着をつけてしまうのもつまらない。

大魔王はガーゴイルの腕を捨てると城門へとゆっくり歩き出した。

「ちょっとちょっと！」

若い女の声が聞こえた。大魔王はその声の方を見る。城門手前にある一体の彫像からその声はしていた。

「こんばんは」

女の彫像だ。他と比べると穏やかな顔をしており、三角帽子にマントとおとぎ話に出てくるような魔女のような姿だ。

大魔王は丁寧に挨拶をする。

「はい、こんばんは。っていやぁ、人と会ったの何年ぶり？　１００年以上ここにいると思うけどめったに人こないからねぇ」

「ここで何をされているんですか？」

「見てわかんない？」

「修行？」

「どんな苦行よ、それ。なんで１００年以上ここでつったってなきゃいけないのよ。あいつよ、あいつ。テオバルトに石にされたの」

「石になりたいとは変わった趣味ですね」

「だから、好きでやってんじゃないって。あいつがたまに襲ってくるやつらを石に変えてこの庭に放置してんのよ。悪趣味だよねぇ」
「あぁ、ではここの彫像はみなさんそういう方ですか？　だとしたら悪いことをしましたね。大半壊してしまいましたが」

大魔王はあたりを見回した。ガーゴイルをなぎはらった際にあたりの彫像も巻き添えを食らって半壊している。

「大丈夫、大丈夫。私以外はみんな死んでるようなもんだし。私は魔女だからね。こうやって何とか意識も保ってるし話ぐらいは出来るってわけ」
「そうでしたか。それは退屈そうですね」
「もう死ぬほど退屈だって！　あぁ、それはそうと何しに来たの？　もしかしてテオバルト殺りに来た？」
「多分そうです」

曖昧だがそう答えた。殺すかどうかはまだ決まっていなかった。

「そっかぁ、でもやめといたほうがいいと思うよ？　私ら魔女7人がかりでも駄目だったし。そりゃ倒してくれるなら私も元に戻れるし嬉しいけどさぁ」
「戻りたいんですか？」
「そりゃそうでしょ！　なんでこんなとこでずっと固まってなきゃいけないのよ！」
「じゃぁ戻しましょう」

べたん、と魔女が転けた。

「はぁ？」

いきなり地面に顔をぶつけた魔女は何がなんだかわからない。気づけば身体が動く。灰色だった体が色を取り戻していた。
体を起こし、その場にへたり込んだ。呆然と大魔王を見上げる。手を開け閉めし、肩を回し動きを確認する。特に問題なく何事もないかのように普通に動いた。

「え？　え？　何が起こったん？」
「石化していた方とあなたのリンクを切断しました」
「うそ！　そんなんできるの？」
「うそじゃないですよ」

魔女は信じられないという顔をしながら立ち上がった。大魔王より頭１つ分背が低い。黒い三角帽子に、黒いマント。本人の申告がなくとも魔女のイメージだ。

「えーと、ありがとう」
「いえいえ、たいしたことはしていませんよ」

魔女は手を差し出した。大魔王はそれを握り返し握手を行った。

「あんたも魔女？　私が石になってる間に増えた？」
「大魔王ですよ」
「うわぁ、大きく出たねぇ。それがあんたの二つ名？　まぁ、私の妖炎の美姫ってのもひどいと思うけどさぁ。あ、私はロベルティーネって言うの。よろしくね」
「はい、私はパエリアと言います」
「でさ、テオバルトやるってマジ？」
「マジ、ですよ」

マジという言い方が気に入ったのか、大魔王はそこに特に力を入

れて言った。

「そっかぁ、石化解除とか出来ちゃうんだから行けるのかもねぇ。……よし！　私も一緒に行くよ！　中を案内したげる！」

「中をご存じなんですか？」

「まあね。元々この城は3階建てなんだけど、その上に10階分増築されてて全部で13階。で、まぁ10階ぐらいまでは攻め込んだかな」

「そう言えば7人おられるとか聞きましたが」

「そうそう、7人でね。何回も襲撃かけたんだけどね。何百年前だったかにかなり本気で攻め込んだのよ。その時に10階まで行ったんだけどさ、3人やられちゃったの。で、3人はそれ見て逃げちゃった。で！　私はそれでもやられた3人を見捨てられなくて、孤軍奮闘、獅子奮迅の活躍を……って、おーい、一人で勝手に行くなぁ。あんたが聞いたんだろうが！」

大魔王は一人、城門へと歩いていた。

ロベルティーネがその後を慌てて追う。

「あぁ、話が長そうでしたので」

「いやいや、ちゃんと聞いてよ」

「それでそのやられた3人の方はどうされたんですか？　この庭におられるんですか？」

「さぁねぇ。ここにはいない見たい。まぁ、あいつらは、むちむちっ！　って感じだったし、なんかエロいことでもされてんじゃないの？」

大魔王がロベルティーネを見る。平坦な体だ。憐れみの表情を浮かべそっとロベルティーネの肩に手を置いた。

「大丈夫です。そのうちあなたもエロいことをされるようになります」
「されたくないって。つか、私の身体はずっとこんな感じだよ！　憐れむな！　同情すんな！」
そんな会話を繰り広げながら二人は城内へと足を踏み入れた。

＊＊＊＊＊

ロベルティーネが言うように3階までは石造りの古式の城の作りで特に何事もなかった。
４階への階段。その前に二人はいる。
「こっからが本番てわけよ。あいつの悪趣味なテーマパークってやつ？」
そんな説明を聞いているのかいないのか、大魔王はあっさりと４階へと登った。
４階からは周囲の雰囲気が一変している。床や壁が黒く艶やかだ。天井も高く通路も広い。
「この階はここを真っすぐ行くと広間になってるぐらいかな。そこに敵さんがわんさかいるって感じ」
「そうですか。では行きましょうか」
二人は長い通路を歩き出した。通路には一定間隔で明かりが灯っている。窓はないがそれなりの明るさが保たれていた。
やがてロベルティーネが言うところの広間に出る。

そこにいたのは巨人だった。巨大な金属の塊。2階建ての民家ぐらいの背丈がある。それが10体以上。広間を埋め尽くしてる。

「こりゃ凄いねぇ。あいつも本気じゃん。アイアンゴーレム？　いや鉄じゃないのかな？　光沢があるような」

「この方たちはずっとここにいるのでしょうか？　あんなにいると立ったりしゃがんだりぐらいしかできないんじゃないですか？」

「別に意思とかはないんじゃないの？　入ってきた敵に襲いかかるぐらいで、って言ってるそばから入ってかないで！」

大魔王が広間に足を踏み入れた途端、巨大な拳が振り下ろされた。その影は大魔王をすっかり覆うほどの大きさだ。ロベルティーネロベルティーネは惨劇の予感に思わず目を閉じた。

だがその後に訪れると予想した床に叩きつけられる轟音は聞こえてこない。ゆっくりと目を開くと片手を上げ、巨大な拳を抑えている大魔王の姿があった。

「へ？」

ロベルティーネは間抜けな声を出した。だがただ見ているだけでは案内を勝手出た意味もない。ロベルティーネは叫んだ。

「ゴーレムの弱点は額の文字！　それを削るの！」

「そうですか」

大魔王の手がゴーレムの中指にみしりとめり込む。掴むには巨大だったので、適当に持ち手を作った状態だ。それをそのまま振り回した。庭園でガーゴイルに対してやったのと同じだ。ただ規模が違った。

鉱石で出来たゴーレム達が次々と黒光りする壁に激突する。それ

は壁とゴーレム双方にダメージを与えた。ゴーレムは半壊し、壁は砕け外の光景が見えた。

大魔王は倒れ動かなくなったゴーレムの頭へと近づき額の文字を確認する。掌を当て真下へと力を込めた。ゴーレムの頭部が粉微塵になりその動きを完全に停止する。

「おぉ！　確かに止まりましたよ！　面白いですね！」

大魔王がはしゃいでいる。ロベルティーネは呆れたようにそれを見つつ言った。

「あぁ、いや、それ削るとかじゃなくてただ壊してるだけだと思う……」

その後もただ大魔王がゴーレムを壊していくのをロベルティーネは見続けた。人形遊び。そう思えた。それもままごとに乱入してきた弟のような所業に思えた。

ひと通り壊し終えた大魔王は広間の奥へと向かうと5階への階段を登り始めた。ロベルティーネもそれに続く。

「5階以降は迷路って感じかな。て、おおぃ、先先進まないでよ、もう！」

大魔王は進んだ先で高速で飛来する髑髏を蹴り返していた。カタカタと口を開きながら、着弾の際に哀れな獲物の肉を噛み千切ってやろうとするその異様な弾丸は大魔王の蹴りと手刀に粉砕されて行く。いくつかはその軌道を代え、壁、床、天井に激突していた。

廊下の端にある砲台からそれは発射されている。それを操るのは骸骨の兵士たち。自らの頭部を砲台に込め次々と発射していく。

やがて全弾を撃ち尽くした砲台は沈黙した。骸骨の兵士たちはそ

れ以外のことは出来ないのか、首のない状態でただ、たたずんでいた。

大魔王は前方を見た。砲台のある通路の端までの間には十字路が数十ある。迷路になっているということだろう。どこを行けばいいのか。それはまるでわからない。

大魔王は腕を組み、あごに手をやった。何か考えているらしい。

少しして考えがまとまったのか、その右手を上げ掌を上へと向けた。

ロベルティーネは嫌な予感に叫んだ。

「ストーッぷ！　ねぇ、今何しようとしてんの？」

「迷路とかめんどくさそうなので、もうここから上、全部吹き飛ばそうかと思いまして」

「やめてぇ！　それはやめて、お願い！」

ロベルティーネは大魔王にすがりついた。それはまずい。とても困る。

「そうですか。何かすごく必死な感じなのでやめようかとは思いますが、何か理由があるのですか？」

「神獣！　もふもふ！　私らがテオバルトと争ってたのは神獣のせいなの。それ奪い合ってんの！」

「なるほど。その方が上層階にいらっしゃると？」

「そう、そうなの！　だから全部吹っ飛ばすとかそーゆーのはやめて！　迷路の抜け方は知ってるから！　ちゃんと案内するから！」

「わかりました。もふもふにはあまり興味がないんですが、何か大事そうなのでやめておきます」

ロベルティーネはほっと胸をなで下ろす。何をする気かはわからなかったが、このまま放っておいたらその言葉どおりになっていた

のだろう。

「こっち。ついてきて」

ロベルティーネが先導する。言うように迷路の構造は把握していたらしい。以前に辿りついた１０階層以上も下調べはしていたらしい。迷いなく進み１３階層、最上階へと辿りついた。途中、敵や罠は幾度か現われたのだが、鎧袖一触を文字通りに体現する大魔王の前には何の障害にもなっていなかった。

ただそんな事はテオバルト側もわかっていた。彼らがやっていたのは時間稼ぎ。大規模な儀式が完成するまでに少しでも足止めになればいいというものだった。そしてその心もとない目論見は辛うじて達成された。儀式は成功したのだ。

＊＊＊＊＊

ロベルティーネは１３階層へと辿りついた時、満天の星空と龍の月の明るさに屋外へ出てきたのかと勘違いした。

最上階はほとんど何も無い巨大な空間だった。空はよく見れば微妙ながら星明りに歪みを感じることが出来る。ガラス状の物質で天井全体が構築されていた。複雑な面で構成された円蓋は星々と月の光を一点に集め、巨大な円陣の中心を照らしている。

その円陣の中心、その一身に光を浴びてテオバルトは立っていた。

テオバルトの表情には余裕がまるでない。鬼気迫るものだった。その右目は眼窩を晒している。魔器である眼球は抉り取られていた。

「気づかれたのですか？」

大魔王が床に捨て去られた眼球を見て訊ねた。他にもいくつか血糊のベッタリとついた拳大の石のようなものも見受けられた。これらは全て魔器だ。

「そうだ。貴様……魔器に接続できるのだな」

「はい。というかあなたを初めて見た時びっくりしました。ここまで脆弱性をむき出しにしてこれまで生きてこられたとは驚きです。そのままでしたら、自決してください、とでも命令するつもりでしたが」

魔器を通じて悪魔へ指示を出す。魔法の基本だ。その際当然、悪魔側は魔器へと接続しその指示を受け取っている。当然それが魔法防御などで妨害されるわけがない。体内に内蔵してしまったら尚更だ。大魔王はその経路を通じて安々と魔力をテオバルトへと行使することが出来た。

「……悪魔か。肉体をもったまま人間界に現れるなどとは……それとも傀儡か？」

「傀儡扱いは心外ですね。これは生身の私自身の身体ですよ？」

テオバルトは杖を両手で構え前方へと突き出した。魔法使いとして最初期から使い続けている最後に残された魔器だ。

詠唱が始まった。テオバルト自身が呪文を唱えたのはいつ以来か。それは巨大な空間に朗々と響き渡った。

「ち、ちょっとヤバイよ！　あれ止めないと！　つか私どうしたらいいの？」

「側にいてもらってかまいませんよ？」

ロベルティーネが大魔王に食ってかかる。

「いやいや、そんなのんきにしてる場合じゃないって！　あれマズイよ？　あれは魔界の3魔王、炎王ザミィ、蛇王バグラス、雷王ゾネの力を一気に開放するつもりなの！　魔王って言っても魔族領にいるようなのじゃないよ？　魔界の本物の魔王の力！　あいつ、魔王と契約してんの！　マジ化物なんだって！」

「魔王ですか？」

「そう！　魔王と契約できたのは人間ではあいつだけ！　あんた一体なにやってあいつあそこまで怒らせてんの！　一体の力でもここら一帯、更地になっちゃうよ！　3体同時なら大陸が消し飛ぶかも！」

「それは困りますね」

全く困っていそうには見えなかった。いや、困っていると言えば困っているのだが、その表情があまりに場違いだったためロベルティーネは呆然とした。大魔王は恥じらいの表情を浮かべていた。

「ちょ、ちょっと！　あんた何照れてんの！　なにも褒めてないよ！」

「うーん、これは……あの方も中々やりますね。最後に私に一矢報いることが出来たということでしょうか？」

「はぁ？　意味分かんないんだけど！」

「まぁまぁ、もうすぐ終わるみたいですから」

テオバルトの詠唱が終わった。

何も起こらなかった。

大魔王以外の二人はその結果に言葉もでない。この詠唱は暗号化されていない。これはテオバルトのみが契約している悪魔に対してのもののためわざわざそんなことをする必要がなく、妨害出来る魔法も知られていないためだ。

それ故ロベルティーネは魔法の詳細を把握出来た。意味のわからない単語も多いが、それらは定型文として大体パターンが決まっている。どのような結果が現出するかがありありと想像が出来た。詠唱に間違いはなく、儀式の手順や円陣の構築にも不備は見られない。発動しないわけがなかった。

テオバルトはその場にくずれ落ちた。膝をつき、うつむいている。

「なぜだ？」

そこには感情は見られなかった。ただつぶやいたと言うだけだ。

「褒め殺しというのは中々効きますね。すごく恥ずかしい感じですよ、なにかむずがゆいものを感じました。さすがこんなお城を持っているだけのことはありますね。あなたお名前はなんと言いましたっけ？」

テオバルトは答えない。一向に応える気配がなかったため大魔王はロベルティーネを見た。

「え？　あんたこいつの名前知らなかったの？　テオバルトってんだけど」

「あぁ確かにそう呼ばれていましたね」

大魔王はテオバルトの名前を思い出した。今までの会話で出てきたような気がした。

「テオバルトさん、何か納得がいかないといった様子ですね」

テオバルトは応えない。いまだ自らの内に潜り込んでいる。

「私の名前は、パエリアと自己紹介させて頂きましたが、本名はもっと長いんです。パエリア・グンネル・ガンボア・マカレナ・シェブローム・スタゴリァ……と、まぁ全部言うと大変ですので端折りますが、前から５１３番目がザミィで、６３４番目がバグラス、７１３番目がゾネと言います……お分かりですか？」

テオバルトにはわからない。聞こえてはいたが意味がよく理解出来ない。

「魔界には名前について人間とはまた違う慣習がありまして、倒した相手の名前が後ろについていくんです。ですのであなたは先程から、私に魔法の使用許可を取っていたという次第です。しかしあそこまで持ちあげなくてもいいんじゃないんですか？　さすがに恥ずかしくなって来ました。ゾネさんは女は褒められて美しくなるとおっしゃってましたけど……」

テオバルトがのろのろと顔をあげ大魔王を見た。一気に老け込んだようにも見える。

「普段は魔王への魔術行使の依頼はそれぞれに委託しているので私は関係ないんですが、あの方達今回は何か面白がって私に中継してきました。あなたやっぱりおっぱいに並々ならぬ愛情を注いでるんでしょうか。なにか私の胸の美しさをこれでもかと讃えておられましたが」

「ふ、ふざけるな！　こ、この私が！　４千年を生きたこの私が！　魔の真髄を極めたこの私が！　貴様などに！　貴様などに！」

「４千年ですか。私は十数年しか生きていませんが……あなたが４千年頑張ってこの程度ということでしたら随分と無駄な時をお過ごしになったんですね」

大魔王が優しく微笑む。ロベルティーネはそれを見て随分とえげつないと思った。ここまでの短い道中、のんびりとやってきたがさすがに大魔王を名乗るだけのことはあると思った。

この言葉は大魔王の思惑通りに、テオバルトの心を折った。

「さて、これ以上何か出てくることはないですよね？　でしたら……どうします？　人間はあまり殺さないようにしているんです。でも今回はアルさんの件がありますからね、今後手を出せないようにはさせてもらいますけど。ふふっ、大魔王の呪い。受けてみます？」

「殺せ」

それがテオバルトの最後の矜持だった。このままおめおめと生き永らえることなど出来なかった。この先何千年生きようとこの存在にはかなわない。それが身にしみてわかった。

「……お前は……結局魔法らしい魔法を見せなかったな。ならば……」

「魔法が見たいですか？　そうですね。では私のお気に入りの魔法をお見せしましょう」

大魔王がテオバルトのそばに寄ると襟元を掴んだ。

「ちょっと地上で使うには不向きなのでこんなやり方になりますが」

大魔王がテオバルトを真上に向けて投げた。

テオバルトがプリズムとなっている円蓋を突き破りはるか彼方へと飛翔していく。砕かれた破片が星明りを反射しキラキラと輝いていた。

ロベルティーネは今までの確執を忘れ宙を行くテオバルトを美しいとすら思った。

空を飛び続けたテオバルトは少しずつその速度を落としやがて静止した。そこから先は重力に引かれ下降に転じる。
大魔王が空を見上げ、右手を掌を上にして上げる。
「光子魚雷（フォトントゥピド）」
大魔王がつぶやくように言う。光が立ち上った。
大魔王の手から生み出されたその熱量は収束し、天を駆ける。その光は直線上のガラスを大気を焼き尽くしついでのようにテオバルトを消滅させた。
ロベルティーネはただ空を見上げあっけにとられている。気のせいだとは思うが龍の月の腕が欠けているように見えた。龍が身をよじっている様に見えるのは気のせいだと思いたい。
「名前がお気に入りなのです。トゥで入った気合がピドで抜けるような感じがいいと思いませんか？」
「……えーと、大魔王……さんでしたっけ？」
「はい」
「今のは一体……」
「もう少し派手な方がよかったでしょうか？　１ｋｇ程、重水素を対消滅させるというお手軽な技だったんですが」
「ジュウスイソ？　ツイショウメツ？　それは魔界語でございますでしょうか、大魔王様」
「そうですね。魔界でも一部地方で使われる言葉ですね。ところで、何か話し方が違うような気がするんですが」
大魔王が小首をかしげる。ロベルティーネは慌てて両手を前にだし振りながら答えた。
「いえいえ、めっそうもございません」

「そうですか？　ところでお仲間やもふもふの方は探さなくていいんですか？」
「あ！」
「この階には何もなさそうですから、下の階でしょうか」
テオバルトの消滅により、城は全機能を停止していた。その為探索は簡単だったが魔女は見つからなかった。
「まぁ、魔女っつってもさ、別にそんなにつるんでるってわけでもないのよ。普段はそんなに交流もないしねぇ。でも、なんかさみんな神獣好きみたいなのよ、で、テオバルトにさらわれた神獣を助けるために一致団結したってわけ。だからまぁ、見つからないならそれはそれで仕方ないね」
結局ロベルティーネの話し方は元に戻っていた。取り繕っていてもすぐに地が出る性質らしい。
「で、この子よ。この子」
ひよこだった。背丈がロベルティーネと同じぐらいの巨大ひよこだった。
「ぴよ！」
神獣は大きめの部屋を与えられそこでなに不自由なく暮らしていたらしい。特に虐げられていた様子はなかった。
ひよこに家具は必要ないのだろう。端に机がおいてある以外にはなにもない部屋だった。
ロベルティーネはひよこに飛びつくと羽毛に顔をうずめ頬ずりする。ひよこもおとなしいものでされるがままになっていた。人なつ

っこい性格らしい。
大魔王は机の上にあるものが気になったのでそれを手にした。
ひよちゃん観察日記と書いてある冊子だ。ひよちゃんと名付けられていたらしい。ぱらぱらとめくってみる。
絵日記のようだった。子供の字と絵で小さな女の子がひよこと戯れる様子がそこにはつづられていた。
ひと通り目を通すと絵日記を机の上に戻しひよこを見た。そこには絵日記に書かれていたような光景がロベルティーネにより再現されていた。

「美味しそうですね」
「ぎゃーやめてー！　この子は食べ物じゃないー！」

ロベルティーネは食材を見る目の大魔王と、神獣の間に両手を大きく開いて立ちはだかった。

「ふふっ、冗談です。ひよこは食べませんよ。……ところでこの方は、成長すると大きな鶏になるんでしょうか？」

ロベルティーネは大魔王の目を覗き込む。

――これは……鶏になったら食べたいなぁ、という目だ！

「ううん！　この子はずっとこのまんま！　神獣だからね！」

成長するとどうなるかなど知らなかったがでまかせを言った。

「そうですか」

大魔王が残念そうな表情を浮かべた。諦めたらしい。

「では私は帰ることにします。あなたはどうされるんですか？」
「うーん、とりあえずしばらくはここにいようかと思うんだけど……１００年以上経っちゃってるし、今更うちに帰ってもねぇ。あ、ここって大魔王さんのものってことになるの？」
「そうなりますね。でも別にここにいてもらっても構いませんよ。ところで……ここからベイヤーに帰るにはどちらに行けばいいですか？」

ロベルティーネは大魔王が飛んでやってくるのを見ていたので、てっきり同じように飛んでいくのかと思ったがなにかこだわりがあるらしい。
大魔王はマテウ国の西の端から１週間以上をかけて徒歩で帰った。

１５話　その後（前書き）

１４話もほぼ同時に更新しています。ご注意ください。

15話　その後

キャシー宅の裏庭。アルは日課となっている練習を早朝から行なっていた。
すでにゴミの山は片付いている
テオバルトの襲撃から一週間程が過ぎた。街は平穏を取り戻している。
アル達はあれからひどいありさまでキャシー宅へと戻ったが、ゴミ捨てるだけで時間かかりすぎじゃないか？　と軽く嫌味を言われただけだった。
一週間をかけてキャシー宅の掃除を行い完了させた。仕事は終了している。だが旅立つまでいていいといわれその好意に甘えていた。

「おはようございます」

大魔王があらわれた。

「おはよう。ここでまた会えると思ってたよ」

アルが練習をやめ挨拶を返す。

「心配はしてくれなかったんですか？　もしかしたらもう2度と会えなかったのかもしれませんよ」
「ないだろ。それは。あいつはどうなった？」
「消滅しました」

アルは聞いてはみたものの特になんとも思わなかった。もっと喪失感のようなものが生まれるかと思っていたが、出てきたのは「そうか」ぐらいのそっけないものだった。

あまりに自分に関係ない所で話が進んでいたせいかもしれない。

「ありがとう」

「お礼を言われるのはおかしいですよ？　借りだと言ったはずですが？」

「あぁ、そうだね。いつか返してもらうよ」

そんな時がくるのか？　とも思う。大魔王をじっと見た。この大魔王が苦戦するような敵。想像が出来なかった。

「体で返せとおっしゃるんですか？」

アルの視線をどうとらえたのか大魔王がみずからを抱きしめ後ずさった。冗談だろうが、アルは少しドキっとした。

――リーリアを見慣れたせいかそう思わなかったが、意外に大魔王も胸あるな……。

アルは周囲を見渡した。こういう時にリーリアがやってきそうな気がした。

「何かおさがしで？」

「いや、なんでもない」

あらためて大魔王を見る。確かに美しいがそれほど強いようにはまるで見えない。だがテオバルトを終始圧倒していたし消滅させたという。その底しれなさに寒気がするような思いもあるが、それならばと聞いてみた。

「なぁ大魔王。リーリアが不完全な状態で生きているのはわかって

ると思うんだけどなんとか元に戻す方法はないか？」

大魔王は常識外の力を持っている。ならば何か知っているかもしれないし、あわよくば大魔王の力で元に戻すことが出来るかもしれない。

「リーリアさんをですか？　……私では無理ですね。方法もわかりません。私の力は破壊一辺倒ですし、怪我を治してくれる方にも心あたりはありますが、死んでしまっていると無理ですし」

「そうか、それは自分で探すことにするよ」

「お役に立てなくて申し訳ありません」

大魔王でも無理となると厳しいのか？　とも思うが世の中は広い。何かあるかもしれないと前向きに考えることにした。

旅に出てその何かを探す。アルの当面の目標だ。

「大魔王、魔法を教えてくれないか？」

リーリアを元に戻す方法として考えたうちの一つがアルの能力の成長だ。それにより可能になるかもしれない。自分の能力が魔法のようなものだとはわかって来たが詳細はわかっていない。

大魔王を名乗るぐらいだ。魔法には詳しいんじゃないかと思いたずねてみた。

「私に魔法を教わる。それは正しいとも間違っているとも言えますね」

「どういう意味だ？」

「正しいというのは、私は魔界で最強ですから当然魔法も最強なのです。ですので私から教わるというのは最強へ近づくには良い手だと思います」

臆面も無く最強と言ってのけた。事実大魔王には自らが最強であるという思いにまったくゆらぐ所はない。

「間違いというのは、アルさんではまだ無理だということです」
「無理？」
「そうですね、実際にお見せしましょう」

大魔王の腕が肩口から一つ増えた。黒い腕だ。それはアルの魔術視覚野に映し出された。

「これが魔力肢です。今のアルさんには見えていると思いますが」
「あぁ」

その黒い腕が伸び、庭に落ちている石をひとつ取り上げた。はたから見れば、石が浮いているように見えるだろう。

「魔力肢は対象の構成要素を分析し状態を変化させます。このように」

石が崩れ落ち跡形もなくなった。

「アルさんもやってみてください」
「僕がか？　まぁやってみるよ」

説明の一環として意味があるのだと思い従うことにした。右手で落ちている石を拾い、左手から大魔王がいうところの魔力肢を出す。それ自体は一度出来ていたので簡単に出来た。だがそれは随分と貧弱なものに見えた。腕などといえる程のものでもない。黒い糸のようなものだった。それを石に伸ばす。そこでアルはどうしていいか

わからなくなった。

「どうです？　魔力肢が触れた物質の状態がわかりますか？」

「わからない……何かある。ぐらいしか」

「それが解像度、粒度の違いですね。物質のもっと細かい単位で操作出来ないと魔法は無理です。あぁ、落ち込まないでくださいね。そのうち出来るようになると思いますよ」

アルにはまるでイメージが出来なかったが、出来るようになると言われたのでそういうものかと思った。

「それだけだと私が意地悪言ってるだけみたいですね。ではいいことを教えてあげましょう！」

大魔王がそのいいことを思いついたのか、いい笑顔でアルを見た。

「今のアルさんには細かな魔力操作は無理です。ですが、それで敵の魔法を妨害することが可能ですよ」

「どういうことだ？」

「アルさんの魔力肢を敵の魔力にぶつけて適当に魔力を発動させればいいのです。細かな操作はいりません。相手の魔法をぐちゃぐちゃにしてしまえばいいのです。それだけで相手は魔法を使えなくなります」

「そんなことでいいのか？」

「えぇ、人間で魔力肢を使える方は少ないでしょうから、魔法使い相手なら無敵ですよ！　よかったですね！」

「なるほど、使い勝手がよさそうだ。練習してみるよ」

「頑張ってください。熟練するには実践あるのみです」

テオバルトがどうなったか、その結果を伝えにくるのが目的だっ

た大魔王はアルの質問が終わったとみると去っていった。
残されたアルは練習を再開した。

＊＊＊＊＊

「あはははははははっ」

キャシーの笑い声が朝の食堂に響き渡る。掃除は完了してゴミの山は片付いたため、食事には食堂が使われていた。
アルのしかめっ面がツボに嵌ったらしい。

「なぜお前らがここにいる！」

練習を終え朝食を食べにアルは食堂にやってきた。
アルは食卓を見ている。一人暮らしにしては大きめだ。来客を想定しているのだろう。
そこには、リーリア、狼、銀髪の少女、キャシーが座っている。

「なんでしょうか、にいさん」
「にいさん！　なんだそれは、いや、待て！　お前と僕は血縁関係にあったのか？」
「そんなわけないじゃないですか」

銀髪の少女が馬鹿をみるような目でアルを見た。

「じゃぁ、なにが、にいさんだ！」
「これはおかしなことを。にいさん、あなたは血縁関係どころか種族すら違う魔族の母親をかあさんと呼んでいたのではありませんか

？　それならば、テオバルト様の実験体であるあなたと私を兄妹ととらえることになんの問題があるというのでしょう？」

反論できない。いや、だからどうだというような問題だ。アルは矛先を変えた。

「おい、狼！　お前がなんで食卓で、椅子に座ってる！」
「私が主人であるリーリア様のそばにいることの何がおかしい！」
「じゃなくて、床でいいだろ！　なんで椅子に座ってご飯食べてるんだ！」
「なぜ私がお前より、下で食事をせねばならんのだ！」

アルはリーリアを見た。リーリアも困り顔だった。どうしていいかわからない。想定外だ。なんだこれは。

「えーと、この子もあの魔法使いに無理強いされてただけで悪い子じゃないと思うんだけど……。ベアくまちゃんもおとなしくしてるし……」
「おとなしい？　これがか？　というか、リーリアが主人てのはどういうことだ？　主人は僕じゃないのか？」
「貴様、ふざけているのか！　私はリーリア様に名をいただいた。それ故リーリア様が主だ。貴様などただの魔力の供給源にしか過ぎん！」

アルは途方にくれてキャシーを見た。

「どういうことなんですか？」
「どうもこうも……、アル君の妹だという娘と、リーリアちゃんの下僕だというのがやってきたんだ。歓待するだろう？」
「しなくていいですよ」

アルはつったっていても仕方が無いので食卓の席についた。頭が痛い。念の為と、魔力視覚野を発動する。3本の黒い線が自分から、リーリア、銀髪の少女、狼に伸びていた。ため息をついた。既に問題はリーリアだけの事ではなくなっていた。

「お前どうやってここ来たんだ？」

狼はわかる。嗅覚が発達していそうだし匂いをたどって来たのだろう。

「にいさんは馬鹿なんですか？　私には魔力が見えるんですよ？これを辿ってきたにきまっているでしょう？」

銀髪の少女の瞳が赤くなり、アルから伸びている頼りない魔力肢を指さした。

「なにしに来た？」

「はぁ……にいさん、あなたは私にもう一度死ねと。そうおっしゃるんですか？　随分と冷たいんですね。こちらの巨乳には随分と甘いようですが、私のようなものはどうでもいいですか。そうですね、流石になんのためらいもなく私のような幼い少女の心臓をうちぬくだけのことはありますね。おまけにテオバルト様に突っ込まされて……おかげさまで、動けるようになるのに今までかかりました。ところでこの左腕は修復してもらえるんでしょうか？　利き腕ではないとはいえ、さすがにこれはこれからの活動に支障をきたすと思うのですが」

そう言われると辛い。確かにあの時は敵対していたが、こうやってただ会話をしていると、ただの美少女だ。罪悪感に襲われる。

その姿をよく見てみる。銀髪の少女。前髪は真っ直ぐに切られている。自分で切ったのだろうか、処理が適当だ。後ろ髪などはもっと適当で肩のあたりでざくざくと鋏を入れただけのようだった。
格好はボロ布を巻きつけただけのような姿で、ちょっと前のリーリアを彷彿とさせる。
左腕はそのボロ布が巻きつけてあったが捻くれたままで痛々しい様子だ。
アルの少女を見る視線に気づいたのか、キャシーが答えた。

「あぁ、流石に子供物の服はなくてな。すぐに用意は出来ない。後で買って来てやったらどうだ?」
「髪は私が切ってあげるよ、これ自分で切ったの?」
「余計なお世話です。服は着てあげてもいいです。にいさんなら妹にプレゼントぐらいするでしょう?」

銀髪の少女はリーリアは一言で切ってすて、アルに向き直る。上から目線でたかる気満々だった。

「えーっと、アルくーん?」

リーリアが情けない顔でアルを見た。アルは首を横にふる。諦めた。受け入れるしかない。受け入れないならそれは殺すということだ。こうやって話をしてしまった上で今更それは出来ない。
アルは右手を少女の左腕にそっと添えた。しばらくすると少女の左腕は元のように動くようになっていた。

「おぉ、そりゃすごい。信じていないわけじゃなかったが目の当たりにするとな」

キャシーがその様子を見て感嘆の声を上げた。

「お前、名前は？」
「ありませんよ」
「は？」
「テオバルト様には、お前としか呼ばれていません。あなたもさっきからそう呼んでいるんです。それでいいんじゃないですか？」
「あ、いや……それは悪かったよ。じゃあ何かないのか？　自分で付けるとか」
「そうですね、では……にいさんがアルですのでイルでいいです」
「適当すぎるだろ？」
「あ、だったら私が！」
リーリアが元気よく手を上げた。
「リーリア……君がつけるのだけは勘弁してくれ。いくらこんな奴でもそれは可哀想だ」
リーリアが憮然とした顔をした。納得がいかないらしい。
アルは一応聞いてみた。
「ちなみにどんな名前だ？」
「さるモンキー」
「いくらなんでもひどすぎる！」
アルとキャシーが珍しく同時に突っ込んだ。銀髪の少女も恐ろしいものを見る目でリーリアを見ている。ベアくまは特に疑問には思わなかったようだ。ぺろぺろと水のはいった皿をなめていた。
「こんなのん気な顔をしながら、さりげなく私を人間扱いしないとは……若干この方に対する認識をあらためないといけませんね……」

「あー、リーリアにそんなつもりは全くない。ネーミングセンスが壊滅的なだけだ」
「えー、そうかなー」
リーリアはやはり納得がいかない様子だ。
「しかしなんだな。人が多いと食事も楽しいもんだな」
キャシーが楽しげに言う。
「全然楽しくないですよ！」
「そうか？　一人の食事など味気ないものだぞ？」
「それはそうかもしれませんが……」
アルは口をにごした。母親と二人で過ごしていた時のことを思うと、楽しくないとも言い切れない。
「しかしあれだな、ハーレムと言うやつだな」
「は？」
アルは聞きなれない言葉を耳にした。なんだそれは？
「なんだ気付いていないのか？　ここにいるのはアル君以外は全員女だ。果報者だな！」
「え……っと、こいつもか？」
アルはベアくまを見た。
「貴様！　私を雄だと思っていたのか！　ふざけおって！　噛み殺すぞ！」

「いや……そう言われても狼の性別なんてわからないよ！」

そんなことで非難されても困るとアルは思った。多分見た目では無理だ。ひっくり返して股間でもみない限りはわからないだろう。そしてわざわざそんなことをしてまで確認する理由もない。

「え、ごめん、私も男の子だと思って、ベアくまってつけちゃった……」

「ごめん、ベアくまが男の子の名前だってところからわからない」

「リーリア様……」

銀髪の少女はしょんぼりしているベアくまを見た。リーリアの名付けの被害者だ。そう思うと可哀想にも思えてきた。おっかなびっくりベアくまに手を伸ばすと頭に手を乗せなでた。ベアくまもされるがままになっていた。

「話は戻りますが、ハーレムってなんですか？」

「あぁ、まぁ定義にはいろいろあるのかもしれんが、広義には一人の男が複数の女を囲うようなことを言うな」

「これが……そうなんですか？」

「あぁ、死姦、幼女姦、獣姦、熟女姦……よりどりみどりだな！というかこう言うとアル君が凄い変態に聞こえるな！」

キャシーが凄い笑顔で言う。アルは全く笑えなかった。

「それは……私もテオバルト様には様々な虐待を受けてきましたが……そこまではされませんでした。しかし……命を盾にとられ、体の自由までも奪われてしまうような状況では逆らうことも……」

銀髪の少女が椅子ごと後ろに下がる。引いている。不審者を見る

目つきだ。

「いや……それはお前……一応だな私にも番（つがい）がいてだな、操を立てているのだが……貴様、獣か！　見境なしか！」

ベアくまが困った末に吠えた。

「アル君……」

リーリアが何か言いたげにアルを見ている。

「お前ら……キャシーさんが勝手なこと言ってるだけだろ？　まに受けるなよ……」

アルは机に突っ伏す。なんなんだこの状況は。対処しがたい。

「まぁそれは半分冗談としてだな」

キャシーの決まり文句のようだ。アルはそう思う。

「これからどうするんだ？　掃除はもう終わったし、給金も支払った。あぁ、いや別に出て行けと言っているわけじゃないぞ」

「そうですね。とりあえずはリーリアの実家のある街へと行こうと思うんですが」

「なんだ？　娘さんを僕にください！　とか言いに行くのか？」

「……そんなわけないでしょ……」

リーリアが少し落胆したようだがそれには誰も気付いていなかった。

「まぁ旅を続けるなら実家の許可もいるかもしれませんね。リーリアを人間に戻す方法を探しに行きますのでリーリアも一緒に来てもらう必要がありますし」
「人間に戻す……か。あてはあるのか？」
「それがまったく。とりあえず旅をして各所で情報収集を行おうと思っていますが」
「あてならありますよ」

銀髪の少女が言う。

「なに？」
「グラウシェル博士。テオバルト様と共同で研究を行なっていました。カテゴリーR、君臨するものについて造詣の深い方です」
「なんだそれは？」
「詳しい話は端折りますが、現在カテゴリーRは5名。そのうちの一人があなたと同じような能力ですが、さらに規模が大きく、死者の軍団を形成していますが、その能力範囲に制限はありません、何かのヒントになる可能性はあります」

銀髪の少女に言われるまで考えもしなかった。なぜ自分がいきなりテオバルトに襲われたのか？　テオバルトを目にした時に考えたのは復讐だけだった。それ以上の事情について考察していなかった。

「にいさん、人間に戻れるというなら私も協力しましょう。幼い妹に欲情するようなにいさんから離れる事ができないというのはお互いに不幸なことです」
「……いや……妹とか言ってるのはお前だけだし、幼女がどうとかはキャシーさんが勝手に言ってるだけなんだけど……」

なんだろう。嫌な予感しかしない、とアルは思う。これから先ず

っとこんな感じでからかわれ続ける気がしてきた。

「で、その博士はどこにいるんだ？」

「セプテム王国とティアル王国の間にある小国ビヘド。そこにおられます。レガリアを所持する7大王国には数えられていませんが中々発展している国です。レガリアに対抗するための魔導の研究が盛んですね」

「なるほどな。ここから行くとしたらどうしたらいいんだ？」

「さぁ、私は地理には疎いので……」

「リーリア？」

「えーっと、私はマテウ国内でも怪しい感じなんだけど……」

アルも大陸の大体の位置関係は本で読んで大体わかっていたが、具体的にどう行けばいいのかはわからなかった。

誰もわからない様子だったのでキャシーが助け舟を出した。

「あぁ、ビヘドへ行くなら大きくは2つだな。セプテム王国経由か、ティアル王国経由だ。セプテム王国はマテウ国とは国交がない。バリバリの敵対国家だな。こっちへ行くなら無理やり押し通る必要がある。ティアル王国はまぁ、比較的おだやかな国だから入国自体は問題ないが……こちらは経路が問題だ。第1魔族領を通る必要がある。なんとかいう冒険者が行路を開発していたはずだ。詳しくはしらんが調べればわかるだろう」

「セプテム王国……ですか。あれは中々無茶な感じの国ですね」

「あぁ、そっちはお薦めしない。下手すれば洗脳されて二度と出て来れなくなるな」

「そうですね。魔族領を通るほうがまだなんとかなる気もします」

魔族領ならなんとかなる気がした。だが少しアルは誤解している。魔族領と聞いて今まで自分が住んでいたような森だと思ってしまっ

ていた。森ならどうにでも隠れながら進める気がしていたが、第1魔族領はほぼ平原と捨てられた都市部で構成されている。

「えーっと、とりあえず、名前はイルでいいか？」

今更のようにアルが銀髪の少女に聞く。名前についてうやむやになってた。

「はい、にいさんがそれでいいのなら」

「そのグラウシェル博士ってのはどんな奴だ？　テオバルトと共同研究していたって聞くと警戒心がわくんだけど」

「あの方はまともな方ですよ、テオバルト様に比べれば」

わざわざまともだと説明するのが逆に怪しく思える。アルは会う時には最大限注意を払おうと心に誓った。

アルは大体の今後の計画を大雑把に心に描けた。ならば準備だ。

「今日から旅の準備をしようと思う。しばらくは買い物をして装備を整えたり、情報収集だ。それからリーリアの街へ向かう。その後は第1魔族領を通ってティアル王国を経由してビヘドだ。いいか？」

「わかりました」

イルが無表情でそう言う。

「ついていくしかなかろうが！　リーリア様もおられるしな！」

ベアくまが吼える。

「うん！」

リーリアが嬉しそうにうなずいた。

アルは思う。森を出ようと決意した時にはこんなことになるなんて想像もつかなかった。まだ森を出てそう日にちも経っていないのにこんな状態だ。これから先どうなるのか。

期待と不安がないまぜになった気持ちでアルは仲間たちを見渡す。仲間、これも森にいたままでは望むべくもなかったものだ。まだ出会ったばかり。仲間としては不安な点も多々あるし、アルの力によって結びついているというのは、純粋な仲間としては歪にも感じる。イルとベアくまなどまだどのような者達かはっきりしないところもある。

だからこそ仲間たちを必ず元に戻す。そう決意をあらたにした。

＊＊＊＊＊

一つの伝説がある。戦場に現れるという化け物の話だ。

それは死霊の王とも、魔法殺し、異能殺しとも呼ばれる5身一体の怪物だ。

それは5つの体を駆使し、からみつき、結びつき、わかたれ、まるでひとつの生き物のように戦場を蹂躙する。

それが現われた後には何も残らない。全てを喰らい尽くした後、喰い残された無惨な骸達は自らの足で起き上がりいずこかへ去るという。

それは千年を生きる大魔導師が創り上げたとも、魔界の大魔王が創り上げたとも言われている。

それは3人の異能の王の三つ巴の戦いに介入し、その全てを滅ぼ

したと言われている。
そして……それは一人の少年と3人の少女、一匹の狼の姿をしていたと伝説にはうたわれていた。

１５話　その後（後書き）

２章の話自体はこれで終わりです。
ここまで読んでいただいてありがとうございます。
後１話、１章と同じように幕間が入る予定です。
これも消化できるかどうかよくわからない、風呂敷広げるだけの話ですｗ

幕間　脅威分析（前書き）

2章最終話です。2章と3章の間みたいな感じです。

幕間　脅威分析

男が一人そっとその部屋に入ってきた。その部屋には既に何人かの男が着座している。重厚な木製の大きな机の上には資料が散乱していた。

その机から少し離れた位置にいる男が立ったまま資料を手に何事かを説明している。

既に会議は始まっているようだ。

その説明をしている男が侵入してきた男に気がついたが、侵入者は人差し指を口元に当てた。黙っていろということらしい。男はそれに従った。

侵入者は机の端の椅子を静かに引くと、気付かれないように腰掛けた。

「はいはい、では次にソードドラゴンの幼生についてです」

説明をしている男、諜報部のルーカスが資料を見ながら言う。

「貴様！　その態度はなんだ！」

セプテム国の軍服を着た男が言った。着座している者は将軍と上級将校だ。この中で諜報部の男だけがかなりの格下ということになる。

「あー、さっきまでは頑張ってたんですけどね、思わず地がでちゃいましたね。まぁいいじゃないですか、口の聞き方ぐらい」

「なめているのか！　規律をなんと心得る！」

「別に命令違反をしているわけでもないじゃないですか。死ねと言われりゃ死にますよ？　それが命令系統に従った正式な命令ならね」

「まぁまぁ、ドルエン将軍、いいではないか。彼は態度にはまぁ、問題はあるが、言えばそれだけだ。少々しゃくにさわるかもしれんが我々の忠実な部下だよ」

一人の男がとりなした。ドルエンと呼ばれた男もそれ以上些細なことにこだわっても器を疑われると思ったのか黙り込んだ。

「で、ソードドラゴンの幼生なんですが、うちの第3王子様が殺してしまいました」
「な！」
「馬鹿な！」
「あの馬鹿王子め！　何を考えている！」
「いやー、馬鹿王子はないんじゃないかなぁ。仮にも一国の王子だよ？」

その場にいたものが一斉に部屋の後方を見る。そこには今話題となっていた第3王子が座っていた。

「い、いや、……何故ここに？」
「これは秘密会議です。あなたを呼んだ覚えはないのですが」
「僕がそのソードドラゴンについて直々に説明してあげようとこうしてきたんだよ？」

第3王子は隠れている必要がなくなったため、将軍たちの席の近くにまでやってきて座りなおした。

「国境を越えてやってきたソードドラゴンですが、当初の予定では餌などで誘導し追い返す計画でした」
「それをこの馬鹿が……」
「いやいや、面と向かって言われると僕もさすがに傷つくよ？」

傷ついているようにはまるで見えない。その美しい口の端を上げ笑みを浮かべている。

「で、これがソードドラゴンの角だよ」

そう言って王子は腰にさしていた剣を抜いた。それは剣というにはかなり複雑な構造をしている。薄い刃状になっているのだが、ところどころ歪み、突起が飛び出している。角といわれればそのように見えた。その角に持ち手をつけて剣として使えるようになっている。

この形状では通常の鞘に収めることが出来ない。鞘は側面が開いた状態になっており、留め金でとめるようになっていた。

ソードドラゴン。その特徴は額にある角だ。これが刃状になっておりとても鋭い。戦闘時には首を振り回しこの角を主要な武器として使いこなす。

「くっ！　……お前！　これが欲しくて暴走したのか？」

「馬鹿とかお前とかひどいよね、みんな」

「ソードドラゴンの成体がやってくるぞ！　あれに勝てるとでもおもっているのか！」

「そうかな？　幼生であんなもんなら、成体でもたかがしれてると思うんだけどね」

まったく悪びれる様子がなかった。

「はいはい、脱線はそれぐらいにしておいてください。そういうことですので、ソードドラゴンの幼生の脅威度は０に。その分ソードドラゴンの成体の脅威度が上がりました。３です」

ルーカスは議題を次に進めた。

「えーと次はですね、ちょっと変わってますね。異世界人だと主張する少年ですね」

「なんだそれは？　ただの馬鹿じゃないのか？　それがなぜこの会議の議題にあがる？」

「まぁまぁ、それなりに理由があるんですよ。ね、ドルエン将軍？」

話題を振られたドルエンは苦虫を潰したような顔になる。

「あぁ……見た。うちの孫娘が拾ってきたのだ」

「資料をみてください。写真がついてますね、この少年です。モノクロの写真ではよくわかりませんが、黒髪黒目の少年です」

「……なんというか平凡な顔だな」

「ドルエン将軍のところのお孫さん。お名前はクラリーネさん。この方の庇護下にあります。クラリーネさんがドルエン将軍さんちに伝わる馬鹿馬鹿しい成人の儀式のため森に出向いたところで出会ったそうです」

「貴様！　愚弄するか！」

「えー？　馬鹿馬鹿しくないですか？　成人の儀式に魔獣の蔓延る森にある塔に登ってくるって。死んじゃったらどうするんですか？」

「武門の一族だ！　武を示せずしてどうする！」

「で、まぁ、そのクラリーネさんはその武を示しきれずに死にそうになるわけですが、そこにたまたま通りかかったこの少年。えーと、名前はコーイチですね。このコーイチに助けられたようです」

「まぁまぁドルエン将軍。そういきりたたずとも」

ルーカスは資料をめくると少年の脅威について語った。

「この少年は魔法を使うようです。本人が言うには記憶喪失らしい

ですが、様々な魔法を使うようですね。他にも森の木を一撃で折ったり、その森の塔ですか？　その最上部まで飛び上がったりしていますね。クラリーネさんを助けた際には、子鬼ですか。その群れを吹き飛ばしています。後は、ロータス家の次男と決闘まがいの争いがあったようなんですが、その際には数１００本の剣を召喚したとあります」

場がざわめく。途中まではそれほどのものではないと思っていたが、剣を数１００本召喚というのはそれまでとは少し毛色が違う。

「幻術の類ではないのか？」

「その可能性は否定できません。結局次男の方はその剣に恐れをなして降伏してしまいましたので、それが使用されたわけではないようですね」

「支配の王錫による洗脳はしないのか？」

「それについては保留となっていますね。強力な個人に対しては王錫の副端末では対応できません。今のところクラリーネさんには従順なようですし。現在の脅威度は１。要観察ですね」

「ふーん、面白そうだね。ドルエン将軍のうちにいるのかい？　会いに行ってもいいかな？」

王子がこの少年に興味を示した。舌なめずりをせんばかりの様子だ。

「好きにしろ！　ただ無闇に戦おうとするなよ！　何がおこるかわからんからな！」

「えー、そんな人を戦闘狂のようにいわないでくれるかなぁ」

「はい、次行きます。えーと、次は皆殺しの一族です。最近動きがありました。代替わりがあったようです。頭首が１２歳の少年になったと」

「ねぇ、ルーカス。僕はその皆殺しの一族と言うのはよく知らないんだけど……なにが脅威だというんだい？」
「そうですね、脅威がわからないという点が脅威というところですか」
「へぇ？」
「何かの武術を伝承しているらしいんですが……どのように戦うのか見たものが誰もいないんですよね、これが」

ルーカスは王子に対しても特に口調を変えることはなかった。どこかなめたような口調だ。

「目撃者は必ず殺すらしいんですよ。ですので誰もこの一族がどのように戦うのか知らない。恐ろしいまでの秘密主義ってわけです」
「へぇ、それは強いのかい？」
「そうでしょうね。誰も知らないんですから、戦った相手はかならず殺されてるってわけです」
「そりゃ……面白そうじゃないか！」
「馬鹿王子が！　少しは自重しろ！」

ドルエン将軍が吠えた。そう何度も暴走されてはたまらない。

「しかしだ、そこまで秘密に出来るものかね？　どこか遠くからでも見てしまうというのはあるのではないか？」
「独自の諜報組織を持っているようですね。市井の噂レベルでもかぎつけて密かに始末していくということらしいです。それを執拗に繰り返すわけですね。いずれだれも皆殺しの一族について噂すらしなくなる……というわけです。ですのでこうやって議題に出るのもうちの諜報部の優秀さを示しているというわけですが……まぁ、褒めてくれとはいいませんよ。脅威度はこちらも1。要観察です」
「その皆殺しの一族ってのはどこにいるんだい？」

「聞いてどうする！」
「まぁまぁ、別にあちらさんも居場所までは隠しているわけではありませんしね。隠しているのは技だけです。住処はマダー王国の山間部ですね」
「そうか……まぁ他国なら仕方ないね」
国内なら絶対に襲撃していると、ドルエンは確信した。
「はい、では次です。えーと、こちらは中央正教の動きです。１２神官の一人、マキノが聖都へと向かっています。それに関係するのか聖都の北の守護者が動き出しました。これらを合わせると、どこかでこの二人が合流するのかもしれません」
「どういうことだ？」
「素直に考えると、マキノの里帰りを北の守護者が迎えに出た。ということかも知れません。北の守護者は二人組です。守護者はヤグラム、もう一人は交渉人として名高いビクターという男です」
「ん？　何が脅威なんだい？　よくわからないんだけど」
王子が口を挟む。王子はこの会議への出席は初めてだ。前提となる知識が抜けている。
「えぇとマキノは１２神官の一人で聖女とも呼ばれてるんですよ。戦闘能力もそうですが、信者に対しての影響力が凄い。支配の王錫の副端末での洗脳を解除してしまう可能性があるということで監視対象に入っているというわけです。我が国にとってこれが非常にやっかいなことになるのは王子もわかると思いますが」
「へぇ、それはまずいねぇ。始末しといた方がいいんじゃないの？」
「貴様……馬鹿だ馬鹿だと思っていたがそこまで馬鹿か！　中央正教と事を構えてどうする！」
「中央正教は建前として軍を持っていません。その代わりとなるの

が聖都を守る守護者でして。これが9人います。四方の守護者とも呼ばれていまして、各方面に2名、中央に1名ですね。5名は常に聖都の守護に回るわけですが、4名はいつでもうって出られる状態にあります。この方たちが……まぁ、いわゆる化物ということでして、一軍に匹敵すると言われています」

「つまり、中央正教と事を構えるとそいつらが出てくるってことかい？」

「まぁそういうことですね」

「面白そうじゃないか！　なんで君たちは僕にこんなおいしい情報を隠しているんだい？」

そりゃ教えるとあんたが首つっこもうとするのが目に見えてるからでしょうが、とルーカスがぼやく。

「さて次です。今一番ホットな話題ですね。大魔王です。これについては別資料が用意してあります。そちらをご覧ください」

大魔王に関しての資料、その1ページ目には何枚かの写真が貼り付けてあった。

「その写真の少女が今話題の大魔王です」

どこからともなく、ほう、と感嘆の声が漏れた。

「これはなんというか目を見張るような美しさだな。孫にでもいればとても自慢できそうだ」

大魔王が街中を歩いている写真だった。いつものように黒いドレスを着ている。

「とても信じられんな、この写真からは何も脅威は感じられんが」
「これはどうやって撮ったのかね」
「マテウ国に潜入してる諜報員が街を歩いている所を撮影したものです。特に警護の者がいるわけでもないので簡単だったようです」
「これもか？」
そう言って指さされた写真は大魔王を真正面から撮影したものだった。
「それは写真を撮らせてくれと頼んだようですね」
「馬鹿な！　危険ではないのか！」
「いえ、街の者は結構気軽に撮影しているようで、平民に偽装している諜報員が頼むのは特に不自然ではないようです」
ドルエン将軍はろくに話も聞かずにその写真にただ見とれていた。
「では２ページ目を御覧ください。大魔王のこれまでの足跡についてまとめてあります」
ぱらっ、というページをめくる音が間をおいて続く。そこにはこの場にいるものが初めて知る情報が記載されていた。
「これは……ツトモス平原の戦いに現れるまでのこともわかったのか？」
「はい、ではわかる範囲で最初から説明いたしますと、一番最初に大魔王を発見したのは、ジェルボー魔族領の監視の任に当たっていた兵士です。ジェルボーの監視塔の最上階で待機していた兵士が、鶏の月の２０日の昼頃、魔族領から出てきた少女を目撃しています」
セプテム国では魔族領を領地の名称でそのまま呼んでいた。

「ほう、ということはこの少女は国内を通ってツトモス平原へ行ったのか」
「はい、その後国内でも数件目撃例がありますが、それらを総合しますとほぼまっすぐツトモス平原へ向かったようです」
「その最初に発見した兵士とやらは魔族領から現われた魔族と思しき存在を見逃したのかね？　それは君、問題だろう？　何のための監視だね」
「時を同じくして魔物の襲撃が会ったようですね。監視塔の人員は出払っていたようです。人員の増強等はこの会議の議題ではありませんのでそれについては場をあらためてお願いします」
「まぁいい、続けたまえ」
「はい、少女はツトモス平原にある、ロクス村へ向かいました。ツトモス平原はマテウ国と我が国で領有を争っている中立地帯であるのはご存知かと思いますが、ロクス村はどちらの国にも属さず自治を標榜しています。ロクス村はその境遇から堅牢な防壁を村一帯に築いているのですが、少女はその防壁内には入らず、防壁から少し距離をおいた場所にある小さな小屋へ向かったようです」
「何のために？」
「その小屋には村から追い出された母娘が二人で住んでいますがそちらを訪ねたようです。少女はそこで一月程暮らしていたようですね。この母娘と少女の関係についてはわかっていません。そして猫の月の2日目なのですが、マテウ国軍の1部隊が略奪のためロクス村に向かったようです。作戦行動の一巻かと思われますが、中立地帯ゆえか防衛意識も高く防御も堅いロクス村に手を出しあぐねそのまま引き返したようです。その後、その部隊は消息を断ちました。引き返す途中で少女の済む小屋に目をつけて全滅させられと推測されます」
「にわかには信じがたいが……ツトモス平原での行動は聞いている。やれるのだろうな」

「はい、その2日後。ツトモス平原で戦闘開始の直前にこの少女は現れました」
「ツトモス平原か。別に大した土地でもないらしいじゃないか」
王子がぼやくようにいう。手に入れた所で特に益するところはない土地だと聞いていた。
「マテウ国に取られてしまうのもまずいのでな。小競り合いを続けているといった状態だ。向こうも本気ではなさそうだが」
「現われた少女は魔法でその場にいた全員を攻撃しました。研究所からは今までに知られていない魔法と報告を受けています」
「それはどのようなものだね？」
「資料の5ページ目を御覧ください。少女の戦闘能力についてまとめてあります。1番の項目です。上空に光の球をを浮かべ、そこから雷を落とすという魔法です。少女の発言によれば射程は1ｋｍです。この戦闘では、両軍合わせて2000名が同時に攻撃を受けています」
室内が一気にざわめいた。
「なんだ、それは！　ありえんだろう？　戦闘どころではない、戦いようがないぞ！」
「そしてここにも注目していただきたいのですが、少女は明確な魔術発現行動を行っていません。最初に光の球を出す際にも手を上に上げただけです。その後、詠唱や手印等それとわかる魔術発現行動を取っていませんが、雷の攻撃を発動させています」
「無詠唱自体はありえんことではないな、精霊魔法などはそうなんだろう？　精霊との意思の疎通だけで発動出来るとも聞いたが」
「精霊魔法でこの規模の魔法がありえるのか？」
「他にも香を使うなど、わかりにくい発動方法はあるな」

「まとめますとこの魔法は、光の玉を出現させそこから雷を発生させ攻撃する。射程範囲は球を中心に１ｋｍ。攻撃対象は任意に設定でき、この場合ですと、伏せているものは攻撃しない、二人までは立ち上がっても攻撃しない、球から離れるように移動するものは攻撃しない、など柔軟な対象設定を行っています」

全員が言葉を失った。そこまで自由な魔法があるとは信じる事が出来ない。

「では話を戻します。ツトモス平原での戦闘後、少女はマテウ国に向かいました。この時点から7日後にマテウ国にあらわれ、これは既に広く知られていますがレガリアの奪取に成功、大魔王の支配を宣言しています」

「しかし、マテウ国側には特になにもないな」

「そうですね、マテウ国の体制は今まで通りです。我が国としても今まで通りの対応を継続しています」

「そう言えば、最初に住んでいた小屋というのはどうしたのだね、戻らなかったのか？」

「はい、レガリア奪取後は、首都ベイヤーに滞在しているようです。ロクス村の小屋も調べてみましたが母娘は健在でした」

「では、大魔王はわざわざマテウ国を支配し何をしているのかね？　というかね、大魔王という名称はなんなのだね。ふざけているようにしか思えないが？」

「本人がそう言っていますね。まぁ、大魔王という自称に何かの認定がいるわけではありませんし。次に大魔王が現在何をしているのかですが、５ページ目を見ていただいているので、先に大魔王の戦闘能力についてご説明致します」

大魔王の日常について説明するのは気がすすまないため、ルーカスはそれを後回しにした。

「1番目の項目の続きですが、先ほどご説明した魔法以外は今のところ使用した形跡がありません。2番目の項目が大魔王の身体能力です。マテウ国内で知られている限りでは3回の戦闘を行っていますのでそこからの推測です。まず移動速度についてはよくわかりません。街中ではかなりゆっくり歩いている姿しか見られませんし、戦闘中も立ち止まったままがほとんどです。次に膂力ですがかなりのものです。人を2ｋｍ投げ飛ばした記録があります」

「待て！　……人間を2ｋｍ投げただと？」

「聖剣の勇者と戦闘を行っているのですが、その戦闘前のことです。投げ飛ばす瞬間を目撃した者もおりますし、広場に激突した勇者も確認されています。次に武装と戦闘方法ですが、これまでの戦いは全て素手で行っています。ホルスという冒険者と戦っているのですがその攻撃力は寒気のするようなものでして、素手で鎧ごと体を引き裂いたそうです」

「……聞き間違いか？　鎧ごとだと？」

「はい、古代遺物の鎧だったそうですが、あっけないものだったようです。他にも、聖剣をへし折ったとか、天使を両断したとの噂があります。2回目の戦闘は先程の話に出てきた勇者と行っているのですが、目撃者が途中で逃げ出しています。詳細はわかっておりません」

3回目のテオバルトとの戦闘についても、それが北門外で行われたこと自体は把握していたがその詳細は得られていなかった。

「次に、防御能力ですが……」

「もういい。どうせ何も効かんのだろう？」

「はい、その通りです。今までの所、大魔王に有効な攻撃を加えたものはおりません。では、次に大魔王の現状です。3ページ目にお戻りください。基本的には日中は街中をうろついていて、夜は適当

な家や宿屋に泊まっています。王城に向かったことはこれまでありませんでしたので、政局には無関心のようです」

資料3、4ページには大体の大魔王の行動パターンが街の地図と共に記載されていた。

「何がしたいのだ？」

「わかりません。大魔王の行動原理は謎です。戦闘も挑戦されれば受けて立つようですが、その場合も本気で戦っていないようです。相手の攻撃をわざわざ待ってみたり、隙だらけの相手を放置したりと自由気ままです」

資料の内容はここまでだった。

ルーカスが報告を終えると各自がてんでばらばらに話し始めた。凡そ会議の体をしているとは言えない状態になる。

「極めて不味い事態ではないか？」

「あぁ、その大魔王とやらが攻めてきた場合対抗する術がない」

「マテウ国とはお互い様子見とはいえ交戦中だ。いつ何が起きるかわからん」

「とにかくだ、今のところは下手に刺激しないほうがいい」

「そうかなぁ、そう大したものでもないんじゃない？」

王子が疑念を呈する。今までの話からはそう大したものでもなさそうだと思っていた。

「なんだと？」

「この世界には伝説的な存在なんて山のようにいるじゃないか！カロン迷宮の殺戮機械、佳き者達、昏き舞姫、古き巨人、魔獣王、封印されし神。それらと比べてどうだい？」

「そんなおとぎばなしのような話を持ちだされましても……」
「じゃあ僕でもいいよ。今の報告の内容なら僕でも勝てそうだと思ったけど？」

静寂が訪れた。全員が王子に注目する。このいい加減な、だが常識はずれのこの男ならどうにかするのではないかと皆が思った。

「王子……はひとまず置いておくとしてだ。我が国に大魔王に対抗できそうなものは何かないのか？」
「いくつかは思いつくが国内でしか使えんし軍部から介入出来んな」
「後は、我が国のレガリアだな、支配の王錫の本体。あれならば大魔王だかなんだか知らんが支配下における」
「いや、余計な色気は出さんほうがいい。確かに大魔王をこちらに引き入れられれば、この上ない戦力だが、下手をするともう一つレガリアを差し出すことになる。それに王族に、特にレガリアに関しては口出しできんぞ」
「そうだねぇ、お父様はうんと言わなそうだよねぇ」

王子がそれとなく口を挟んだ。王がレガリアの本体を持ち出すことは滅多に無い。

「そういえば、魔族との関係はどうなのだ？」
「大魔王と連携して事を起こしている魔族は今のところいないようだな」

発散している議論をドルエン将軍がまとめた。

「今のところ情報が不十分だな。諜報活動をさらに徹底させろ。大魔王の好物、性癖、趣味なんでもいい、詳細に調べろ。研究所には対抗策を出させろ。可能性だけでもいい。話を聞く限り想像以上の

化物だ。出し惜しみするなと伝えろ。そして現状維持だ。下手にマテウ国を刺激するな」

まぁ、そうだろうなとルーカスは思う。直接大魔王を見たこともあるこの男は放っておいても特に問題ないのではと思っていた。

大魔王は毎日楽しそうにしているのだから。このままならセプテム国に目を向けることは多分無い。

だが……こいつらは何か余計な事をするんだろうな、と漠然と思った。

幕間　脅威分析（後書き）

ご愛読ありがとうございました。２章はこれで終わりです。これ自体は幕間ということで２章と３章の間のような感じです。

まだ続ける気はあるんですが、続きは……もう少し先になるかもしれません。一旦ここまで書いた分を整理します。改訂とかいうほど大げさなものではありません。誤字脱字の訂正とか、おかしな表現の修正とかで、シナリオ自体はそう変わらないと思います。

読者の方にお願いするのは筋違いかもしれませんが、誤字脱字や、意味がわからない表現等ありましたらご指摘くだされば嬉しいです。

今後、漠然と考えているネタとしては、

「大魔王　対　大魔王」
「大魔王　対　神」
「大魔王　対　殺戮機械」
「大魔王　対　魔法少女」
「大魔王　対　超能力殺人鬼」
「大魔王　対　狂王子」
「大魔王　対　皆殺しの一族」
「大魔王　対　異邦人」

のあたりです。他にも「ぼくのかんがえたさいきょうのちょうせんしゃ」を思いついたらという感じでしょうか。

他には

「大魔王の過去話」

てのもあるかもしれません。

アル達のその後……は全く考えてませんでしたが、要望あるようなら外伝とかにするかもしれません。（２章１５話の最後の部分は…

…そんなシナリオが既にあるわけじゃないですよw）

それと……もうちょっと勉強します。小説の書き方みたいなのがよくわかってなくて見よう見まねでやってたんですが……。
色々小説の書き方みたいなのを買ってみたのでそれ読んだりとか。

では、ここまで読んでくださってありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2219w/

大魔王が倒せない

2011年10月30日02時33分発行